

飲んで、徹夜空けで、しかも最強クラスの敵である使徒と文字通りの死闘を繰り広げたネットコは、疲労困憊という言葉を通り越してほとんど半死人となっていた。彼は自分の部屋のベッドに倒れかかると、一呼吸のうちに眠りについた。アムリタは彼のソファで寝た。ナターシアとリタはアムリタの姿を見ると、彼女がネットコの何なのかあれこれと話し合つて、大方旅の途中で出来た仲間だろうという結論に達した。あながち間違いというわけでもない。

数時間後、ネットコが疲労の抜けきらない体に鈍い痛みを感じながら目を覚ますと、アムリタは彼よりも先に目を覚ましていて、なにをするわけでもなくぼんやりと窓の外を眺めていた。彼女が自分の家にいることに違和感を感じたネットコは、まず彼女を家族の誰かに紹介する必要を感じた。とにかくアムリタの肩に家族という名の公式のスタンプを押してみれば、全ては少しずつ馴染んでいくはずだと、彼はそう信じていた。

彼はまずナターシアにアムリタを紹介した。リジヨはミルチアとのドタバタで相変わらず家

をあけていたし、リタも町内会かなにかの用事で家を出ていた。ナターシアはなんとなく胡散臭そうな目つきでアムリタを見た。いきなりネッコに「妹がいた」などと紹介されても、戸惑うなどというほうが無理だし、複雑な背景を知らないナターシアはネッコの悪ふざけかなにかと勘違いしていたのだ。

「妹、ねえ……」

ナターシアは腕を組み、じろじろとアムリタを見回した。頭のとっぺんからつま先まで、体をパーツ分けして一つ一つじっくり検証していくかのように。その間、アムリタはじっと目を瞑り、微動だりしなかった。

「似てると言えば似てるけど、似てないと言えは似てない」

「似てようが似てまいがアムリタは僕の妹なんだ。この家に住む権利があるんだからな」

「権利ねえ……」

なにか気に入らなさそうなナターシア。ネッコには彼女が何を気に入らないのか分からなかったし、おそらくナターシア自身にもはっきりとその理由を答えることはできないだろう。とにかく、なにかがもう一つ気に入らない。妙にひっかかるなにかがある。それは単なる事実として、ナターシアの中に燻っているのだった。

「……とにかく、アムリタ。こいつがナターシアってうちの女中だ。失礼なやつだけど、仲良くしてやってくれ」

「……ほんとは美しいのに、ボロ衣を纏った人」

ぼつり、と呟くアムリタ。

ナターシアは自分のエプロンをつまむと、それをちらつと眺めた。たしかにそれなりに着古したものだが、他人にボロといわれるほど劣化しているわけでもない。

「あんた、初対面の人間にそんな風に言ってるのかい？」

美しい、という言葉が本当は嬉しかったのだが、照れ隠しにつつかかるような言葉を吐くナターシア。

アムリタは気にせず、自分の言葉が続けた。

「確かにあなたのようなやり方も賢いわ。着飾らないというのは、傍から見るとは実とはとも難しいことなのだから……けれど、あなたはそのせいで本当の幸福を遠ざけている」

ナターシアはアムリタが言おうとしていることが今一つ飲み込めず、戸惑った。自分を褒めているのか、貶しているのかすらも分からない。

「自分を卑下しないで、もっと自分の夢や希望に素直になってみるのも……つまり、もっと図々しくなってみるのも、あるいはいいものよ」

アムリタはナターシアにそう言っ、うなじのあたりを何度か擦った。慣れないソファなんかで寝たため、首に少し鈍い痛みが残っていた。

ネッコはアムリタの言葉をじっくりと吟味する。彼は彼女のこんな言葉には慣れっこだったが、自分以外の誰かがこんな風に言われているのを聞くのは珍しかったし、彼女の言葉とナターシアの印象を照らし合わせてみるとちょっとした推理ゲームみたいで面白かった。

しかし、当の本人、ナターシアは戸惑うばかりだ。

「……そ、それって嫌味かしら？」

腕を組んで、精一杯傲慢な態度をとるナターシア。

「私は十分凶々しいし、自分の思うように生きてるさ。あんたはどうかの？ヘンテコな言葉ばかり並べて……一方的に話して……バカ旦那にどんなペテンをかけたのかしらないけど、これ（ネツコ）を騙すのにテクニクはいらんだから！」

ナターシアはそう言うのと得意げな顔で笑った。

ネツコは複雑な心境で二人を見ていた。

（……こりゃ、この二人が仲良くなるのは時間がかかりそうだな……無理かも）

「かわいそうな人ね」

「……な、なんですってえ……？」

アムリタの言葉に、笑顔が引きつるナターシア。

「哀れな哀れな子羊に、イーリアス母神の祝福を」

「あ、あ、あ、あんたなんか同情されるほど落ちぶれてないし、そもそも、私や神様なんて全然信じ……んぐ」

アムリタはナターシアの言葉をせき止めるように、強引に口づけした。ずっとこけそうになるのを堪えて、いつの日かの出来事を思い出すネツコ。

（こ、これは……？）

ネッコは思った。

(アムリタ、それは強攻策なのか……!?)

ナターシアは咄嗟のことに体を硬直させ、アムリタを引き離そうと彼女の両手を掴むが、本気で押し返そうとする様子は無い。頭では拒否しようとも、体はそれを悪く無いものだと思っ入れ、引き離すことを名残惜しいと感じているのだろうか？演劇の舞台や公園や結婚式でみるような、さわやかな男女の口づけとは違う、同性愛好的でイモーラルな美しさ。ネッコは顔を真っ赤にして二人の少女の口づけに見入っていた。うつろな細い瞳をして身をゆだねるナターシアが、このときばかりは後光差す天女のように見えた。

ようやくアムリタが頭を引き離す。ぽかーん、と口を開け、本心状態に陥っているナターシア。

「……う、うう……」

たじろぎ、体を振るわせ、二、三步後ろに下がる。

「うわああああっ！」

ナターシアは自分の身に起こったことを改めて思い返したのか、全身の毛を逆立て、ひっくり返りそうになりながら部屋を飛び出した。

あとに残されたネッコとアムリタは、互いにナターシアが出て行ったドアの方をじっと見つめる。ネッコはまだ胸がドキドキしていた。アムリタは別になんとも思ってなさそうだった。彼女はいつだってこんなことを覚えたのだろうか？と、彼は思った。

「……お母さん……」

ぼつり、と呟くアムリタ。ネッコは彼女の寂しそうな表情に気づく。

お母さんか……。ネッコは思った。アムリタの口づけは、性とかそういったものを超越した彼女なりの愛情表現だったのかもしれない。いわば母神イーリアスの、大らかで掛け替えの無い母性のような……。アムリタは自分の言葉通り、ナターシアという少女がそういった類の愛情に欠けた、哀れな子羊<sup>3</sup>に思えたから、だからアムリタはアムリタなりにナターシアを慰めてあげただけのことなのかもしれない。また、あるいは彼女がナターシアにしたように、アムリタは母・マリアにそうして貰いたかったのかもしれない……。自分の望むことを他人にする。彼女の場合は極端だったが、当然といえば当然のことだろう。結局人は自分だけが万物のものさしなのだから。

そう考えると、ネッコは先ほどの自分の目つきに羞恥を覚える。

(……イモータルだってさ。とんだ変態だよ、僕は。まったく……)

ネッコは自分にそうなじると、居心地悪そうにぼりと頭を掻いた。

アムリタはネッコの方を、まるで置物かなにかを見るような目つきでちらっと見た。そして、ネッコがアムリタにどんな言葉をかけようか迷っているうちに、彼女はスタスタと部屋を出て行ってしまった。

「……お、おい、アムリタ？」

空を切るネッコの呼び止め。

彼女は一体どこへ行くつもりなのだろうか？

ここはたしかにもう彼女の家だけど、彼女の居場所はまだないというのに。

——魔王城。

長い長い廊下を歩くリリパット。使い魔である彼はヴァジュラの死の責任を問われ、ここ魔王城にやってきた。

「おい、グズの使い魔が来たぞ……」

「恥ずかしげもなく……」

「ここで八つ裂きにしてしまおうってのは……」

「ふん、忌々しい。同じ空気を吸うのも汚らわしい！」

影から口々に罵声を浴びせられるリリパット。しかし、彼は悔しくもなければ腹立たしいわけでもなく、ただこれから自分にやってくるであろう未来を呆然とした意識で受け止めていた。主を死なせた使い魔がのうのうと生きていけるほど魔界は甘くは無い。

巨大な王の間の扉が開く。赤い絨毯の先に、玉座に掛けるモードレッドの姿があった。頬杖をつき、じっと目を閉じている。

リリパットは震える足をなんとかモードレッドの前まで運ぶと、肩膝をつき、頭を垂れた。

「……リリパット、ただいま御前に……」

モードレッドの前まで来たということは、もはや、いつ首が飛んでもおかしくない状況。張り詰めた緊張感のなか、リリパットはモードレッドの言葉をただひたすら待った。

沈黙は長く続いた。秒針が時計を二周、三周と回っても、モードレッドが口を開く様子は一向に見受けられなかった。恐怖に頭がしびれはじめるリリパット。俯いていると、眩暈とともに床の模様がぐるぐると回り、気を抜けばすぐにも卒倒してしまいそうになる。

モードレッドがようやく口を開いたのは、リリパットが到着してから実に数分後のことだった。

「……表をあげろ」

「……はい」

ビクビクしながら顔を上げるリリパット。モードレッドは石の仮面のような無表情を崩すことなく、怒っているのか、あるいは同胞の死に悲しんでいるのか、それすらも分からない。

「……ヴァジュラが死んだそうだな」

「……も、申し訳ありません！ 全ては俺……いや、私の責任です……！」

リリパットは取り乱しながらも、精一杯それだけ言って、また頭を下げた。

「……」

モードレッドはまた沈黙する。リリパットの顎から汗が滴り落ち、絨毯に染み込む。本当に耐え難い沈黙。リリパットは、こんな気分にはさせられるぐらいなら、まだ言葉で責められ、詰られ、罵倒されているほうがマシだと思った。



物々しく開かれる王の間の扉。そこに現われたのは一人の魔族だった。背格好は人間で言う  
と四十か五十かを過ぎたぐらいの中年女性で、顔の輪郭は細くとがっており、顔中が小じわで  
覆われていた。真っ黒で高価そうなドレスに散りばめられた宝石は、彼女が一歩歩くごとに  
ジャラジャラと鳴る。

「お呼びでございますか、モードレッド様……」

高慢そうな見た目と違い、随分と人の良さそうな声。しかし、その声を聞いた途端、リリ  
パットの背筋に言い知れぬ悪寒が走った。リリパットはその声の主を知っていた。

(し……神官……カーマ・カメレオン……!)

カーマ・カメレオン。彼女はモードレッド直属の部下で、悪神を称える魔界の神官を努めて  
いるがそれはあくまで表向きの顔。実際は忌まわしい呪術や黒魔術の研究を専門とした闇の魔  
法使いで、研究のためには手段も方法も選ばない凶悪で残忍な性格の持ち主である。手ごろな  
部下を揃まえては己の闇魔法の人体実験を施したり、自らの美貌と力のために屈強な男の悪魔  
の精気を搾り取ったりと、「カーマのおばちゃま」という俗称で同じ魔族の間でも相当恐れら  
れているのであった。

「今日はどうなされたのかしら？また新しい披検体を提供してくださるとか？」

「そうだ」

モードレッドが答える。

「こいつを好きにするがいい」

そう言うと、モードレッドは顎でリリパットを指す。ぎよっとするリリパット。

「あらまあ……リリパットちゃん！」

カーマの顔がぱあっと明るくなる。

「リリパットちゃんみたいに元気な男の子を！？カーマは光栄でございます！」

「お、おお、お待ちください！モードレッド様、どうかお情けを」

リリパットは慌てて立ちあがると、モードレッドに言った。

リリパットは自分の部下で、カーマに捕まったものが数人いることを知っているが、その末路はどれも悲惨なものだ。あるものは精気という精気を搾り取られて干物と化し、あるものは生きたまま局部を大根のように摩り下ろされて絶命し（呪術にとっては悲鳴が大事なスパイス、とはカーマの言葉）、あるものに至っては首から下を切り落とされ、培養液の中でマリモのように浮かび、悪趣味なインテリアとして今もまだ生きつづけているという……。

「ど、どうせなら一思いに首をはねてください！俺はもう、主人が死んだ以上使い魔として一分一秒もこの世にいることなんて……」

「話は終わりだ」

「……うう……」

モードレッドの気迫に気おされ、たじろぐリリパット。カーマはゆっくりと、優しくリリパットの腕を掴んだ。リリパットの体が飛び上がる。カーマはねっとりとしたいやらしい笑みを浮かべた。

「さ、行きましようねえリリパットちゃん！いろんな楽しい玩具があるわよお」

ぐいっと腕を引っ張られるリリパット。彼が自分で歩こうとしないのを見ると、カーマは無理矢理リリパットを引っ張って歩き始めた。女とは思えないそのバカげた力に、リリパットはぐいぐいと引っ張られていく。

「い、い、いやだああー！」

魔王城に響くりリリパットの悲鳴。こうして、一人の魔族の少年の運命は絶望の真つ暗闇に転がり落ちていった。

――カーマの屋敷。

カーマは自宅に帰ってくるなりリリパットを自分の部屋に引きずり込み、木の椅子に縛りつけて、全く身動きが取れない状態にした。

「うふふ。さ、楽にしてねえ」

「こ、こんな格好に楽もクソもねえだろ！」

体をよじってなんとか椅子から抜け出そうとするリリパット。自分を拘束する縄などいっそのこと引きちぎってしまいたかったが、カーマの強力な魔法で強化されたそれは彼の手に負えるようなものではなかった。

「畜生、縄を解け！殺すならさっさと殺せ！」

「あらあら、怖いわあ……最近の子供はなんて物騒なんですよ」

どこまで本気が分からないカーマの言葉。

（お前の方が一千倍は物騒だろうが、ババア！）

と、リリパットは思った。

カーマはリリパットの近く椅子を置くと、自分もそれに腰掛けた。

「さて。リリパットちゃん。あなたのご主人様を殺したのはだあれ？トウオン？それともメレアガンス？」

「……それは……人間だ」

「まあ……！」

驚くカーマ。

「ネッコ・ヴァンシユタインとかいう……ただの人間の小僧に……ヴァジュラの奴は殺されたんだ」

言いながら、燃え盛るような憤怒を胸中に掻きたてるリリパット。自らの主人を失って一番心を痛めていたのは、他でもない彼だったのだ。

「ネッコ……ヴァンシユタインちゃん」

カーマが呟く。

「人間にして使徒を倒す力を持つ者……なんてまあ美味しそうな子なんですよ……！きっと一流の悪魔並みの精気を蓄えているに違いないわ！おばちゃま、うっとりしちゃう……！」

カーマの言葉を聞いてリリパットは一瞬、まだ見ぬ宿敵に少し同情した。

ふと、屋敷の外でなにやら騒がしい音がするの聞きつける。

「あら、なにかしら……?」

慌てたカーマの部下がカーマの部屋に訪れる。

「か、カーマ様、大変です!屋敷の外に……」

言いかけた部下の後ろに、彼よりもずっと小さな影が現われる。

「邪魔ね、どきなさいよっ!」

カーマの部下は突然現われた少女に蹴飛ばされて、廊下を転がっていった。少女は椅子に縛り付けられたリリパットを見るなり、顔を真っ青にした。

「り、リリパット……!」

彼女の名前はブラッディ・アリス。リリパットの双子の妹で、使徒アルアルパッツの使い魔である。黒いリボンで結んだツォーテルの金髪と、黒地に白いレースを被せたスカートに、やはり黒のブラウスというモノクロ統一の服装は、いわゆるゴシック・ロリータといわれるスタイルだ。人間界では忌み嫌われているが、魔界ではそれほど珍しい格好ではない。かれこれ数百年の間、行方不明になった主人を探し続けている律儀で忠実な僕だが、自分の兄が神官カーマに捕まったときいて飛んできたのだった。

「まっ。お行儀のなっていない子ね……あなた!人の屋敷に上がりこんで、いったいどういうつもりなのですか?せっかくリリパットちゃんと仲良くお話している最中に……事と次第によっ

ては首の一本や二本では済ましませんよ」

カーマが不愉快そうに言った。口調だけは普通のおばさんだが、内容はとても物騒だった。「私はリリパットの妹でアルアルパッツの使い魔、ブラッディ・アリス。兄がここに連れてこられたと聞いて……」

「そうですよ。モードレッド様からリリパットの処分を預かったのです」

アリスは戸惑っていたが、しょんぼりとしたリリパットの顔を見るとその表情は決意に変わり、こう言った。

「お、お願い！兄を解放してあげて！」

「ダメよ。誰か、この子その辺に捨ててきて」

鼻にもかけないカーマ。アリスは自分を連れて行こうとするカーマの部下の腕を振り払って、必死にカーマの足にすがりついた。

「お願い！これは私の……たった一人の家族だから……！」

(アリス……お前……)

妹が自分のために必死になってくれている姿に、思わずほろりとくるリリパット。

「うーん。そうねえ……」

カーマがさっと腕を上げると、アリスを引き剥がそうとしていた部下達が一斉に身を引いた。「私にできることなら、なんでもするから……！」

必死に懇願するアリス。そんな彼女を見て、カーマはほくそえんだ。

「……なんでも？」

カーマのぞっとするような瞳。アリスは恐る恐る頷いた。しかし、一番不安なのは他でもない、妹が自分のためにカーマのような魔族の言う事を聞こうとしているリリパットだろう。

(アリスのバカ野郎……このババア、なにを言い出すかわかったモンじゃないぞ……！)

——羅漢洞周辺。

そこには、ヴァジュラの配下である数千の魔物たちが集まっていた。単純な力を究極にまで追い求めたヴァジュラの存在は、魔物たちにとってまさしく暴力のアイコンとも言うべきものであった。そのため魔界はおろか自分の領地の統率にすら気を回していなかったのに、ヴァジュラに対する魔族や魔物たちの人望は厚かった。単純な数の「人気」で言えば使徒の中でも一、二を争うほどであろう。(ヴァジュラが新しくつける為の片腕を探していたとき、名乗り出た魔族の数は十や二十では無かったという)

そして、そのヴァジュラが死に、魔物たちは深い悲しみと怒りに身を震わせていた。

「ヴァジュラが死んだ！」

武道着をきたヴァジュラ直属の高官たちが口々に叫んだ。

「ヴァジュラが死んだ！」

「ヴァジュラが死んだ！」

「殺されたのだ！それも、人間に！」

「サングルークの魔法使い、ネッコ・ヴァンシユタインに！」

「敵を討って弔いを果たさねばならぬ！」

「そして、同志リリパットの解放をモードレッド様に訴えるのだ！」

「立て、ヴァジュラの名を知る幾千の戦士達よ！」

「貴様らは血と暴力と苦痛の奴隷だ！」

「戦って、己が天命を思い出せ！」

「戦って、己が使命を果たせ！」

「戦って、己が宿命を全うせよ！」

「戦って、己が欲望を満たすが良い！」

「そして殺せ！」

「人間どもを殺せ！」

「ネッコ・ヴァンシユタインを殺し、その軀をヴァジュラ様の御許へ！」

「永遠の苦痛を怨敵に！」

「そして、人間界をいま一度恐怖のどん底に叩き落すのだ！」

「いま一度、魔族が世界を征服する宵闇の時代を！」

「血と暴力と苦痛の時代を！」

「世界に黒き魔の情愛と祝福を！」



「汝らがその矛先となれ！」

「全ては魔王モートとその血族のために！」

「立てよ、戦士たち！」

「戦って殺し、そして死ぬがいい！」

「それが貴様らを存たらしめる唯一の理由だ！」

「己が死を疑うな！」

「心の臓が破れるまで、喰らいつけ！」

「己が肉体を吝嗇するな！」

「朽ち果てるまで殺せ！」

「殺戮、それこそが真理である！」

「それこそが原始だ！」

「それこそが幸福だ！」

高官の一人が巨大な岩を叩き割る。

同時に幾千もの魔物たちが、地の底から震え上がるような唸り声をあげた。

一言。『殺せ』というただ一言だけがあらゆる状況においての絶対目標として掲げられ、魔の軍団は南へと大進軍を開始した。

人間界（サンダルク）へ。

人間を、そして怨敵（ネッコ・ヴァンシュタイン）を狩る為に。

吹き荒む風は辛く、身にぶつかる砂塵は荒い。

ロアとリュネットは、互いに身を寄り添うように、魔界の大地を歩いていった。

いや、もうここは魔界ではない。二人はすでに国境、ペルセンの砂漠地帯に入っていた。見渡す限り、一面の砂の大地。幾千年もの間に吹き積もった、悠久の砂漠だった。

運ぶ足は砂の地に取られ、頭上では太陽が燦々と輝き、身を焦がすように二人の体力を削っていく。

しかし、体は麻布のように消耗していたが、二人の心は決して沈んでいなかった。リュネットには、自分達の行く手を阻むこの無限の砂の大地を造る一粒の砂までもが、いとおしく思えた。

永い旅を経て、ようやく人間界に帰ってきたのだ。自分達が住む世界に。

二人は、砂漠に横たわる巨大な岩石の影を見つけると、そこで身を休めた。

「……やっと帰ってきたのね」

リュネットが、そう言つて水筒を取り出し、水を一口飲む。乾ききった体には、ただの水で

さえも蜜水のように甘い。

「ああ、ここはもうペルセン領だろうな」

ロアが開いた地図を見て、言った。

「もうすぐね」

リユネットは遥か遠く、南方を見る。

「ああ。あと一息でサンダルク領内だ」

ロアも南方を見つめた。

そこに仲間達がいる。

そして、ロアは北を振り向いた。遥か彼方にそびえる山脈。魔界の世界。

辛い旅だった。

ロアの目の前で死んでいった者達の顔が浮かぶ。

ラト、ネーテル、カーリア……。

想い出は、後髪を引くように、ロア達の心に深く刻まれている。

ロアは頭を振って、立ち上がった。

「さあ、行こう」

リユネットも頷いて、立ち上がった。

帰らなければならぬ。二人の旅は、まだ終わっていないのだ。

過去の想い出が、如何に彼らの心に深く突き刺さろうと、

例え、未来にどんな困難が待ち受けていようと、進まなければならない、それが人の運命なのだ。

サンダルークへ向けての援軍の出兵当日。ライオネルは全ての準備を終えて、自室でただ出発の時を待っていた。城外からは集まった兵士達の歓声が聞こえる。全身を鎧で固め、腰には長年使い続けてきた愛剣。椅子に腰掛けて、ただ、じっと目の前を静かに見つめている。戦において常勝無敗のこの男だが、今回の出兵は何か不吉なものを感じた。なにより遙か遠方にいるエレインの身が気に掛かったが、もう一つ……。

「失礼します」

部屋の扉が開き、エステルがお辞儀をして入って来た。

ライオネルが何かを訴えるように、エステルに目を向ける。エステルは首を横に振った。「……ナナさんはまだ帰ってきていません」

エステルが言う。それを聞いて、ライオネルは静かに目を閉じた。眉間には深い皺が浮かぶ。ナナは昨日、ミリアムを尾行して行ったまま消息を絶った。丸一日何の連絡もない。ナナの身に何かあったとは思えない。

「大丈夫です。ナナさんはレオデグランス一の諜報員ですよ。あの人がそう簡単に死ぬわけが

ありません」

エステルが言う。しかし、その声はどこが自身がない。

ライオネルにもナナが優秀な諜報員だとはわかつている。女でありながら戦闘技術も下手な兵士などは問題にならないほどの腕だ。だが、そのナナが消息を絶った。だからこそ心配なのだ。

このキャメロンで、何か黒い陰謀が渦を巻いている。その中心にいるのが、あの謎の女貴族ミリアムであることは間違いない。ライオネル自身がずっとあの女を監視しておきたかったが、そもいかない。サンダルークへ兵を率いて行かなければならない。

「……時間だ」

ライオネルは静かに目を開けて、椅子から立ち上がった。鎧が重い金属音を立てる。

「エステル」

「はい」

「陛下とこの国を頼む。あの女からは決して目を離すな」

ライオネルの言葉に、エステルは黙って頭を下げた。

ライオネルは五千の兵を引き連れて、キャメロンを出た。サンダルーク国内に入る前に、あと二万は合流する予定だ。ライオネルの心は、一刻も早くサンダルークにいるエレインの元に返りたかったが、そもいかない。これだけの大軍となると移動速度も制限される。ライオネ

ル一人で移動する速度と比べて、倍は時間が掛かっていた。

もう日も暮れる。すでに隊は野営の準備に取り掛かっていた。兵士達は馬をつなぎ、テントを張る。夕食のシチューの匂いが煙と共に辺りに流れる。これから隊の外の見張りにたつ兵士達は恨めしそうに夕食の準備を眺めていた。

ライオネルは数名の兵を引き連れ、野営地を見回っていた。久しぶりの出陣で、気が弛んでいる者も多い。まだレオデグランス国内とは言え、いつミルチア軍が攻めてくるかもわからないのだ。用心に越した事はない。そう言えば、そろそろ斥候が帰ってくる時間だ。

ライオネルの元に、馬に乗った一人の兵士が近づいて来た。ライオネルが放った斥候の一人だ。

「大変です、ライオネル卿」

ライオネルの前まで来ると、斥候が馬から飛び降りていった。

「どうした？」

「ここから約三十kmほど北西に、約一万ほどの部隊が駐留しております」

その言葉を聞いたライオネルが顔を顰めた。

「何処の軍隊だ？」

「それが、どうやら何処かの国に属している軍ではなく、各国から集まった傭兵部隊のようです」

それを聞いたライオネルの表情がますます険しくなる。傭兵部隊など珍しくもないが、一万

もの大部隊だと話は別だ。おそらくは十数の傭兵団が一箇所に集まっているのだろうが。それだけの数が集結しているとなると、戦に備えてるとしか思えない。

サンダルクがミルチア侵攻に備えて集めたのだろうか。しかし、その様な話は聞いていない。だとすればミルチアだろうか……。

「とにかく、そのままその傭兵団の監視を続けろ」

ライオネルが斥候から帰ってきた男に言う。男は敬礼をして、再び馬に乗り、走り去った。

「どうしたいします、ライオネル卿？」

ライオネルの横に立っている老兵が言った。老兵の髪も顎鬚も真っ白で、ライオネルの父親といつてもいいような歳だ。顔は深い皺で覆われており、おまけに片目が潰れているのか黒い眼帯をしている。子供が診たら泣き出しそうな、酷く怖い顔だ。彼の名はウーガン。今回の部隊でライオネルの副将を勤める男だ。ライオネルとウーガンとは何度か戦場で共に戦った事もある戦友だった。歳を食って力は衰えているだろうが、戦場の経験の多い頼りになる男だ。

「お前は思う？」

ライオネルが逆にウーガンに聞く。

「このまま押しかけて、詰問してやりましょう。それで怪しい節があれば叩き潰せばいい。なに、数は一万と多いですが所詮傭兵など烏合の衆。奇襲をかければ一発です。ミルチアの軍とやる前に軽く蹴散らしてやりましょう」

ウーガンが古傷だらけの顔でニヤリと笑った。自分達の倍の軍を相手にするのに、赤子の手

を捻るかのように簡単に言う。

「いいかげん引退したらどうかと思っていたが、相変わらず盛んだな」

ライオネルが苦笑する。

「まだまだ青臭いガキどもには負けていられませんからなあ」

ウーガンが大口を開けて笑った。口の悪いのも相変わらずのようだ。

「で、どうするのです？」

「……無駄な争いは避けたい。遠回りにはなるが、迂回してサンダルクに向おう」

「ほう？ 貴方様らしくありませんな」

ウーガンが髭を捻りながら言った。

「我等の目的は一刻も早くサンダルクに援軍として向かう事だ。こんな所で無駄な時間と労力を食っている暇はない。それに敵兵と決まったわけでもないしな。キヤメロンに注意を呼びかける伝兵だけ出しておけばよからう」

「わかりました。すぐに伝兵を出しておきます」

ウーガンが言う。

ライオネルはすっかり暗くなった空を見つめた。暗い灰色の雲が流れている。

エレイン姫は無事だろうか。その事がライオネルの心に重くのしかかっていた。



ぼんやりとした意識の中、目を開く。寝ている自分。薄暗い、見知らぬ天井。木造の粗末な造りで、至る所に埃と痛みが見える。暗い室内を、一本の蠟燭だけで、なんとか光を残してる。なんだか懐かしい気がした。

「おや、気付きなさったか」

その言葉の方に、ナナは寝たまま首を向ける。小さな老婆が部屋に入ってきていた。

「気分はどうじゃえ？」

老婆が人のよさそうな顔でナナに近づく。

「ここは……」

ナナが小さく呟く。

「婆の家じゃ。気にせずゆっくり休むといい」

意識がはつきりとしていくと共に、ナナの頭に記憶が徐々に蘇って来た。ミリアム、オクト大臣、そしてキリエ……。

全てを思い出し、飛び起きようとするナナ。しかし、身体は意識に反し、思うように動かなかった。ベットから転げ落ちる。

「無理してはいかん。もうだいぶ熱は下がったようじゃが、昨日まで凄い高熱だったのじゃから。まだ体が弱っておるじゃろう」

ナナを助け起こし、ベットに戻す老婆。その老婆の腕は枯れ木の様に細かった。

「……私は何日眠っていました？あなたは一体誰です？」

「路地裏でお嬢ちゃんを見つけてから、もう三日目じゃ。ビックリしたよ。血塗れで倒れているんじゃない。幸い、怪我はたいした事なかったようじゃが」

三日……そんなに寝ていたのか。どうやらこの老婆に助けられて、自分は一命を取り留めたようだ。それに、持っていた解毒剤が偶然にも聞いたとみえる。そうでなければ、キリエから受けた毒で、とっくに死んでいるだろう。

しかし、傷はたいしたこと無かったが、体力はまだ戻っていないようだ。あるいはまだ体内に毒が残っているのかもしれない。体に力は入らず、意識はまだ虚ろだ。

それでもナナは、全身に力を込め、ベットから起き上がった。それを止めようとする老婆を片手で制す。

「お婆さん、お名前は？」

「……私はエマじゃが」

ナナは、エマ婆さんに、深々と頭を下げた。

「私の名前はナナです。命をお助けいただいたご恩は、忘れません。しかし、私はすぐに行かなければなりません。後日必ず、助けさせていただいた御礼をしに参ります」

ナナはそれだけ言うと、あっけにとられているエマを置いて、急いで走り出した。

外は、もう夜。

町中に暗い影を落としている。

ナナは走った。覚束ない足取りで、それでも走った。

一刻も早く、ミリアムとオクト大臣の企みを、アヴァロン王に知らせなければならない。暗い道を、ナナは、遠くに見えるキャメロン城を目指して、駆けていった。

夜。月は灰色の雲に隠れている。その暗い闇の中に巨大なキャメロン城が堂々とそびえ立っている。

城に近い木立の影に隠れていたキリエは黒装束の中の灰色の瞳で、そのキャメロン城を見上げた。

キリエの体が震えた。昼から降り続いていた雨はもう止んでいたが、空気は濡れていた。吹く風が重い。

(よく冷える)

そう思ったとき、キリエは苦笑した。冷えるのではない。このキャメロン城を目の前にして、この巨大な化け物を自分は畏怖しているのだ。このアトラス大陸最大の城にして、世界の中心。勇者アトロが建設して以来、誰一人この城を落としたものはいない。その難攻不落の要塞を、今からキリエは落そうとしている。たった一人で。この城の主を殺して。

キリエは木陰から走り出ると、地を這うように低く影の中を走っていき、城を囲む巨大な防壁の一角に張り付いた。そのままイモリのように、高さ十五メートルはあるであろう垂直の壁

を器用によじ登り始めた。指先に神経を集中させ、濡れた石と石の隙間を掴んでいく。もの数十秒で上りきると、そのまま身を低く屈めて防壁の中の様子を眺めた。城門の前には警備の兵が立ち並び、槍を持った兵達が規則正しく並んで巡回している。そこから中で篝火が惜しみなく焚かれている。

(城外の警備だけで五百はいるな。さすがにたいしたものだ)

キリエは改めて警備の厳重さに感心しながら、城郭を見上げた。今日までにキリエ自身何度も外から観察し、またミリアムが入手した城内の地図のおかげで、キヤメロン城内外の構造は頭の中に入っている。もちろん、標的である王の寝室の配置も。

防壁から飛び降り、音もなく着地すると、キリエは篝火の明かりと明かりの影となる草陰に身を隠した。ザツザツという硬い靴の底で土を踏みしめる音が聞こえる。キリエはじつと息を殺して、巡回兵が通り過ぎるのを待った。

巡回兵が遠くへ離れていったのを確認し、キリエは影から影へ移動していくと、やがて城壁にまでたどりついた。壁に影のように張り付きながら、キリエが真上を見上げる。遙か上に一つの窓があった。そこが王の寝室のはずだ。

キリエは城壁に張り付くように城壁を登っていく。ゆっくりゆっくりと。キリエの眼下では、兵士達が巡回をしている。もし、こんな状態で見つければ、キリエに逃げ場はない。壁に張り付いたまま弓で射殺されるか、城壁から降りたところを兵士達に捕縛されるだろう。

神経をすり減らすほどに慎重に、城壁を登りつづけて、ようやく目的の窓まで達すると、窓

杵を片手で搦んだ。そのまま片手でぶら下がるように体重を支えると、もう片手で懐から短刀を取り出した。音を立てないように慎重に硝子の一部を切り外し始める。ここが最も注意しなければならぬところだった。部屋の中では、すぐそこでアヴァロン王が寝ているはず。硝子を切る音でアヴァロン王が目を覚ましてしまつてはお終いだ。ギツギという硝子を切る小さな音が、キリエにはやけに大きく聞こえる。ようやく硝子を外した頃には、さすがにキリエの全身から汗が流れていた。

(これでアヴァロン王の命は消えたも同然……)

切り取った穴から手を入れ、鍵を開ける。

静かに部屋の中に身を入れるキリエ。広く豪勢な部屋の中には、予想通りアヴァロン王が眠りについていた。

キリエは枕元に立った。大きなベットの中で、静かに目を瞑っているアヴァロン王。キリエはアヴァロン王の顔を覗いてみた。豊かな顎鬚を蓄えた、五十を過ぎた男の顔が其処にはあった。何処にでもある顔だ。これがアヴァロン王であると知らなければ、特別威厳も感じないだろう。しかし、この男が勇者アトロの末裔であり、現在この世界で最も巨大な権力を持つ王なのだ。その男の命を今、キリエが握っている。短刀を振り下ろせば、それで終わる。この男の持つ権力も栄光も、一瞬で消える。ミアムという女からこの仕事の以来を請けて半年、その半年間苦心してきた仕事がこの一瞬で終わるかと思うと、なんだかあっけなさ過ぎる気もした。

「起きろ」

キリエが低い声で言う。

その言葉に、アヴァロン王はゆっくりと目を開けた。ぼんやりとした眼で、キリエを暫く見つめていたが、やがて引き締まった表情で、

「……見慣れぬ顔だな。誰だ？」

と言った。もちろん、服装からキリエが危険な人物であると確信しての言葉である。

「キリエと言うものだ。貴方を殺しにきた」

「ほう」

アヴァロン王は言った。騒ぎもしない。ゆっくりをベットから上半身を起こした。

「誰に頼まれたのかな？」

「自分から進んで依頼主を明かすような馬鹿な刺客はいない」

「……なるほど。質問が悪かったようだ。では、幾らで雇われた？」

「一億」

そのキリエの言葉を聞くと、アヴァロン王は苦笑した。

「一億か……一国の王の命が一億とは高いか安いかわからんが。少なくとも自分の命を危険にさらすだけの仕事と割に合う金額とは思えんな」

「別に金のためにやっているのではない」

「ほう？では何のために」

「……貴方に理解できるかどうかは知らんが、この世には金も名誉も望まぬ者もいる。ただ自

分の技術を磨き上げ、それを試す事を生きがいにして連中がな。俺もその口だ」

「自分の殺しの技術を実践するためだけに、わざわざ危険を冒してまでここまで来たと？」

「そうだ」

キリエの言葉に、アヴァロン王はまた小さく笑った。

「……確かに少々理解しがたいな。それにしても、キリエと言う名は伝説の暗殺者と聞いているが、寝ている者をわざわざ起こすとは随分酔狂な暗殺者だ」

アヴァロン王の言葉に、キリエは言葉を詰まらせた。自分でも、なぜ標的となる人物を起こしてしまったのか理解できない。話せば情が移る。暗殺者としては最悪だ。

「……それで、さっさとわしを殺さんのか？何を待っている？」

アヴァロン王が逆に尋ねた。

「お前は死にたいのか？」

「まさか。わしだってまだまだ子供の一人娘を残して死にたくはない。娘の花嫁姿ぐらい見ながら死にたいものだ。しかし、今この場ではわしの命はお主に握られておる」

「……助けてもいい」

言って、キリエははっとした。なぜ自分はこんなことを言うのだろう。

「それは助かる。しかし、仕事を反故にしてお主はよいのか？今後、二度とお主に殺しを頼む者などいなくなるぞ」

「……別に構わんさ。どのみち、今回の仕事を最後に、足を洗うつもりだった。今回以上に困

難な暗殺など二度とはないだろうからな。くだらん仕事をしても退屈なだけだ。ただし、：

…

「ただし？」

「お前の持っている、この国の王の証である王冠が今ここにあるなら、それが欲しい」

「王冠を？……なぜだ？」

「俺は命を捨てて覚悟でここまで来た。帰りも無事ですむなど考えてもいない。それぐらいの見返りは当然だろう。俺がここまでこれたと言う記念品にな」

「……いいだろう。王冠はその机の上の箱に入っている」

アヴァロン王は一つの箱を指差した。ゆっくりベットから立ち上がると、その箱に向って歩き出した。

「しかし、まったく……君は変わった男だ」

箱を手にしたアヴァロン王は、苦笑した。

その時、部屋の扉が勢いよく開いた。数人の兵が部屋になだれ込んでくる。とっさに、キリエはアヴァロン王と自分が侵入してきた窓を瞬時に見た。それは時間にしてコンマ数秒。逃げるか、アヴァロン王と人質にとるか考えたのである。アヴァロン王も、自室に突然の兵の侵入に驚いた顔をしている。キリエはアヴァロン王から目を離し、窓に向けて走り出そうとした。

シュツという小さな音が、キリエの耳に聞こえた。それは本当に小さな音だった。兵士がなだれ込んでくる騒音の中、その音が聞こえたのは一流の暗殺者として神経を研ぎ澄ませてあつ



たキリエだけだったろう。

はっとして、アヴァロン王を振り返るキリエ。

アヴァロン王は床に倒れていた。

部屋に入って来たナナが、倒れたアヴァロン王と、部屋に立つ黒衣のキリエの姿を見た。ナナの顔が怒りで強張る。

「貴様！」

ナナが飛び出して、キリエに組み付こうとした。キリエはいち早く、身を躍らせて窓から飛び出す。ナナが急いで窓から身を乗り出した。そこは地上十数メートル、逃げ場は無いはず。しかし、キリエの姿はどこにも無かった。

「ちっ」

ナナが舌打ちして、部屋の中を振り返る。兵士達に囲まれるようにして、エステルが倒れたアヴァロン王の容態を確認していた。

エステルが顔を上げた。ナナと目が合う。エステルは悲しげに首を横に振った。

ナナの意識が、怒りと絶望と悲しみで、真っ暗に歪んだ。意識が遠のいて倒れそうになるのを、壁に手を付き何とか支える。ふらつく足で、アヴァロン王の元まで行く。眼を見開いたまま呼吸の無いアヴァロン王の首には、小さな針が突き刺さっていた。おそらく毒針だろう。

「陛下……」

ナナがうな垂れ、かすれた声で呟く。側にいるエステルも眼が涙で赤く滲んでいる。

ナナが急に立ち上がった。涙で濡れた瞳は、鋭い光を発している。

「下手人はキリエと言う男です。まだ城からは出ていない筈、なんとしても見つけ出してください。それと、今ここで起こったことは絶対に口外しないように。今、このようなことが起こったと知れ渡れば、必ず国内外に混乱がおきます」

ナナが皆を見渡していった。兵士達は頷いて、慌てて外へ出て行く。

「エステルちゃん。陛下の御遺体は誰かに任せて、貴女は何人か連れて急いでオクト大臣の身柄を拘留してください。私はミリアムを抑えます」

ナナが言った。エステルは頷く。

エステルは仲間の十数人の諜報員と連れて、オクト大臣の自宅の前に行って来た。門の前には警護の兵士が二人立っている。

「我々は国家諜報部の人間です。緊急事態につき、オクト大臣にお会いしたい。通させていただけます」

先頭に立っているエステルが、身分証を見せて兵士に言う。二人の兵は槍を十字にして交差して、エステルの行く手を阻んだ。

「この様な深夜に、困ります。オクト様はとっくに就寝しております」

エステルが鋭い眼で、兵士の瞳を見る。

「……やむ得ませんね」

エステルの手が目にもとまらぬ速さで動いた。瞬く間に、二人の兵士はエステルの当身によつて倒された。白目をむいて気絶している。

「早くここを開けなさい。開けないと、門を叩き壊してでも中に入りますよ」

屋敷の巨大な門を前に、エステルが落ちいた、しかしよく通る声でそう言った。

しばらくして、門がゆっくり開かれた。エステル達が屋敷の中に入る。玄関を入ったところすぐのエントランスに立っていたのは初老の品のいい男だった。この屋敷の執事だろう。エステル達の姿を見て、やけにびくびくしている。

「オクト大臣は？」

「御館様は、お二階の寝室で……」

執事が消え入りそうな声でそう言った。

「私はここだ」

エステルが声のしたエントランスから二階へ通じる階段を見る。オクト大臣が数十名の軽装の兵を連れ、階段から降りてくるところだった。階段を降りきったところで、オクト大臣とエステルが向かい合う。

「この様な夜更けに何の用かな？」

オクト大臣が威圧的に言った。その後ろには五十名近い兵士達が並んでいる。エステルがが連れて来た人数の三倍はいる。オクト大臣の方の兵は皆、軽装ながら武装していた。このような夜更けに武装している事態おかしい。

エステル達とオクト大臣の兵達が睨み合う。辺りに緊迫した空気が流れた。最初に口を開いたのはエステルだった。

「オクト大臣。貴方を国家反逆罪の容疑で逮捕します。ご同行願いましょう」

エステルが多くの兵を前にしても、臆することなく言った。

「何を馬鹿な。何処にその様な証拠がある？」

「諜報部員の目撃証言です」

「そんなものが証拠になるか！私を誰だと思っている！一体これは誰の命令だ！」

オクト大臣が怒鳴った。しかし、エステルはあくまで平静だった。

「貴方は我が国、レオデグランスの國務大臣です。それに誰の命令かとの事ですが、これは我等諜報部独自の判断です」

「貴様等一役人の独断で私を逮捕するだど？笑わせるな。陛下の命令でもあれば話は別だが……」

「どうやらお忘れのようですね。我等諜報部は何処の派閥にも属さない国王直属の組織です。そして今、国王は諸事情により命令を下せる状態にありません。そうである以上、我等は独自の判断で行動します」

「なに！国王陛下がどうなされた？」

オクト大臣が驚いたように言った。エステルには一瞬、オクト大臣の表情に笑みが見えたたような気がした。

「それはお話できません。とにかく、貴方を拘留します。ご同行願いしましょう」

エステルがオクト大臣に近づこうとする。オクト大臣の兵達が一斉にエステル達を取り囲む。エステルがじろりと兵士達を見回した。

「抵抗するためになりませんよ。私達に槍を向けると言う事は、国家に対する反逆を意味します。全員、縛り首になりたいのですか？」

エステルの言葉に、オクト大臣の兵達はたじろいだ。

兵士達が動かないのを確認すると、エステルはオクト大臣の後ろに回って、手に縄をかけた。オクト大臣も、ここで争っても利は無いと思ったのか大人しくしている。

「……小娘、こんなまねをしてただで済むと思うなよ。どうせ、貴様等ごときの力で長くは拘束しておけない。その時を覚えていろ」

オクト大臣が憎々しげに言う。

「申し開きは王立裁判所ですて貰いましょう」

エステルはそう言う、オクト大臣を連れて屋敷を出た。

キャメロン城内にあるミリアムの自室に踏み込むナナ達。豪華なアンティーク家具が変わらず並んでいる。しかし、そこにはもう誰もいなかった。

「逃げられましたか……」

ナナが呟く。敵ながら、鮮やか過ぎるほどの行動の早さだった。

「急いでレディ・ミアムを全国に指名手配してください。懸賞金を掛けて。ただし、陛下暗殺の事には絶対に触れないように」

ナナが側にいた仲間の諜報員に言った。

「それと、サンダルークにおいでになるエレイン様へ、早馬を飛ばしてください」

偉大な王、アヴァロン王は死んだ。

レオデグランスの玉座は、今は誰も腰を下ろす者は無い。

しかし、世界は動いている。激流のように、レオデグランスを取り巻く情勢は、予断を許さない。

一刻も早く、エレイン姫にご帰還して頂かないと、このレオデグランスは大変なことになる。ナナは、遙か遠く、エレイン姫がいるであろうサンダルークを思った。

アヴァロン王暗殺の翌朝。キャメロンの町はいつもどおりの朝を迎えていた。まだ民衆はこの国の王が暗殺された事など知らない。平穩そのものだった。

町の一角に、『フォーキングス』と言う名の宿屋がる。名前とは裏腹に二階造りの、粗末な宿屋だ。客の大半は交易に来ている中小商人や、労働者。少なくとも貴族などが泊まる事は今までにない。

その『フォーキングス』の店主ファードンはいつもどおり、カウンターに座っていた。まだ

早朝で人も疎らな外の通りを眺めながら、欠伸をかみ殺す。この宿は基本的に門限などと言うものは無い。どんな時間にも客の出入りは自由だった。宿泊料は前金で貰ってあるから心配ない。

そこに一人の男が宿に入ってきた。ファードンはギョツとする。男の眼が暗く落ち窪み、顔には濃い疲労の色が浮かんでいて、それでいて眼だけぎらぎら光っていたからだ。

「……これはエルニー様。今お帰りですか？」

ファードンが慌てて頭を下げていった。男はこの宿に二週間前から泊まっている客だった。宿帳に書かれた彼の名前はエルニー・ドルマンとなっている。職業は高級品で知られるキャメロン産のガラス製品を扱う商人と言っている。無口な男のようで、二週間も泊まっているのに店主のファードンには、ほとんどこの男と会話した覚えが無かった。

「……昨日は酒場で飲んでいて、そのまま酔い潰れて寝てしまったらしい。店から放り出されたようで、今朝気づいたら道端で寝ていたよ」

エルニーが低い声で苦笑して言った。

「それはそれは……」

「まだ酒が抜けていないようなので、部屋で寝る事にする。誰も部屋にはこさせないでくれ」  
エルニーはそう言うと、重い足取りでファードンの前を通り過ぎ、二階の部屋へと上がっていった。

キリエが足を引きずりながら、階段を上がっていく。エルニー、これはキリエが使っている

偽名の一つだった。身分を偽って、この宿に泊まっていたのだった。

昨夜は最悪の夜だった。数千の兵士が血眼になって、自分を探していたのだ。隠れられる場所など無い。城から脱出するのはキリエにとつても至難の業だった。そのために何人もの兵を殺した。標的だけを狙うのが最上の暗殺者としては、最低の結果だった。

ようやく部屋にたどり着いたキリエは、疲れたようにベットに腰を下ろした。

それにしても、まずい事になった。昨夜アヴァロン王が倒れた時、あの小さな音、キリエにはすぐにわかった。あの音の正体は吹き矢の一種だろう。アヴァロン王の部屋に兵達がなだれ込んで来た時、その中の誰かがアヴァロン王に向かって吹き矢を吹いたのだ。それは手のひらに隠れる様な小さな物に違いない。それにあの騒動の中、兵達の中で、本当の下手人に気づいた者など誰もいないだろう。あの状況から、間違いなくキリエが犯人とされているはずだ。まあ、その事はキリエにとってはどうでもいい事だったが、もともと殺す気で忍び込んだのだ。国王暗殺の容疑者として追われる事の覚悟はできている。

しかし、それにしても気になるのは、誰がアヴァロン王を殺したのかと言う事だ。直接の下手人は誰であるかわからないが、おそらく命じたのはあのミリアムとか言う女だろう。

まったく用心深い女だと、キリエは思う。キリエが万が一仕損じた時のために用意しておいたのだろう。

ドアがノックされた。キリエはハツとして立ち上がる。

「……誰だ？」



キリエが背でドアの側の壁に張り付き、そう言った。

「ミリアムよ。中に入れてもらえるかしら？」

「……何の様だ？」

「依頼主に対して何の用だはないんじゃないかしら。一応、言い訳を聞きに来てあげただけ  
ど？」

「……」

しばらくの沈黙の後、キリエはゆっくりとドアを開けた。こんなボロ宿には不釣合いな華麗な衣装を纏ってミリアムは、ドアの外に立っていた。

「へえ。また随分汚いところに宿を取ったのね。まるで犬小屋みたいだわ」

油断なく眼を光らせているキリエを外に、ミリアムは無用心とも思える軽快さで部屋の中に入ってくる。ふわりと裾の長いドレスを揺らせ、ベットに腰掛けた。

「さて、何か言いたいことはあるかしら？」

座ったまま、ミリアムが言う。口の端に微笑を覗かせているが、その目は笑っていない。冷たく光っている。

「……ない」

「ないで済むと思っているの？ 貴方はアヴァロン王暗殺のために雇われていたはず。それが土壇場になって、王に情けをかけるとは。それにあのナナという女中、貴方は殺したといったの  
に彼女まで生きていた。おかけでオクト大臣は捕まり、私まで指名手配される始末」

ミアムが楽しげに、しかし言葉の端にどこか苦々しさを表して言う。

「……言い訳をするつもりはない」

「そう。なら覚悟はできてるわけね」

ミアムがゆっくりとベットから立ち上がった。

「俺を殺すのか？」

キリエが静かに聴く。

「ええ、そのつもり。貴方のおかげで私の計画は大きく変更を余儀なくされた。オクト大臣にこの国を乗っ取らせ、私が裏でそれを操るといふ計画がね。貴方にはその責任を取ってもらわ」

ミアムの言葉に、キリエは油断なく目を周囲に配った。部屋の中にも外にも人の気配は感じられない。キリエとミアムの他に、誰もいないはずだ。

「何を中心しているの？心配しなくても、今日は私だけよ」

キリエの心中を見透かしたように、ミアムが笑う。

「……？」

キリエにはミアムの言葉の意図がわからなかった。ミアムという女は、美しい容貌とは裏腹に、蛇のように危険な女だ。常に相手の一手先を読み、罠を張る。まさに狡猾な毒蛇だ。

しかし、その毒蛇も牙が無くては相手に毒を回す事はできない。今この場にいるのはミアム一人。どうやってキリエを殺すつもりなのだ。

「まだ理解していないよね。貴方は私が直接殺してあげるって言うてるの。貴方の五体をバラバラに切り刻んであげないと、私の気は収まらないわ」

ミリアムが微笑む。

何を馬鹿なとキリエは思う。どうみてもかわい女性にしか見えないミリアム一人で、どうやって自分を殺すというのだ。おまけにミリアムは何の武器も見に付けていない。いや、例えミリアムが毒を塗った短剣を懐に隠し持っていたとしても、キリエから見れば赤子が剣を持っているのと大差ない。

しかし、微笑を浮かべているミリアムの瞳を見た瞬間、キリエは何かを感じた。頭の前からつま先まで、氷柱で貫かれるような。それはキリエの生物としての直感だった。頭の前から

ミリアムの瞳が、残酷に瞬いた。

とっさにキリエは後ろに飛んでいた。

しかし、ミリアムの動きはキリエより速かった。瞬く間に、キリエの目の前に迫る。

「ちっ！」

驚くべきミリアムの動きに、驚愕するキリエ。こここの部屋は狭い。キリエの背にはもう壁がある。逃げ場は無かった。

相手の首筋めがけ、手刀を振り下ろすキリエ。当身どころか首の骨をへし折ろうかというほどの力とスピードの、まさに必殺の一撃だった。しかしそれも、相手首筋に届く前に、なんなくミリアムに手首を掴まれ、止められた。とたん、激痛をキリエは手首に感じた。手首の骨が

砕けそうだ。女性の、いやまともな人間の握力ではなかった。

ミリアムが、キリエの手首をつかんでいる手を強引に振った。キリエの体が宙に浮く。技術も何も無い、ただの力技だ。だがその力技で、キリエは放り出された人形のように投げ飛ばされ、壁に叩き付けられた。

「まさか、これぐらいで死なないわよね？」

ミリアムが、床に倒れたままのキリエを見下ろして言う。ミリアムはそう言うが、今のはただの人間なら死んでもおかしくない。それぐらいキリエは強く壁に叩きつけられたのだった。木製の壁は割れ、部屋には埃が舞っている。

―部屋の外で足音が聞こえる。誰かが急いで二階に上がってくるようだ。

「何です！今の音は？」

部屋の扉が荒々しく開いて、宿の主人であるフォードンが顔を出した。倒れているキリエと、その側に笑って立っているミリアムを見て、一対何が起こったのかという顔をしている。

ミリアムがフォードンの顔を見て、にこっと微笑む。美しい笑みだ。

「邪魔よ」

ミリアムが笑ったまま、すっと手を前に振る。

空間が歪む。

血飛沫をあげ、フォードンは声も上げることができず、体はバラバラに崩れた。

顔と体中に血を浴び、白のドレスを真っ赤に染め、満足げに笑みを浮かべたミリアムが、

フオードンの死体から目を離し、キリエが倒れているであろう床を見た。

——いない。

ミリアムがはっとして、後ろを振り返る。

きらりと一縷の光。

ミリアムは首を横にそらす。

はらりと、ミリアムの髪が切れて、宙に舞った。

二人は互いに後ろに飛んで、間合いを取る。

キリエの両手には、いつの間にも手にしたのか、彼の愛用のカタールが握られている。

ミリアムが、そっと自分の頬に手を触れた。指先を見る。指に絡む、赤い血。

「……やってくれるわね」

ミリアムが自分の指先を見たまま言う。

キリエはカタールを構えたまま。

「おまえ、人間じゃないな」

キリエが言う。あのキリエを投げ捨てた怪力、身体能力。それに詠唱もなしに、人一人を楽々殺してしまうほどの魔法を唱えることのできる魔力。とても人間とは思えない。

「ええ、その通り。私は魔族よ。それも六百年以上生きている上位のね」

ミリアムが言う。

「魔族が人間に殺しを依頼するとは、世の中も変わったな……」

キリエが自嘲気味に、呟く。

王位を奪おうとするオクト大臣の野望に、それを後ろから操ろうとするミリアム。アヴァロ  
ン王暗殺に雇われたキリエ。それを阻止しようとするナナ、エステル。取り巻く貴族達。使わ  
れる兵達。たった一つ、玉座という座を巡って、そこには数え切れないほどの人間と思想が渦  
巻いている。複雑だ。人間の世界だけでもこれだけ複雑なのに、そこに魔族までかかわって  
くるとは、正直、嫌になる。

キリエは静かに首を振った。自分に関係ない。人の貴族の権威策謀も、魔族の人間への憎悪  
も、自分には関係ない。金を貰って、ただ言われた相手を殺すだけ。

「……私の顔に傷を付けるなんて、楽な死ぬるとは思わないことね」

ミリアムがそう言って、キリエのほうに一步踏み出した。

そのミリアムの足が、どうしたことかよろめいた。視界が揺らぐ。ミリアムは驚いたように  
壁に手を付く。ミリアムはきつい目で、キリエの持つカタールを睨んだ。毒だ。頬を切られた  
時に、体内に毒が入ったらしい。

「魔族も人間と同じで毒は効くようだな」

キリエがカタールをおろして、言う。象でも数分で死にいたる毒だ。人間なら、心臓が止ま  
るまでにもの数秒もかからない。

キリエが横目で、部屋の窓から外を見た。槍を持って、鉄の兜を兵士達が集まってくるのが  
見える。都市の警備兵だ。この宿の騒ぎを聞きつけてやってきたらしい。すぐにでもこの部屋

に踏み込んでくるだろう。

ミリアムは壁に寄りかかり、立っているのも辛そうだった。滲む汗で、美しい髪は額に張り付き、顔は蒼白だった。息は荒く、今にも止まりそうなほど弱い。

「……警備兵達が集まってきた。俺はもう行くぞ」

キリエが、そんなミリアムを見て言った。

虫の息である今のミリアムを殺すことなどたやすい。だが、キリエは殺すつもりはなかった。殺しの依頼を放棄したという負い目があるからだろう。キリエ自身、本来なら殺されても文句は言えないのだ。

キリエが部屋から出て行くとした時、ミリアムが突然力強く立ち上がった。傷つけられた方の頬に手を置く。ゆっくりとその柔らかく白い頬の肉を、細い指で爪を立てて掴むと、突然、さっとその手を引いた。

耳を覆いたくなるような嫌な、肉が千切れる音がして、血が溢れた。

ミリアムの指は、彼女の頬の肉を根こそぎ抉り取っていた。彼女の顔が、髪が、溢れ出てくる血で真っ赤になる。

キリエはぎよっとして、ミリアムを見る。毒の付いた部分を取り除きたかったのだろう。確かにそうしなければ、間違いなく死ぬ。だが、……。

ミリアムは、立ちすくむキリエを無視して、部屋に掛けてある薄汚れた鏡の前まで、ふらつく足取りで歩いていった。

鏡を覗き込む。

顔中が血で真っ赤で、肉を失った頬から、白い頬骨と歯が覗いている。彼女の美しかった顔は、今では見る影もない。美しいままで残る目鼻と、その屍鬼の様な部分が、哀しいまでに際立っている。

ミリアムは鏡を前に、両手で顔を覆って、うな垂れる。

肩を震わせた。すすり泣くような声が聞こえる。

キリエは、動けなかった。

「……ヒ……ヒヒ……ハハ……」

ミリアムの覆った顔から、泣き声とも笑い声ともつかぬ声が聞こえてきた。それは消え入るように弱く、しかしだんだん強く、やがては甲高い笑いになった。

「……イヒヒヒ……アハハハハ」

ミリアムは片手で顔を覆ったまま、もう片手で鏡を叩き割った。割れたガラスの破片がミリアムの手に突き刺さる。

ミリアムはついに顔から手を離し、天井を見上げ、狂ったように笑い続けた。

キリエは動けない。そこに数人の兵士達が入ってきた。しかし、兵士達も血塗れで笑い続けるミリアムの姿を見て、立ち竦んだ。

高い笑い声は、いつのまにか歌に変わっていた。

頬の下覗く白い歯の間から、調律の狂ったオルゴールの様に、不気味なメロディが響く様に



漏れてくる。

しかし、その歌はどこか幼く、童謡の様に、一縷の寂しさと哀しさを含んでいた。ミリアムは謡い、高く、天に手をかざした。

キリエが、はっと、身を躍らす。

部屋に、ぱっと、光が満ちた。

エステルが部下から連絡を受け、宿屋『フォーキングス』に着いた時には、建物は原形を留めず、バラバラの木材と成り果てていた。

瓦礫の下から、警備兵達の死体が運ばれていく。死者十七名、重傷者二十二名。惨々たる状況だ。

生き残った者達の証言から、この宿にキリエ、ミリアム兩名がいたことは確認が取れた。しかし、その二人の死体はついに、発見されなかった。

### 魔王城。

その一室で、モードレッドはゆったりと座り、目の前に広げられていた地図を眺めていた。地図上には、幾つものマルやバツや、数字が書き込まれている。

モードレッドが満足げに目を細める。

かつて最強と詠われた一三使徒は、いまその殆どが死に、モードレッドの仇敵といわれたトゥオンも何処へ消えたか、

主を失った軍勢など物の数ではなく、かつての一三使徒達の居城も、トゥオン率いる新生魔王軍の拠点も、モードレッドの軍勢に為すすべなく陥落し、

今や、魔界の要所の大部分は、モードレッドの揮下に落ちていた。

残るは、トゥオンの本城であるアストラト城と、ネヴィーナの古城カムナギトだけだ。

もとより、ネヴィーナの配下達など微々たる数であろうし、もはやアストラト周辺に駐留しているトゥオン勢も十万を越えまい。

モードレッドは、暗闇の部屋でただ一人、高らかに笑った。

ようやく、この時が来たのだ。

モードレッドが、新たな魔界の王となる日が。

いや、魔界だけではない。このアトラス大陸を統べる、霸王になれる。魔界さえ統一してしまえば、人間達など物の数ではない。

今や、魔界の覇者となったモードレッドの抱える軍勢は、百万を越える。この巨大な、有無を言わさぬ数の力の前には、トゥオン軍の残存兵など、荒れ狂う濁流に飲み込まれるちっぽけな蟻の様に、アストラト城と共に跡形も無く消し飛ぶだろう。

「……一三使徒か……モートが選び出した、不世出の英雄達のはずだが。思えば、まったく下

らん連中だったな」

モードレッドが笑う。

ポールス、ヴァシユラ、ラウド、メラアガンス、トウオン、ネヴィーナ。

「確かに、奴らは一人で兵一万に匹敵する無敵の戦士達だ。だが、所詮己の力のみを恃む蛮勇に過ぎん。真の英雄とは、兵を指揮し、時勢を読み、世界の大局を見る目を持つ者の事だ。あのモートのようにな。やはり、モートの後を継ぐものは、私しかない」

モードレッドが笑った。

ポールス、ヴァシユラは死んだ。サンダルク境界で戦闘を続けている部隊からの報告によると、ラウドもどうやら死んだらしい。

今、モードレッドの側に、彼を助ける一三使徒はいない。

しかし、モードレッドにとつては、そのような事、どうでもよかった。

一三使徒はいなくとも、一三使徒にも匹敵するような綺羅星の如き人材が、彼の手中には数え切れないほどいる。そして、百万の軍勢もだ。

戦いは数なのだ。無敵の戦士も、たった一人では一万の兵に勝てない。十をもって百に勝つというのは、聞こえはいいが、そんなものは所詮、奇道に過ぎない。百をもって十に勝つ。それが兵法の正道にして、基本の基本だ。

しかし、モードレッドにも、心に残る一抹のしこりがあった。

それは彼の副官であるセリーンのこと。彼女は、何を企んでいるのか、レオデグランスに

いたはずだが、急に連絡が途絶えた。

もう一つは、彼の部下の一人であったルーテネの事。彼女のコピーは、いつも魔王城に十や二十人はいたはずだが、これも最近になって忽然と姿を消した。あのイカレた女は、何をしようとしているのか、モードレッドにもまったく見当が付かなかった。

「……まあいい」

モードレッドはそう呟くと、再び視線を目の前の地図に戻した。

所詮、大局を動かすほどの、要因ではない。

世界統一は、目の前なのだ。

しかし、あと一歩のところまで来ても、モードレッドに油断はなかった。

まるで詰め将棋でもするかのようにじっくり、アストラト城を囲む軍勢の軍備を、整えていく。この世界の覇者を決める、最大にして最後の決戦に備えて。

魔界のとある僻地。

空は薄暗く、灰色の雲が流れ。黒い山脈は、まるで槍を立ち並べたかのように、鋭くそびえたっている。

その山脈の中腹。生え並ぶ木々や草もなく、岩だけが、至る所に無機質に転がっている。こんな場所では、例え魔物でも生きてはいけなだろうと思われた。

しかし、そんな場所に、奇妙な一団がいた。

真に奇妙な光景だった。

そこにいるのは、みんな同じ顔をした、青い髪の幼い少女達。

ルーテネだった。

それも百や二百という数ではない。数える事もできない。群がる蟻の様に、一箇所に固まっている。

皆一様に、無表情だった。話す声も、動く姿も見えない。ただ人形のように、じっと立ち並んでいた。

だが、たった一人、無数に並ぶルーテネ達の中央に、他のルーテネとは明らかに違うルーテネがいた。

それは姿は少女のままなのに、皮膚は老人のように荒れてひび割れ、瞳は黄色く濁り、岩場に蹲りながら、弱々しい息をしていた。そして、なにより目に付くのは、そのルーテネの下部は、大きく膨らんでいることだった。膨れ上がったお腹の皮膚には、青い血管が透けて見え、時折、鼓動を打った。

胎児は、夢を見ていた。

暗い空、穏やかな海。

その海で、生命は生まれ、

幾億年もの時をかけて、進化し、

やがて、人となつていく、その様を。

胎児は、夢を見ていた。

やがて、生まれ出る、

その時まで。

サندانルーク宮廷。

その会議室に、若きユング王をはじめ、サندانルークの重臣達が集まっていた。エレインの姿も見える。彼らの表情は皆、一様に重かった。

ミルチアからの降伏勧告から丸一日。意見はまとまらなかった。主戦派と降伏派が二つに別れ、広い会議室には舌戦が飛び交っていた。

主戦派はシーグムンドを筆頭とする武官達。コーデリアもこの立場だった。

降伏派は内政官達だ。ネツコの父、リジヨはこちらを支持している。

ユング、スイトーピーは中立といった立場で、まだ自分達の意見を表さないまま、主戦派と降伏派の意見を聞いていた。

「諸君、我が祖国は勇者アトロに付き従った賢者サندانルークが建国して以来三百年、一度として侵略をこころむ敵国などに頭を下げたことはない。また一度としてこの城は陥落したこと

もない。今、ミルチアなどという蛮国が降伏勧告を言い出してきたようだが、笑止千万。増長のアルテオムとか言う成り上がり小僧に、サンダルクの強さを思い知らせてやろうではないか！」

シーグムンドが円卓の椅子に座ったまま、力強く言った。周りにいる武官達から、声援がある。向かいに座る内政官達は顔をしかめた。

「しかし、將軍。敵はミルチアだけではありません。北方には魔族の一群が領土を侵そうと布陣しており、現在コーデリア殿揮下のエーデルリッターが交戦中です。しかも、その魔族の一団を指揮しているのは、あの十三使徒のラウドです。それだけではありません。物見の報告によると、さらに魔界から数万の増援がこのサンダルクに向けて進行中とか。とてもサンダルク一国で防ぎきれぬような敵勢力ではありません。例え、防ぎきったとしても、我が国の被害は甚大。国内にある幾つもの都市は陥落し、罪のない女子供が目も覆いたくなるような凄惨な辛苦にあうでしょう。ここは臥薪嘗胆、恥を忍んでミルチアの提案を呑み、ミルチアとサンダルクの二国をもって、魔族の進行に備えるべきではないでしょうか」

リジヨが整然と言った。内政官達から賛成の声が上がる。

「何を弱気な！例え国土すべて焦土と化そうとも、サンダルク建国以来の誇りを捨て去っていいものではない。それにサンダルク一国ではない。お味方にはレオデグランスという数百年来の同盟国がいる。幸いなことに、今この場にレオデグランス国王陛下の御娘、エレイン王女がいらっしやる。ぜひ、エレイン様の御意見を拝聴したい」

シーグムンドはエレインに一礼して、そう言った。

「そうだ。余も、エレイン姫の意見を聞いてみたい」

ユング王が言った。円卓のユング王の向かいの席に座っていたエレインは、悠然と立ち上がった。そして、その場にいる全員を見渡した。

「始めにお断りしておきたいのは、私は他国の人間です。この国の国政に口を挟む立場の人間ではない事を、まずはご了承願います。故に、今問題になっている交戦か、降伏かという意見には、私はそのどちらにも賛成も反対もできません」

エレインはここで少し、言葉を切った。シーグムンドは少し顔をしかめる。エレインが交戦を支持してくれると踏んでいた彼としては、予想を裏切られて戸惑っているのだろう。

エレインが続ける。

「レオデグラルスとサンダルクは建国以来、同盟国として不断の友情を築いてきました。この三百年、幾度の人間世界の国の争いと、幾度もの魔族侵攻がありました。両国が存亡の危機に立たされた事、一度や二度ではありません。しかし、危機が訪れる度、両国は助けあって、その危機を乗り越えてきました。両国はまさに唇齒輔車。レオデグラルスの滅亡はサンダルクの滅亡、サンダルクの滅亡はレオデグラルスの滅亡です。今、ユング王が交戦、降伏、どちらを御決断なさろうと、我が父アヴァロン王とレオデグラルス国は全力を持ってサンダルクを支援することを、私はアヴァロン王の娘として、ここに誓います」

その声、その言葉、流れる清流のように澄み、その沈着な様子と、朗々たる音吐に、一瞬そ



の場にいる全員が耳を澄ましたが、終わると共に、主戦派の武官達が、わあっと歓喜の声を上げた。

「なお、付け足していただきますと、今朝、ライオネル率いる三万の援兵が、この城の郊外に到着しました。どうぞ、この援兵は貴国の一軍と思い、御自由にお使いください」

エレインが最後に言う。その言葉に、武官達の歓声はますます大きくなる。シーグムンドも満足げな表情で、その目尻の端には涙が光るほど、感極まっていた。

赤く目を晴らして、シーグムンドがユング王を見る。

「レオデグランズが御味方についてくれる以上、恐れるものはありません。陛下、ご決断を」  
シーグムンドが、言った。

「陛下、ご采配を。陛下がどちらを選ばれようと、我ら臣と、サンダルクの民は陛下についていきます」

スイートピーが、ユング王に一礼して言った。

「うむ、そうか……」

しかし、ユング王には、まだ決断はつかなかった。彼は王としては、まだ若すぎた。彼には戦場での経験も、戦を指揮した経験もない。戦争がどんなものか、想像もつかなかった。苦しむ民の顔ばかり浮かぶ。容易に決断できることではなかった。

その時、会議室にライオネルが入ってきた。驚く諸氏百官を無視して、慌てたように早足でエレインの側まで行くと、エレインに何か耳打ちした。

「なんですって！お父様が……」

ライオネルの言葉に、エレインはそう言って立ち上がると、天井を仰ぎ、気を失うように倒れこんだ。ライオネルがその身を支える。

「……ええ、大丈夫です」

ライオネルに支えられたエレインが、なんと口にする。

「どうなさいました？エレイン様？」

スイートピーが、心配そうに聞く。

「……なんでもありません。それより、ユング王とスイートピーさんお二人に、お話があります」

なんとか自力で立てる様になったエレインが、言う。

何かただ事でない事態を察知したスイートピーは、ユング王にさっと目配せし、ユング王は立ち上がる。そのまま、ユング王、スイートピー、エレイン、ライオネルの4人は会議室から出て行った。

会議室に集まった人々は、何があったのかと、騒ぎ出す。

一時間近くも経って、ようやくユング王とスイートピーは会議室に帰ってきた。しかし、エレインとライオネルの姿はなかった。

「皆様、お話があります」

スイートピーの言葉に、諸官は静まった。

「レオデグランス国内で問題が持ち上がり、エレイン様は急遽、キャメロンにご帰国することになりました。よって今までの議論は白紙となり、もう一度話し合いを一から始めたいと思います」

スイートピーが言う。

諸官、特に武官達は一斉に騒ぎ出す。

「馬鹿な！このタイミングで、急に帰国だと。レオデグランスで何があったというのだ？」

シーグムンドが席から立ち上がり、怒鳴った。

「それは今ここではお話できません。後ほど別の場で、話し合いたいと思います」

スイートピーが静かに言う。

シーグムンドはむっつりと黙り込んで、席に座った。

あのエレイン様が、理由もなく急に態度を変えとは思えない。相当な事態が起こったと見るべきだ。それに先ほどのエレイン姫の驚きと言葉……まさかアヴァロン王の身に何かあったのか……。

エレインはサンダルク城内のユング王から与えられた一室で、ただ座っていた。大きな窓から、外を眺める。一筋、涙が流れた。

「……お父様が死んだというのは、本当なのですか？」

エレインが景色を見たまま、言った。

「……つい先ほど、キャメロンから早馬が着ました。これがそのナナからの書簡です」  
エレインの後ろに立っていたライオネルが、エレインに一枚の羊皮紙を渡す。そこには短く、  
こう書かれていた。

アヴァロン王陛下、刺客に倒れ、崩御。

オクト、ミリアム兩名の差し金と思われる。

内乱の兆候あり。

急ぎ、ご帰還されたし。

書簡を持つエレインの手は振るへ、羊皮紙には涙が落ち、染みができた。

ライオネルは、エレインに掛ける言葉を持たなかった。ただ、

「……もはや、一国の猶予もありません。急ぎ、キャメロンに帰りましょう。兵馬の準備は既に整っております」

ライオネルの言葉に、エレインは頷いた。

「わかっています。ただ、気掛かりなのは、友国のサンダルークの危機に、私達が何もしてあげることができないということ。キャメロンに帰るだけなら、私一人でも帰れます。ライオネル、貴方と三万の兵はここに残って、ユング王の力になってあげてください」

「いけません！」

ライオネルの断固とした声に、エレインはビクツとして、ライオネルを振り向いた。

「エレイン姫、貴女様は甘過ぎます。たった一人、キャメロンに帰って、何をなさるつもりな

のです。言っておきますが、十二大貴族の当主達は甘くはありませんぞ。貴女様に王位継承の力無しとわかれば、あっさり別の者を王位に据えるでしょう。貴女様が王位に就くには、大貴族達の支持が必要です。そして、その大貴族達を従えるには、後ろ盾となる兵力が必要なのです。今この地にいる三万の兵を引き連れて、貴女様は首都に凱旋しなければなりません」

ライオネルが言う。エレインはうな垂れた。  
そうなのだ。

私はもう王女ではないのだ。

王である父は死んだ。

今の私はアヴァロン家の、一貴婦人に過ぎない。

十二大貴族というのは、アヴァロン家を含む、レオデグランス国内の十二の有力貴族のことを指す。十二大貴族の末裔は、勇者アトロ・アヴァロンと彼に従った騎士達である。ちなみに、オクト大臣もこの十二大貴族の一つ、バルリット家の当主である。

慣例として、レオデグランスの王位に就く者は、勇者アトロの血を引いていなければならない。そして、勇者アトロの直系の家系はアヴァロン家である。こう言えば、アヴァロン家の者だけが王位に就くだろうと思えるかもしれない。しかし、三百年の歴史の中で、貴族達は政略結婚を繰り返し、今や十二大貴族は互いに、親戚同士といってもいい血の繋がりのだ。

十二大貴族の当主すべてが、勇者アトロの血を多かれ少なかれ受け継いでいるわけである。結果、全ての当主に王位継承権があるわけなのだ。

実際、レオデグランス三百年の歴史の中で、アヴァロン家以外の当主が王位に就いた事など、何度でもある。

王位に就くためには、最低でも十二大貴族の当主達の過半数の支持を集めなければならない。そうでなければ、内乱になる。

「……わかりました。兵を引き連れ、急いで帰りましょう。私は父の意思を継ぎ、なんとしても王位に就かなければなりません」

エレインが言う。

そうだ。早く帰らなければならない。帰って、バラバラになった大貴族達を一つに纏め、必ず私が王位に就く。少なくとも、オクト大臣のような男を、王位に就けてはならない。今は国内で争っている場合ではない。魔族の脅威が、そこまで来ているのだ。

エレインは決意を胸に、意思の炎を瞳に宿し、椅子から立ち上がった。

その時、扉が開いた。部屋に一人の男が入ってくる。

「まあ！ロア」

エレインが声を上げ、うれしさのあまり、ロアに抱きついた。

「よく無事で。いつ帰ってきたの？」

「たった今着いたばかり。こいつも元気になった」

ロアがそう言って、背中からリュネットを引っ張り出す。リュネットは気まずそうな顔で、エレインの前に出た。リュネットとエレインは、犬猿の仲と呼べるくらい仲が悪い。

しかし、エレインは、そのリユネットも抱きしめた。

「ちよっと……」

「貴女、体の具合はもういいの？」

急に抱きついてきたエレインに戸惑うリユネット。その言葉も聞かず。エレインがリユネットに尋ねた。

「……ええ、まあ、お陰様で……」

ぶつぶつ呟く、リユネット。リユネットも、魔界の旅を経て、少しは丸くなったらしい。昔のリユネットならエレインを突き飛ばしているだろう。

「他にもいるぜ」

ロアが後ろを指差す。そこにはアッド、メルフィナ、アマリタ、ネッコの姿が。まあ、ネッコはずっとサンダルクと一緒にいたが。

「……みんな……無事でなによりだわ」

エレインはその一人一人に抱擁し、頬にキスをした。

特にアマリタの事は、実の妹のように心配し、強く抱きしめていた。アマリタは迷惑そうな、照れくさいような、複雑な表情をしていた。

ライオネル、アマリタ、リユネット、ネッコ、メルフィナ、アッド、ロア。

ひさびさに揃った仲間達を見て、エレインの瞳からは、涙が流れた。

父が死に、悲しみに暮れているところに、一緒に遠路を旅をし、苦難を共にしてきた仲間達

が帰ってきたのだ。

ただ、うれしかった。

涙が止まらなかった。

「……泣くほどのことか？」

相変わらず、ネツコは毒舌だ。

ロアは笑った。

「ははは、まあいいじゃんか。これでようやく、パーティーが再結成できたわけだし。あとは目指すは魔王城だな」

ロアが言う。

「……気が早い」

アッドが呟く。

「でも、ここまで来たんです。もう一息ですわ」

メルフィナが微笑んで言う。

エレインが、頭を下げた。

「ごめんなさい。私、もうみんなと一緒にには行けないの。キャメロンへ、帰らなければなら  
ない」

エレインが、頭を上げ、涙に濡れた瞳で、微笑んだ。

「え？なんで？」



ロアが、驚いて声を上げる。信じられないといった表情だ。

エレインがライオネルに視線を投げかける。ライオネルは頷いた。

「……そうですね。みんなには話していいでしょう。しかし、これから話すことは、絶対に他言無用に願います」

エレインが言う。

「まかせてくれ。口は堅いほうだ」

「……」

ロアの言葉に、嘘つくなど言わんばかりの疑いの視線を送るリュネット。

「実は……我が父、アヴァロン王が死にました。私はキャメロンに帰って、父の後を継いで王位に就かなければなりません」

エレインの言葉に、その場にいる全員が息を詰まらせた。

アヴァロン王……世界の中心たるレオデグランスの国王にして、絶対の権力を持つ者。勇者アトロの血を引き、境界地域において、幾度のとなく魔族の侵攻を撃退してきた偉大な王。そのアヴァロン王が死んだのか。

ネッコは思った。彼の死で、レオデグランス一国のみならず、世界中の国が大混乱を受けるだろう。かつてないほどの大規模な魔族の脅威が、今そこに迫ってきているというのに、なんてことだ。

それにエレインは自分が王位に就くといったが、そう簡単にいくだろうか？エレインはまだ

若い、おまけに女性だ。いくら前王の一人娘だからといって、他の貴族達が納得するだろうか……。

「私は、みんなと一緒に行けない、ここでお別れになるけど、みんなの旅の成功を祈ってるわ。」

エレインは悲しげに、微笑んだ。

ここはネッコの家。ネッコ、アッド、メルフィナ、ロアの4人が集まっていた。あの日、キヤメロンで偶然出会い、共に旅してきた最初の4人だ。

ナターシアは「今日はまた、大勢友達を連れてきたわね」なんて仏頂顔で言いながら、四人にお茶を出し、さっさと部屋から出て行った。

「ん？アムリタはどうした？」

ロアが聞く。いつの間にか、アムリタはいない。

「奥の部屋で休んでるよ。まだ体調が優れないんだ」

ネッコの言葉。

「そういうお前は、リユネットはどうした？」

「ああ、あいつなら、第十六神聖騎士団を連れて、いったんラヴィーンに帰るって。だいぶ前から帰還命令が来てたらしい。ずっと無視してたらしいけど、そろそろ帰らないと異端審問に

掛けられそうだって言うんで、急いで出発して行ったよ」

ロアが言う。

エレインはライオネルと共に故国に帰り、リユネットもまた、去った。アムリタも、旅をできるような体ではない。

旅の仲間達は、こうして集結し、また、去って行った。

残されたのは最初の四人。

「さて……俺達四人、これからどうする？」

アッドが言う。

「どうするって……最初の目的通り、魔王城に向かうんじゃないのか？」

ロアの言葉。

「でも、アヴァロン王がお亡くなりになれば、勇者募集で集まった我々の目的も、もう消えてしまったことになりますよ」

とメルフィナ。

「もう、魔王討伐なんて暢気な事言ってるご時世じゃないのかもな……このサンダルクだって、どうなるかわからないんだ。王を失ったレオデグランスも……」

ネッコが、呟いた。

世界は、四人を残して、動いていく。

この広大なアトラーズの世界から見れば、ちっぽけな四人。

世界はどう変わっていくのか。

自分達に何ができるのか。

四人には、わからなかった。

「落ち着け！」

「落ち着いていられるか！」

朽ちかけた古城、その一室でトゥオンとメレアガンスが激しく口論していた。

「トゥオン、お前の気持ちもわかる。しかし、お前が行ってどうなる？」

「そんなことは関係ない！私を慕って付いて来てくれた部下が今にも滅ぼされようとしているのに、その主たる私がこんなところでのうのうとしていられるわけないだろう」

メレアガンスの説得に聞く耳も持たず、トゥオンはその内にある激しい思いをぶちまけていた。「私だってわかっている！私が行ったところで私達の軍は全滅するだろう。しかし、部下を見捨ててまで承らえた命に意味はない。モート様にどの面を合わせろというのだ！」

「トゥオン！今君が死ねば、誰がモードレットの、あの逆行行為を止められるというのだ！あれは我々、モート様に下賜づく者への侮辱に他ならん。所詮虎の威を狩る狐であるあの男を！」

激情には激情で、いつものメレアガンスが嘘のように激しく叫ぶメレアガンス。

「しかし！」

否定の言葉を口走ろうとしたトゥオンは、メラアガンスのその真摯な眼に気がつく。すると、少し落ち着きが出たのか、荒々しくその場を出ようとしていた身体を、近くの椅子に預ける。

「メラアガンス、そなたの言うこともわかる。だが、部下をこのまま見殺しにはできん」

そう幾分調子を下げてトゥオンは述べた。落ち着きはしているが、全く意見は変えていない。それはトゥオンの譲れないところでもあるからだ。

「私とて、見殺しになどしたくはない……しかし、ここからアストラトまでは、私の馬を飛ばしても丸一日はかかる。何か方法を考えねば、私達が接近したことをしったモードレットは、到着前に城を陥落させようとするだろう……」

そう述べたメラアガンス。トゥオンも愚かではない、その辺りの事は気がついてはいる。しかし、それでも、彼女は部下を助け出したいと、いや助け出すと心に誓っていた。

「どうか……」

そう呟き、熟考するメラアガンス。

トゥオンは、猛る気持ちを表すかのように、自分の膝が上下に揺れているのに気がつき、軽く舌打ちをした。

そのとき、メラアガンスの顔ががばっと持ち上がる。

「ネヴィーナ、彼女ならなんとかなるかもしれない」

そう言ったメラアガンスの言葉に怪訝な表情を見せるトゥオン。

「ネヴィーナは、空間を越えて移動することができる種族の末裔だと聞いたことがある。正確には違うだろうが、彼女なら時間稼ぎくらいならいくらでもできるはずだ。十三使徒の一人でもある」

「しかし、ネヴィーナがどこにいるのか、メラアガンスわかるのか？」

「それは……」

言いよどむメラアガンス。

その答えは、意外なところから帰ってきた。

「あら、何か御用なのかしら？ トゥオン嬢」

いつの間に扉は開いたのである。先ほどトゥオンが抜け出そうとしていた入り口、そこに立っていたのは、紛れもなく十三使徒ネヴィーナであった。

「おいおい、物騒なことだな、二人して」

いきなり声が掛かったことにより、瞬時に戦闘態勢を取っていた二人に、ネヴィーナの後ろから顔を覗かせた男が言う。

「貴様は……ガルガンディの部隊の副官？」

「おや、名高き十三使徒のトゥオン嬢に名を覚えてもらっているとは光栄だね」

トゥオンの呟きに、エアリアルは軽そうにそう返した。

「魔界随一の刀匠が、ネヴィーナと一緒になんのようだ？」

メレアガンスが油断なく問いかける。

「あら、用があるのは貴方達の方ではないの？私のことで何やら話していたみたいだけれど？」

そのネヴィーナの言葉に、突如出現した二人に注意が向いていた彼らを口論の原因を思い出させた。

「ネヴィーナ、頼みがある」

真剣な表情で、トゥオンが言う。

そんなトゥオンの申し出に、ネヴィーナは妖艶な笑みを浮かべたのだった。

——アストラト城

「もう限界だ」

「弱音を吐くのではない。トゥオン様はまだ亡くなったわけではない！」

「だが……」

そう、状況は彼らにとって最悪のものであった。籠城を決め込む彼らの戦力の何倍、下手をすれば何十倍の戦力が、取り囲んではいないものの、眼と鼻の先に陣を作っているのだから。

(敵はすぐにでも、こちらを落とせるのだ)

この城の戦力をまとめている士官はそう考えてた。



(しかし、敵は攻めてこない。……きつとトゥオン様を探しているのだ。薄汚い人間どもの出の分際で、いきがりおって)

そう考えつつも、成すすべのない自分に、憤りを覚え、拳をきつく握り締めるのだった。

先ほど一人の兵が言ったとおり、この城はもう限界であった。膨大な戦力の差、大将の不在。数え上げれば切りがないほどのマイナス要素が彼らを追い込んでいるのだ。

彼らがまだもっているわけは、単に上官、つまりトゥオンへの信頼であろう。士気の高い兵達は、何倍もの力を発揮する。そのお陰で、今までは持っていたのだ。

しかし、そのトゥオンが不在である時間が長くなりすぎている。彼らの士気は、まさに尽きようとしているのだ。

「このままでは時間の問題。なれば……」

そう呟き、城のまとめ役であった仕官は決意を秘めた眼を空へ向けたのであった。

「皆のもの、よく聞け！先の戦いで、我等がトゥオン様は行方不明だ。しかし、トゥオン様は必ず生きておられる！そして、生きておられる限りわれ等はトゥオン様の手であり足である！われ等は危機に瀕しておる。しかし、我々はモート様の僕！誇り高き十三使徒、トゥオン様の尖兵！そのわれ等に仇名す彼の愚か者に、我等が力を見せつけようぞ！それがわれ等の最後の勇姿になろうとも！」

仕官の最後の檄に、悲観になるものなどいない。この軍は、モート軍の中でも1、2を争うツワモノの揃いなのだ。

「ここでただくれたばつては、トゥオン様に笑われる！一人でも多くの逆賊を葬り去ろうではないか！」

割れるような喚声が響き渡る。彼らは最後の突貫を成そうというのだ。

城にいる兵士達全員に決意の意思が宿る。

地響きのように辺りに響き続ける喚声。

そして、その最高潮が訪れようとしたとき、

「頭を冷やせ」

凜とした声が響き渡る。

そして、誰かが叫んだ。

「トゥオン様！」

城の広場に集まっていた兵達バルコニーのように突き出している謁見台を見上げる。

「死しても、我等がモート様の望みは果たせん」

トゥオンの背後には、闇が、そして銀色の月が見える。

「われ等の使命は死ぬことではない。モート様のご恩を仇で返す、あの逆賊共に死と言う名の罰を与えてやることだ。私は帰ってきた。私と共に、モート様の為に戦い抜くまで、我らは死すこと許されんのだ」

トゥオンはそう叫び、彼らの集う広場に舞い降りたのだった。

メルフィナからラウドを倒したという事実を聞き、コーディネアはエーデルリッターをサンダ  
ルークまで後退させた。そのコーディネア自身は、今サンダルークが抱えている問題に対しての  
会見に参加すべく、サンダルーク城内部にある会議室へと足を運んでいた。

そこには、コーディネアを含めた九人の姿があった。ユング、スイートピー、シーグメント、  
リジョ、アッド、ネツコ、ロア、メルフィナ、そしてコーディネアの九人である。

「しかし、まずいことになりましたな……」

リジョが難しい顔をして言う。

「期待していたレオデグランスからの援軍が一切受ける事ができないとなると……状況は前よ  
りも遙かに悪い」

「状況が悪いのは確かだが、このまま黙ってミルチアに降伏するなど……そんなことは許され  
る事ではありませんぞ？」

リジョの言葉に食って掛かるシーグメント。

「こちらには、あのラウドを撃破したエーデルリッターもいる。やってやれないことはなから

う」

「シーグムント将軍のお気持ちはわかりますが、いくらエーデルリッターの協力を得たからといって、ミルチアと魔族を一度に相手にするには少々無理があるのではないかと……」

「お二人とも、落ち着いてください。……コーディネリア殿、あなたの意見を聞きたいのですが」

スイートピーが二人を制止し、コーディネリアの方を見ながらそう言った。名を呼ばれたコーディネリアは、静かに頷き、その場にすっと立ち上がる。

「まずミルチアの軍ですが、これはかなりの規模であることに間違いはないでしょう」

「本当か？あのエフラムとかいう小僧がでかく出てきているだけではないのか？」

「その可能性は低いでしょう。エフラムは、そんな小賢しい事をする男ではありません。そして、あの自信……戦うとなれば、かなり厳しい戦いになると思われます」

「なるほど……そうなると、魔族の方は規模にもよりますが、このままでは両軍に勝てる可能性は限りなくゼロに近いと……いうことになりますね」

「降伏勧告を受け入れた場合ですが……民をひどい目に合わすような男ではありませんが、魔族の襲来を知れば、サンダルクの兵たちは真っ先に前線に送られる事になるでしょう。」

そして、我々エーデルリッターですが……恐らく、アルテオムからはエーデルリッター皆殺しくらいの命令も受けている事でしょう……」

コーディネリアの言葉に、その場が沈黙する。

「あ、そうそう」

その沈黙を破ったのはロアだった。

「これ、なんかヘンギストが作ったものらしいんだけど」

そう言って、ロアは懐から手鏡を取り出し、コーディリアへと手渡す。

「ヘンギストが作った……魔境？」

そう呟きながら、コーディリアは無意識にその手鏡をメルフィナに向ける。すると、メルフィナの後方に突如、大きな映像が広がる。そこには、黒いドラゴンと、十三使徒のラウドが戦闘を繰り広げられていた。

「これは……？」

その映像を目にし、静かに目を閉じるメルフィナ。

「これは、私が六百年前にラウドと戦った時の映像ですね……」

メルフィナのその一言に、全員が驚きの顔を見せる。

「その鏡は、手にしたものが見たい過去、知りたい正体を映し出す鏡のようですね。鏡の反射が、映し出した相手の記憶や過去を引き出す魔力が働いているようです」

「ちよ、ちよっと待ってくれよ」

ネッコが声を揚げる。

「それじゃあ、メルフィナがその黒いドラゴンだっていうのか？」

「ええ……」

「人間じゃないのはわかってたけど、まさかドラゴンだったとはなあ」

ロアがなるほどとばかりにそう言った。

「皆さん、驚きなのはわかりますが、その話は少し置いておきましょう。その鏡が手に入ったことで、一つだけ選択肢が増えました」

「選択肢……というത്？」

メルフィナの言葉に、スイートピーが問う。メルフィナはコーデリアの方を見ながら、ゆっくりと立ち上がる。

「ミルチア奪還です」

「え……？」

「アルテオムを制し、ミルチアを奪還すれば、サンダルクは救われます」

「しかし、降伏勧告の返事は明日に迫っている。そんな短時間で奪還できるものではないだろう」

「降伏勧告は受け入れてください。そして、ここに来るミルチア軍には魔王軍と戦っていただきましょう。その間に、エーデルリッターのみでミルチアを奪還して……」

「お待ちください司祭殿」

メルフィナの言葉を遮り、リジョが声を揚げる。

「無茶苦茶です。降伏を受け入れれば、ユング王の命はない。それに、エーデルリッターだけでミルチアを奪還するなど……あまりにも無謀です」

「ユング様には、明日の朝レオデグランスに発つエレイン様にお頼みし、亡命していただきま

しよう。ミルチアに関してですが、レオデグランスからの援軍はない。サンダルクの兵は動かせないとなると、やはりエーデルリッターだけで奪還していただくしかないでしょう」

「駄目だ！ミルチアを奪還できる保証もないのに、そんな作戦を飲むことはできません！」

「じゃあ他に方法があるって言うのか？このままサンダルク壊滅を待つのか？」

「お前は黙っている！」

「何が黙っているのだ！さっきから聞いてれば、メルフィナ以外にまともな意見なんかできやしないじゃないか！」

「これがまともな意見だと……！？　こんな無謀な作戦が、まともと言えるものか！」

「無謀かどうか、我々が証明して見せましょう」

リジョとネッコの言い合いに、割ってはいるコーデリア。

「サンダルク内に滞在するミルチア兵の規模はわからない。だが、兵を割いていることは事実。我々エーデルリッターなら、奪還する事も可能でしょう」

「魔王軍の規模もわかりませんが……司令部を叩けば、崩すのは容易になるでしょう」

「またそんな……一体誰がやると言うのです！」

リジョの言葉を受け、立ち上がる四人。

「……俺たちの役目だな」

「ああ、適材適所ってところかな」



「僕らの目的は、もともと魔王を倒す事なんだ。なんの問題もないはず」

「と、言うことです。他に選択の余地はありません。ユング様」

ユングは黙ったまま俯いている。しかし、顔を上げ、コクッと頷く。

「わかった。その方法しかないし、それでいくしかないだろう」

「……承知しました」

ユングの言葉に、しぶしぶリジョはそう言った。

「我々はサンダルクを守ります。この作戦、三つの行動のうち、どこか一つでも抜けてしま  
うと失敗になります。賭けのような作戦ですが……みなさん、よろしくお願ひします」

スイートピーの言葉に、全員が頷いた。

会議の後、四人はネツコの部屋へ集まっていた。

「しかし、メルフィナもよく言ったもんだなあ。今までは、様子を見て、被害を最小限に抑え  
ることばかり言ってたのに」

「僕は、メルフィナがドラゴンだったって事の方が驚いたけど」

「しかも黒！ありや、どう見ても魔族だぜ」

「魔族っぽくて悪かったですわねえ……」

ひきつった笑顔で、メルフィナは言う。

「カオスドラゴンといったが、他とどう違うんだ？」

「ドラゴンには種類がいて、それぞれ得意分野があります。アースドラゴンは防御に優れ、優秀なシールドを持つ……と言ったように。ですが、カオスドラゴンはそのような能力はありません。しかし、他のドラゴンと比べると、戦闘能力が遥かに勝っているのです。そういう意味では、カオスドラゴンはドラゴン族の戦闘種族にあたるかと考えてもらっていいでしょう」

アツドの問いに答えるメルフィナ。それを聞いたロアが口を開く。

「戦闘種族が街の司祭様だけ？世の中わからんもんだよなあ」

「にしてもだ。なんで今まで隠してたんだよ？メルフィナがちゃんと戦ってくれてれば、もっと楽に事が進んだはずだろ？」

「私は人として行動することを誓いました。事情は話せませんが……」

「まあ、人それぞれさ。な、ネッコ」

メルフィナに食って掛かるネッコをなだめるロア。

「ありがとうロア。でも、これからはそうは言ってられないようですね」

「……確かにそうだな。で、俺達は何処へ行き、誰を叩く？」

「モートが復活していない今、魔界の全権を握るのは、恐らく副魔王と呼ばれるモーでレッドでしょう。それに、モードレッドを倒すために魔界に行けば、他の十三使徒とも接触するはずですよ」

「僕らは十三使徒をすべて倒さなければならぬのか……？」

「それはわかりません。十三使徒にも色々いますから……ヴァジュラのように戦闘、殺戮を好

む者、ボールスヤラウドのように何らかの目論見で動く者。また、モートの復活を信じ、この戦いに参加していない者……」

「そのモードレッドってやつは、モートの復活を信じてないってことか？」

「もう三百年も経ちますからね。モードレッドはモートが復活しないのに見切りをつけ、自身  
が新たな魔王となるために動いているに違いありません」

「……となると、モードレッドと敵対している者もいるかもしれないな」

「そうです……この戦い、決して勝てない戦いではありません」

「しかし、どうやって魔界まで行くんだ？」

「サンダルークより遙か北の大陸に行けば、魔界に通じるゲートがあるわ」

ロアの疑問に答えたのは、いつの間にか部屋に入ってきたアムリタだった。

「北陸地帯か……今も人間軍の前線が魔族と戦いを続けているところじゃないか」

「……だが、行くしかなからう」

「そうだな。リユネット、エレイン達は帰国、アムリタもエーデルリッターも来れないとなると、俺達四人がやるしかねえだろ」

ロアの言葉に、全員が頷いた。

「と、言う事なのです。お願いできますか？」

スイートピーがエレインに言う。ユングをレオデグランスに連れて行ってくれないかという

願いだった。

「わかりました。自国の事情とはいえ、サンダルクを援護できない事には心苦しい限りです。喜んでお受けします」

「ありがとうございます。ユング様を……お願いします」

「お任せください」

「それでは、明日の早朝に、ユング様をここへお連れしますので」

スイートピーはそう言っ、一礼してその場を後にする。入れ替わって、コーデリアがエレインの元へと来る。

「エレイン姫、我々ミルチアがご迷惑をおかけして、申し訳なく思っています。今更ですが、ここに謝礼を申し上げます」

「お顔を上げてくださいコーデリアさん。こうなつたのは、すべてアルテオムの仕業です。ミルチアが悪いわけではありません」

「かたじけない」

そう言っ、顔を上げるコーデリア。

「我々は今夜出発します。ミルチアの事が片付き次第、レオデグランスとサンダルクに力を添えるつもりです。ただ、もし万が一にも失敗した場合には、他国と協力し、早急にミルチアを攻め落としてください」

コーデリアの言葉に黙り込むエレイン。コーデリアの思考は、アルテオムからミルチアを取

り返すということから、アルテオムを世に野放しにしてはいけないという風に変わっているのだと、その一言で悟ったからである。

「わかりました。でも、私からもお願いがあります。必ず、成功させてください」

「ありがとうございます。それではこれで……」

コーデリアも一礼し、その場を後にする。

「エレイン様、明日は早いです。そろそろ御休みになりましょう」

ライオネルが言うが、エレインは返事をしない。

「エレイン様……？」

「ライオネル、私は悔しい。何故、サンダルークの力になってあげられないのでしょうか？

確かに、お父様が死んでしまったことも悲しいのです。しかし、今私の国よりもっと困っている国が目の前にあるのに、手を差し伸べる事ができないのでしょうか？」

「……エレイン様」

「私は……無力な人間です。本当に悔しい……！」

エレインの瞳から、涙が零れ落ちる。そのエレインを見て、ライオネルはすっとエレインを抱きしめる。

「エレイン様、少しの辛抱です。エレイン様が王にならなければ、後はエレイン様のお力で、自国も他国も救うことができますのです。だから、今はご辛抱ください」

ライオネルの言葉が聞こえているかどうか定かではない。エレインはずっと泣き続けていた。

コーデリアの召集の元に、エーデルリッターはサンダルクの正門へと集まっていた。

「みんな、疲れていると思うが、もう少しだ。我々がミルチアを取り返す日は近い。最後の踏ん張りだ！頼むぞ」

コーデリアの言葉に、エーデルリッター全員が声を揚げる。

「ロット殿、本当にいいのですか？」

「構いません。このまま、ブラックナイツの隊長として、お供させてください」

「あなたは軍所属でもなんでもない、ただの一般人だ。このまま逃げ出しても誰も文句は言いませんよ？」

「元々は自分に掛けられた容疑。自分で晴らして見せます」

「……わかりました。それでは、もう少しの間お力をお借りします」

「お任せください。しかし、ガウエイン、ルーシィ。君たちもいいのか？」

ロットは二人の方を見ながら言う。ロットがエーデルリッターとしてミルチアに着いていくと言った時、二人も同行する意思をロットに伝えたのだ。

「私はロット殿に着いていく。この一生をかけてでも」

「わ、私もついていきますよ！何があっても！」

「……ありがとう。君たちを選んだ私の目に狂いはなかったようだ」

ロットの言葉に頷く二人。

「よし、ヴァルレーにはほとんど魔物はいないはずだ。一気に突破する！私とブラックナイツが先陣を斬る！行くぞ！」

コーデリアの合図で、エーデルリッターがヴァルレー大橋へと向けて走り出した。

「というわけで、またしばらく家をあける」

シヤツのボタンを閉めながら、ネッコはリタに向かってそう言った。

「ええ、まあ、仕方の無いことなのでしょうけど……」

「魔王がいるかいないかはともかく、魔王の使徒たちが魔界で幅を利かせている以上、人間界に平和は訪れない。僕が戦わなくちゃならないんだ」

「ええ、ええ……それは……」

「なに、任せるがいいさリタ！僕はいまやサンダルク最強の兵の一人なんだよ」

「はあ……」

それでも心配そうな返事をする。ネッコがヴァジュラを倒したことは知っていたが、彼女はどちらかと言えば彼の實力よりも成熟しきらない精神面の方が心配だった。

「坊ちゃん、どうか悪い人に騙されないように」

「なんだよそれ！と、ネッコは思った。しかし、的確なアドバイスである。

乾いた軋みを上げて木戸が開く。ネッコの部屋に現われたのはアムリタだった。



「やあアムリタ。リタ、ズボンどこ？」

「三番目の引き出しにありませんでしたか？」

「ないよ……ああ、ここ」

リタに言われて、ごそごそと棚をあさるネッコ。上はシャツだが下は下着一枚の姿で、アムリタは目のやり場に困った。

「そう言えば、結局、父さんにはお前のことを紹介できず終いだっただな……一番大切なことだったのに」

ズボンに足を通しながら、ネッコは言う。彼の言葉に、アムリタは黙っていた。そのことは彼女も気にしていたようだ。

ネッコはズボンを履くと、今度はベルトを求めて部屋をきよろきよろしはじめる。リタが「一番右上の引出しですよ」と言った。ネッコが調べると、予定調和のようにそこにベルトがあった。

「……ま、ここで暮すうちに、嫌でも会う事になるさ」

「あなたはまだそんなこと言うの？」

アムリタは無感情にそう言う。ネッコはきゅっとベルトをしめた。

「……なにが？」

「私がここで暮すって、あなたは本気でそう思ってるの？」

「嫌なのかい？」

ネッコはぼりぼりと頬を搔く。

「……まあ、ナターシアとはなかなか上手くないのかもしれないけどさ……でも……」  
はあ、と溜息をつくアムリタ。ネッコは思わず言葉を止めてしまふ。

アムリタの冷たい態度に、ネッコは腹立たしいとか心苦しいと言うよりも、それが不思議で仕方が無かった。なにをそんな態度をとる必要があるんだろう？

さてはアムリタの奴、新しい生活に戸惑ってるのかな……と、彼は思った。

やがてアムリタはネッコの胸中を察したかのように、また大きな溜息をつく。冷ややかな視線は、彼の方を見ずに、どこか部屋の隅を眺めていた。

「……あなたの脳味噌はハムスター並かしら」

「な、なに!？」

アムリタの心外な言葉に、彼は酷く傷ついた。

「ハムスターって、五センチも無いじゃないか!もう少し大きいよ!」

「勘違いしないで。ハムスター程の大ききさって意味じゃないわ。ハムスターの脳味噌ほどの大ききさって意味よ」

「おいっ!」

これにはさすがのネッコも怒った。腕を組み、勢い良くベッドに腰掛けると、ベッドは壊れそうなくらい軋みを上げた。

「まず、どういう意味か説明してみろ!」

「私たちの母親は、マリア」

アムリタはまるで馬鹿を相手にするような単純な言葉で説明をし始める。ネッコはまたカチンときたが、あえて黙っていた。ここで怒鳴り散らしたって、今度はコオロギ大の脳味噌とかなんとか嘲笑されるのがオチだ。

「あなたの父親は、リジヨ・ヴァンシユタイン」

そりやそうだ。とネッコは思った。

「でも、私の父親はゼム・ロック」

アムリタの言葉を横で聞きながら、リタは暗い顔をしていた。

それとは対照的な、ネッコの傲慢な顔つき。

「馬鹿馬鹿しい、そんなことか……」

彼は鼻で笑った。

「父さんなら、自分がどうすることが正しいかぐらい、分かってくれるはずだよ。アムリタには直接の恨みは無いんだし、いくらお前がゼムの娘だからって、母さんの娘を無下に扱うようなマネは……」

「いいえ、坊ちゃん」

リタは悲しげに首を横に振った。ネッコは驚いた。

「あなたのお父様は分別のある方でいらっしやいます。アムリタさんも可愛いお嬢さんですし、私たちみんなが、ナターシアだってアムリタさんのことを好きになりますよ、きつと」

「だろう？ だったら……」

「ですが、それとこれとは別です」

ネッコはリタの言葉に戸惑った。彼女の言わんとしていることに、自分の感情が上手くリンクしない。それとこれとは別？、これ、ってなんのことだ？ 思い当たる節は無い。

深く考えすぎだよ！ 一思いにそう言ってしまった。彼は思った。そして、彼女があまりに悲しげな、諦めにも似た表情を浮かべているせいだった。彼は思った。そして、彼女がそんな顔をしている限り、やはり僕は何かを知らないんだ。リタの言葉から推測するに、一種、宿命的ななにかを。

「あなたは人を好きになつたことが無いのよ」

と、アムリタは言った。

「それも本気で、死ぬほど、一途に、魂をかけて」

急に胸にぽっかりと穴が空いたような気分。いや、性格には穴が空いていたことに気づいただけなのかもしれない。

アムリタの言葉を受けても、ネッコは黙っていた。黙るしかなかった。自分よりもいくつも上の大人を相手に叱られているような気分だった。屈辱的とも少し違う、なにか理不尽なものに上からぎゅうぎゅうと押さえつけられているような苛立ち。だって、俺は……、そんな言葉の続きを探しても、虚しく無意識の暗がりを行徨うだけ。彼は、自分がハムスターの脳味噌大の脳味噌しか持っていないような気がした。

「……でも、僕は……何人かの人になら命だつて投げ出す覚悟はある。家族のみんなや、仲間

のみんな、アムリタ、お前だってそうさ。僕はお前が思うほど冷血漢じゃないんだよ」

「知ってるわ。あなたはとても優しい。でも、それとこれとは違う」

と、アムリタは言った。悔しいけど、そんな気がする。と、ネッコも思った。

「でも……とにかく、今はあなたの旅の無事を祈らせてもらうわ。生きてさえいれば、いくらでも考える時間はある。そう、時間さえあればいつかは突き当たる人生の壁なのだから。運命、なんて路上の石ころみたいでありふれた、とてもうんざりする言葉があるんだけど……ネッコ、運命は好き？」

「嫌いだな」

「私も」

アムリタが右手を差し出す。ネッコはそれを握り返した。

「気をつけてね」

アムリタのよどみの無い笑顔を受け、ネッコは照れくさそうに笑った。

——サンダルーク市街地。

三番街の汚らしい町並みを、通行人を見苦しい目つきで眺めながら歩く少女がいた。リリパットの妹、ブラッディ・アリスである。

(なに、この街……薄汚く、低俗で、まるでドブ川みたいな臭いがする。こんなところに住ん

で平気なの？人間って……)

一人の酔っ払いと目が合うと、相手は壮大なゲップを胃袋から吐き出した。あまりの下品さにアリスは失神しそうになる。使徒の使い魔である彼女は、魔界では上流貴族のようなものだった。

(……早いところネッコ・ヴァンシユタインを探して、カーマのもとに連れて帰ろう)

カーマはリリパットを解放する変わりに、ネッコを無傷で連れてくるようにアリスに命令した。ネッコの実力はアリスを遥かに上回っている。となれば、相手を騙して連れてくるしかない。しかし、悪魔の言葉を面と向かって訊くような相手でもない。なにせ、あの使徒ヴァジュラを倒した凄腕の魔法使いだ。そう簡単に隙を見せるとは思えないだろう。

そこで、アリスはある秘策をカーマより享受したのだ。アリスは懐からハート型のコンパクトを取り出し、カーマの言葉を思い浮かべた。

「アリス、いいですこと？このコンパクトを開いて「メルビン・ケルビン・アルビニプロデューズ」と唱えるのです。そうすればあなたは悪魔から人間へとその姿を変えることができます。背中の翼は無くなり、牙は引っ込み、爪は丸まってしまうでしょう。ただし、注意おし。人間の姿の時、あなた自身の能力も人間のそれとかわらない。あなたは本当の意味で、なんの変哲も無い、一介の人間の少女となっております。ネッコはおろか、山をうろつく野犬や人間のオスにすら勝てません。それだけは肝に銘じておきなさい。いざというときは、コンパクトを開いて「ヘイヘイ・マイマイ」と唱えるのですよ。そうすればあなたは悪魔の力をその

身に取り戻すことができるでしょう。決して、忘れてはなりません……いいですね？ほほほ……ふん、カーマ・カメレオン。私をこんな目にあわせて……せいぜい楽しんでいけばいいのよ)

コンパクトの鏡に移る自分の顔は、いつもの蒼白さが消えうせ、血色の良さそうな頬にはほんのりと赤みがのり、何千という魔物を凍りつかせるような戦慄の目つきはおだやかな海のよな碧色に変わってしまっている。アリスは頭痛がしてきた。

(ああ！使徒・アルアルパッツの第一の使徒である私がこんなところでなにをやっているの？早くあの方をお探して、憎きモードレッドを打ち倒して……)

気が付けば、アリスは完全に道に迷い、人気の無い路地に迷い込んでいた。引き返そうと思つて道に戻つたつもりが、どこをどう歩いたか全くわからない。はあ、と溜息をつく。途中、数人のゴロツキがたむろしていたので、仕方なく彼らに道を訊ねることにした。

「その者ども」

少女の威厳溢れる言葉に、ゴロツキどもがきよんとする。

「メイנסトリートはどこちだ？」

「……なんだこいつ……？」

「へっへっへ」

枯れ枝のような男がにやにやと笑つた。タバコのヤニで歯の腐りきつた男が、さらに下品な笑い声で追従する。

「嬢ちゃん、一人かい？」

リーダーらしき男がアリスのつま先から頭のとっぺんまで、じろじろと眺める。その目つきは肉欲を隠す事無く、限りなく低俗で、それだけでアリスは全身をガマガエルが這ったような悪寒に襲われた。

（もうたくさん！さっさと引き上げて、帰って人間の血のシャワーを浴びたいものだわ）

アリスは懐からコンパクトを取り出し、それを開いた。そして、例の変身解除の呪文を唱える。

「ハイハイ・マイマイ！」

……しかし、変身は解けなかった。アリスの甲高い声だけが、虚しく宙に響き渡る。背筋に寒気が走る。

「へ、ハイハイ・マイマイ！」

やはり、なにも起こらない。

（まさか……まさかまさか！）

「カーマ……あなた……！」

最悪の予感がアリスの脳裏をよぎった。

カーマはウソの呪文を教えていたのだ。

あっけに取られる男達。

「……なに言ってるんだコイツ」



「なに言ってんだろうね」

「まあ、据え膳食わねばなんとやら。へへへ」

「違えねえ。へへへ」

「へへへ」

三人のゴロツギが口々に言う。

アリスは慌てて逃げようとしたが、乱暴に二の腕を掴まれた。

「痛っ！」

振りほどこうとしてもほどけない。人間とは思えない握力……いや、アリス自身が、悪魔と思えないほど弱まっているのだ。

「放せ！この……」

両腕を掴まれ、乱暴に壁に押さえつけられるアリス。

リーダー格の男が顔を近づける。

「……なかなか上玉だな。貴族様か？」

「それ以上よ、愚かな人間！私をこんな目に合わせたことを、いまに後悔……」

アリスの言葉を塞ぎ止めるように、強引に口づけをする男。汚れた舌がアリスの唇内を軟体生物のように舐めまわす。アリスは心を真つ二つに引き裂かれたような衝動を感じ、肉体に力が入らず、抵抗すらできなかった。

(……なに、これ……)

目の前が真っ暗になり、涙がぼろぼろと零れる。

(これが、私のファーストキス……?)

肉体が生理的拒否反応を起こし、胃から胃液がせりあがって来た。その独特の酸味を感じ、男が慌てて口を放すと、アリスはよろよろとその場に倒れこみ、建物の影に吐瀉物を撒き散らす。

少女の、この上無く無様な姿を見たゴロツキどもが大笑いした。

「ひえっ、こいつ吐きやがった!」

「ひーっひー!」

「お嬢様、のこのことお庭から出てきたのが運のツキだったなあ……ん?」

(……)

殺意。少女から放たれる底なしの殺意に、ゴロツキどもは笑顔を引きつらせた。互いに顔を見合わせて、無言で意思を交わす。

このガキ、なにかやばくないか?と、ゴロツキども全員が予感する。

アリスがゆっくりと体を起こすと、空気が陽炎のように揺れた。錯覚かもしれない。が、ヤニと枯れ枝が汗びっしょりになってうるたえる。しかし、リーダー格の男だけはたじろかず、アリスをもう一度壁に押さえつけると、強引に胸を鷲づかみにした。アリスはじっと俯いたまま、微動だりしない。

「……へへ、へへ」

やはり気のせいだ、と胸をなでおろす三人。しかし、さすがに言葉は少なくなっていた。その時、路地の先から足音がした。舌打ちをして懐からナイフを取り出すゴロツキども。姿を現したのは、まだ垢の抜けきらない幼顔の青年だった。しかし、意志的な目つきは力強い。

「……なんだ。悪魔の気配がしたから来て見たら……」

青年、ネッコ・ヴァンシユタインは呟いた。

「なんだあいつ」

「おい、くそガキ。俺たちは忙しい。大人しく向こうへ行け」

ゴロツキどもが言った。が、ネッコは聞こえないフリをした。

「ふん。悪魔なんて、所詮、人の心が呼び込むもんだよな」

「聞こえねえのか!？」

ネッコはつかつかとゴロツキどもの方へ近づく。枯れ枝が鋭く輝くナイフを構えて、勢い良くネッコの腹部を狙って突き出した。が、それが刺さる前にネッコは枯れ枝の顔面を殴り飛ばす。二、三mふっとんで気を失う枯れ枝。

「はっはっは!安心しろ悪党ども。僕は素人に魔法は使わない」

基礎能力増強魔法をばっちりかけているネッコがそう言った。軟弱な彼が素のまま人を殴り飛ばせば、自分の拳の方が骨折しているところだったろう。

ヤニがネッコ目掛けてナイフを振るう。ネッコはナイフを持った腕をしっかりと捉え、掴みあげると、そのまま一本背負いで相手を投げ飛ばす。激しい地響きを立てて、肩から地面にめり

込むヤニ。もはやピクリとも動かない。

リーダー格の男がすぐ目の前まで迫っていた。先の二人のゴロツキよりも少し長いナイフを持っていたため、避けたつもりが切っ先がネツコの頬を掠めた。僕もまだまだだな、と思いつつ、ネツコは相手の腕を蹴りあげると、ナイフを地面に落とさせ、そのまま強引に胸倉を掴んだ。そして渾身の張り手を打ち付ける。相手の鼓膜は破れ、路地を何メートルも転がっていく。両耳から血を流しながら、男はその場に昏倒した。

「ふう、終わり」

ばんばん、と手をはたくネツコ。そして、ちらりと少女の方を見る。

少女はじつとその場にうずくまり、小刻みに震えていた。

「おい。大丈夫だったか？」

そつと少女の肩に触れるネツコ。少女は肩を激しくびくつかせ、ネツコの腕から逃れた。

（……うう。こっちの方が意味、強敵だぞ）

「……大丈夫だ、もうゴロツキは退治したし、僕は君に何もしない。家まで送るよ」

ネツコがそう言うと、少女は初めて顔を上げた。その顔は涙に濡れ、絶望のどん底に沈んでいる。ネツコは悔しまぎれに「このゴロツキども、もう一度張り倒してやろうか」と思った。だが、きりが無いのでやめた。

ネツコはポケットからハンカチを取り出して、少女にそれを差し出した。少女は一瞬戸惑ったものの、大人しく彼のハンカチを受け取り、涙をふき取った。安心すると、つついっい嗚咽が

漏れる。

しばらくの間、彼女はハンカチに顔を鎮め、じっとそうしていた。ネッコはなにも言わず、ただ黙って彼女の様子を見守っていた。下手な慰めの言葉をかけるより、こうしている方がいい。

ふと、ハンカチの刺繍がアリスの目に止まる。N e k k o ・ V の文字。

(ネッコ・V……ネッコ・ヴァンシュタイン……！)

彼女は自分の役目を思い出すと、傷心の少女から俄かに寒々しい、魔族の気持ちになった。こんな所で強姦魔に襲われて、それを助けられたのがこともあろうに、あのネッコ・ヴァンシュタインにだなんて！運命という言葉が本当にあるなら、それに感謝すべきか、はたまた……。

「……ありがとう、もう大丈夫です」

アリスの言葉。ネッコは笑った。

「差し支えなければ、お礼がしたいので……私の家に一緒にきてくれませんか？」

アリスは思った。いくら相手が人間とは言え、仮にも恩人を売るようなマネをして、恥知らずなものだ。しかし、この際、面子なんていらぬ。兄さえ助ければ……そうすればリリパツトもきつとアルアルパツの捜査に協力してくれるだろう。そう、すべては魔族のために。でない……

(でない……私の方が報われないわ……！)

「うん、いいよ」

ネッコはあっさりと答える。彼は既にリタの助言を忘れていた。

「それでは、私を迎えにくる馬車があります。それに乗って参りましょう」

やがて、ネッコの消息が絶たれたことをロアやリジヨ、アムリタ達<sub>3</sub>が知るのは、それから数日後のことであった。

アストラト城。

それは高い山々に囲まれた、魔界屈指の要害であり、かつて魔王モートが「アストラト城は魔界の心臓部である」と言ったように、そこは魔界の地理的にも重要な拠点だった。故に、特にモートの信任の厚いトゥオンがこの城の城主に命じられ、六百年の間、一度として陥落したことはなかった。

そのアストラト城は、今、モードレッドの軍勢に二重三重と取り囲まれている。まさに孤立無援、トゥオン率いる新生魔王軍の最後の拠点となっていた。

モードレッド軍勢を率いるのは、モードレッドから先陣を任されたドルヴァ。ドルヴァはモードレッド旗下の猛将で、身の丈はそびえる様に高く、人相はまこと怪異、その両の腕は盛り上がった岩肌の様といった、まさに希代の勇将であった。

そのドルヴァが今、三十万近い兵を率いて、アストラト城の眼前に陣を敷いていた。

アストラトに立て籠もったトゥオンの兵士達の数はすでに十万足らず。

まさにアストラト城の命運は、風前の灯に見えた。

しかし、ドルヴァがこのアストラト城を目にしてもう数週間、押せども引けどもアストラトの城壁は、まるでびくともしないのである。

さすがに、新生魔王軍最後の拠点に残ったこのアストラト城の兵士達は、トゥオン旗下でも振るいに掛けられた精鋭達だと見えて、一心一体、ドルヴァの猛攻をことごとく防ぎきっていた。

出てくる敵は討ち易いが、城に籠ってしまった敵は討ち難し。

猛将ドルヴァも、さすがに力押しは愚だと悟って、彼の副官であるサルトと陣中で協議を重ねていた。

協議の中心はやはり、どうして敵を城から誘い出すかの一点であった。

「サルト、どうする？」

「さあ？やはり、ここは長期戦を覚悟するしかないのでは。敵はどうあっても、城から出てはきまずまい。モードレッド様の本隊が到着するのを待って、それからでしょう」

サルトが言う。

「しかし、口惜しいではないか。あと一息だと言うのに」

ドルヴァは歯軋りして言った。

「モードレッド様は、大いに勝てとは仰いませんでした。ただ、よく此処を守り、本隊が到着するのを待てと」

サルトが、いきり立つドルヴァをなだめる様に言った。



そこに、伝令が慌てて入ってきた。

「大変です！敵が出撃してまいりました。その数約五千。率いるのは、敵の総大将トゥオンと思われます！」

伝令が言った。

「まさか？」

サルトは信じなかった。

たかだか五千の兵で我が軍に特攻など、自殺行為もいところだ。それにトゥオンは、アストラト城には不在だったはず。

ドルヴァとサルトは、席を立て、前線を眺めた。

なるほど、騎馬の一団が、こちらに向かって駆けてくる。

その先頭。紅のまなじりを怒らせ、連環の鎧を着かさね、手には巨大な大鎌を引っさげ、燃えるような真紅の駿馬に跨り、敵陣を踏み砕かんとばかりに駆けてくるのは、まさしくトゥオンだった。

「おお！トゥオンだ」

その凛々しいさまに、サルトが感嘆して言った。

前線で、戦闘が始まった。

トゥオンは、馬に鉄鞭を当て、群がる敵兵に突入して行った。

鋼鉄の大鎌を、右へ左へ振るたびに、敵兵の首、手足、胴などが、血煙と一緒に飛んでいく。

「やあ、口ほどにもないぞ、寄り手の雑魚ども、トゥオンこれにあり。私を討ち取ろうと言うものはいいなのか」

と豪語しながら、縦横無人に疾駆していく。

幾人もの武将達が、トゥオンを討ち取ろうと寄り集まってくるが、トゥオンの大鎌の前には、まるで竜巻に舞い散らされる木の葉のように、なすすべもなく屠られていく。

誰も彼女に当たる者はいない。まるで無尽の荒野を行くが如く、トゥオンが通るところ、見る見る間に、累々の死骸が積み上げられていく。

勇将の下、弱卒はいない。トゥオンの部下達も、まるで堅固に覆い重なった壁のように群がる敵を、蹴散らして進んでいった。

ドルヴァは、その様子を眺めて、

「トゥオンもついに痺れを切らしたとみえる。これこそまさに千載一遇の好機。奴を捕らえれば、一城を攻め落とすにも勝る手柄だ」

そう言うと、一軍を引き連れて出撃していった。サルトも慌てて、ドルヴァの後を追う。

トゥオンは戦場を駆け、目にした敵兵をことごとく屠っていく。その横から、  
「待て、トゥオン！我こそはドルヴァ。その首貰い受ける」

とトゥオンに斬りかかっていく者がある。

トゥオンは馬をとめ、きつと振り返った。

見ると、身の丈も超えそうな大剣を振りかざし、威風凜凜まじく、ドルヴァが討ちかかって来

るところだった。

しかし、トゥオンは、

「ふん。貴様がドルヴァか……」

と、その美しい目で、冷たく一瞥をくれただけで、相手にする気もないといったように、そのまま馬を進ませかけた。

「待て！」

ドルヴァは心中怒りたぎらせて、トゥオンにかかっていく。

だが、トゥオンは、彼の如きを近づかせもしないのである。周りに群がってくる無数の敵兵を切り払いながら、片手間でドルヴァを相手にしていた。

ドルヴァが鹵軋りして、全力で切り込んでいっても、トゥオンが悠々と振るう大鎌に阻まれて、まるで相手にならない。

しかし、始めは威勢のよかったトゥオン兵も、多勢に無勢、包み込まれるように敵兵に囲まれ、徐々にその数を減らしていく。

トゥオンも、不利と悟ったのか、踵を返し、敵兵を突破して逃げていく。

「卑怯だぞ！待て！」

ドルヴァが怒鳴って、トゥオンを追いかけようとするのを、横に來たサルトが止めた。

「妙です。逃げるなら城に逃げ込むはず。しかし、トゥオン達は城とはまるで別の方向に逃げいきます。何か罫があるのでは」

「馬鹿な！戦力差は歴然。例え、どのような小細工を弄しているにしろ、踏み潰して進むまでだ！」

とサルトの静止も聞かず、猛進してトゥオンを追っていくドルヴァ。サルトは危ぶまれたが、さりとて主将を放っておくわけに行かず、ドルヴァについていく。

トゥオン達はどこまでも逃げていく。

ドルヴァは追い続け、数万の兵は細く伸びきり、長蛇の列を成して進んでいく。

やがて、深い谷に入ってしまった。

道は細く、大勢が馬首を並べて入れないような隘路である。

「や。——この地形はいぶかしい」

谷に入ったところで、サルトは馬を止めた。はやりたつ旗本達を後ろへ下げ、

そして、左右の者に、

「急いで、先にいるドルヴァ殿を止めて来い」

と言った。

「……むむ、確かに」

サルトの注進を受け、ドルヴァも止まる。左右の地形を見渡す。辺りには木が生い茂り、その影には、枯れ草が大量に積まれていた。

「しまった！急いで引き返せ」

ドルヴァが怒鳴った。

その声と同時に、辺りの木々から一斉に鼓躁、喊声が起こった。隠れていたトゥオンの伏兵達が、姿を現したのだ。

火の手が上がる。

谷の上からは雨のように矢が降り注いできた。

今や、ドルヴァ勢は大混乱だった。

ある者は炎に包まれ、ある者は弓矢に当たって死んだ。

逃げようと思っても、長く伸びきった軍列は、簡単には後退できない。混乱の中、味方の馬に踏み殺された兵士の数だけでも、何百あるかわからなかった。

必死で後退するドルヴァの後ろから、声が聞こえた。

「なんだ、ドルヴァ。もう帰るのか？ 帰るなら、その首、土産に置いていけ」

あつ、とドルヴァが振り返ると、後方に、大鎌を手にし、返り血に塗れ、全身真っ赤に染まったまま、笑うトゥオンの姿。

「おう、そこにいたか！ 動くな！」

ドルヴァがトゥオンに向き直り、唸り声を上げて馬を走らせる。

トゥオンの真紅の馬が地を蹴った。

それは一閃の赤電が、物をめがけて、雷撃していくような勢いだった。

「ドルヴァ、おまえに雀と大鵬の違いというものを教えてやる」

「笑わせるな！ どちらが雀か、すぐに思い知らせてやるわ！」

ドルヴァが大剣を振り上げた。しかし、それを振り下ろす間はなかった。

トゥオンの大鎌が、唸りを上げ、ドルヴァへ落ちてきた。

その迅さと、尋常でない圧力の下から、身をかわすこともできなかった。

ドルヴァはなんとか受け止めようと、大剣を頭上にかかげた。

ジャン！と凄まじい金属音がした。自慢の大剣も、兜も鎧も真つ二つに斬られて、目も眩む

ばかり、真つ赤な鮮血を咲かせて、ドルヴァの軀はばさと地に叩きつけられていた。

トゥオンはドルヴァの首を悠々拾うと、鞍に括り付けた。

サルトは逃げ惑う味方の混乱の中、その様子をぞつと見ていた。ドルヴァほどの猛将が、

トゥオンにかかればまるで子供扱いなのだ。

トゥオンが、サルトの姿を見つける、目が合った。

「サルト、お前までいたのか。お前を殺すのなど簡単だが、もういいかげん、殺すのも飽きた。ほら、さっさと逃げないと、馬の蹄で踏み潰すぞ」

トゥオンが笑う。

サルトは生きた心地もなく、背を向けて走り出した。

トゥオン勢の追撃は続く。

サルト勢は体制を立て直すこともできず、ただ逃げる事しかできなかった。

ようやく、陣まで逃げ戻ったサルトの耳に、休む間もなく、もう一つの訃報がもたらされた。

サルト達が陣取っている地の後方、ガイテイ砦がメレアガンス率いる敵勢の手によって、落とされたと言うのだ。

「しまった！トウオンの一軍は陽動だったのか！」

サルトが机を叩いて、叫ぶ。

どおりで、トウオンの引き連れた軍勢は少数だったわけだ。敵の主力は、サルト達がトウオンを追っている間に、ガイテイ砦に向かっていたのだ。

高い山々に取り囲まれた、自然の要害と言えるアストラト城周辺地域において、ガイテイ砦を通る街道は、この地方唯一の輸送路だった。

三十万近いサルトの軍勢にとつて、何よりも問題なのは、まず兵糧だった。これだけの兵士を養うには、莫大な量の食料がいる。その食料はガイテイ砦の街道を通じて、後方から輸送されていたが、そこが落とされたとなると、途端にサルト勢は飢えに苦しむことになる。「……撤退だ。一時、引くしかない」

サルトが、絞り出すような声で言った。

「すぐさまガイテイ砦を急襲すれば、落とせるのでは？ガイテイ砦にいる敵兵は、味方に比べれば、ごく少数でしょう？」

サルトの周りにいる、士官達が言った。

「無駄だ。少数とはいえ、あのメレアガンスが守っている砦を、たかだか数日で落とせるものか。輸送路を立たれてしまつては、我が陣にはもう一週間分の兵糧も無いのだ……」

サルトが、無念そうに言う。

食料が無くなってしまうえば、三十万の大軍など、ただの足枷に過ぎない。みんな、飢え死にするだけだ。

「全軍撤退するが、後方には十分なしんがりを残しておけ。わかったら、急いで準備にかかるんだ」

サルトが、部下達に言った。

サルトには、モードレッドの怒りが目に浮かんだ。

ただよく守れと言われていたのに、攻め入り、深入りしすぎて逆にモードレッド軍の急所を衝かれてしまった。あげくに、アストラト地方から撤退とは……。

サルトは、死を覚悟した。

「お、帰ってきたか」

トウオンが、ガイティ砦から引き上げてきたメレアガンスを見て言った。

「ガイティ砦はどうしている？」

「三万ほどの兵をつけて、部下に守らせてある。あそこも魔界屈指の要害。簡単には落ちんだろう」

メレアガンスが言った。

「ははは、しかし今日はなかなか愉快だった。久しぶりに、思う存分敵兵を蹴散らしたから



な」

トゥオンが笑った。

今日の戦いで、討ち取った敵将の数だけでも数十、野に屍をさらしている敵兵の数は三万を超えるだろう。味方の被害はその五分の一にも満たない。まさに大勝利だった。

「敵が陣を払って、引き上げていくようだが、このまま追撃するか？」

トゥオンが、メレアガンスに聞く。

「いや、サルトとて無能な将ではない。撤退には十分な備えをしているだろう。こちらは相手より少数。追い討ちをかけたところで、返り討ちにあうだけだ」

「そうだな」

トゥオンが頷く。

今回の戦はトゥオン勢の大勝だった。モードレッド軍はアストラト地方から撤退した。しかし、敵は輸送路を阻まれたために撤退したのであって、その兵力に大損害を被ったわけではない。

敵はそう速くないうち、再びやってくるだろう。モードレッドが同じ過ちを繰り返すとは思えない。おそらく今度は本気で、彼自身が全勢力を率いて。

その時、防ぎきれぬだろうか。

サルトは、軍勢をアストラト地方の遥か後方まで撤退させると、兵士達をそこに残して、単身、魔王城に帰還した。もちろん、モードレッドに敗戦の釈明をするためだ。

「このたびの敗戦……すべて臣の罪でございます」

震える声で、そう言うと、サルトは跪いた。頭を垂れる。

しかし、サルトの予想に反して、モードレッドの怒りの鉄槌は落ちてこなかった。玉座に座ったまま、むしろ悠々と、

「そうか」

と言った。

「お怒りではないのです？」

サルトが恐る恐る、顔を上げて聞く。

「敗戦と言っても、被害はたかだか二、三万だろう。大勢に影響する被害ではない。ガイテイ砦など、また取り返せばいいしな。むしろ、私が怒っているのは、貴様等の無能かげんにだ」

モードレッドは、静かに言う。

「ドルヴァは勇だけで智も策もない馬鹿とはわかっていたが、サルト、おまえは幼少の頃から兵法書を読み、少しは兵を操るすべも知っている者だろう。だからこそ、おまえをドルヴァの副官としてつけたのだ。それが、たかがトゥオンごときの策にしてやられるとは……」

輸送路を断つなど、兵法の基本の基本。なぜ、ガイテイ砦の守りを怠った？」

「面目もございません……トゥオンの姿を見つけ、つい……功を焦り過ぎました」

サルトが、首をうな垂れて言う。

「まあいい。ガイティ砦を奪われた時点で、さっさと撤退してきたのはいい判断だった。意地を張って、ガイティ砦を取り返そうとしていれば、この程度の被害ではすまなかつただろう。」

三十万の兵の半数は死んでいた」

モードレッドが苦笑して言う。

「……一つ、提言させていただいてよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「敵ながらトゥオンは万夫不当の鬼神。言うまでも無く、メレアガンスも智勇兼備の名将です。この二人が十万もの兵を要して、あの名城と名高いアストラト城に立て籠もっては、私のような凡将が二十万や三十万の兵を指揮したところで、百度攻めても落ちないでしょう。しかし、閣下自らが総軍を率いて御出陣なされば、アストラト城を落とすなど赤子の手を捻るようなものでしょう。なぜ、そうなさらないのです？ 私には、閣下がわざと攻め手を弛めているように思えるのですが……」

サルトが言った。

モードレッドはそれを聞いて、しばらく苦笑していたが、

「……確かに、私が直接出向けば、今アストラト城を攻め落とすなど、わけないことだ。しかし、それだけでは意味が無い。待っているのだよ、来るべき時を……」

「……時、ですか？」

「そうだ」

モードレッドはそれ以上答えなかった。しばらく、黙っていたが、やがて、  
「もういい。さがれ」

と短く、言った。

サルトが一礼して部屋から出て行き、一人薄暗い部屋に残ったモードレッドは、薄笑いを浮かべたまま、じっと考えを巡らせていた。

残る十三使徒はあと四人。トウオン、メレアガンズ、ネヴィーナ、アルアルパッツ。死にぞこないのアルアルパッツなど、もとより問題ではない。

三百年かけて、ようやくここまでできた。多少のイレギュラーはあったが、全ては順調に進んでいる。

そして、モードレッドには切り札がある。この三百年、ずっと隠してきた奥の手。その最後の切り札があれば……。

モートが組織した、最強の十三人。十三の使徒。  
十三使徒も、これで終わる。

「ネッコはホントにいないのか？」

ヴァンシユタイン家の玄関でロアはリタにそう尋ねた。

「ですから、三日前に城へ行くと出たきりお坊ちやまは帰られてないんです」

今、玄関にいるのは三人、アッド、ロア、メルフィナであった。

ネッコが三日前から城に現れず、また魔導書でも読み漁っているのかと待っていたが、いくら待っても現れないネッコを訝しく思い、こうして三人でヴァンシユタイン家を訪ねたのだ。

「坊ちやまは城におられるんじゃないんですか？」

リタが三人にそう尋ねる。

「……どうやらどこかでふらふらしているらしい」

「あら、またですか。全くしょうがないわね。帰ってきたら城に行くように伝えておきますわ」

アッドの言葉に幾分か安心したのか、リタはそう言うと三人を見送った。

ヴァンシユタイン家を後にして、しばらく進んだ後、三人は立ち止まり話始めた。

「どういうことだ？」

「ネッコさんは行方不明ってことでしょようね」

「だろうな。しかし、何が原因だ？」

「まったくわからんね」

「ですね」

三人が話合うも、ネッコが行方不明ということ以外はわからない。

「あの人になにかあったの？」

突然後ろから掛かった声に三人が振り返ると、そこにはアムリタが立っていた。

「ええアムリタさん。どうやらこれは深刻な事態ですわ」

「深刻な？」

メルフィナの雰囲気を感じたのか、表情が少し強張るアムリタ。

「現在行方不明だ」

アッドが簡潔に状況を告げる。

「……」

アムリタは言葉も出ないようだ。その表情は、呆れている。呆れて言葉もでないということであろう。

「全く世話の焼ける」

ロアは頭を掻きながらそう呟いた。

「とにかく、サンダルクの窮地が近いのですから、そんなに悠長なこと言ってもらえ  
ん」

「そうだな。とりあえず手分けして探してみるか」

メルフィンとアッドが打開策を提示する。

「了解。アムリタも手伝ってくれるか？」

「ええ、あんなのも一応親族ではあるみたいだしね」

ロアがアムリタを誘い、四人でのネットコ搜索が開始された。

二時間後、サンダルク内に、ネットコの姿を求めて歩き回っていた四人が、街の食堂のよう  
なところで一休みしていた。

「手がかり無し」

ロアが言葉の通り両手を軽く上げてそう言った。

「まだ探していないところにいるのか……」

「あるいは、死んでいるのか……」

アッドの言葉に、彼らにとって最悪の状況をアムリタが呟く。

「そう簡単にネットコさんがやられるとは思いませんわ」

「確かに、もし襲われたんなら、ネッコが抵抗して街にクレーターの一つでもできてると思  
うぜ」

メルフィナの言葉に、ロアは笑いながら同意した。

実際、ネッコは魔導師としてはトップクラスと言っても過言ではない。何と言っても彼は無  
敵とまで言われたモートの13使徒の一人をその魔力で打ち倒しているのだから。

「アムリタ、彼と仲のいい友人を知らないか？彼らしか知らない行き着けがあるのかもしれな  
い」

アッドがアムリタを見ながら問いかける。

「私自身彼と共にいたのはここ最近なの、交友関係はあまり詳しく理解していないわ。彼の家  
の人たちなら旧知と呼べる人達のことを知っているのではないかしら」

テーブルに出された紅茶のカップを手でゆっくりと回しながらアムリタはそう言った。

サンダルークに暁の光が満ちる頃、街の広場に端から見れば途方にくれた様に見えるアッド  
たちが立っていた。

リタたちに余計な心配をかけない為、サンダルークの観光という名目で、ネッコの古くから  
の友人、アルフォンソの紹介を受け、彼らの行き着けと呼ばれる場所を風潰しに探してたの  
だった。リタ達には、ネッコは城で職務中と言ってあった。

「これで打つ手は完全に無くなってしまうましたね……」



メルフィナがうな垂れながらそう呟いた。

「だな、どうするか」

アッドがそう言い、ロアの方を見る。

ロアは軽く手を挙げ、無言で首を振る。わからないという意味表示らしい。

「もうネッコさんはこの街にはいらっしやらないのでしょうか」

メルフィナがそう呟く。

「もしそうなら、あいつに発信機でも付けてなきや探しようがないぜ」

ロアは軽くそう言った。

「それね」

そのロアの言葉に反応し、アムリタはそう呟いた。

「それって……発信機でも付けてるのか、ネッコは」

「いいえ。けど、私達魔導師には固有の魔力パターンというものが存在する。それを追跡できる装置さえあれば、彼の居場所は特定できるはずよ」

ロアの問いかけにアムリタは小さく、しかし自信を持った声色で答えた。

その言葉に期待を託し、三人はアムリタの次の言葉を待った。

「行くわよ。たぶんあそこならその装置はあるわ……」

アムリタはそう言いながら歩き出した。そのアムリタの表情は、とても思いつめたような、ひどく悲しいようなそんな複雑な表情であった。

しかし、完全に背を向けていたために三人は気づくことができないのであった。

サンダルークを発ったエーデルリッターは、ヴァルレー大橋の中間辺りにさしかかっていた。ロット率いるブラックナイツを先行さし、しばし足を止める他のエーデルリッター。

「ねえコーデリア、少しおかしくない？」

「確かにおかしい」

ヴァネッサの問いに、間髪をいれず答えるコーデリア。さらに言葉を続ける。

「この辺りはもうミルチアの管轄内といってもおかしくない所だ。なのに、装甲蟲はおろか、監視兵の一人もいないとは……少し気になるな」

「ではやはり、エフラムの率いる兵が大規模だということになってくるのかしら」

「可能性はある。しかし、一人もいないというのはどうにも気になるわね……ここに兵を配置できないと言うのは、絶対におかしい」

「レオデグランスに攻め入るために兵を集結させているとか」

「いや、それはないだろう。いくらあのアルテオムとはいえ、そこまで愚かな行為にはでないはず。あれでも、戦の指揮を取らせたらかなりの腕の持ち主だ。サンダルークを攻めている最

中に、強国のレオグランズと一戦交えるような馬鹿な真似はしないだろう」

「そっか……じゃあ、今がチャンスと前に進むしかないわね」

「そうね。とにかく、エフラムからアルテオムに報告が行かないうちに、この橋を渡りきらなければならぬ。先に進もう」

コーデリアの言葉に、頷くヴァネッサ。

エーデルリッターが少し先に進むと、先行していたブラックナイトが待機していた。それを見て、コーデリアがロットの方へと近づく。

「コーデリアさん、やはり誰もいませんね。数騎先行させていますが、恐らく何も無いかと思えます」

「やはりそうか……」

「やはり罠でしょうか？」

「エムラムからの伝令がいくのには早すぎる。かもしれないでは身動き一つ取れないでしょう？やはり行くしかないのよ……私達は」

「サンダルークに戻れないのはわかっています、闇雲に進むのもどうかと思ひまして」「それはわかっているわ。私はそんなに無謀な隊長ではありません。カイル、フォルデ」

コーデリアと呼ばれ、すぐに前へと出てくる二人。

「カイル、フォルデは二人で先行してくれ。私達は周囲を警戒しながら進む。何かあったら合図をちょうだい」

「ええー！そんな無茶苦茶な！」

コーデリアの言葉に、泣きそうな顔で叫ぶフォルデ。一方のカイルは黙ってコーデリアの方を見ていた。何か言いたそうだが、堪えているという感じである。

「もし向こうが待ち伏せしていたらどうなるんですか？こんな非人道的ですよ！」

「カイル、お前も嫌だと言うか？」

コーデリアがカイルに向かって言う。彼は表情を変えないまま口を開いた。

「不満はあります。ですが、選択肢がないようなので、行くしかありません。」

カイルの言葉にはっとした表情を浮かべるフォルデ。

「わかりました……俺も行きます。反論してすみません……」

フォルデが言い終えると、二人は無言で先行する。

「コーデリアさんは、彼ら二人には厳しいですね……」

「あいつらとは士官学校時代からの付き合いだからね。こういった事をつい任せてしまうのよ。二人とも、小隊を任せられるだけの実力はあるんだけど……私についていくって聞かなくてね」

「そうでしたか。しかし、フォルデはどうして急に行く気になったんですか？それにカイルの言っていた選択肢とは……？」

「ロット殿もわかっていると思うけど、小騎で先行するのはかなり危険なことです。もし、彼らが行かないと言っていれば、私が一人で先行していきましょう」

「でも、他にも人選はできません。何故二つの選択肢しかないのです？」

「ロット殿を含む隊長たちは、各ナイツの指揮を取らなければならない。だからと言って、今着いて来てくれている兵達に、そう易々と危険な任務を与える事はできません。まあ、そこは指揮官としての資質を問われるところでしょうね……」

言葉を終えたコーデリアは、悲しそうな表情のまま前へと進んでいた。

（自らを犠牲にすることで、他の者を守るコーデリアさんと、人を道具とも思わず、駒として操るような指揮官。どちらが人の上に立つのがむいているか……と言う事か）

コーデリアの表情を見て、彼女がこのように考えているのではないかと、ロットはそう思った。

エーデルリッターがしばらく進むと、フォルデとカイルの二人が、颯爽とエーデルリッターの方へと駆け戻ってきた。

「コーデリア様、大変ですよ」

「何があった？」

「ミルチア入り口付近にゼト將軍がいて……コーデリア様とお話したいそうです」

「ゼトが!?!」

二人の言葉に、声を大きくしてその名を言うコーデリア。

「……畏か？」

「わかりません。ですが、向こうに戦意はないようです。お付の兵も二人ほどで、辺りに伏兵

を潜ませている様子もありませんでした」

額に手を当て、考え込むコーディア。

（ゼトは信頼できる人間だ。彼が協力してくれれば、我々の勝利の可能性がかなり上がる。だが、もし罠なら、我々は窮地に陥るだろう。話し合いに応じるか、全力で突破するか）

「コーディア様、ゼト將軍は信頼できる人間です。話し合いに応じた方が……」

考え込むコーディアに、カイルが声を掛ける。

「待てよカイル。もし罠だったらどうするんだよ」

フォルデが二人の間に割って入ってそう言った。反論されたカイルはフォルデのほうへと向く。

「ゼト將軍はアルテオムの下につくような人間ではない。それはお前も知っているだろう？」

「そうかもしれないが、今は過去の人望や人徳で人を見るのはやめるんだ。もしこれが罠だったらどうするんだ？俺達は窮地に立たされるんだぞ」

「だが罠だという確証もない！」

「落ち着け二人とも。私が一人で彼に会いに行く」

そう言って、コーディアはティティスの手綱を握り締める。

「ま、待ってください。せめて俺達をお供に……」

「駄目だ。二人は各隊長にこの事を伝える。もし罠だとわかったら合図する。それまでは、全軍低速にて前進だ。ロット殿、これを……」

コーデリアはそう言って、ロットに魔境を手渡す。

「もし私に何かあったら……その時は頼みます」

「コーデリアさん……」

ロットはしばらく躊躇したが、コーデリアの目を見て頷いた。それを見たコーデリアは体を翻し、前方へと駆けていった。

「よし、全軍低速で前進だ！もう少しでミルチア……気を引き締めろ！」

ロットの号令で、ブラックナイツは再び前へと進みだした。

コーデリアがしばらく駆けていると、前方に騎士の姿を確認した。カイルとフォルデの言ったとおり、ゼトの周りには二人の兵しかおらず、辺りに隠れている様子もまったく見受けられない。

コーデリアは、ゼトから少し距離を置いて馬を止めた。

「ゼト……」

「久しぶりだなコーデリア。私の読みは正しかったようだ」

「私たちが来る事を予想していた……見事ね。で、私に話とは？」

「ここでは目立つ。私の砦へ行こう。もちろん、エーデルリッター達もだ」

「残念だけど、罫ではないという確証がない限り、あなたに同行することはできないわ」

「だろうな。私が同じ立場でもお断りだ。だからこういうのはどうだ？私がアルテオムの首を



用意しよう。その代わりに、事が片付いたら私に金を渡すのだ。取引だよ」

「……ふふふ、相変わらずね。金なんかいらなくせに」

「こうでもしないと、信用してもらえないみたいだからな。さあ、どうする?」

ゼトが首をかしげ、コーデリアの返答を待つ。

「ふう、わかったわ。とりあえず信用しましょう」

「よし、では急いで私の砦へと移動だ。ぐずぐずしていると気づかれるからな」

ゼトに招かれ、エーデルリッターはゼトの砦へと駐留することになった。一室には、ゼト、コーデリア、各隊長、それにカイルとフォルデが集まっていた。

「これで全員か?」

ゼトが部屋を見回しながら言う。

「そうだ。この方が、今臨時でブラックナイツの隊長をやってもらっているロット殿だ」

「初めまして、ロット・ステイルバンです」

「よろしくロット殿。英雄騎士としての噂は聞いている。だが、今回君の名を聞いたのは、暗殺者としての名だった」

「そうですか……」

「気を落とす事はない。それにしてもコーデリア、トランの件は痛かったな。彼がいれば、こんな苦勞をせずにすんだかもしれんのに」

「そうだな。だが、済んだ事を言ってもしかたない」

「わかっている。で、サンダルクはどうなったのだ？今も交戦中なのか？」

「いや、サンダルクは落ちたよ。無条件降伏という形だな。ユング王はまだ若い。そこをエフラムが巧みに突いて、サンダルクを降伏させた」

「そう簡単に諦める国とは思えんが……」

「悪い事は重なるものだ。現在、魔族の大軍が、サンダルクを目指して進行中。ミルチアと交戦すれば、たとえ勝利を収めても魔族に対抗するだけの戦力が残らないと踏んでの決断だ」

「魔族が……」

「それで私達が、エフラムの降伏勧告を受け入れるまでに用意した時間の間に、サンダルクを抜け出してきたんだ」

「そうだったのか……では、エフラムからアルテオムに伝令が行くのも時間の問題ということになるな」

「その前になんとか事を進めたいと思って、先を急いだんだが、何故橋に見張りの兵が一人もいなかったの？」

「私が下げさせたのだよ。お前達が来るんじゃないかと、そんな気がしてな」

ゼトはいったん言葉を切る。腕を組み、体重を椅子の背もたれへとかけた。

「先々代王から仕えていた士官や兵たちは、全員ミルチア城から離されている。私も、将軍からここの橋を見張る任務を受けた。だから、ここは私の管轄なのだ」

「ミルチア城から離された……なるほどね」

「だから、城には今装甲蟲と、奴の息のかかった傭兵、そしてあの大臣どもしかおらん」  
「クラードン大臣達か。あの無能なじじいどもめ……」

「まあ、奴は我々を側に置いておくのが怖かったんだろう。今、奴は自分の足場を固めるのに必死だ。まだ固まりきっていない今がチャンスだろうな」

コーデリアも、ゼトと同じく腕を組み、考え込む。

「しかし、コーデリアよ。アルテオムを討つだけでは、事は静まらんぞ？」

「わかっている。私の仲間が、これを魔界から持ち帰ってくれたのよ」

そう言って、コーデリアは魔境を取り出す。

「この鏡が？」

「これを、過去や正体の知りたい相手に向けると、巨大な映像でその人物の過去や正体が映し出される魔境なんだ。これを使えば、アルテオムの正体を民に知らしめることができる」

「なるほどな。では、私も協力させてもらうぞ」

「すまないな、ゼト」

そう言って、コーデリアがゼトに右手を差し出す。それを見たゼトは、その手をしっかりと握った。

「さてと、そろそろ本題に入ろうか」

コーデリアから手を離し、皆の方へと向き直るゼト。

「よし、目的はとにかくアルテオムの正体を、民に晒さなければならぬところにある。だから、何を差し置いても、アルテオムに近づかなければならない」

「映像が映し出されることを想定すると、やはり謁見の間にアルテオムがいた方が、都合がいいと思うぜ」

ヨシユアが言う。その意見に、全員がうなづく。

「それは私がなんとかしよう。アルテオムを謁見の間に貼り付けて置くようにする」

「そうか。じゃあそれはゼトに任せる。それとゼト、あなたのとこの部隊は、他の外にいるミルチア兵達を抑えてもらいたい。戦うより、話し合いで抑えてくれればありがたいんだけど」

「わかった、やってみよう」

「決行は、やはり夜でしようか？」

ロットが全員に向かって問う。

「いや、昼間に行く。それも、堂々と正面からな」

コーデリアが言うと、全員がわかったようにうなづく。ただ、ロットを除いて……。

「解せません。何故昼間なのですか？夜の方が奇襲としては効果的ではありません」

「まあ、そのことについては後で説明します。では、中分けを言うよ。まず、ヨシユアとクーガーの2部隊は正面からミルチア城を攻撃。但し、城内に無理に突撃しようとせず、できるだけ注意を引くような戦い方をしてちょうだい。次に、ヴァネッサの部隊は西からミルチア城の第二関門を襲撃。あたかも、陽動作戦においての奇襲部隊本体であるという戦い方だって。

ミルチア城の部隊が、この2方向に注意がいったら、私とロット殿の部隊で裏口から城内へ突入。そのまま謁見の間を目指す。作戦決行は、明日の正午前だ。今日は全軍をゆっくり休ましてやってくれ。以上だ」

—そう言い終えると、コーデリアは席を発った。

「魔界にもルールというものがあります」

と、カーマは言った。

大広間の中央にはネッコが座っていた。後ろ手に手錠を三重にかけられ、目には皮製の目隠しがされている。他は特にこれといって目立った拘束はされていなかったが、ネッコを中心に半径3mほどの巨大な魔方陣が描かれており、これが彼の筋力と魔力を完全に押さえつけていた。彼は息をするのも一苦労だった。

「暴行、強盗、詐欺、強姦、殺人。それら犯罪を取り締まるルール、即ち……あなた方の世界で言う、法律」というものでありましょうか……もちろん、あなた方の世界とは少し勝手が違います」

魔方陣の上をつかつかと歩くカーマ。ネッコにはその足音だけが聞こえる。

「例えば、ある地域に愚かしい権力者がいて、部下達の反感を買ったがためにその権力者は私刑（リンチ）にあつて殺された。これは可か否か？」

質問の後、カーマは一呼吸、二呼吸ほどの間を空けてみるが、ネッコはなにも返事をしな

かった。

「……これは、可、です。罪は、力と統率力に欠けた権力者の方にあるのです！もつとも、神を敵とする我々魔族が、罪、などという言葉を使うのは不適當ですが……ほほほ」

ほほほ、と広い空間に木霊する笑い声。ネッコは一度だけ鼻を噉った。

「ではネッコちゃん。とある人間が、こともあろうに、魔王の使徒を殺害してしまった場合……これは可か、それとも否か？お分かりになりますか？」

ピタリ、とネッコの背後で足を止めるカーマ。十本の指がネッコの首筋に触れる。そして突如、大声で叫ぶ。

「否よッ！ネッコちゃん！なに考えてるのよ！あたりまえじゃないの！否、否、三たび否ッ！悪徳の中の悪徳！大罪の中の大罪！反逆の中の反逆ッッ！あなたはそれを犯しちゃったのよおお！」

カーマはネッコの首を恐ろしい力で締め付ける。人間の女には出しようもない馬鹿力。苦痛、苦しみ、速のく意識。鬱血した顔面が破裂してしまいそうになる。魔力もなにも無いネッコには抵抗しうる術も無く、彼はカーマの腕から逃れようと弱弱しく体を捻るだけである。

もう限界、というところでようやく手を離すカーマ。激しい咳をするネッコの首筋は青黒く腫れ上がっていた。カーマの絶叫は尚も続く。

「ああ、未曾有の罪人ここにあり！逃れられないパニッシュメンツ、拷問と折檻が舌なめずりしてあなたを待っている！爪剥ぎ、皮剥ぎ、水責め、湯責め、煙責め、火責め、電気責め、虫

責め、吊るし責め、引き伸ばし、股割り、鞭打ち、串刺し、足砕き、腕砕き、舌抜き、目玉潰し、去勢！ありとあらゆる精神的、肉体的苦痛があなたを待っている！悲嘆と叫喚の園へようこそ！奈落の桃源郷へようこそ！聞かんや、第五天使のラツパの音！悪魔王アバドンの唸り声！絶望、絶望、また絶望！死という絶対的自由を奪われる、この世で最大にして最高の恐怖を魔族総勢誠意を尽くしてお届け致しますよう！ほほほほほ！」

興奮しすぎたカーマは、言葉が途切れるとはあはあと肩で息をした。ネッコも先ほどの首絞めの余韻に、しばらく呼吸を荒げていたが、それがようやく落ち着いたときに初めて口を利いた。

「おい、ばばあ」

「口の利き方に気をつけなさい！」

「僕のぬいぐるみを知らないか？」

ふふふ、と含み笑いを漏らすカーマ。

「……私が何も分からないその辺の低級魔族だと思っただ大間違いですよ。あのぬいぐるみにはあなたご自身よりもはるかに嚴重な封印を施しております。あなたも魔法使いならご存知でしょう？、立体魔方陣、の存在とその効力を……！」

カーマの言う立体魔方陣とは、通常の魔方陣が平面であるのに対して、更にそこへ上下の概念を取り入れたより高度な魔方陣のことである。例えば九つの印で構成された正方形の魔方陣があるとして、その上部にもう九つ、更に下部にもう九つの印を付け加えると、三×三×三×三



で構成された立方体が完成する。その対角線上の中心点に対象を配置すれば、上下左右ナメに渡ってがんじがらめの魔方陣が成立するというわけだ。もちろん、その魔方陣が通常の何倍もの効力を発揮することは、素人目にも容易に想像に足ることであろう。解呪に長けた魔法使いや高等魔族ですらも打ち破ることの出来ない強力な封印や結界、呪術などを施すことが可能である。もちろん、その設置には大変な手間がかかる。カーマは非常時と言うよりは半ば自分の趣味のために、自分の財力と権力とにものを言わし、屋敷の地下三階に渡って九つの部屋を建設、その一つ一つを印とした巨大な立体魔方陣を作っていたのだ。まさしくそれは、この世で数える程しかない強力な力を持つ魔方陣だった。

「布と綿の奥に秘められたとてつもなく強大な魔力……恐らくヴァジュラを倒したのもあの力……あの力を解析し、我が物にすれば、私は使徒ヴァジュラをも超える力を手にすることができる……！だから、それまではネッコちゃん。あなたをモードレッドに渡すわけにはいきません。あの力が何なのかを理解するまで、私はあなたを行方不明として扱います」

「お前なんかには扱える力じゃないさ」

「そうですか。ではまず足の骨でも砕きましようか」

一瞬、ネッコにはカーマの言葉が脅しのように聞こえたが、彼女はどこから取り出したのか鉄製の棍棒のようなものをネッコの膝元にずっしりと置いた。目隠しをされている分だけ、余計にはっきりと感じるその重みが、彼の恐怖を一層かき立てた。

「ま、まてー！」

「……どうしたのですか？」

「……わ、わかった。ぬいぐるみの力について喋る」

「おやおや……なかなかお利口さん、と言いたいところですけどね。人のお楽しみを奪っては  
いけませんよ。ほほほほ。足の一本や二本無くたって言葉ぐらい喋れる」

そういうと、カーマはゆっくりと棍棒を持ち上げた。

「ちよ……」

ネッコの背筋に寒気が走る。強張る体。無意識に奥歯を噛みしめる。

と、その時。

「カーマ！」

大広間に響く若々しい声。ネッコには聞き覚えの無い声だった。

「……なんです、リリパット。アリスとの約束どおりあなたは解放致しました。さっさとこの  
屋敷から出てお行きなさい」

「そいつがネッコ・ヴァンシユタインなんだろう？」

リリパットはカーマの言葉に従わず、真っ直ぐに広間の中心へと足を運ぶ。目的もなにもか  
もはつきりした、揺るぎの無い直線の足並み。

「なあ、カーマ。こいつがネッコ・ヴァンシユタインなんだろう？」

「それなら一体どうだというのです？」

「ネッコ・ヴァンシユタインなんだな？」

「あなたねえ、勝手に人の屋敷に入り込んで……」

カーマが言いかけたその瞬間、言葉にならぬ叫び声を上げて、猛烈な勢いでネッコの（既に青くなっていた）首筋を掴むと、リリパットはネッコを押し倒し、椅子ともどもその場に激しく横転した。両手を手錠で縛られているネッコは受身が取れず、モロに床で体を打った。視界が奪われていると全身の感覚までが混乱し、まるで世界そのものがシェイカーでぶんぶん振り混ぜられているみたいだった。リリパットが叫ぶ。

「テメエ、この人間風情があつ！ 貴様、貴様のせいで俺はなあ……！」  
拳を高らかに振り上げて、ネッコの顔面目掛けて振り下ろす。

「リリパット、ネッコを魔方阵に戻しなさい！」

カーマの言葉よりも早く、ネッコはリリパットのわき腹を蹴り上げる。咄嗟に筋力増強魔法を唱えていたネッコの蹴りは、相手のアバラ骨をへし折った。苦悶のうめき声を上げてその場に転がるリリパット。ネッコはもう一度寝転びながら蹴りを放つが、見えない相手の体を上手く捕らえることは出来なかった。手の甲か何かを蹴ったように思える。

ネッコはその場で後転し、器用に立ち上がり、勢い余って二、三步後ろによるめく。すかさずリリパットが相手の足を取る。また勢いよく転んだ。それでもネッコはなんとか這いつくばってその場から逃げようとするが、彼の向かう先には既にカーマが回り込んでいた。

「まったく、本当に、困った子供達だこと……そうれ！」

カーマの振り下ろした棍棒がネッコの背中に打ちつけられる。息が止まり、思考も止まる。

四つん這いの姿勢が崩れ、地面にひれ伏した。「よいしょ！」カーマがもう一度打ち付ける。ネッコは一瞬エビのように体を反らせたかと思うと、咳と共にどろどろとした血を吐いた。啞内に広がる血の香りがどうしようもなく気持ち悪い。敵は更にもう一度打ち付ける。そこで初めてネッコの絶叫が広間に響き渡った。苦痛というより、生の感触を確かめるための絶叫みただった。あまりの大声に、彼自身が驚いた。

「さあ、もう一度殴られたくなければ自分の足で魔方阵にお戻りなさい！……リリパット、あなたはじっとしているのです！もうこの場を混乱させることは許しませんよ！ここは私の屋敷なのです！あなた方には後でたっぷりとお置きをさしあげます！もはや言い逃れはできませんよ！」

「たのむ、カーマ！この人間と戦らせてくれ！」

「いけません！」

「……てめえ、モードレッドにチクツてもいいんだぞ！こんな大罪人を匿っているとすればカーマ、お前だって……」

「あら、私を脅すのですか？リリパット」

「なに？」

「アリスが魔族に戻れなくなってもよろしいのですか？ほほほほ」

カーマの言葉の意味するところがリリパットには理解できなかった。彼は復讐のことばかりが頭に一杯で、現在アリスがどういふ状況にいるのか知りもしないでいた。訝しげな目をして、

カーマの言葉に對しあれこれと想像を掻き立てるが、それが本当の脅しなのか単なるハツタリなのか、今の彼には知る由も無かった。しかし、結果として迂闊なことはできなくなった。

「さあ、あなたも、いつまでも芋虫みたいに這ってないでさっさと立ちなさい！」

そう言つて、更にもう一度カーマが棍棒を振り下ろそうとした瞬間、ネッコは死に物狂いで体を転がした。棍棒は強く床を撃つ。大理石の床に見苦しい傷がつき、カーマは激怒した。狂乱の声をあげ、また棍棒を大きく振りかぶる。ネッコはぎゅっと目を瞑り、心の中で叫ぶような祈りを唱えあげた。「助けてくれ！」と。

……

じーん、と痺れる頭の芯。彼の体の内、特に、心臓から放たれる眩い光が、大広間を真っ白に染め上げ包み込む。その人間的で調和の取れた忌々しい威光を前に、カーマは思わず身構えた。おやめなさい！なにごとです、おやめなさい！カーマが同じ言葉を二、三度と叫ぶ。

地中深くに囚われた守護者の魂が、主の生への意志と渴望にシンク口する。心のどこかで解放されるレベル5魔法の制動装置。爆発的に高まる魔力のオーラが、熱い血脈となつてぬいぐるみに注ぎ込まれていく。打ち鳴らされる逞しい鼓動、生命の息吹、生命の快活、巨大な生命の潮の奔流！細胞の一粒一粒が存在の歓喜に打ち震え、雄叫びをあげる。太陽の莫大なエネルギーの子孫として、大きな大きな雄叫びをあげる。そこに理性は無く、ただ自然元来の逞しさと乱暴さが台風のように渦巻くだけである。

ぶちぶちと引き千切られていく魔方陣という牢獄、格子戸としての立方体の印。屋敷を襲う

静かな揺れは、やがて大きな地響きとなり、突発的に打ち鳴らされる。一つ、二つ、三つ！  
カーマは棍棒を手から落とす、その場に転んだ。リリパットも転んだ。

「いけるぞ！と、ネッコは思った。

「……まさか……！」

「さあ、来たれ！ヴァンシュタイン家の僕！」

ネッコが（アムリタの真似をして）叫ぶと同時に、地面を突き破ってクマネコ王子が大広間に現われた。拳を突き上げた愛くるしくも猛々しいその姿はネッコには見えなかったが、こちらじゅうを包み込む懐かしいオーラは、いつか夕暮れ時に見た黄金色に輝く麦畑によく似ていた。オーラは、まさしく王子のものに他ならなかった。彼は安堵した。そして、王子から湧き出る力の躍動感に、言い知れぬ興奮を催した。無敵だ。お前が生きている限り、僕は無敵なんだ！

「り、立体魔方陣を破るなんて……！」

所詮、魔方陣では脅威のレベル5クラシック魔法モディファイド・ベアの前には無力であったのか、あるいはクマネコ王子の存在そのものが、ネッコやアムリタ、マリアの魔力が総和以上の力を作り出した奇跡の産物だったのだろうか……いずれにせよ、もはやカーマに彼を食い止める手立ては何一つ残っていないかった。

ネッコが王子に目隠しを外させたとき、既にカーマは居なかった。カーマは自分の危険にはとても敏感だった。魔界で長生きをするものは皆この種の本能に長けている。

それほど離れていない場所から、じっと彼を睨みつける魔族の少年が一人。王子から漂う力の渦に、リリパットの足は震えていた。

「……き、貴様のせいで、お、俺の人生は滅茶苦茶になったんだ」

と、リリパットは言った。

「貴様がヴァジュラを倒しさえしなければ、こんなことには……」

「知らないな。そんなこと」

ネッコはきよろきよろと辺りを見回した。カーマの部下達が続々と集まり、彼を取り囲む。

雑魚が何十匹集まろうが彼にとって大した問題では無かったが、問題は彼の体を襲う魔方陣による疲労と打撲の苦痛であった。体力と魔力が尽きぬうちに、早急にどこか安全な場所で休む必要があった。でなければ、もう一度魔方陣に放りこまれ、今度こそ……。

「リリパットだかカニパットだか知らないが、それほど僕が憎いんだっただらいつでも相手してやる。クマネコ王子抜きでも構わない。受けた挑戦を受けるのが、ヴァンシュタイン家としての誇りだ」

そう、ルドヴィヒは一度だってゼムの挑戦を断った事は無い。その血と誇りは色濃くネッコに受け継がれていた。

しかし、今日のネッコはとてもしんどかった。

「というわけでまた今度」

ネッコがそう言うのと、クマネコ王子は腕を目の前にかざした。刹那、かざした腕の先から発

射される光の玉。敵中心部に着弾し、巨大な爆発が巻き起こる。強力な魔力のキャノン・ポール。画用紙に向かって滅茶苦茶にクレバスを走らせたような、滑稽さすら感じさせる真っ黒い爆煙の中で、塵くずのように吹っ飛ぶカーマの部下達。あつという間に活路が開けた。

呆気にとられるリリパットと、怖気づくカーマの部下たちをよそに（たまに襲い掛かってきてもクマネコ王子がデコピンで弾き飛ばした）、ネッコと王子は悠然と屋敷から脱出した。

……そして、途方にくれた。

彼は今、自分が魔界のどの地域のどの場所にいるのかすら分からない。

カーマの屋敷は魔界の市街地からは少し離れた森の中に建っていたのだが（お陰で、他に騒ぎを聞きつけられずに済んだのは都合だったが）、まずその森の様子からして人間界のそれとは少しく異なっていた。と言うより、ずっと悪質だった。人間界では滅多に見ることの無い、強い毒素を含んだ木、毒草、毒キノコ……それらのメジャーなものからマイナーなものまでが様々なバリエーションで連なっている。毒性研究の学者や毒物を用いた禁術関係者なら思わず目を輝かせるような光景だが、真つ当な魔法使いであるネッコにはもちろん害悪以外のなにものでもなかった。体の丈夫な方ではない彼でなくとも、長いこと森の中に居つづけると、空气中に漂う毒木の花粉に体を蝕まれてしまうに相違いない。だんだんと頭痛が酷くなってきた。嘔吐の生々しい感触がムカデのように胃の底を駆け巡る。新鮮な空気を求め、歩調を早めるが、一向に景色は変わらない。気持ちばかりが焦る。



そして、追手、追手、追手！続々とネッコを追いかけてくるカーマの部下達。自分を守ってくれるはずのクマネコ王子も、とうに三分のリミットが切れてただのぬいぐるみと化していた。野宿どころか小休憩すらままならない状況である。彼はかれこれ一時間も徒歩と小走りを繰り返していった。その間、二度だけ敵に追いつかれ、それを撃退するために貴重な魔力を浪費した。

背中の打撲傷が酷く痛み出す。回復魔法というのとはとても魔力を使うもので、クマネコ王子を発動させた後の彼にはそんなものを唱えるほどの余裕は残されていなかった。もし回復魔法のために魔力を完全に消費し尽くした後、追手を撃退する手立てが無くなればそこでアウトなのである。悲しいかな、彼は他に自分を守る術を知らない。剣も知らなければ、弓矢も扱えない。彼は根っからの魔法使いだった。

一步、二歩、三歩、四歩……棒のようになった足から、地面を抜けて体力が逃げていくような感覚。気を許せばその場にしゃがみこんでしまいそうになる。痛みと嘔吐感の間に疲労が幅を利かせ始める。消耗が激しいのは魔力だけではない。むしろ、肉体の疲労こそいまは深刻な問題であった。疲労が募れば募るほど、無駄な考えばかりが脳裏にこびり付いて、うんざりした気持ちになってくる。

ええ、しゃきつとしろ、しゃきつと！根性が足りないんだ僕は。情けない！もう少し、あともう少しだけ歩く。まだ歩けるぞ。もう少しだけ歩いて、もうこれ以上歩けないって時になったら……そこで座ればいいじゃないか！あとは野となれ山となれだ。ただ、それまでは歩くん

だ。歩かなかったことで後で後悔するのは嫌だ。例えば、おっ死んだ、にしろ、後悔だけはしたくない。後悔……死後の世界で？いや、違う。来世の話だ。ここで、歩かなかった僕、が来世に生まれ変わったとき、またこういう状況で、歩かない僕、が生まれてくるんだ。どうせ死ぬなら、カルマの精算は今生の内に終わらせよう！魂の確定申告書を持ってカルマの管理局

(Karma Police) に届け出るんだ。『ネッコ・ヴァンシュタインはこれこれこういう状況にめぐずに立派に人生に立ち向かいました。今度はもつと立派な意志と力を彼の肉体に宿らせてやってください。今のように卑屈で、臆病で、根性無しじゃなくて……』

……なにを言ってるんだ俺は？

お前は一体いつから輪廻転生を信じるようになったんだ？

ええ、しゃきつとしろ、しゃきつと！普段気にも止めないものにするってのは、相当弱ってる証拠だ。いや、実際、僕は相当弱ってるんだろう。さつきから眠りたくて仕方が無いんだ。肉が痛んで、骨はぎしぎし軋んで、全身の細胞が睡眠欲しさにストライキを起こしてやがる。

・休憩が要る！水が要る！パンが要る！睡眠が要る！あれもこれも満ち足りない！ありとあらゆるものが要る！……ふん、なにも要るもんか！この僕が我慢してるんだから我慢しろよバカ野郎！……脳ってのは、肉体の司令塔なんかじゃなく、肉体全体の統合意志に過ぎないって何かの本で読んだな。まあ、単なる一つの可能性としての説にしか過ぎないんだろけど……もしそうだとしたら、面白いな。だって、もしそうならこの肉体の悲鳴に立ち向かっている僕の意志はなんなんだ？気力ってのはどこから湧いてきてるんだ？肉体に蓄積された物理的なダ

メーヅに打ち克つ何か、脳ではなく肉体に潜んでいるっていいのか？細胞の一粒一粒に？つまり、細胞にも生への意志があるってことか？じゃあ僕の皮膚の断片や垢、流す汗の一粒に至るまで意志の断片のようなものがあって……つまりその集合意志が僕という存在そのものだとすると、僕、なんて括りはあまりにも曖昧で、不安定なもので……

……なにを言ってるんだ俺は？

馬っ鹿馬鹿しい。だったら何だってんだ。下らない！

……でも、もしそうだとすると……地球だって、本当に一つの生き物として扱っていいんだ。微々たる意志をもった細胞としての人間たち。その集合体である地球という名の僕。地球は太陽と月の揺り籠に揺られ、悠久に養ってもらってるから死にはしない。ただし、病にはおちるだろう。生きるからこそ、病に悩まされる。そして病は細胞を……破壊していく！

病？病つてのは、何のことだ？魔王？……いや、奴は地球の敵じゃない。人間の敵だ。人間はどうだ？自然主義のイモ連中がうるさく言ってたな。「科学技術や魔法技術が発達するにつれ、人々は自然を汚している。母なる大地に対する逆行行為だ。人間は、地球に住まう寄生虫であり、害悪なのだ！」とかなんとか。あの時僕は「母なる大地から生まれた人間様がやっつてることなんだから関係ないだろ？」なんてバカにしたりしたけど、だったら母なる大地から生まれた、なにか、に人間が皆殺しにされたとしても、僕は文句は言えないわけだ……まったく、ぞっしない話だよ。リセットじじいってなんだっけ？

しかしなあ。ええ？神様よ。人々が害悪だったら、一体それがなんだってんだ？僕たち人間

があまりに増えすぎた……ってか？その通りさ！人々は太陽の恩恵を受けるばかりで、自分の命を燃やそうとはしない。保守的で、自分を守ることばかり考えて、いつか尽きる命に間違った感謝と愛情を捧げてるんだ。僕だって一人の人間には違いない。だけど、無駄に命を惜しんで生きちゃいけない。エネルギーは、とりあえず生き延びる。ただけのものじゃない。だから……ん……？あ、そうか！

ネツコは疲れてぼんやりとしていた臉を、思わず見開き、震わせた。

そうだそうだ！エネルギーだ！人間、そのものが決して害悪なんじゃない。地球を襲うエネルギーの飽和！これこそが地球における害悪だ！地球を蝕む病だ！決して科学の進展や自然破壊なんかじゃない。受容しすぎたエネルギーの飽和と、地球の極限の肥満化こそが、今の星を蝕んでいる全ての原因だったんだ！あまりに満ち足りて、渴望が足りない！パンク寸前の熱気球が、まるで今にも破裂しそうにしているかの如く！

だったらどうするんだ？大量虐殺でエネルギー調整？

ふん、馬っ鹿馬鹿しい。それこそ短絡的な畜生の知恵じゃないか。

僕たちは人間だ。人間は余力を創造に向ける力と、余裕と、そして退屈さがある。余分に余って余り尽くして飽和したエネルギーを自らの意志と掛け合わせ、爆発させたとき、また新たな道が生まれるんだ。くそつたれノアの選民思想！洪水が世を襲うなら、ダムを作れば良い！水に浮く島を建てれば良い！そうして、皆が方舟に乗り込んで、地球の病は一先ず癒える。そうさ。人間は地球を癒し得るからこそ偉大なんだ。そうさ！人間は永劫不滅だ！

その時、ネツコはもう力無い足を不恰好にもつれさせると、ぼったりとその場に倒れた。一度倒れてしまふともう立つ事はできなかつた。人間や彼の論説はともかく、彼自身は全然不滅では無かつた。脳裏に流れる古いフーガのオルガン小品曲が、彼を実に哀れな気持ちにさせた。そして、神々の最後の祝福として、深い深い睡眠を享受するのだった。

ルドヴィヒの住まう塔を上る、アッド、ロア、メルフィナ……そして、アムリタの四人。薄暗い螺旋状の階段を研究生に連れられながら黙々と歩く。メルフィナがちらりと後ろを振り返った。ゆらゆらと揺れるランプが浮かない顔つきのアムリタを一瞬映し出す。

「……」

なにか声をかけようと思つて、メルフィナはやめた。ロクな言葉が思いつかないし、部外者がなにかを言うには、ヴァンシュタイン家とロツク家の因縁はあまりに深く、複雑怪奇であつた。そう、そもそもアムリタは、ルドヴィヒを殺すために育てられたのだ。それはゼムが死んだ後も糸を引き、蜘蛛の巣のように絡み付いてくる。

こちらです、と研究生が言つて最上階の扉を開けた。アッドとロアが足を踏み入れる。彼らに続いて中に入ったメルフィナは驚いた。そこに居たのはルドヴィヒだけではなかつた。テーブルを挟み、ルドヴィヒと議論か何かを交わしていた一人の男は、恐らくヴァンシュタイン家で最もゼムを憎んでいるであろう、あのリジヨ・ヴァンシュタイだった。関係の複雑さに一層

深い陰影を落とす。

そして、最後に足を踏み入れるアムリタ。その表情はいつにも増して暗い。彼女の心を苛むものは、ゼムの教育の中で植え付けられた怨恨か、それとも罪悪感か。

「おや、これは……」

と、ルドヴィヒはアムリタを見て言った。リジヨは何も言わなかった。

それでもルドヴィヒとリジヨの二人は、さすがに表情を崩さない。が、胸中はきつと複雑な思いが渦巻いていたであろう。彼らは表情を崩さないのではなく、内心を相手に悟られまいと岩のような表情になってしまっていたのだ。不器用な微笑は、せめてもの大人としての器量であらうか。

テーブルを挟む形で向こう側にルドヴィヒとリジヨ、入り口側に四人が腰をかけた。

「あんたがネツコの爺ちゃんかい。噂はかねがね聞いてるぜ」

と、ロアが言った。それはどうも、とルドヴィヒは眩き、失われた片目を覆う眼帯の下を擦った。

「じゃ、早速でなんだけど、用件を……」

「ちよっと待って」

と、アムリタがロアの言葉を遮った。全員の視線が彼女に集まる。リジヨとルドヴィヒも例外ではない。

「どうした？アムリタ」

アムリタは羽織っていたマントの中に手を突っ込むと、ほとんど意識をしてない様子で、一本のナイフを取り出し、立ち上がった。銀で出来た、とても鋭く、綺麗で、輝かしい、猛毒塗りのナイフであった。その切っ先をルドヴィヒとリジヨの目の前にゆっくりと、見せものようにちらつかせると、はあ、とロアが隣で大きな溜息をついた。

「アムリタ、それは一体何の真似だ？」  
と、アツドが言う。

アムリタはナイフを握り返し、逆手に持つと、勢い良くテーブルに付き立てる。ダン！という乾いた大きな音が部屋に響いた。

「すつきりさせて置くべき事情があるわ。お互いに」

と、アムリタが言った。少し荒々しいその声は彼女に似つかわしく無い。全員が沈黙する。ロアが背もたれに背中を預ける。椅子のぎしぎしと軋む音がとてもよく目立つ。メルフィナは止めようか止めまいか迷っていたが、アムリタがいきなり「ブスリ！」とやるわけでは無さそうだったので、とにかく彼女の言葉を待った。

「あなた方の怨敵は死んだ」

アムリタはルドヴィヒを睨むような視線で言った。

「でも、その怨念の名残は消えない。ルドヴィヒ・ヴァンシュタイン、あなたは片目と娘を無くし、リジヨ・ヴァンシュタインは愛する者を奪われ、マリアは心を無くした。そして、その怨念の名残、怨敵の忘れ形見があなた方の目の前に居る。あなた方はそれを分かっているの？

それを自覚して、なお萎え犬のような顔ができて？」

ルドヴィヒは落ち着き払い、ふふふ、と笑った。リジヨは黙って俯いたまま、まだ一言も口を利いていない。

「お嬢ちゃん……君をそうさせるのは、罪悪感か？それとも、死に果てた父の命か？」  
ルドヴィヒが言った。

「他人のためじゃない。全ては私自身の為」

「死ぬことが自分の為？」

アムリタは何も答えない。

「ふふ……いや、やはり私も老いたものだ。若いロマンチズムにはついて行けん」

「ロマンなんかじゃ……」

「ロマンなんかじゃありませんよ、お義父さん」

と、アムリタの言葉を遮ってリジヨは言った。

「いや、たしかに、この子はロマンチストかもしれないませんが……その裏には必ず鋭い理性が働いている。感情と、謀略と、そして度胸がね！これじゃネツコも散々手玉に取られたことだらう」

うんうん、と頷くアッドとロア。メルフィナは相変わらず真剣に成り行きを見守っている。

「見てください！この子は自分に毒刃の切っ先を向けて、僕達の答えを強烈に催促しているんです。答えの如何では自分が死に至ろうとも仕方が無いというクソ度胸、いや、無鉄砲！本当



に若さというものは羨ましいものだ……こうして自分のたった一つの命を厭わず、全力で生きることができるのだから。自らの意志で命を燃やし尽くすことができるのだから！そして、そう。お義父さんの言う通り、とっておきのロマンチズムを魂の輝ける太陽として生きていく！アムリタ・ロック。君の勇氣に敬意を表して、お望みどおり私の答えを表明させてもらおう

リジヨはテーブルに刺さったナイフを引き抜くと、その場に立ち上がり、アムリタの額ぎりぎりに突きつける。アムリタもゆっくりとその場に立ち上がるが、全身に脱力が見られ、特に死を恐れた様子は無かった。少なくとも、傍目にはそう見えた。

おいおい、おっさん、と、ロアは言った。アッドとメルフィナもいよいよの時のために身構える。ルドヴィヒだけは、じっと目を瞑って動かない。

「マリアが私の最も愛する人間であって……」

リジヨは言いながら、アムリタのマントを捲る。そして、彼女の腰に巻いた革製の鞆にすくとナイフを取めた。その一連の動作はまるで、父親が娘に忘れ物を持たせるそれと何ら変わらないように見えた。

きよとん、とする全員の顔。アムリタの表情は変わっていない。

「彼女の愛する一人娘を、私が愛してはいけないという道理があるかね？」

しばらく誰も口を利かなかった。アムリタはぼんやりとした目つきでリジヨを見ていた。彼の言葉を信じるか信じまいか詮索をしていたのか、あるいはただ予想もなかった答えに戸

感っていたのかもしれない。また、予想はしていたけれど、だからこそ現実の言葉といつても予想をはるかに上回る質量感で襲ってきて、当事者を当惑させるものだ。

リジヨはルドヴィヒの方をちらりと見て、芝居じみた自分の行動を恥じたのか苦笑いを浮かべて着席した。しかし、リジヨは思った。若さには若さで対抗しなければならぬ、若さには百の言葉のオブラートなんかではなく、一つの剥き出しの感情で語るべきなのだ、と。それをこうした演劇を用いて照れを隠すのが、大人としてのせめてもの「技巧」であろうか。

アムリタはどこか諦観にも似た表情を浮かべると、やがて声もなく椅子に腰掛けた。何が解決したというわけではないし、彼の言葉が必ずの本心とも限らない。が、アムリタとしてはリジヨが「こうありたい」と思う意思なり希望なりの返事を聞いただけで大変な収穫だった。

ふと、彼女の脳裏を過ぎる言葉。「また私は馬鹿なことをやってるのかしら?」……しかし、そういう『馬鹿』さが自分は好きなのだということに気づくと、アムリタは訳も分からず嬉しくなった。

リジヨの演劇は自分の照れ隠しだが、アムリタの演劇は相手の興味を強烈に惹きつけるための、ませたお遊戯だった。遊戯は、とても人間らしい。

「さて、本題に入ろう」

アッドがそう言う。彼は一度咳払いを入れてから、順番に事のあらましをリジヨとルドヴィヒに説明した。ネッコが失踪したこと、本人からは何の連絡も無く、攫われたような痕跡すら

無いこと、そしてこの塔に来たのは彼を探す為の知恵を借りるためであること。

「やれやれ」

と、ルドヴィヒは言った。リジヨは息子の失態に恥ずかしい思いをし、苦々しい顔つきで俯いている。

「しかし……ネツコの魔力を辿る……か。確かに、魔力とは場所を隔てて人を繋ぐ性質がある。その性質を利用した、遠距離間での意思と意思の繋がりが所謂テレパシーというものだが、あれはお互いにそれなりの準備が必要だ。それに遠距離と言っても一キロメートルも無い。実用にはまだまだ遠いよ」

「テレパシーでなくても良いのです。魔力の探知機のような……」  
メルフィナが言った。

「平常時、人が発する魔力は微弱なものだ。どこにいるのかも分からない人間を探知するには少し足りん。それに、肝心のネツコの魔力の紋様すら分からない」

「クマネコ王子を利用できないかしら」

と、アムリタが言った。

「あれには私の全魔力が封じ込まれているから」

「なるほど」

リジヨが口を開いた。

「そのクマネコとやらがアムリタの魔力を内に保っているなら、アムリタ、君自身が探知機に

なれば良い。魔力の紋様というのは絶対に自分一人のもので、他の誰にも真似できない。そしてそれは距離を超越する。つまり、君が自分の魔力の紋様の在るであろう方向を予感し、辿っていけばいいだけだ。優れた術師は自分のゴーレムの居場所が分かる」

「それならここに来る必要なんて無かったわ。もっと確実性が必要なのよ」

「ふむ……ならば、アムリタの魔力の紋様を解析して、それに呼応するような装置を作れば……」

「いけない。さっきも言った通り、肝心の魔力元が微弱だろう」

リジョの案の脆弱性をルドヴィヒが指摘する。

「なら、こちらからフラットな魔力波を打つというのは？アムリタの紋様に反射して返ってきた信号だけを、その装置とやらで受信して……」

と、リジョ。

「ソナー・システム……か。なるほど、それならまだ可能性は見える。しかし……それには魔力波が障害物を良く抜けなければなるまい」

「それなら大地魔法でしょう。地面を這っていけば、海さえ越えていなければ随分な距離まで届くはずですよ」

「地のエレメントを利用した魔法波を発生させる装置と、返って来た信号の受け皿としての装置……」

「恐らくその……失礼」

「あ、メルフィナです」

「メルフィナ殿。あなたの魔力を利用することになるでしょう。他の二人より純粋に魔力が高いようだ」

「神官の魔力を利用するなら、神聖な媒体がよからう」

「ええ。例えば、銀」

「十字架」

「聖水」

「水晶」

「神像」

「杖」

「数珠」

「鏡」

「……今挙げた中からだと、発信元は杖、受け皿は水晶が性質上よからう」

「そう思いますね。メルフィナ殿、ぶしつけですまないが、それらの用意は直ぐにできますか？」

「えっと……つまり……」

「法化儀式のようなものは……」

「ああ、洗礼をすればいいのね。はい。時間はかかりません」

「助かります。成功するかどうかは分からないが……とにかく、まずはそれでやってみよう。ヴァンパイアとエルフのお二人には私の言う材料を集めてもらうとして……アムリタ、君にも付き合ってもらおうよ。なによりもまずは君の紋様を採集しなければいけない」

アムリタは頷いた。リジョが二度大きく手を打つと、直ぐに階下から研究生が走ってきた。ルドヴィヒが明確かつ詳細な注文をつけて実験室の用意をするように言いつけると、彼らはまた急いで階下に走っていく。

「アムリタ、さっきこそ君の遊戯に付き合ったが、だからと言って大人を見下し無能だなどとは思わないでくれたまえ」

リジョがそう言うってから数時間後、ルドヴィヒとリジョ、そして有能なスタッフ達の高い技術と知恵、そして意地が、ソナー・ステッキ（メルフィナ用）と受信水晶を完成させた。さすが研究者だな、とはアッドの弁だが、まさしく塔を訪れた四人全員が舌を巻いた。

しかし、喜びはそれほど長続きはしない。ソナーが返って来た方向はるか北の大地……即ち、魔界なのだから、彼らの胸中は穏やかでなかった。

アッド、ロア、メルフィナ、アムリタの四人はルドヴィヒ達に礼を言い、必ずネツコを無事に救出することを約束すると、悪しき大地へ向かって突き進んだ。当初の予定と行き先が同じなのは、幸運というより、やはり宿命でもあろうか。

アトラース大陸のとある山脈地帯。その中の一つの山の裾、見渡すかぎり岩と砂の不毛の荒地に、薄汚れたぼろきれを纏った一人の少女が立っていた。そして、その少女を囲むようにして、数百人のルーテネが倒れている。皆、死んでいた。おぞましい数の死体の山の中で、彼一人無言で立っている。

いや、それは少年だったかもしれない。中性的な顔。染み一つない白い肌。艶やかな黒い髪。深みをもった黒い瞳。細くしなやかな体躯。遠い目で、薄暗い空を見上げている。

少女にせよ少年にせよ、その子は完全な美しさを持っていた。それは一片の淀みもない、完全な存在であった。完全な生命体のはずであった。

その子の足元で、何かが動いた。子供が冷たい、無垢の目で見る。それは、もう虫の息の一人のルーテネだった。

「……新たな王……輝ける新時代の子、そして……生まれ出た完全な私よ……あなたをテイア・リアドと名付けます……古語で、『明けの明星』を意味する名……世界に新たな夜明けをもたらす者……」

息も絶え絶え、ルーテネが言う。ティアと名付けられた子供は、ただじっと、そのルーテネの姿を見つめていた。

「なぜ……答えない……なぜ、あなたには「私」の記憶が無いの……あなたは、魔王も勇者も超えた存在……全ての生命体の進化の頂点に立つ者なのに……どこで、失敗したの……」

必死の形相で、ティアの足元にすがりつくルーテネ。

しかし、ティアはそのルーテネには目もくれず、一人、歩き出した。

遠く、過ぎ去っていくその姿を、ルーテネは動く事も出来ず。ただ見つめていた。やがて、ティアの姿が見えなくなった。

「……わからない……わからない……理論は完璧だったはず……あれは私のはずなんだ……新たな時代に行くのは、新しい時代の生命だけでいい……そのために皆死んだのに……あれが私でないとしたら……私はどうなるの？」

ルーテネが涙を流して、呟いた。

そのルーテネの目の前に、一人の老人が突然姿を現した。地に倒れて、今にも死にそうな、最後のルーテネを冷たい目で見下ろしている。

「……誰？」

「……愚かな……」

老人がさげすむ様な目をし、呟いた。

「モートはこの世界に偶然生まれたイレギュラー。いわば運命の流れの中に突如発現したバグ



だ。そして、そのモートを倒したアトロも、モートを滅ぼし世界を修正するために、私がモートに似せて造った人為的なイレギュラーだ。どちらもバグ。彼等はこの世界に存在し続ける事でさえ、本来は不安定で奇跡的なことなのだ。そのイレギュラーとイレギュラーを掛け合わせても、生まれるのは今度こそ制御不能のバグだ」

「あなた……一体誰なの？」

「神だよ」

その言葉を聞いて、ルーテネの口が三日月のように反り上がった。口の端から真つ赤な血をたらだらと流しながら、狂ったように笑う。目は狂人のようにキラキラと輝いた。

「クローター……あなたがヴァルナの地下に記されていた、旧世界を滅ぼしたという神、クローターなのね？」

「……そうだ」

「ははは、あはははははははは」

「何が可笑しい？」

クローターが、顔をしかめて言う。

「嬉しいのよ。だって、もうすぐ『私』が、ティア・リアドが、あなたを殺すでしょうからルーテネが笑う。」

「人は時に理解しかねる言葉を吐く……それとも、死の間際で頭が狂ってしまったか」

「失礼ね、狂ってなんかいないわ。それでも私はこの世界で最も知能指数の高い生命体のつも

りよ」

ルーテネは何とか身を起こすと、岩場に腰掛けた。その間も、口や目からは絶え間な血が流れている。

「それに、一度こうして神と面と向かって話をしてみたかったの。一科学者としてね」

ルーテネが不敵に笑う。

「狂っているとしか思えぬな。人が神には勝てぬ。ましてや、あれは人と言うにもおこがましい。正常な生命体ですらない。あんな出来損ないが、私を殺すと？」

「ええ。殺すわ」

「やはり、理解できぬな」

「哲学、及び数学者としての『私』、ヘンギストの人格を借りて言わしてもらえば、この世に理解できない事などないわ。この世の如何なる現象も、数式で表せないものなんてない。運命だろうと人の心だろうとね。運命なんてせいぜい複雑な確率のカオス理論、人の心もただのアルゴリズムとルーチン、0と1の論理の集合体に過ぎないわ。理解できないって事は、単にあなたの知能指数が低いのよ」

「驚いたね……私に向かって、そんなことを言ったのは君が初めてだよ」

クローターが呆れて言う。

「そう？口が悪くてごめんなさいね。でも、事実よ。まあ、そう言っても理解は出来ないんでしょうけど」

「ああ、君のただの妄言にしか聞こえないね」

「昔の有名な数学者が、『神は最も優れた数学者だ』と言ったけど、どうやら間違いだったみたいね。まあ、とっくの昔に脳の立ち腐ってしまってる古代の神に、こんな事言ってもしょうがないでしょうけど」

ルーテネの毒舌は止まらない。口から血を吐きながら、喋っていた。

「死に際の妄言と受け取っておこう。本来なら、そのような高慢な態度、許して置かぬのだが」

「ありがとう。でも、あなた達神さまが、そうやって天上でふんぞり返っている間に、下界では人は成長しているのよ。目にも留まらぬスピードでね。そして、知性というものを持って、人の成長は加速度的に速まった。私は、本来なら数千万年は掛かる筈の進化を、たった数日で成し遂げた」

「それが、あの出来そこ無いだということのか？」

「そうよ。あれこそ人類の英知の結晶。ボールスと私が目指した、神と言う運命に縛られない、次の世代の生命体。新たな時代の夜明けを告げる者。全ての人類が通るべき、進化の道なのよ」

「……」

「覚えておきなさい。例え神であろうと、人の運命を抑えつける事は出来ない。人は立ちほだかる壁を乗り越えて、成長し、次の世代へと進化していくのよ……」

「モートも、カーリアとかいう小娘も同じ事を言っていた。だが、どちらも死んだ。神の定めた運命の前には、無力にな」

「ふふふ……、あなた、私の言っている事、まったく理解していないわね……これだから嫌なのよ、……馬鹿と喋るのは……」

そう言つて俯く、ルーテネ。

もう、事切れていた。目を開いたまま。

クロートーはただの肉塊となったルーテネから目を離すと、遙か南方を見つめた。

もう、ティアの姿は何処にも見えない。

見つけ出して、殺すか。

いや、放しておいても、害は無かろう。

奴には、モートのような禍々しさは感じられない。そして、生命体として全てが不完全で、アンバランスだ。放つておいても、そう遠くないうちに死ぬだろう。

それより、見守っておかなければならないものがある。

三百年前に、アトロを生み出してより始めた、運命の修正計画。モートによってバラバラに引き千切られた運命の糸を、紡ぎ治さなければならぬ。その最後の仕上げ。

モートの因子を受けた者、魔族達全てを、完全に消去しなければならぬ。一匹でも残っていれば、そこからまた運命が乱れてしまう。

——エレイン。

### 第三の王。

アトロの血を継ぎ、全ての修正を終わらせる者を、見守らなければならない。運命の監視者として。

ナナやエステル達、諜報部と一部のレオデグラルス十二大貴族の関係は、日増しに悪くなつていつている。原因はもちろん、諜報部におけるオクト大臣拘留だった。オクト大臣自身、十二大貴族の一つ、バルリット家の当主でもある。彼と親交のある貴族達からの、諜報部に対する圧力は凄まじかった。

もう一つ、諜報部とアヴァロン家一同はまだアヴァロン王の崩御を発表していなかったが、十二大貴族達は独自の情報網で、とつづくにこの事を知ってしまったらしい。国王不在の中国政の舵取りのリーダーシップをとろうと、皆一様に国政に関与してきた。

エステルは自室で頭を抱えていた。目の前の机の上には、貴族達からの手紙が山のように積まれている。どれもオクト大臣釈放の要求書だ。今、オクト大臣は城の一室に軟禁してあるが、それもどうやら時間の問題だ。

ナナは今ここにはいない。彼女は十二大貴族達の協力を得ようと、各地を走り回っていた。しかし、どうやらそれも芳しくないようだ。アヴァロン王という後ろ盾を無くしてしまった諜報部に、もうたいした力はないのだ。

事態は、本当に最悪だった。

まず、アヴァロン王崩御を知って、十二大貴族のうちの一つ、グリファル家の若き当主リスランが時期女王として名乗りを上げた。それに続くように、リヴァ家の当主、ベルドまでもが国王候補に名乗りを上げたようだ。他の大貴族達は、互いに様子を見合っている。

もはや、当主を失ったアヴァロン家と諜報部だけでは、貴族達をまとめる事ができなかった。エステルが、大量の報告書に目を通してしていると、ようやくナナが帰ってきた。

部屋に入ってくるなり、声を上げた。

「エステルちゃん！久しぶりの吉報だわ。ついにエレイン様が御帰国なされたの。ライオネル様も！」

「え！」

エステルが、驚いて立ち上がった。

「もうキャメロンの外れまで来ているわ。さあ、早くお迎えの準備をしないと」  
ナナが慌てたように言う。

ようやく、帰って来てくれたのだ。

引き連れた三万の兵は都市の外で野営させて、エレインとライオネルは三百ほどの騎兵だけを連れ、キャメロンの町に入った。

騎兵達の先頭、エレインは白馬の上でしゃんと背を伸ばし、町の様子を見渡した。何も変わっていない。

行きかう町の人々は、エレインの姿を見ると、一齐に頭を深々と下げた。

ようやく、帰ってきたのだ。

ひどく、懐かしい。

この町を離れて、たかだか数ヶ月だが、もう何年も帰っていないような気がする。

エレインとライオネルはキャメロン城の玉座の間に入った。

ナナやエステル、その他文武百官が出迎える。大勢の貴族達も。もっともこの場にいる貴族は皆、アヴァロン家とその支配下にある貴族ばかりだが。彼等は輝く目で、玉座の間の中央を進んでくるエレインを見つめる。この若き、新しい指導者に、不安と期待を混じらせて。

エレインは玉座に座った。この国の王が座るべき場所に、何の躊躇も無く。横にはライオネルが立つ。

「みなの方、出迎え、大儀。心配をかけたようですが、私はこうして無事に帰ってきました」  
エレインが堂々とした声で言った。

「私の留守の間に色々と問題があったようですが、細かいことは後で聞かして、まず何よりも聞きたいのは、我が父アヴァロン王がお亡くなりになったと言うのは事実ですか？」

「はい」

一人の老人が百官の間から進み出て、言った。ザザというこの城の侍従長である。

「そうですか。御遺体は何処に？」

「地下に安置しております」

「急ぎ、王の葬儀を執り行いなさい、ザザ。王の死をいつまでも国民に隠しておくわけにはいきません。準備は貴方に一任します」

「はっ。すぐに取り掛かります」

ザザが一礼して言う。

「我が父、アヴァロン王は亡くなりました。しかし、この騒乱の時代、例え一時でも指導者不在というのはこの国の存亡に係わります。よって、父に代わり私がこの国の国政を執ります。不服ある者は、今この場で名乗りを上げなさい」

エレインが百官を見下ろして言う。まるで反論を許さない、重い言葉だ。

誰も声を上げる者はいない。

いや、しばらくすると一人の武官が進み出た。若い貴族の男で、顎には髭を蓄えている。ハイドンと言う中流貴族の一人だ。

「エレイン女王万歳！レオデグランスに栄光を！エレイン女王に創造主イーリアスの祝福を！」

ハイドンが片腕を上げ、叫ぶ。

その声に発して、百官の間から次々を声上がる。

「エレイン様万歳！」



「アヴァロン家に栄光を！」

「勇者アトロの血に栄光あれ！」

人々のエレインを称える声は、まるで唸る波の様に玉座の間に広がった。

エレインがずっと片手を上げる。そのまま、エレインは百官の騒ぎが静まるのをまった。しばらくして、ようやくエレインが口を開ける。

「皆の者、大儀。しかし、勘違いしてもらっては困るのは、私はまだ王ではありません。あくまでこの国の王である父アヴァロン王の代役を果たしているだけです」

エレインが言う。その言葉にナナが一步出て、口を開く。

「一同を代表して申し上げます。今ここに居る者は皆、エレイン様にこの国の王位に就いていただきたいと思っています。今、世界は戦乱の時代です。王位不在が長引けば、それだけ他国に付け入られる隙を与えてしまいます。願わくば、速やかにレオデグランス王として他国に宣言し、国の内外の戦力を整えるべきです」

「私も同じ意見です」

そう言って、前に出た男。中年をすぎた貴族で、髪には白いものが混じり、顎には立派な髭を蓄えている。アヴァロン家傘下の貴族たちがほとんどのこの場で、彼一人は違った。彼は十二大貴族の一つ、ヴィテツロ家の当主ヴァースだった。

「我がヴィテツロ家はレディ・エレインとアヴァロン家を全面的に支持します」

「ヴァース公爵、あなたのその言葉と我が父に対する変わらぬ友情に、心より感謝します。私

は父の後を継いで王位に就くつもりです。しかし、物事には何事も順序があります。まずは国内の貴族達を纏める事が先決です」

エレインがヴァースを見て言う。

「そしてまず何より、我が父を殺した反逆者に誅を下さなければなりません。ナナ、報告を聞きましよう」

エレインの言葉に、ナナが口を開いた。

「アヴァロン王暗殺の首謀者と目される人物は、内務大臣であるオクト・バルリットとミルチアから亡命してきたミリアム・エルドリッチという元ミルチア貴族であると、我々諜報部は考えております。その二人がキリエと言う暗殺者を雇って陛下を暗殺したようです。現在、キリエとミリアムは逃亡して所在不明。オクトはこの城に軟禁しております」

「わかりました。オクトをここに連れて来なさい」

ナナが部下に指図する。やがて、兵士達に囲まれたオクトが玉座の間に連れられて来た。玉座の間にいる者は、ある者は冷たい目で、ある者は怒りを宿した熱い目で、オクトを見つめる。階下を挟んでエレインとオクトが向き合う。

「これはエレイン姫、御無事な御帰還なによりですな」

オクトが笑って言う。

「私の留守中に色々あったようですね、オクト大臣」

エレインの丁寧だが、冷たい言葉。

「ええ、おかげで身に覚えの無い冤罪で困っております」

「あくまで、冤罪だと言うのですね」

「もちろんです。陛下の信任の厚かった私がそんなたいそれた事をするわけが無いでしょう。

まったく、諜報部の無能にも呆れますな。あなた様が帰ってきてくれたのは幸い。一刻も早く、私を解放していただきたい」

「黙りなさい！」

それまで静かな口調だったエレインが叫んだ。

「あなたとミリアムが王位簋奪を策謀していたことは、諜報部員の目撃証言で明らかになっています！オクト、国家反乱罪と国王暗殺の罪で、あなたの貴族の称号と所有する全ての領地を剥奪します！」

「馬鹿な！あなたはこの国の国王でもなければ、もはや王の娘でもないので！今のあなたはアヴァロン家の中の一貴族に過ぎない。そのあなたが、バルリット家の当主であるこの私に、そんな事を命じる権利があると思っているのか！」

オクトも激昂して叫ぶ。

「あります。死んだとはいえ、新たな王がまだ即位していない以上、法律上は今もこの国の王は私の父です。その父の名代として、娘の私が命じるのです」

「詭弁だ！私は貴様の叔父なんだぞ！」

「あなたが犯した罪は、本来なら死罪でも軽すぎる大罪ですが、国王の義理の兄であると言う

事と、内務大臣としても今までの功績を考えて、国外追放とします。今すぐこの城から出て行きなさい」

「ふざけるな！ヴァース、おぬしも何か言ってくれ。それともおぬしまで、こんな小娘の横暴を許しておくのか！？」

オクトが、同じ十二大貴族の当主であるヴァースを見て言う。

「往生際が悪いぞ、オクト殿。国外追放で済んだ事を、レディ・エレインの寛大なお心に感謝するがよい。それでも、これ以上この場でその汚い口を開くなら、私がこの首切り落とすぞ」腰に挿してある剣の柄に軽く手を触れて、ヴァースが冷たく言い放つ。

オクトが歯軋りして唸る。兵士達がその腕を掴んで、玉座の間の外に連れ出そうとした。

「……許さんぞ、エレイン、ヴァース。こんな横暴がまかり通るなどと思うなよ。他の十二大貴族達が黙っておらんぞ。このままでは済まさんからな」

大声でそう喚きながら、オクトは玉座の間から出て行った。

「ご立派でした。エレイン様」

エレインの自室に戻り、二人きりになったライオネルが言う。

「……何が立派なものですか。玉座に座っている間、ずっと冷や汗をかいていましたよ。声が震えてませんでした？」

エレインが疲れた様のため息をついて言う。

「大丈夫です。女王としての威厳は十分ありました」

「あなたまでやめてください。私はまだ女王なんかではありませんよ……」

「しかし、あなた様は女王にならなければなりません。あなた様の意思に関係なく。この国と民のために」

「……わかつています。しかし、わたしにその器量があるんでしょうか？わたしがあの偉大な父の後を継げるのでしょうか？」

「いけません。王たる者は例え如何なる時も部下に弱気を見せてはいけません。上に立つ者が弱みを見せれば、下の者まで弱気になります。指導者とは決して揺らぐ事の無い厳でなければなりません。あなたはアトロの血を受け継ぐ者でいらっしやるのですぞ」

ライオネルの言葉は父のようだった。彼の言葉こそ、揺るぎの無い断固とした意思に満ちている。

「わかつています。でも、あなたにぐらい愚痴をこぼしてもいいでしょう。あなたの忠誠と意欲は鉄より硬く揺らぐ事などないとわかつてますから」

エレインがにやりと笑って言った。

部屋のドアがノックされた。エレインは姿勢を正して、「お入りなさい」と言う。顔を見せたのはヴァースだった。ナナとザザもいる。

「お呼びでしょうか？レディ・エレイン」

「ええ、入ってください」

三人が部屋に入り、エレインの前に置かれた椅子に座る。

「集まってもらったのは、これからの事について話し合いたいからです。ナナ、現状はどうなっていますか？」

「はい。今のところ、十二大貴族の内、グリファル家のリスランとリヴァ家のベルドが王位候補として正式に発表をいたしました。他の十二大貴族の動きとしては、ポールハンド家とアイレン家、レイマン家がリスランを支持を表明しました。また不確かではありますが、諜報部の調べではサレン家、ヤース家、モズヴァニ家の三家がトリストラル家の当主であるティグレインを王位候補に推し立てようとしているとか……しかし、今のティグレイン様自身は王位候補として名乗りをまだ上げていないことから、あのお方が王位につく狙いがあるのかはわかりません……どちらにしても、あまり良い状況とは言えません」

ナナの報告を聞いて、エレインは眉をしかめた。

「我々、ヴィテツロ家は如何なる事があっても、あなたを支持します。どうぞ、ご安心を」

ヴァースが髭を撫でながら言う。しかし、そのヴァースもナナの報告には眉をしかめている。十二大貴族の数を単純に計算して、それぞれの陣営を考えると、リスランが自家を含めて4、ベルドが1、ティグレインも4、エレイン陣営は自家とヴァースのヴィテツロ家を含めて2か……。

確かに、良い状況とはいえない。支持者の数で敵陣営に大きく溝を開けられているようだ。

やはり、レオデグランスに帰ってくるのが少し遅かったか。

それに王位候補を表明しているリスラン。まだ若い女性でたしかエレインと同じくらいの歳だったはず。エレインも直接あった事があるが、彼女は危険だ。頭も切れるし、一家の当主としての器量も余りあるほどある。なによりエレイン自身彼女の事が嫌いだった。あんな女が女王になどなったら最悪だ。

そして、おそらく私の最大の障害となるのは、このリスランだろう。エレインはそう直感した。

「あと、残っている十二大貴族といえはオクトのバルリット家ですが……これは……」

ナナが言い辛そうに言う。

「そうですね。これは間違いなく敵陣営のどれかの支持に回るでしょうね」

エレインが呟く。これでまた敵陣営との差が広がるわけだ。オクトが領地を剥奪されたといっても、それは言葉の上だけで、実際には今のエレインにオクトの領地を奪い取る兵力がないのだ。オクトのバルリット家はまだ十二大貴族としての力を十分持っている。

「失礼ですが、敵に回るとわかっていているオクトをそのまま城から返したことが賢明とは思えません。なぜ、あのまま死罪にしてしまわなかったのです」

ヴァースが言う。

「オクトなど小者です。彼を殺したところで、バルリット家の力が弱まるとは思えないし、バルリット家傘下の貴族達を怒らせるだけでしょ。私は、国王暗殺はオクトよりむしろミア

ムという女性が裏で糸を引いているのではと考えています。さらにはその後ろがいるかもしれません。それらをつきとめる為に、オクトの事は泳がせておきましょう」

「なるほど」

エレインの言葉に、ヴァースは満足気に頷いた。

「ヴァース公爵、万が一の時、兵員はどの位動員できますか？」

エレインが聞く。

「そうですね……三千位なら今すぐにも集める事が出来ます。数日あれば、一万ぐらいは確実にです。限界ぎりぎりまで集めたとして……二万を少し超えるぐらいでしょうか」

ヴァースが髭を撫でながら言う。

二万か……エレインのアヴァロン家でも、自家の領地と傘下貴族達から集めれば、いいところ四万ぐらいだろう。合わせて6万ぐらいか。まるで足りない。これでは国境の警備もままならない数だ。

「ライオネル、地図を持ってきてください」

エレインの言葉に、ライオネルが机の上に地図を広げる。

エレインは地図を指差した。

「ペルセンとの国境付近の兵を呼び戻しましょう。それとミルチア方面においてある兵も」

「国境の守備を疎かにして大丈夫でしょうか？」

ヴァースが言う。



「ミルチアは今、サンダルクと交戦中。わざわざ精霊の森を通って我が国に攻めてくる余力も無いでしょう。それにペルセンも少し前に十三使徒との戦いで軍に大打撃を受けたと聞きます。彼等にもこちらを攻めるだけの余力があるとは思えません。ペルセンにはレオデグランスの仮統治者として私が使者を出して、不戦条約を早急に結びましょう」

「なるほど」

「それでも、まだ兵士が足りません……ザザ、今国庫にはどれくらいの予算があります？」  
そう言われて、ザザが手持ちの手帳を開いた。

「……あまり、余裕があるとは言いがたいですな。なにせ、この前の勇者募集でかなりの予算を使ってしまったので……幸いな事に兵糧はこの城に十分蓄えられています。陛下が常々、戦時の事を想定して蓄えられておりましたので」

「そうですか。国中の両替商に人を派遣して、借りれるだけの資金を借りてきてください。その資金で傭兵を雇いましょう。兵士の質は悪くなりますが、今は数が大事です」

エレインが言う。

これで敵陣営とも張り合える兵数になるだろう。今は何より兵数がある。こちらの兵力が敵陣営に劣っているとわかれば、今は中立派の貴族達も敵陣営に回ってしまう。

「ザザ、資金調達は急いでください。おそらく敵も同じ事を考えるはずです。資金を借りに行っても既に敵に借りられていて、空でしたなんてことのないように」

「わかりました」

ザザが言う。

「さて、当面の目的は、我々の賛同者を増やす事です。ナナ、そちらの根回しは頼みます」  
エレインがナナを見る。

「お任せください。諜報部の人員をフル活動させて、貴族達にエレイン様の支持を取り付けて見せます」

「頼みます。それとミリアムとキリエという人物の搜索も」

「わかっています。それと、一つ提案があるのですが」

「なんです？」

エレインがナナに聞く。ナナはザザの方を見た。

「ザザさん、アヴァロン王陛下の葬儀はなるだけ盛大にやってください。前王の葬儀をエレイン様の名義で行なえば、民はエレイン様をアヴァロン王の後継者として見るでしょう。盛大であればあるほどいいと思います」

「なるほど、いい考えです。ザザ、よろしく願いますね」

「お任せください、エレイン様」

ザザが一礼した。

その時、部屋がノックされて、一人の男が入ってきた。ナナの側に行き、何か耳打ちする。そしてエレインに一礼して、男は部屋から出て行った。

「何です？ナナ」

エレインがナナに聞く。

「……部下からの報告が二つあります。一つは良くない知らせです。もう一つはどちらともまだ言えません」

ナナが言う。

「……悪い方から聞かせてください」

「ベルト家のリヴァが王位候補の名乗りを撤回して、リスラン支持に回りました」

なるほど。最悪の報告だ。これでまた最大の敵であるリスランの勢力が増強されたわけだ。

「……で、もう一つの方は？」

「トリストラル家のレディ・ティグレインがエレイン様にお会いしたいそうです。すでにこの城下にまで来ているとか」

ナナの言葉に、エレインは驚いた。

レディ・ティグレイン。王位候補に名を上げられている十二大貴族の一人だ。その彼女が、この時期に私に会いにくるとは……。

何を考えている？

「……どういたします？」

ナナが聞いた。

「……いいでしょう。会ってみます。ナナ、準備をしてください」

エレインが言った。自分に言い聞かせるように。

テイグレインが何を企んでいるか知らないが、会ってみれば少しははっきりするだろう。エレインはライオネルをちらりと見た。ライオネルは黙って頷く。

昔、ライオネルに教えて貰った教訓がある。

戦場で指揮官として最も大事な事の一つは、敵と味方を見分ける事だつて。

テイグレインはどっちだ。敵、それとも味方？

エレインは力強い目で、立ち上がった。

リユネットは第十六神聖騎士団を引きつれ、聖都ラヴィーンに帰還していた。

ここラヴィーンは、アトラス大陸の最大宗教であるイーリアス教の総本山であり、アトラス大陸で最も古い都市の一つである。都市の至る所に古代文明を忍ばせる建築物があり、数千年にもわたって培われてきた歴史、文化、知識は膨大な物である。今でも年に1千万人を越す人々が、このラヴィーンに巡礼に訪れる。

リユネットが兵士を連れ、白馬に乗って街中の石畳の道を進んでいくと、道端にいる人々はリユネットを祈り崇める。この町にいる人々は皆、信心深い。

リユネットは広場に兵士達を待機させ、一人、都市の中央にある巨大な石造りの寺院に向かった。

静寂の、物音一つしない、独特の重さを感じる静けさを持った寺院の中を歩いていると、一

人の若い男がリュネットを見て、声をかけた。

「リュネットさん。帰ってきたんですね」

男の癖に女のリュネットより背が低い。くるりとした丸い目、童顔、おかつぱ頭。手には革張りの分厚い本を数冊持って、イーリアス教のローブを羽織っている。リュネットの同僚、第十九神聖騎士団の団長、アミスだ。

アミスはリュネットの方へ駆け寄ろうとして、こけた。手に持っていた本が地面に散らばる。慌てて本をかき集めるアミス。

相変わらず、どんくさい男だとリュネットは思った。

アミスはリュネットとは同期で、幼少期は同じ寺で過ごし、同じ寺で勉学に励んできたという学友だが、この男は何をやってもとろい。体力や運動能力なんて皆無だ。取り柄と言えば、くそ真面目な事と、馬鹿に信心深いことぐらいである。そのアミスが何を思ってわざわざ志願してまで神聖騎士団に入隊したのかは、リュネットには理解できない。こんな男を団長にした教会の考えは、もっと理解できない。騎士団などより、寺院に籠って神学の研究でもしている方が、よっぽど似合っているだろう。

本を拾い終わったアミスが、リュネットと並んで歩く。

「遅かったですね。もう他の騎士団の方々は皆、帰って来てますよ。リュネットさんで最後です」

アミスの言葉に、リュネットが眉を上げた。

「みんな？まさか、全ての神聖騎士団がラヴィーンに帰ってきているの？」

「そうですよ。知らなかったんですか？」

緊急帰還命令など珍しくもないが、それが全ての騎士団に対してだと話は別だ。リュネットの記憶するかぎり、今までこんなこんな事はなかった。

「ただごとじゃないわね。何があったの？」

と聞くリュネット。

と言っても、だいたい想像はついているのだが。

「……これは絶対に他言無用ですが……どうやらアヴァロン王がお亡くなりになられたらしいです。おそらく、そのためでしょう。アヴァロン王にイーリアスの祝福を」

アミスが声を落として、祈りの言葉を言った。

やはり、その事か。

レオデグランスはイーリアス教にとって最大の保護国だ。そのレオデグランスの王が死に、次の王はまだ決まっていない。下手をすれば、レオデグランス国内で内乱になる。そうなれば、このラヴィーンも蚊帳の外というわけにはいなくなる。

「……もしもレオデグランスで内乱が起こったとしても、内乱の火の手がこのラヴィーンにまで及ぶとは思えません。……方が一の事を考えて、ラヴィーンの警護のために騎士団を呼び戻したのでしょうか」

この三百年類を見ないほどの魔界の動乱だけでもやっかいなのに、人間界まで慌しくなっ

きた。ミルチアのサンダルク侵攻に続いて、アトラス大陸最大最強国家であるはずのレオデグランスで王位継承を巡っての内乱か……。

この世界は本当にどうなるのだろうか？

「そういえば、ルアーク様が呼んでましたよ」

アミスが思い出したように言う。その言葉を聞いて、リユネットの顔付きが変わる。額に汗が浮かんだ。

「馬鹿！それを早く言いなさいよ、このうすのろ！」

「ひどい……」

リユネットの暴言に、アミスが泣き出しそうな声になる。

そんなアミスはほっといて、リユネットは急ぎ足でルアークの部屋まで向かった。

ルアークの部屋の前まで来たリユネット。大きく深呼吸をして、ドアを叩く。

「第十六騎士団団長、リユネットです」

「入ってくれ」

部屋の中から聞こえる声。

「失礼します」

リユネットがドアを開け、部屋の中に入った。

広い部屋の中で窓の前に立ち、長身で体格のいい、ブロンドの髪の壮年の男がいる。第一神

聖騎士団団長、ルアークだ。胸にはイーリアスの紋章の入った黄金の記章をつけ、朱色のマントをつけている。腰には銀の装飾の入った見事な剣。その瞳は神に仕える僧とは思えぬほど鋭い。

ルアークはリユネットが部屋に入ってから、しばらく窓の外を眺めていたが、やがてリユネットの方に向き直った。

「かけてくれ」

ルアークがリユネットの前にある椅子を目で指して、言う。

「いえ、結構であります」

リユネットはまっすぐ背筋を伸ばして起立したまま、きびきびした口調で言う。

「そうか」

ルアークはそう言って、机の前の椅子にゆったりと腰掛けた。

イーリアス教の組織する神聖騎士団は二十の騎士団からなるエリート部隊である。各隊の人数はそれぞれ三百人から千人程度。ここでいうエリートとは優れた戦闘能力を持つ集団と違うわけではない。地位の高い者の集まりと言う事である。各騎士団の団長は、ほとんどが有力貴族だし、その団員達の中にも下級貴族などが多い。よって騎士団と言っても、ろくに戦闘経験のない部隊も多い。

事実、アミスの第十九騎士団などは、戦闘部隊というより、各地に派遣されて布教を行なっている布教部隊を言った方が正確だ。その他の部隊も、大陸各地の寺院周辺における治安維持



程度の仕事がいざいざである。リュネットのように積極的に魔族討伐や異教徒狩りを行なっている部隊の方が珍しい。

しかし、第一から第五までの神聖騎士団は違う。彼等は騎士団の中から選りすぐられた、本当の戦闘部隊だ。特に第一神聖騎士団は人数も五千と他の部隊と比べて格段に多く、団長であるルークはその他の全ての騎士団を指揮する権限を持っている。

ルーク、彼の前では、傲岸不遜なリュネットですら身が硬くなる。

彼はイーリアス教の守護神であると呼ばれ、幾度となく強力な魔族を滅ぼしてきた名実共に神聖騎士団最強の騎士である。信者達からは「黄金の獅子」と崇められ、法王にも劣らない人がある。

「まずは帰還ご苦労」

椅子に座っているルークがリュネットに向かって言った。

「いえ、世界に正しい教えを広め、正義を施行する聖なる任務、苦には思いません」

「よろしい。もっとも君の部下から聞く話では、君の普段の勤務態度はあまり褒められたものではないようだ。各地で騒ぎを起こしているらしいな。それに今回の帰還命令にも随分遅れている」

「はっ、それは……」

リュネットが青い顔をして、慌てて弁明しようとする。あとで告げ口した部下に蹴りをいれてやる。

「まあ、それはいい。今回、君を呼んだのは、君を責める為ではない」

リユネットがほっと溜息をつく。

「実は、レオデグランズ国内で容易ならぬ事態が起こった」

「はい、聞いています。アヴァロン王がお亡くなりになられたとか」

「ほう。耳が早いな……そうか、君はつい先日までエレイン姫と行動を共にしていたのだったな。ちようどいい」

「ちようどいい……と言いますと？」

リユネットが聞いた。何がちようどいいのだろうか。

「君もわかっているだろうが、レオデグランズはイーリアス教の最大の保護国だ。その国内の内乱は我等も無関係ではいられない。今、レオデグランズ国内では数人の貴族達が新国王候補として名前が上がっているそうだが、万が一新たな国王が即位しても、レオデグランズはイーリアス教の保護国であり続けてもらわねば困る。君はエレイン姫と個人的に親しいと聞いている。そこで君はキャメロンに行つて、エレイン姫やその他の貴族達と交流を持って、誰がレオデグランズ国の新国王として即位すれば、我ら教団にとって最も利益になるか、調べて欲しい」

ルアークの言葉を聞いて、リユネットが驚いた顔をした。

「――私がエレインと個人的に親しいですって？」

とんでもない。犬猿の仲をいう奴だ。ルアーク様は何か勘違いをしているらしい。

浮かないリユネットの表情を見たルアークが、怪訝な顔をする。

「……何か問題でもあるのかね？リユネット？」

「いえ、ありませんが……私が思いますに、この任務には他の誰かにお任せになった方が良いでしょう……」

「人選については上で決定された事だ。検討した結果、最も適任だろうと君が選ばれた」

「……それに内乱などにならず、エレインが新女王になるのでは？何といても前国王の一人娘ですし」

リユネットがまだ不服そうな顔して言う。リユネット自身、エレイン以外がレオデグランスの王になるなど、考えても見なかった。

あの生意気な小娘が王位に就くなんて、ムカつくが。

「我々の調べでは、そう簡単に事は収まりそうにないな。家出同然にキャメロンを飛び出し、身分の卑しい者達と各地を旅していたというエレイン姫の今までの行動に、王女としての資質を疑問視する声が各地の貴族から少なからず出ている。」

「それは、魔王を倒すために……」

リユネットが言う。言うてから、何故かエレインの弁護をしている自分に気付いて、驚いた。「理由はどうあれ、確かに一国の王女としては軽率な行動だった。その結果、アヴァロン王が死ぬという国の一大事のその時に、その場に居合わせる事が出来なかったのだからな」

「……」

言い返せなかった。黙って唇をかみ締める。自分が何に腹を立てているのか、わからなかったが。

「とにかく、これは極めて重要な任務だ。我等教団は世界を正しい方向に導く義務がある。万が一にも、異教徒や邪悪な心の持ち主がレオデグランスの王位に就いてもらっては困るのだ。かつてのモートのような暴君、暗黒時代の再来だけは防がねばならぬ。やってくれるな？」

「はい」

リユネットは短く答えた。本当は気乗りなどしなかったが。

「よろしい。準備が出来次第、キャメロンに向かってくれ」

リユネットは敬礼して、ルアークの部屋を出て行った。

一人、廊下を歩いていくリユネット。先ほどルアークの言った暗黒時代という言葉が、妙に頭にこびり付いていた。

イーリアス經典に記された暗黒時代。莫大な権力を持ち、世界中の王室に多大な影響力を持つているといわれ、まさに世界の影の支配者だったイーリアス教の法王に有史上、たった一人弓を引いた男。六百年前に端を発した、魔王とイーリアス教徒との戦い。魔王モートによるイーリアス教の弾圧。暗黒時代は三百年続いた。イーリアス教にとってはまさに暗黒の時代だった。

今でも經典には、魔王モートは創造主に弓ひいた罪人として、有史上最大の極悪人として書かれている。全ての欲望と罪の権化、悪魔として。

リユネットもそう習った。

でも、それが真実なのだろうか？

モートも悪魔なんかじゃなく、ただの人間だったはず。

たった一人の人間が、そこまで言われるほどの罪を犯せるものなのだろうか？

モートの配下達、魔族と呼ばれる者達は、生きとし生ける者達の敵対者なのだろうか？

本当に？

誰が決めた？

魔界でネーテルという魔族と出会ったリユネットには、今まで何の疑いも持たずに信じてきた境界の信念に揺らぎを感じていた。

人間と魔族は今でも互いに憎しみあつて、殺しあっている。

理由もよくわからずに。

こんな事をして、誰に得がある？誰が喜んでいる？

誰も喜ばない。双方、血と涙を流すだけだ。

血で血を洗う事が、イーリアスの御心に適っているとは、どうしても思えない。

なのに、戦いは終わらない。

まるで、誰かが人間と魔族の戦いを、望んでいるように。遙か遠くから見つめている、第三者が……。

そんな事をリユネットが考えていた時、突然、背中にぞっとするものを感じた。驚いて辺り

を見回す。誰かに見つめられている気がしたのだ。だが、誰もいない。寺院の中は、いつもどおり、薄暗く静寂に包まれていた。

リユネットは廊下を抜けて、目の前に見える中庭から空を見上げた。

——気のせいかな確か、遙か頭上から、何か奇妙な感じを受けたのだけれど。

リユネットは首を振った。

ありえない。そんな事は。私は気でもおかしくなったのだろうか。

神に見つめられた気がしたなんて。

ティアはただ一人、荒れた大地を歩いてきた。辺りに見えるのは無機質な岩と、灰色の砂、黒くそびえる山々だけ。人影も、生物の姿も、草木一本すら、この辺りには無かった。まさに死の大地だ。空には欠けた月が、やけにはつきりと輝いている。乾いた大地に、彼の黒い影が長く伸びた。

吹き荒ぶ砂塵が、強くティアの身を打った。身に纏ったぼろ布を引き寄せる。長い睫毛の間から、砂が目に入り込んでくる。美しい黒髪は砂埃で汚れ、その表情には、疲労の色が色濃く見えた。

遠くで、狼の遠吠えが山々に響いた。

突如、ティアは足を絡ませ、地面に倒れた。うつ伏せになったまま、ぴくりとも動かない。

しばらくして、狼達が岩場の影から現われ、倒れたティアの元に集まってきた。その中の一匹が用心深げにティアに鼻を近づけ、匂いをかぐ。生死を確認しているのだろう。鼻をティアの胴にこすりつけ、ティアが動かない事を確認すると、肉を喰らおうと首元に鋭い牙を近づけた。

—その狼の体がびくりと震えた。

ティアの目蓋は開いていた。じつと、狼の瞳を見つめている。

その黒い瞳を覗き込んだ瞬間、狼は背を向けて走り出した。他の狼達も、慌てて逃げていく。やがて、ティアはゆっくり立ち上がり、また前を向いて、歩き出した。

寒かった。

疲れていた。

孤独だった。

空腹も感じていた。

それでも、ティアは足を前に進めた。棒のようになった足を引き摺りながら。何処に向かっているのか。

何のために歩いているのか。

ティア自身にもわからない。

ルーテネと呼ばれた少女のお腹の中からこの世に生を受けて、まだわずか数日。無意味な数日だった。無意味な生だった。

生まれ出る前の子宮の中の世界は、安楽な、幸せな世界だった。温かい羊水に満たされていれば、何の苦痛も、空腹も、孤独も無かった。

しかし、新たな世界に放り出されてみれば、そこは地獄だった。

昼間は肌を焼き焦がし、夜は凍りつくように冷たい空気。目を刺す鋭い太陽の光、一寸先も見えない、孤独を感じる闇。ティアを見つめる、数百の少女の瞳。彼女達は理解できない事を口々に喋る。その瞳に見つめられると、ティアは何故か苦しかった。

苦痛があった。

空腹があった。

虚しさがあった。

この世界には全ての苦しみがあった。

こんな世界なら、生まれてきたくなかった。

自分が生きていく意味がわからなかった。

歩いていたティアが、また倒れた。地面に額を打ちつけ、わずかに血が流れる。

苦痛だらけの世界なら、生きていきたくなんかなかった。

生まれ出る前の世界に戻りたかった。

こうやって倒れたまま、じっと死を待っていたかった。

全てを投げ出そうと、ティアは目を閉じた。真っ暗な、温かな彼一人だけの世界が、彼の目の前に広がった。光も闇も、彼以外が存在する苦痛だらけの世界よりも、この世界の方が何倍



もまじだった。

だが、しばらくすると、ティアは目を開けた。砂を掴んで立ち上がると、また意思を宿した瞳で前を向き、歩き出した。

声がするんだ。

頭の中で、心の奥で、空の上から、月の影から、もっと遥かに遠くて近い、どこかから。

時には優しく、時には酷く冷淡に、全身を揺るがす様に大きくて、耳を側立てるほど小さくて。

僕が知っているはずなのに、知っているはずの声が。

南に向かえと。

これが本能と言うものなのだろうか。それとも、少女達が言っていた僕の中にあるはずの『私』の記憶なんだろうか。

いや、違う。そんなものじゃない——とはわかる。でもそれが何なのか、ティアにもわからなかった。

何か、もっと大きなものなんだ。うまくは言えないけれど。

そして、南に行くほど感じる、この感覚。

冷たい孤独と苦痛を癒してくれる、この温かさ。

そう。この額から流れる血と同じ温もりなんだ。

「……僕と同じ人がいる」

ティアはそう呟いて、南に向かった。

「これからどうしましょうか……」

窓の外を眺めながらネヴィーナはそう呟いた。

ネヴィーナの目線の先、そこにはモードレットの大軍の陣がまだその陣容をたたずませていた。

「そうだな……」

窓とは反対側、廊下側の壁にもたれる様にエアリアルは立っていた。

沈黙が部屋を支配する。

短い沈黙を破り、三人目の人物、メレアガンズが発言した。

「何をするにしろ、モードレットとの戦力差は歴然だが……それをどうにかせねばなるま

いっ。」

もっともな案を提示する。

「だが、モードレットの戦力は魔族の七割は優に超えているぞ？それ以上の戦力を集めることは不可能に近いぞ？」

その部屋にいるもう一人、トゥオンが声を上げる。

「それはそうなのだが、どうにかするしかあるまい？我等はモート様の為にも負けられんのだ」

メレアガンスがそう反論する。

再び部屋に沈黙が訪れる。

聞こえるのは外から微かに聞こえる怪鳥の声。

「兵力差を五分に持っていくか……」

エアリアルがそう呟く。

「それね」

突然にネヴィーナが声を上げる。

「それ？」

三人の声が重なる。ネヴィーナの予想外の発言に驚きを隠せなかったようだ。

「ええ。何も兵力を同じ数まで持っていく必要はないわ」

ネヴィーナの意見を黙って聞く三人。

「兵力を同じにすればいい」

改心の笑みでネヴィーナはそう言う。

「だから、それが問題なんだろう？」

エアリアルはそう反論する。

「できないこともないわ。一人で百人の雑魚を凌駕する者を連れてくればいい。そうすればこちらの兵数は一でも兵力は百よ」

ここまでくれば、他の三人もネヴィーナの考えが理解できたようで、納得顔で頷いている。

「そうか、それならば兵力を同じくらいにまで持つていくことも可能かもしれん」

「俺のように隠居してるやつを引っ張ってくるってことだな」

「実際、モート様がおられなくなつてから副官、指揮官ともに姿を消したものは多くいる」  
部屋に活気が満ちてくる。

「後の問題は、そんな隠居している魔族たちを引き込む理由、大儀名文ね」

その言葉で再び部屋に沈黙が舞い戻つた。

「実はそれが一番問題なんじゃねえのか？」

エアリアルの言葉は静まった部屋にむなしく響くのがあった。

深い森林を駆け抜ける二つの影。

疾風のようにその姿を翻している。

それは二頭の早馬。

乗る影は四つ。

「あとどれくらいで魔界なんだ？」

一頭の馬の手綱を捌いているロアが後ろのアムリタに問いかける。

「そうね、後二日といったところかしら」

冷静にそう述べる。

「後二日も馬の上にはいないといけないのかよ」

愚痴るロア。

「ネッコの反応がある所まではそこからもう少しかかるのか？」

さらに隣の馬を捌いているアッドが後ろのメルフィナに問いかける。

「そうですね、反応があるのは、そこから一日半いったところですよ」

「うげえ、さらに一日半！？頼むぜネッコよ……」

メルフィナの発言に完全に項垂れてしまうロア。

「お茶のひとつでもおごっていただかないとね」

メルフィナも馬の上はうんざりしてきたのか呆れ顔で同意する。

「だが、そう簡単にはいかないだろ」

冷静にアッドは言う。

「そうね、魔界はあちらの領分。きつとそこらへんの魔族が襲ってくるんじゃないかしら？」

アムリタもそう言う。その顔にはいくばくかの不安がよぎっている。

「馬の上よりまだそっちのほうがいいぜ、何も考えなくていいからな」

アムリタとアッドの不安をよそに、ロアは気楽にそう呟くのだった。

コーディネリア、ロットが率いるブラックナイツは、ミルチア城がギリギリ目視できる林の中で待機していた。

「後はヴァネッサからの合図を待つだけだな……」

コーディネリアが誰に言うでもなく、ぼつりと呟いた。

「しかし、本当にうまくいくのでしょうか。私は不安でしかたありません」

「ロット殿……」

コーディネリアはロットの名を呼び、自らの顔をロットの顔の側へと近づける。

「私だって不安だ。皆だってそうだろう。だが、そのことを口にすれば、士気が下がるのには目に見えているんだ」

「そうですね……隊長である私が、口にする言葉ではありませんね」

「そうですね……」

静かにそう言い、コーディネリアは再び城の方へと視線を戻した。

「報告します。エメラルドナイトとルビーナイトがミルチア城へ向かって進行を開始しました」

ホワイトナイトの一員が、ヴァネッサへとそう告げる。

「そう。うまく引き付けてくれるといいけど……後は、ゼト將軍の方か。そっちはどうなってる?」

「ゼト將軍はすでにミルチア城内部に入られたかと」

「そっか」

ヴァネッサがそう言い終えた時、ミルチア城の方角から激しい金属音が聞こえだした。

「始まったみたいね。コーデリアの部隊に合図を! 私達もミルチア城へ突入する!」  
ヴァネッサの合図で、ホワイトナイトはミルチア城へと駆け出した。

「何やら騒がしいな。どうしたのだ?」

「城門前で戦闘が起こっているようですな。賊でしょうか……」

王の間にて、アルテオムと大臣が会話を交わしていると、ゼトが慌しく入り込んできた。

「申し訳ありません。エーデルリッターに橋を突破されました!」

「ふん、エーデルリッターか。エフラムがしくじったのか?」

「わかりません。ですが、いるのはエーデルリッターだけのようです。私の軍はほぼ壊滅。申し訳ありません……」



「まあそう気を落とすな、ゼト將軍。あの数ではエーデルリッターを止める事はできないだろう。それで、数はどれくらいいるのだ？」

「わかりませんが、城門前にいる数は全部ではないでしょう。おそらく、陽動作戦に出ているのではないかと思います」

「無駄な小細工を……まあ私が出る幕でもないな。いざという時は、あの手もあることだしな……」

「あの手とは……？」

「……ゼト將軍、お前はここに残り、私の護衛を勤めろ」

ゼトの問いには答えず、アルテオムはそう言い放った。

「わかりました」

「大臣、第三ブロック以外の装甲蟲をすべて起動させろ。陽動作戦など、力でねじ伏せてやる」

アルテオムがそう言うのと、大臣達は一礼し、急いで王の間を出て行った。

ヴァネッサから合図を受けたコーデリアたちは、ミルチア城の裏手にある小さな裏門を目指した。その門は、あまりにも目立たない場所があり、城門としてはとても小さいため、もともとミルチアに使える者でも知らぬ人間が多かった。

「しかし、何故このような小さな門を作ったのだ……？」

「もともとは、脱出用として作られたの。この場所だけは、アルテオムも知らないはずよ」  
ロットの疑問にコーデリアが答える。

裏門を突き破り、一気に城内へと流れ込むブラックナイツ。

「よし、カイルとフォルデ他数十名はここに残って退路の確保。残りは各個撃破で王の間を指せ。行くぞー!」

コーデリアの叫びと共に動き出す軍勢。当人はティティスを駆り、一気に王の間を指した。走りながら敵を切りつけ、踏みつけ、飛び越え、コーデリアはとにかく追う野間を目指した。

階段を駆け上がり、廊下を曲がると王の間が見えてくる。そこには、装甲蟲が二体、待機していた。

「邪魔だ!」

そう叫び、ティティスの背中から空中へと跳び上がるコーデリア。彼女の体は、そのまま二体の装甲蟲を超え、欧の間の扉の前へと着地する。

「ティティス、そいつらを頼んだぞ!」

コーデリアの言葉に、まるで返事をするかのように唸るティティス。コーデリアは、そのまま王の間へと入る。

「……コーデリア・レキカ」

「久しぶりだなアルテオム」

「やれやれ……数が足りないと思ったら、二段構えの陽動作戦だったとはな。まんまといっぱ

い食わされたわけだ。さすがはエーデルリッターを率いる事だけはあるな」

「下らん世辞はしてもらわなくて結構。覚悟してもらおうぞ！」

「フ……ゼト、そいつを殺せ」

アルテオムは、ゼトに視線を移して言う。だが、ゼトは黙ってコーデリアのもとへと歩き出す。

「やはりな。貴様もそちらに下ったか」

「アルテオム、貴様のやり方には我慢ならん。旧ミルチア兵は皆そう思っている」

「だからどうした？私を殺すのか？そんな事をしてみる……民衆はまた王を失い、パニックになる。ミルチアは死ぬぞ？」

「そうならないために、私がきたんだ」

「面白い事を言う」

アルテオムはそう言って、指をパチンと鳴らす。すると、王座の後ろから、二人の兵が現われる。

「……殺れ！」

アルテオムの合図と共に、二人の男は剣を抜き、コーデリアたちに向かってくる。それを見たゼトとコーデリアは腰から剣を抜き放った。

「コーデリア、こいつらは私に任せろ。お前はアルテオムの方を！」

「頼むぞゼト！」

そう言い放ち、コーデリアはアルテオムへと向かう。左手に鏡を持ち、距離を測る。

「つけあがるな小娘があ！」

叫びながら剣を手取るアルテオム。その剣でコーデリアを斬りつける。それを見たコーデリアは、その太刀を捌く。が、その際に左手から鏡を落としてしまった。アルテオムはそのまの勢いで、コーデリアを後ろへ弾き飛ばす。その時、コーデリアが落とした鏡の存在に気づいた。

（鏡……？待てよ。聞いた事があるな……。確か、ヘンギストとかいう十三使徒の発明品で、過去を映し出す魔鏡があると……なるほど、これを手に入れたから、こいつは戻ってきたのか）

アルテオムは、そう考えながら鏡の前で立ち止まる。

「フ……惜しかったなコーデリア」

アルテオムはそう言って、落ちた鏡に件を突きたてた。鈍い音を立てて、砕け散る魔鏡。

「あ……そんな……」

その鏡を目の前に、コーデリアは地面に膝をつく。

「ククク……やはりなあ。何の策もなしに飛び込んでくるような馬鹿ではないと思っていたよ。だが、切り札も使えなくなってしまうえば終わりだ。残念だったなあ」

「貴様あ！」

コーデリアは逆上し、アルテオムへと斬りつける。

「こうなった以上、貴様だけは生かしてはおけない！」

「フ……生かすだと？なめるな小娘が！」

コーデリアの太刀をかわし、反撃に出るアルテオム。アルテオムの繰り出す斬撃に、コーデリアは受け流すのがやっとであった。

「私はあのライオネルと対等の実力の持ち主だぞ！貴様みたいな女に、敵うところではないわ！」

高い金属音と共に、コーデリアの剣が弾き飛ばされる。

「……終わりだな」

ニヤリと笑うアルテオム。手にした剣を、コーデリアに向かって振りかざす。

（ここまでか……！）

死を覚悟し、コーデリアは目をつむる。だが、コーデリアが斬られる事はなかった。

「……？」

静かに目をあけるコーデリア。そこには、アルテオムの剣を受け止めるロットの姿があった。「ちいっ！」

アルテオムは小さく舌打ちをし、少し間合いを置く。

「誰かと思えば、英雄騎士様のおでましか。揃いも揃って、おめでたい奴らだ」

「コーデリアさん、鏡は？」

「すまないロット殿……作戦は失敗だ。鏡は……奴に割られてしまった」

「そんな……」

コーデリアの言葉に、落胆の色を見せるロット。

「フ……ではまず、その英雄騎士から死んでもらおうか！」

アルテオムが、ロットに向かって駆ける。慌ててその太刀を受け流すロット。

「ククク……貴様も私には勝てんよ！」

そう言いながら、攻撃を続けるアルテオム。

「英雄騎士など、所詮名前だけの存在なのだよ！」

「違うっ！」

「何も違わないさ！名ばかりの七光りに変わりはない！」

「私は……英雄騎士などではない！」

ロットは叫び、反撃にでる。

「私は英雄騎士などではなく、ブラックナイツの隊長であり……そして、ただ一人の男、ロット・スティルバンだ！」

攻勢にでるロット。アルテオムは必死に、その斬激をかわす。

「く……馬鹿な！私はライオネルと対等の力を持つ男だぞ！」

「私は……ライオネル殿に一度とて、負けると思っただことはない！」

ロットが斬激が、アルテオムの横腹を切り裂いた。

「ぐはっ……！」

手にした剣を地面に落とす、崩れ落ちるアルテオム。

「ば……馬鹿な！かはっ……な、何かの……間違いだ！」

吐血しながら、何度もそう呟くアルテオム。

「く……ははは！もういい……私が死ぬ時、ミルチアも死ぬのだ！」

そう言い、アルテオムはいつの間にか手にしていたスイッチを押す。

「フ……これが……私の……最後……」

素晴らしい残し、アルテオムは事切れた。

「……終わった」

ロットは、誰に言うでもなく、そう呟く。二人を切り捨てたゼトが、コーデリアの体を抱き起こした。

「アルテオムの最後の言葉が気になるな……」

「ああ、しかし、これからどうするか……これでは、ただ単にミルチアの王を殺したただけという事実が出来上がっただけだ」

「なんにしても、一度ミルチアを出た方がいい」

「そうだな……」

コーデリアがそう言い終えた刹那、どこからか爆発音が聞こえてきた。

ネッコは長い長い意識の暗闇の末に、ようやく目を覚ました。バラバラに散らばった意識を一つ一つ拾い集め紡いでいくように、ゆっくりとその重い瞼を開く。しかし、滲んだ視界に見慣れぬ場所が映った途端、彼はすっかり仰天し、バネ仕掛けの人形のように飛び起きた。透き通った意識が戻るにつれ、ずきずきと酷い頭痛が襲ってくる。額を押えながら苦痛に顔を歪めるネッコ。一方、背中の打撲痛はといえば、不思議なことにすっかり癒えていた。酷い怪我だったし、まさか自然に治癒するほど長い間眠っていたとも思えないので、誰かに回復魔法をかけてもらったと考えるのが妥当だろう。

(しかし……看病してもらうにはどうも向いてない場所だな……ここは)

ネッコが目を覚ましたのは鉄格子のはめられた狭く薄暗く汚い部屋だった。小さなランプの頼りない炎がゆらゆら揺れると、その動きに合わせて部屋は右へ左へと身を振る。そんな空ろで不安定な光景がネッコの孤独な心を一層不安にさせた。ここはどこだろう？ 僕はカーマの追手から逃げ惑い、やがて力尽きて魔界の森で倒れたはずなんだ。行き倒れの人間、を拾って看病してくれる程、魔界には親切で優しい連中も住んでいるのか？……いや、そんなわけが無



い。ここは野生と悪意と殺戮が渦巻くあの魔界だぞ！

ぎくり、とするネッコ。

(そうか！僕はきつと……結局カーマのやつに捕まっちまったんだ！)

ネッコは頭痛に耐えながらゆっくりと重い腰をあげると、部屋の中をゆっくりと見回した。使用用途の良く分からない材木の山や、古びたブリキの人形、口の欠けた壺、弦の飛んでしまった馬頭琴など、その他いろいろなガラクタが至る所に転がっていた。きつと普段は物置代りに使っているのだろう。当然の如くと言うか、肝心のネッコの荷物はどこにも無かったが。

ふと、ガラクタの中から古いアルバムらしきものを見つめる。ネッコは息を止め、荒々しく本の表紙を叩いて埃を払い、適当なページを開いてみると、古ぼけた一枚の鉛筆素描が視界に飛び込んできた。良く似た格好をした幼い男の子と女の子が、無垢な笑顔を浮かべて寄り添う心温まる光景だった。格好だけではなく顔つきも良く似ていて、まるで兄妹か双子のようである。左下に人物の名前が書いてあるが、インクが滲んで読み取り難かった。

「気が付いたか」

突然の呼びかけに慌てて振り返ってみると、格子戸の向こうに音もなく一人の男が立っていた。タキシードを着た、厳格そうな顔つきの初老の男性。白髪を後ろに流し、口の上に品のよい小さな髭を蓄えている。片手に持つトレイには、ネッコの食事らしいスープとパンと水、それにチキンがそれぞれ乗せられていた。

ネッコは格子を掴み、タキシードに問い掛けた。

「ここはどこだ？ どうして僕をこんなところに入れるんだ！」

「ここは然る魔界の御貴族がお住みになれる屋敷の地下室だ。お嬢様のご好意が無ければお前のような人間風情が立ち入り、本来なら息をするのも許されぬ場所」

「お嬢様？ 誰なんだそれは？」

「……お嬢様はお前に貸しがあるとだけ仰られた。しかし、それがネッコ・ヴァンシュタインとは……よりもよって同朋を殺した人間を匿うなど……」

タキシードはネッコの質問には答えたかどうかすら曖昧な、独白のような形でそう言った。

「……これでは名門ルービンシュタイン家の名折れ。私は先代に申し訳が立ちませぬ……お嬢様、どうして……？」

やはりネッコなど無視して言葉を続けるタキシード。白い手袋をはめた手を額にあてがい、苦悩の様をありありと呈する。どうやらその「お嬢様」とやらはともかく、タキシード自身はネッコに少しも好意を持っておらず、まともに口を利くのすら憚れる様子だった。しかし、あるいはその方がよっぽど自然な魔族と人間の関係のように思われる。魔族が人間を匿うなどと言う話は、今まで一度も聞いたことが無い。

タキシードはトレイを足元に置くとそれをつま先で動かして、鉄格子の向こうから手の届く位置にまで押しやった。

「とにかく今はここいら一帯にカーマの追手が蔓延って、血眼になってお前を探している。

我々がお前を生かすにしろ殺すにしろ、ほとぼりが冷めるまではその中で大人しくしていても

らおう。くれぐれも妙な考えは起こさぬことだ。いいな」

「あ、おい。まてよ！」

冷たい視線を残して、タキシードはゆっくりと踵を返した。ネッコは格子を掴んだまましばらく彼の背中を眺めていたが、やがて疎ましい頭痛に疲れて、ふらふらと部屋の真中辺りにまですわってくると、ごろんと身を横たえた。彼はクマネコ王子の無事だけを心配した。——どこかに捨てられたり、あの魔女カーマのような魔族に拾われたりしてなければいいのだけれど……さっきの執事に聞くんだったかな。

ネッコは空腹を思い出しのっそり起き上がると、鉄格子の向こうに置かれている彼の食事の手を伸ばした。

（ルービンシュタイン……貴族だったさ。響きがなんとなくヴァンシュタインに似ているな。お嬢様ってのはいったい誰なんだ？僕は人間界ですら貴族同士の交流には無関心なのに、魔界にそんな知り合いなんて居るはずが……ん？）

「ぶぶっ!？」

冷めきったスープを口に含んだ途端、彼は間髪入れずにそれを全部吐き出した。苦しそうにむせ返り、何度も何度も自分の胸を叩く。

「ぶあっ!なんだよこれ!ぶっ……こんな臭くて不味いスープ……は、初めてだ!」

口直しに飲んだ水は普通の水だったが、パン、それにチキンからもスープとはまた違う悪臭が香って、とても食べたものじゃなかった。

「くそっ！まだナターシアの方がもうちょつとマシな料理作るぞ……ったく、詰まらん嫌がらせしやがって！……これじゃあ匿っておきながら生かすつもりは無いって言ってるようなもんじゃないか？やはり、魔族ってのは嫌らしいことをしやがるもんだ。ぶつぶつ……」

ネッコは胃に穴があくような空腹を感じながらも、結局持ってこられた食事のどれにも手をつけることができなかった。彼は食事に始まって、部屋の衛生の悪さ、硬い床の事などにもぶつぶつと文句を言っていたが、神経が昂ぶっている割にはすぐに再び眠りについた。魔力の行使と毒花粉の影響によって、彼の体はまだずいぶんと疲弊していたのだ。

例のタキシード……執事のメンフィス・ブラウンが地下室から戻ると、己が主の部屋へと向かった。いくつものドアが並ぶ廊下を通り過ぎ大広間にやってくる。中央に備えられた横幅の長い大きな階段を静かにゆっくりと上っていく。屋敷の中はただっ広いだけで人影は無く物音一つ聞こえない。赤の他人が見ればとても寂しいところだと思ふことだろう。だが、この屋敷は昔からこうだったのだ。

代々ルービンシュタイン家はこの広い屋敷内に、必要最低限のメイド、執事以外は雇っておらず、あとは己が血族だけを囲ってひっそりと暮らしていた。上流貴族であるのに身分にあまり相応しないこじんまりとした暮らし振りだったが、それでも信頼の置ける人間だけに囲まれた暮らしは幸福で慎ましかだったという。

不運にも悪性の伝染病に冒された先代ルーヴィンシュタイン夫妻が死ぬと、彼らの血を分け

た双子の兄妹だけが残された。兄は浅黒い肌とカラスのような美しい黒髪をもつ、とても活発な悪戯好きな少年だったが、生真面目な妹との暮らしに退屈するとさっさと家を飛び出し、とある十三使徒のうちの一人に弟子入りした。一方、妹の方はたった一人屋敷に残って、ルーヴィンシユタイン家としての誇りを全うしつづけていた。その最もたるは、兄とはまた別のルーヴィンシユタイン家が代々仕えてきたある使徒への服従であるが、その使徒は彼らが生まれたときには既に行方不明となっていたのだ。まだ顔も知らぬ、どこかでのたれ死んでいるかもしれない主を待つなんてことが、兄にはとても愚かで馬鹿らしく思えたのだ。

主の部屋へ向かう途中でメンフィスは、物陰から話し声を聞きつけるとぼったりと足を止めた。ただのメイド同士の立ち話だろうが、彼にはある一つの心配ごとがあったのだ。その心配事をメイド達が嗅ぎつけていないかどうか、自分の自尊心を傷つける立ち聞きのような卑屈な真似をしてでも、彼には確かめる必要性があった。

「お嬢様はまだお加減が好くないそうよ。今日も寝室で臥せってらっしゃるみたい」

「もう一週間近くになるかしら……相当重いよね。食事にも全く手をつけて無いのでしょう？」

「メンフィス様が仰るにはなにやら感染性の病気にかかってしまつて、私達のことを慮つてお部屋から出てこないのだとか……」

「まあ、お気の毒に……まさか先代のように」

ここでメイド達は深い戸惑いに襲われて、一旦言葉を途切れさせた。

やがて、どちらかがため息をついて、またぼそぼそと言葉を続ける。

「お嬢様も心配だけど、もう一つ心配なのは……」

「地下牢の男の方？」

「ええ。警備兵が森の散策中に行き倒れているのを見つけて、わざわざ連れて帰ってきたんですって」

「連れて帰るのは結構だけど……でも、あれはどう見ても……」

「人間！」

「そう、人間なのよ！それも、なんでも重罪人だとか……」

「まあ恐ろしい。どうしてお嬢様はそんな人間を匿うのかしら……？」

「さあ……あら？」

「まあ、メンフィス様」

さつきまで物陰に隠れていたメンフィスは、何食わぬ顔で彼女達の前に出てくる。二人のメイドは深々と礼をした。

「アールグレイ、ニルギリ。夕食が終わったら地下牢の青年に残飯を持って行って欲しいのだが、頼めるかね？」

「ええ、はい。それはもちろんですが、その……」

赤毛にそばかすを蓄えたアールグレイというメイドがおずおずと尋ねる。

「なんだ？」

「その……地下牢の人間は重罪人なのですよね？そのような輩を、どうしてわざわざこの屋敷に匿うのですか？それほどの罪人なのでしたら城にまで届け出ねば……」

「そうですよメンフィス様。仕舞い目にはアリス様まで罪に問われてしまわれます」

「一体どうしてお嬢様はそこまでして……」

「お前達が知るところではない」

メンフィスは不愉快そうな顔もせず、きっぱりとそう言った。——ただ、彼も主人に従っているだけで、本心は二人のメイドと同じ意見なのだ。

「……はい、過ぎた干渉でした。申し訳ございません」

アールグレイとニルギリは彼と出会ったときのようにまた深々と頭を下げ、メンフィスは黙って彼女達の前を通り過ぎた。

（一先ず、屋敷の者は、例の事<sup>ニル</sup>には気づいていないようだ。しかし、いろいろと納得のいかないことを我慢させて……相当強い不満を抱えていることだろう。すまん、アールグレイ、ニルギリ。お前達がお嬢様を思う気持ちは良く分かるが、ここは一つ目を瞑っていて欲しい。しかし、ネツコ・ヴァンシユタイン。どうしたものか……）

コンコン、と二たび上品なノックが打ち鳴らされた。ルービンシユタイン家の若き当主の寝室に通じる真つ黒のドアである。

「誰？」

「お嬢様。メンフィスでございます」

「入って」

失礼します、と呟きながらメンフィスはドアをくぐった。そして丁寧にドアを閉める。

彼の主人はフリルのついた黒いドレスに身を包み、ベッドに腰掛けて、ただぼんやりと窓の外に広がる景色を眺めていた。そして直ぐ傍のテーブルには小一時間ほど前に置かれた彼女の食事が、そっくりそのまま残されていた。メンフィスは深いため息をつく。

「お嬢様、お食事を断たれてはや一週間……ますます顔色が悪うなっております。いい加減にお食べにならないと、体の方が参ってしまいます」

「体？心の方ならとつくに参ってるわ」

「それはお察し致しますが……」

「察するですって？あなたに何が、お察しできる、もんですか！」

少女は痲癩を起こし、メンフィスの方を向いて早口に怒鳴ったかと思うと、すぐまた窓の方を向いた。赤い唇を尖らせて、今にも泣き出しそうなのを堪えている。

少女は胸に手を当てて、肺の奥の奥から引きずり出したような長いため息をつく、やがて熱っぽく自分の心情を吐露し始めた。

「どんよりと曇ったにび色の空、鬱蒼とした林、黒い屋根の家々、魔獣の忍ぶ気配と鳴き声……ああ、私はいったいどうしてしまったの？こんなに陰鬱で美しいはずの魔界の光景が、今の私の心にはおぞましく、汚らしいものにしか映らない！いいえ、そればかりか……私の心は



あの忌々しい太陽の輝きを望んでいるのよ！太陽の暖かい輝きが大海原の波に踊る姿、赤や青や黄色の花々が大きな絨毯の様に広がる庭園……花は絶対に色彩豊かなものがいいの！どう？魔界にそんなものがあって？チューリップやひまわりなんてものが、この闇の世界に存在を許されて？そんなものを好む魔族がこの魔界に一人でもいて？トロロク族だってもうちよつとマシな趣味をしているわ！」

少女のセンチメンタルな言葉にメンフィスは思わず顔を歪めた。彼女の言葉には魔族にとつて堪えがたい、魔族らしからぬ人間的な美意識が散りばめられていたからだ。

「ふふ。メンフィス、あなただつて本当は可笑しいんでしょう？仮にも十三使徒の使い魔であるこの私が」

「アリス様」

「ああ！」

アリスは短い悲鳴をあげるとベッドから跳ね起きてメンフィスの顔をにらみつけた。

「アリス！私は本当に魔貴族アリス・ルービンシュタインかしら？大魔王は十三使徒アルアルパッツの忠実なる僕、ブラッディ・アリスかしら！？私があなたの主人だと、あなたは本心からそれを信じられて？本当に？私には少しも信じられないわ！こんな赤みの帯びた肌つや、両頬、目の奥に宿る人間的な輝き……あなたはこんな私を見て、嫌悪を催さずにいられるの？ああ、この人が自分の主人だと、微塵の疑いも持たずにいられるの？」

「疑ってはおりませぬ。私の主人はアリス様、そしてリリパット様ただお二人のみ」

メンフィスは心荒げるアリスの目を見る。哀れんだり蔑んだりするような目つきとは決して違う。

アリスは言葉を止めようとはしない。

「……堪えがたいのは、この部屋よ！心安らぐ真っ黒の壁が、あれほど耽美で美しかった悪魔的装飾、逆十字、ドクロ、血の色の薔薇、光量を抑えた薄暗いランプ……いえ、薔薇はまだマシだわ！あれは人間的にも美しいものらしいの。でも、でもね、幼いころにお父様に頂いたあの可愛らしい蝙蝠のぬいぐるみなんか……今の私にはちっとも良い物に思えないのよ！それどころか、いまやとてもとてもおぞましく、堪えがたいものなの！」

「お嬢様、どうかお気をお静めください。現在、ルービンシュタイン家に縁のある知識者たちが総出でカーマの呪いを解くための方法を探しておりますので、今しばらくの間ご辛抱を……」

「それまでに飢えるか気が狂うかして死んでしまうわよ！こんなものが食事と呼べるかしら！？」

アリスはヒステリックに怒鳴ってテーブルの上のパンを引つつかむと、小さくちぎって口の中に放り込んだ。しばらくは目を瞑って苦悶の表情を浮かべながらも租借を続けていたが、こみ上げてくる吐き気に耐え切れず、ゴミ箱に全部吐き出し、続けて口の中に残る不快感を吐き捨てるように何度も唾を吐いた。そしてコップに入っていた水を飲み干すと、急に自分が哀れに思えて膝を抱えて蹲った。

「大好きだった紫小麦のパンも……コカトリスのソテーも……臭くって食べられやしない。これなら泥団子でも食べてる方がマシだわ」

「……もうすぐ人間界の食材が届くと思われますので、どうかご辛抱を」

アリスの顔色が変わる。喜びと不安の相成る表情。

「人間界の食料？……そんなものをここに持ってきて私が人間になってしまっていることがメイド達にバレやしないかしら？」

「幸い、お嬢様が匿いなすったネッコ・ヴァンシュタインがおりますので、そやつの食料ということにすれば」

「そう……そうね。ネッコ・ヴァンシュタインがいるものね」

「しかし……問題はむしろそちらの方です。いくらアリス様の恩人とは言え、どうして人間などを匿うのかとメイド達は疑っております」

「ええ……それは彼女達の言う通りだけど……つまり……」

「つまり？」

「……つまり、人間として暮らすのに、人間が近くに居ないのはとても辛いわ」

アリスは目を伏せて、物憂げな表情を床に落とした。

「せめて、私が魔族に戻るまでの間だけでも、ネッコ・ヴァンシュタインをこの屋敷に置いて頂戴」

「アリス様……」

主のこのような、人間的な、弱弱しい言葉と姿を目の当たりにして、さすがのメンフィスも僅かばかりの嫌悪感を覚えずにはいられなかったが、すぐに首を横に振って自分を戒めた。そんな戒めの延長線上にあるのは、あくまで主に忠実であろうとする何よりも硬い忠誠心。彼の家系は三代に渡ってルービンシュタイン家に仕えているのだ。生半可な血縁よりも、よほど硬い。

「ネツコ・ヴァンシュタインの件については善処致します。ですが、くれぐれもこの部屋からお出でになって、奴に会いに行こうなどと思われませんように。あなた様の今の御姿をメイドや来客に見られてもすれば……それこそルービンシュタイン家はお仕舞いでございますよ」

「ええ……メンフィス。分かっているわ。私はここから出ない。だから、一つだけ頼みがあるの。どうか聞いて頂戴」

「……は。何なりとお申し付けください」

アリスはメンフィスの傍に小走りで駆け寄ると、耳元で何かをぼそぼそと呟いた。メンフィスは驚き、しばらく不満げに何かを小声で訴えていたが、やがてアリスの哀れな表情を見ているうちに、彼の顔は諦めの色に変わった。彼が一度だけ深くうなずくのを見ると、アリスはメンフィスの片手を強く握った。しかし、二人は違和感を感じて直ぐに手を離してしまった。アリスにとってメンフィスの冷たい手は妙な不快感をかきたてたし、メンフィスにとってアリスの暖かい手はやはり嫌悪の対象となったからだ。二人はそのことに気づくと、なんともやるせない気持ちになった。

(アリスお嬢様が魔族に戻らなかったとき、私はどうするべきなのだ？私の主人はルービンシュタイン家なのだろうか？それとも……やはり、アリス様なのだろうか？)

メンフィスは妙な温もりの残る自分の手を眺めながら、そう考えた。

ネッコは部屋にごろんと横になって、食べることの出来ない食事をぼんやりと眺めていた。退屈紛れにぶつぶつと呪文の暗唱をしていると、誰かが階段を降りてくる足音が地下室に響いた。最初のうちは軽快だったが、こちらに近づくにつれゆっくりと不安そうな足取りになって、とうとう壁際まできて立ち止まったらしい。ネッコは胡座をかいて来客を待ち受けた。

こちら、と壁際からヘッドドレスを乗せた顔だけが覗く。暗くてはつきりとは分からないが、どうやら屋敷のメイドらしい。メイドはじつとネッコの顔を見ると、相手が大人しく座っているのでいくらか安心したのか、恐る恐る壁際から出てきた。

メイドは食事に全く手がつけられていないのを見ると、訝しげな顔をした。

「おい、そのメイド。できればキッチンとした食べ物を出してくれないか？」  
ネッコが言った。メイドの表情は変わらない。

「分かるだろ？毒の入ってないやつだよ！今すぐ出してくれ」

「……何を言ってるの？……毒なんて盛ってないわ」

「嘘をつけ！」

ネッコが怒鳴るとメイドはびっくりしてまた壁際に隠れた。彼は構わず罵りつづける。

「だったら、これを料理した奴の顔を見てみたいもんだ！毒が入ってなくなつて、この不味さは毒以上に体に障る！二歳児だつてもっとマシなもの作るよ！」

またひよっこりと顔だけ覗かせるメイド。

「ま……まあ、失礼な人！囚人の食事にコカトリスの肉をやつてゐるだけで、大變な贅沢なんですから！」

「こ、こ、コカトリ……！」

呆氣にとられるネツコ。

「魔族はそんなものを食べるのか？」

「人間は食べないの？」

「人間でコカトリスなんて喰うようなやつは気がどうかしてるよ！もちろん、僕だって普通のニワトリの方がいい。次からは……いや、出来るだけ早くもっとマシなものを持つて来てくれないか。僕はもう二、三日もロクに何も食わずにいたから腹ペコなんだよ」

「……図々しいわ。人間の癖に」

急に高邁で冷めた顔つきをするメイドを、ネツコはからかってやりたい気持ちになった。

「ふん。人間の癖に、だつて？口の利き方には気をつけてもらおうか。こんな鉄格子ぐらゐで僕を閉じ込めたつもりだろうけれど、出ようと思えばいつでも出られるんだぞ？」

「嘘よ」

「本当さ。ただ、ここから出て行く当てが無いし、カーマの手下どもに見つかつてルービン

シユタインのご令嬢なりに迷惑かけるのもつまらないしね。のたれ死ぬところを救ってもらったし、一応、僕なりの恩義は感じてるのさ」

ネッコは虚勢を張るためにあること無いこと適当に言ってみたが、結果的にそれはメイドの警戒心を解く役割をした。メイドは彼の嘘を嘘だと見抜いたのではなく、嘘をまるまる信じたからこそ、相手に敵意が無いのだと思ったのだろう。またネッコも実際のところ不満こそ山ほどあれ敵意などは別に無かった。あるいはメイドにナターシアの面影を感じて、警戒心をすっかり忘れていたのかもしれない。

メイドはおおずおおずと壁際から出てくると、エプロンのポケットから一枚の封筒を取り出し、ネッコにそれを差し出した。

「これ、お嬢様から」

「……手紙？ふん、自分で来ればいいのに」

「いまお嬢様はご病気なのよ」

「病気？風邪か？魔族も病気するんだな」

「あたりまえじゃない」

ネッコは封筒を受け取るとしばらくそれをじっと見つめて、やや雑に封を切った。中から数枚の便箋を取り出し、流れるような線の細い文体を目で追った。

ネッコ・ヴァンシユタイン殿。

私の名はアリス・ルービンシュタイン。またの名をブラッディ・アリスと言って、使徒アルパツの使い魔をやっています。——最も、いまとなってはその面影もありませんが。

ところで、あなたと私は以前に一度お会いしています。もしも心当たりが無ければ、サンダルークで暴漢に襲われたところをあなたに助けて頂いたにも関わらず、あなたを騙してカーマの元へと連れて行った町娘、とでも言えば嫌でも思い出しましょう。そう、あなたの最も憎むべき相手の一人です。その節はどんなお詫びの言葉を言ってもきつと償い切れません。

そもそも私が人間の姿をしていたのは兄のリリパットを救うためで、あなたを油断させるためのカーマの術策の一環でした。つまり私は最初からあなたを騙すつもりだったので、それを聞くとあなたは「だったらどうして今更俺に同情して、カーマから俺を匿ったりするのだ」と不思議がるかもしれません。ところがそれにも混み入った事情があつて、カーマが私に教えた解術の言葉は大嘘で、私は魔族に戻れず、非力な人間の少女として、本、当、に、暴、漢、に、襲、わ、れ、て、い、た、の、で、す。そこを助けて下さったのがネッコ殿、あなた様なのですから、私は本当に今でも心から感謝しております。しかし……あのとき私は、あなた様をカーマの奴めに引き渡す他に仕様がありませんでした。ええ、そうです。憎んでくださって結構です。あらゆる非難にも耐えましょう。しかし、こうなってしまう以上、今はどうか私に償いの機会をお与え下さい。カーマからあなた様を匿うのは決して同情からではなく、感謝と尊敬の感情からきているのだと信じてくださいませ。



そして、あなた様へのお詫びと同時にもう一つ。ここからがこの手紙のもう一つの本題なのですが……

今でも私は人間から魔族へと戻ることが出来ないのです！

……大好きだったもののほとんど全てが嫌悪の対象に変わり、執事のメンフィスやメイドたちがとても恐ろしい人たちのように思えて、誰も信頼できず……人間で居るといいうのはこれほど不安で堪らないものなのでしょう。おまけに魔族の食事はまったく口にあわず、もはや五日も水以外に何も喉を通しておりません。たったの五日ですよ？胃は痛むし、眩暈はするし、一日中気分は悪く……ああ、空腹に身体がバラバラにされてしまいそう！魔族で居た頃は一月はなにも食べなくても平気でしたもの。人間になって改めて彼らの脆弱性に気が付き、どうしてこのような者達が魔族と拮抗しうる力を持っているのか、重ね重ね不思議に感じたものです。――いまは同じ人間として、このぐらいの失言はどうかお許しくださいませ。

私はこれから一体どうなるのでしょうか？あなたは自業自得だと言って私を嘲笑うかもしれません。私も恐ろしく身勝手な態度だとは重々承知しております。ですが、私は私のとるべき道をたどって、仕方無しにこうなってしまったのです。兄を助けるためには命も惜しくありませんでした。こんなに酷い生を強いられるのは死よりもずっと辛いものです。分かっているのです！あなた様にこんなことを訊ねても仕方の無いことなのですが……私は一体、これからどうすればいいのでしょうか？同じ苦しみを分かち合う友人として、どうかあなた様の助言を頂きとう御座います。

「ネッコは手紙をざっと読み上げると、くしゃくしゃに丸めて、ガラクタの山にぽいっと捨てた。主人の手紙を不遜に扱われ、メイドは不愉快そうな顔をした。

「ちよっと、そんな態度ってないでしょう？何が書かれてあったの？」

「人間人間ってバカにしゃがって！まるで人間が悲惨な生き物みたいじゃないか！」  
ネッコは苦々しく毒づく、頭に両手を乗せてごろんと床に寝転がった。

「酷い生が嫌なら、勝手におっ死にやいんだよ！構うもんか」

「まあ物騒。ねえ、何が書かれていたのよ？」

「魔族ってのは他人の手紙の内容にいちいち干渉してくるほど礼儀知らずなのか？」

ネッコにそう言われて、メイドははっと息を呑むと、悔しそうに踵を返し、地下牢を離れた。曲がり角で姿を消す際、振り返ってネッコに意地悪そうに舌を出したが、彼はメイドの方を向いてもいなかった。

（ふんっ！感傷的で、自己中心的で、何なんだこいつは？いかにも女のやることだよ！）

しかしただ一つ気になるのは、自分の命を危険に晒して兄を助けたという事実。妹に助けられる兄、それは彼にとってあまりに慣れ親しんだシチュエーションだった。ネッコは赤面した。アリス・ルービンシュタイン。アムリタの影がちらつくのはどうしてだろう？

ああ、アムリタよ！お前は一体どこでどうしているのだ？賢いお前には予想のついでにいるこ

とだろうけれど、僕は相変わらず酷い目にあつてゐるぞ。少しも慣れさせてくれない人生さ、全く！

怒りがだんだん妙な色に濁り始めたので、ネツコは考えるのをやめた。考えるのをやめると途端に空腹が彼の胃袋を苛み始めるので、さっさと眠りについた。

彼はその日、ワニに追われながらパンケーキを食べるヘンテコな夢を見た。詳しく思い出せないのが残念である。

——暗黒の大森林、地下洞窟。

男は実に、数ヶ月ぶりに目を覚ました。頬を心地よい光のビロードで撫でられた気がしたからだ。しかし目を覚ますと広がるのは、いつもと同じ暗闇の岩の天井。寒さ、苦痛、そして、孤独。滴り落ちる地下水の音が、規則正しく時を刻んでいる。男は音を聞きたびにこう思う。

——「俺はまだ死んでいないのか」と。

十三使徒の一人アルアルパッツはモードレッドとの戦いに大怪我を負つたため、命からがらこの名も無き洞窟へ逃げ込むと、かれこれ百年以上に渡つて自分の魔力を使い、生ける者達のエネルギーを飽食し続けていた。食人樹海という罫でネツコ、ロア、アッド、メルフィナの四人を襲つたこともあったが、彼らの必死の抵抗にあつて失敗に終わった。あれからちょうど数日後、彼は自分の魔力がそろそろ底を尽き始めていることに気がつく。今までは魔力によつて

飽食したエネルギーを、ほんの少しだけ肉体の治療に当てて、また魔力に変換し、なんとか次の飽食のための種を得ていたわけだが、このところ失敗や割に合わない飽食が続き、彼の魔力は一方的に浪費されるばかりだったのだ。かと言って大物だけを狙っては、この先何千年と岩の中に閉じ込められる羽目になる。それにそもそも、栄養が無くては傷ついた肉体が崩壊してしまう。取るに足らぬ獲物だとしても、身体を屍にしたくなければ常に何かを食さなければならぬ。——そんな自分に差し迫るいろいろな現実を考えていると、彼は自分の命が1%も助からないものなのだど悟った。やはり、外部からの救いの手が必要だったのだ。

しかし、死んでいないのなら……とアルアルパッツは思った。

死んでいないのなら俺は生きる。生き続ける！いや、あるいは生かされているだけなのかもしれない。誰に？モードレッドにだ！俺の中から湧き上がる煮え滾った怒りの溶岩は、未だ死すらも飲み込んでいる！精神力！そうだ、死んでたまるかと言う精神力だけが、俺をこうして現世に縛りつけているのだ。ええい、地上はどうなっている？我が部下達は？使徒どもは？魔王は？怨敵モードレッドは？

……見えぬ、だが分かるぞ、この感覚！この暗く狭く寒い穴倉の中でも、これだけは分かる！いま地上は荒れ狂う大海のように波打っている！弱いものたちは必死に逃げつづけ、強大な力がそやつらのハラワタを貪り喰らっている！どうしようもない三流コックどもに、生と死が滅茶苦茶に料理されている！新たな時代を創造するための土壌に、血油を撒いて肥やし続けている！ああ、その残飯の一欠けらでもいい！そいつを喰らった魔の神々の糞便だって構わな

い！どうかこの俺に力を分け与えてくれ！もう一度、もう一度だけでいい。この俺を十三使徒アルアルパッツとして再生してくれ！

……アルアルパッツは自らの狂気にも似た、生への飢えの叫びに気を紛らわされ、ずっと気づかないでいたが、ふとした瞬間に自分の頬を撫でたピロードの光の事を思い出した。いや、頬を撫でるばかりではない。それは崩壊しかけたぼろぼろの肉体に優しく纏わり尽き、芳醇な生のエネルギーをひたしていく。懐かしい感触が身体を駆け巡る。

（これは……なんだこの感じは？）

アルアルパッツは精神を集中させ、意識的にピロードの光を手繰り寄せると……なんと、彼の魔力は見る見るうちに満たされ始めたのだった。それだけではない。悠久の時に半ば死屍と化した肉体にさえ力を与え、苦痛を取り去り、生命としての活力と再生の兆しを与えているではないか！

懐かしい感触……それは生命力という名の原始的作用が、彼の心の臓を高らかに打ち鳴らす全身の震えの感触であった！

（し、しめた……しめたしめた、しめたぞ！残飯が零れ落ちてくる！悪神どもが悪戯心に任せ、この俺に糞を垂れている！どういいうわけかは分からぬが……血で肥えた土壌の栄養分が、この俺に染み込んできているのだ！）

奇跡……わずか数分後、筋肉と骨が軋みを上げながら、地面から腐敗した背中を引き剥がし、頭痛と眩暈を振り切り、百年間余りも横たわっていた彼の肉体がしっかりと地面を踏みつけ、

ふらつきながらもついに立ち上がることの出来た事実……それを奇跡という言葉の他、一体どのように解釈できようか？

咆哮とともに拳を突き上げる。放たれる魔力の波動が天井を裂く。その瞬間、滝のように流れ落ちる太陽の光の洗礼！薄暗い魔界の大森林の木漏れ日でさえ、彼には生まれて幾百年のうちで最強の閃光に思えた。

跳躍し、地上に立つ。ふらつく足を踏ん張り、バランスを取る。毒毒しく懐かしい森の香りが鼻をつく。なにも変わっていない世界。殺伐とした恐怖が吹雪く氷の世界。物影の淵という淵に沈み込んだ絶望が、鈍い光を湛える世界！俺は地上に帰ってきたのだ！

ふと、アルアルパッツはすぐ傍の木の根元に転がる奇妙な造形のぬいぐるみを見つけた。クマのような形をしているが、ネコのようにも見える。

(モディファイド・ベア……か？)

アルアルパッツは古の仇敵・賢者サンダルクの幻影を見る。

彼は全てを理解した。このぬいぐるみから沸き立つ底なしの魔力を吸い込んだため、彼の命は、肉体は、細胞は奇跡的に息を吹き返したのだ。神の糞便は、この可愛らしい一匹のぬいぐるみだったのだ。

「これぞ天啓！」

アルアルパッツはぬいぐるみを掴むと、ぬいぐるみに残った魔力を凄まじい勢いで吸い込み始める。カラカラに乾いた砂漠のような肉の隅々に注ぎ込まれる、強烈かつ新鮮な生命力。魔

力と言う名のエナジー！それはアムリタやマリア、そしてヴァンシユタイン家に纏わるさまざまな事件とそこに流れるさまざまな感情が生んだ、意志と魔力の結晶、魂と力のダイヤモンドだった。その圧倒的な輝きは少しも余すところ無く十三使徒の巨大な器に飲み込まれていく。――そして、宝珠は闇の中でも美しく輝く。

彼は長く長く息を吸い、生まれたばかりの空気で肺を満たしたまま、まるでオブジェと化したかのように動かなくなった。近くを徘徊していた言葉も解さぬ畜生同然の弱小モンスターたちが、この悪鬼の強烈なオーラを感じ取ると、恐怖のあまり騒ぐことも忘れ、身動き一つ取れなくなってしまうていた。緑の枝葉は呼吸を止め、超規格外の生物をじっと見守る。音は止み、色は失われ、温度は暖かくも寒くも無くなった。時間は死んだ。光は死んだ。ありとあらゆる感覚が、五感を離れてどこか遠い世界のものに感じられる。

緊張を目いっぱい吸い込んで肺胞の隅々に蓄えると、彼はそれを熱いため息とともに全部吐き出した。死んでいた空気が活力を取り戻す。畜生は大声で騒ぎ立て、狂ったように逃げ出す。茂る木々は自らの足が根であることを恨むかのように、枝葉をざわめつかせる。

アルアルパッツははちきれんばかりの力を解放せんと、魔界中に轟くような叫び声を上げた。

踊れ、我が飢餓、草食え、飢餓よ、  
音の牧場だ。

昼顔の

陽気な毒でも舐めろ。

砕いてもらって小石を食べろ

御堂の古い石材も

古いでみずの玉石も、  
洪水

灰色の谷間に転がるパンまで食べろ！



エレインはライオネルとナナを連れて、キャメロン城の一室、ティグレインとの会見をおこなう部屋に向かった。部屋の前に着くと、軽く深呼吸して、部屋の扉を開ける。部屋の中にはティグレインがすでにただ一人、静かに窓辺を見つめて座っていた。エレインが部屋に入り際、部屋を見回す。部屋は広すぎず、狭すぎず、装飾も控えめの落ち着いた部屋である。

エレインはほっとした。相手に無用な虚勢を見せたくない。まだ女王でもないエレインが過度の威勢を見せれば、相手の反感を買うだろう。まだ敵か味方かもわからないティグレインの反感はなるべく買いたくない。その意味では部屋の選択はよかった。部屋を選んだのはナナ。さすがに頭の回るナナだと、エレインは思った。

エレインが入ってきたのを見て、ティグレインは立ち上がった。ゆっくりと丁寧に、エレインに向かってお辞儀する。

「お久しぶりです、レディ・エレイン。旅に出られていたと聞いて、心配しておりました。ご無事で何よりです」

エレインもお辞儀する。

「ようこそおいでくださいました、レディ・ティグレイン。あなたにイーリアスの御加護のあらん事を。どうぞ、お掛けください」

エレインの言葉に、ティグレインは軽く、優雅に頷いて元の椅子に座った。エレインも続いて、ティグレインと向かいの椅子に腰掛ける。ライオネルとナナもエレインの側の椅子に座った。

エレインがティグレインの表情を観察する。まだ若いのに、落ち着いて気品のある顔。緩やかにウエーヴの掛かった艶のある黒い髪。こうして直接会うのは二年ぶりぐらいだ。

トリストラル家はレオデグランス国の中でも有数の名家で、その血脈の源流は勇者アトロの最も忠実だった騎士、ユーウィン・トリストラルである。ティグレインはそんなトリストラル家の若き当主。歳はエレインとほとんど変わらない。たしかティグレインの方がエレインより3つほど上だったはず。しかし、一部の民衆からおてんば姫とあだ名されるエレインとは対照的に、ティグレインは二十代に入ったばかりの娘とは思えぬほど、大人びて落ち着いた雰囲気のある女性だった。

そのティグレインがこの時期に、そうこのレオデグランス全体が緊張状態にあり、一矢即発のこの時期に、わざわざ単独、ただ一人でエレインに会いに来た。何のために、とエレインは思った。ティグレイン自身、十二大貴族のうちサレン家、ヤース家、モスヴァニ家の三家から女王候補に推されている身だというのに……。

「突然お邪魔して、驚かせてしまったでしょうか？」

ティグレインが静かに、少し微笑んで言った。

「あなたならいつでも大歓迎です。どうぞ、お気遣いなく」

もちろん、内心ではティグレインのこの行動に驚きもし、怪しんでもいたが、エレインは当たり前障りなくそう言った。

「ありがとうございます。今日、お伺いしたのは他でもありません。現在深刻な問題になっているこの国の王位継承問題について、わたくしから一言はつきりと言っておかねばならない事があるからです」

やはりその事か。エレインは息を呑んだ。しかし、努めて表情は変えない。あくまで冷静に、黙って領いた。

「聞きましょう」

「……現在、わたくしは幾つかの貴族から次期女王として支持を受けております。しかし、わたくしにはそのつもりはありません。わたくし、ティグレイン・トリストラルはアヴァロン家のエレイン・アヴァロンを次期女王として推薦し、これを支持します」

その言葉を聞いた時、エレインは啞然として口を馬鹿みたいに半開きにしていた。しばらくエレインにはティグレインの言っている事が理解できなかった。が、思考が正常に働いてくると、半分の歓喜ともう半分の疑念が頭の中を駆け回った。エレインの横に座っているナナも、さすがに驚いた顔をしている。もっとも、ライオネルだけは眉一つ動かさず、冷静そのものだった。

信じられない。エレインは思った。にわかには信じられる事ではなかった。ティグレインは現在、グリファル家のリスランと並んで次期女王の最有力候補なのだ。その彼女が王位継承権を辞退して、エレインの支持に回ると言っているのだ。こんなにうまい話があるわけがない。しかし、今この時点でこんな事を言って、ティグレインに何か特があるだろうか。もし、これが本当なら……。

「……大丈夫ですか？エレイン様」

ライオネルの言葉に、はっと我に帰るエレイン。

「……ええ、大丈夫です。レディ・ティグレイン、一つ聞かせていただきたいのですが」

「なんででしょう？」

「なぜ、王位継承権を辞退するのです？あなたは最もこの国の女王にふさわしい人です。私よりも、もちろんあのリスランよりも」

エレインが言った。お世辞ではなく、本心だった。こうして前に座ってみるとよくわかる。ティグレインは、知性、教養、寛容、自愛、威厳、王としての資質の全てで自分よりも優っている。私の十倍、リスランの馬鹿の百倍は、女王として相応しい。もし、私があるんらかの理由で王位継承権を諦めるとしたら、その時は間違いなく十二大貴族の中で私はティグレインを女王として支持するだろう。

ティグレインは微笑した。

「『我がトリストラル家は名誉や栄光など求めるな。ただ忠節と正義を重んじよ。ただ主を守

る静かなる鋼たれ』それが始祖ユーウインの言葉です。そして、その信念が我らの誇りです」

『ただ主を守る静かなる鋼たれ』か……エレインも昔、本で何度も読んだ言葉だ。

『鋼の騎士』ユーウイン。勇者アトロの最も忠実な部下で、鋼の意思を持った男。その物語はレオデグランスの国書である『創国記』にも多数書かれている。

その中でも最も有名な話。かつてアトロがモートに反抗の狼煙を上げ、大陸中で魔王軍と戦いを繰り広げていた時代。まだこの頃の魔王軍の勢力は凄まじく、一時は怒濤の勢いで魔界半ばの地まで攻め入った人間を中心とした種族を超えた連合軍も、魔王軍に徐々に押し返され、ついに魔界に残る連合軍の居城はユーウイン率いる三百の兵が立て籠もる小城だけになった。

ここが連合軍にとって、魔界に残った最後の攻勢の楔。ここが失われれば、甚大なる犠牲を出して攻め上がった連合軍の魔界侵攻作戦はゼロからのスタートに戻ってしまう。

小城を取り囲むはトゥオン率いる二万の精銳。立て籠もるユーウイン勢は僅か三百。アトロ連連合軍主力軍勢は大陸各地で魔王軍に阻まれ、ユーウインに援軍を送れずにいた。

誰が見ても絶望的な状況だった。だがユーウインは籠城を決意。トゥオン勢は一斉に攻撃を開始した。猛将トゥオンによる怒濤の猛攻。しかし、三日経っても城は落ちなかった。三百の兵はユーウインの手足となり、トゥオンの攻撃を防ぎきった。力攻めは無駄と悟ったトゥオンは、城の包囲攻めを開始。城を包囲され、水や食料の輸送を経たれたユーウイン勢は、城の中の蓄えもやがて底を付き、飢餓に陥った。兵糧が無くては戦えない。これで敵の士気は下がり、やがては降伏してくるだろうとトゥオンは思った。だがユーウイン勢はいつまで経っても抵抗

を止めなかった。

この時、ユーウィンが疲労と空腹に絶望し、徐々に不平の声を増してくる城内の兵士達を見て、部下達に言った言葉が『ただ主を守る静かなる鋼たれ』である。ユーウィンは言った「今おまえ達が身に着けているその剣や盾が、戦いの最中に不平を言った事があるか。痛いだとか空腹だとか、そんな事を一度でも口にした事があるか。ないだろう。そういうもの達のおかげで我々は守られているのである。そして武具に口は無いが、優れたるモノは名刀名具として幾世にも名を残していく。騎士の道も同じだ」。そう言うときユーウィンは自らの剣で自分の舌を切り落としてしまった。それを聞いた兵士達の士気は大いに高まり、幾度となく敵から送られてくる勧告書の中も見ずに破り捨て、草の根を食べ、雨水をすすり、石垣に噛り付いてでも城を死守した。

ついにユーウィン勢はまる一月の間、小城を守り抜き、ようやく到着した援軍によって城を取り囲んでいたトウオン勢は撃退された。そしてこの後も、この小城が連合軍にとって重要な前線拠点になったのである。

そしてユーウィンの最後も凄まじいものだった。魔王軍との最後にして最大の戦い、『魔王城の戦い』にて十三使徒の一人であるメレアガンズと壮絶な一騎打ちを演じ、敵に深手を負わせながらも、ついにはメレアガンズに討たれた。だが、メレアガンズに切り落とされたその首は、地面に落ちながらも独りで動き、眼を開け、魔王城に攻め上るアト口達の方角を見守っていたといわれている。

まあ、首が独りでに動いたという逸話は後世の作り話だとしても、これらの話は『鋼の騎士』と言われたユーウィンをよく表している。

さて、話がそれた、元に戻そう。

「我らトリストラル家は王を守る鋼の剣。わたしは祖国の混乱に乗じて、王位を篡奪しようなどという野望はありません。王は王たるに相応しい者がなるべきです。いや、ならねばなりません」

ティグレインが言った。

「……でも、それがなぜ私なんです。他の者の王位を支持するなら、リスランもベルドもいるはず」

エレインの言葉。

「言ったはずです、王には王たるべき資格が要ります。優柔不断なベルドになど、その資格はありません。ましてリスランなど……あなたもわかつているでしょう」

確かに、リスランが王位に就いたなど、考えただけでも最悪だ。あの女にはティグレインの十分の一、いや百分の一も、王たる者に必要な慈愛も寛容も無い。あるのは政敵を陥れる蛇の様な狡賢さだけだ。

「……そして、レディ・エレイン、わたしはあなたこそが、誰よりもこの国の女王としてふさわしいと思っています。それは何もあなたが前国王の娘だからではありません。今、この国の女王に必要な資質を、誰よりも持っているからです」

「資質？」

エレインは聞き返した。自分の何がティグレインより勝っているというのか、エレインにはわからなかった。このティグレインの前では、自分がいやに子供に思える。短気な自分に、女王の慈愛の精神があるとも思えない。ティグレインほどの知性も教養も無い。昔はいたずらばかりやって、お父様に叱られてばかり。一部の臣下や民からは「じゃじゃ馬」と陰口される始末。

「それは勇氣です。今は戦乱の時代。王たる者は下々の前に進み出て、誰よりその勇氣を示し、人々を導いて、新たな時代を切り開いていかなければなりません。かつて勇者アトロがそうしたように」

「わたしにその『勇氣』があるでしょうか？」

エレインが自信なさ気に言った。

「あります。前王が魔王討伐のために勇者募集の大会を開いたおり、あなたは王女という立場でありながら、ライオネル様ただ一人を連れ、魔王討伐に出ました。世間もろく知らない、わずか十七歳の小娘がです。その行動を、人は愚かな行動と言うかもしれませんが、身の程を知らない、愚行だと。しかし、わたくしはそうは思いません。わたくしにあなたのような勇氣はありません。そして、あなたはその旅で、十三使徒の一人であるポールスを倒したと聞きます」

「あれは私の力じゃありません……仲間達がいたから……」

「あの勇者アトロとて、一人の力で魔王を倒したわけではありません。多くの仲間達が彼を支



え助け合って、共に苦難を乗り越え、ついには悪を討ち滅ぼしたのです。あなたも同じです。あなたの勇気が、仲間達に力を与えたのです」

ティグレインの言葉に、エレインはうな垂れた。

私に本当にそんな力があるのか。あの偉大な勇者アトロと同じ力が。いや、あるはずがない。私とアトロでは違いすぎる。ポールスと向き合った時、私は足が震えてまともに動くこともできなかつたのだ。勇気なんてとんでもない。アトロが魔族と向き合った時、足が震えたなんて伝説は聞いた事が無い。馬鹿馬鹿しい……。

「今が決断の時なのです。あなたやわたしだけでなく、人類全体が。世界を取り巻く情勢は、もはや一国の猶予もありません。レオデグラルス国内で争っている場合ではないのです。誰かが人々を導いて、きたるべき試練の時に立ち向かわなければなりません。かつて勇者アトロがそうしたように。そしてそれができるのは、あなたしかいないとわたしは思っています」

ティグレインはそこまで言うのと、一瞬くらい顔をして、言葉を詰まらせた。

「わたしには嫌な予感がするのです。なぜだかわかりませんが、このまま黙って待っていれば、人類の未来は深い闇に落ちていくような気がするのです。かつての魔王の暗黒時代など比べ物にならないような暗い闇……」

ティグレインが言った。

無理だ。エレインは思った。わたしにそんなものを止める力は無い。わたしは英雄でもないし、まして勇者でもない。ただ貴族の小娘なのだ。

エレインは自信の無い暗い瞳で横に座っているライオネルを見た。ティグレインの話を聞いているのかいなのか、ライオネルはさつきから巖のように押し黙って、静かに目を閉じている。数々の戦場を潜り抜けてきた彼の身体からは、黙っていても張り詰めた凄みが感じられる。――英雄というのはライオネルのような人の事をいうのだ。彼がレオデグランスの国王になればいい。

エレインがそう思った時、ライオネルが瞳を閉じたまま、小さく何か言った。

「」

その言葉を聞いた時、エレインははっとした。

そうだ、何を迷っていたのだ。迷う事なんて無かったはず。私とアトロとは違う。わたしはわたしの出来る事をやるだけだ。私にはこの国の民の未来を平和へと導く責務がある。そして、それは私にしかできない。ライオネルでも、ティグレインでも、他の誰でも駄目なんだ。なぜなら……。

私が誰よりもそれを一番強く願っているから。私自身がそう信じているから。

私じやなきや、駄目なんだ。

エレインは力強い目で、ティグレインを見た。

「わかりました。わたしが必ず女王となりこの国を統一し、そしてこの大陸に平和をもたらして見せます。そのために力を貸してくれますか、レディ・ティグレイン」

「ええ、もちろんです。よく、決断してくださいました。わたくしもできうるかぎり、お力に

なります」

にっこりと微笑み、手を差し出すティグレイン。エレインはその手を強く握り返した。

なんとという幸運だろう。この危機的な状況の中で最大のライバルの一人となるはずのティグレインが、エレインの支持を表明し、最大の味方になってくれたのだ。ティグレインのトリストラル家と言えば、武勇で名高い家柄。これほど強力な仲間是他にいない。

「レディ・エレインの御決意を聞いて、一つ、わたしくしから御提案したい事があります」  
ティグレインが言った。

「なんででしょう？」

「わたくしを次期王位継承者として支持してくれていたサレン家、ヤース家、モスヴァニ家の三家ですが、わたくしが説得すればすぐにでもレディ・エレイン支持に回っていただけると考えています」

「それは素晴らしい提案ですわ」

エレインの横にいるナナが声を上げた。

エレインも内心で小躍りした。これで完全にリスランとの立場は逆転だ。ティグレインがその三家の説得を成功させてくれれば、エレインは十二大貴族の半数の支持を集めた事になる。うまくいけば内乱を起こさずに済みそうだ。

「ぜひ、おねがいします」

エレインは満面の笑顔でそう言った。

エレインとティグレインの会見が終わった後、ライオネルは一人、中庭で剣の鍛錬を積んでいた。真剣は風を切り、ライオネルはまるで踊っているかのように素早く足と身体を移動させていく。

十五分も素早い剣舞を続け、ようやく静かに息を吐いて、ライオネルの動きは止まった。上着を脱いで裸となった上半身からは汗が光っている。歳は四十を越し、髪には白いものが見え始めたライオネルだが、その肉体には一部の無駄も無い。まさに彫刻のような鍛え抜かれた身体であった。

「お見事です、ライオネル様」

木陰からその様子を黙って見ていたティグレインが姿を現して、言った。いつからそこにいたのか。もっともライオネルは遥か以前から気付いていたが。

「……何か？」

ライオネルはそっけなくそう言うと、傍らの木に掛けてあった上着を取って羽織った。庭に植えられた、白い椿の花だ。涼しい風が吹いた。

「随分、お久しぶりですね。もう長い間会っていないような気がします。あなたがレディ・エレインと旅に出られたと聞いた時、わたくしはどんなに心配したか……ご無事で何よりです」

「……死神がまだわたしを迎えに来なかった。それだけの事」

そう言うライオネルの目は、ぞっとするほど冷たい。生きている人間の目じゃない。生を放棄した人間の目だ。

「……やめてください。そんな目をしたあなたを見ると、悲しみでわたしの心臓は張り裂けそうになります。あなたは」

ティグレインが声を落として言った。

「わたしの生涯は決まっている。生あるかぎり魔族と戦い、そしていつか魔族に殺される事だ」

ライオネルのその言葉に、ティグレインは胸が詰まった。

ライオネルの生い立ちはティグレインも聞いている。かつてサンダルクと魔界との間にシャイルという小国があった。ライオネルはその国の王族として生まれた。しかし、彼がまだ物心付く前に、シャイルは魔族の侵攻を受け、彼の祖国は滅びる事となる。彼は僅かな軍勢に守られ、シャイルを脱出し、同盟国であったレオデグランスに亡命する。そして彼はシャイル最後の王族となった。

「あなたは最高の戦士です。あなたの強さは伝説の戦士ラーデウイにも勝り、あなたの鉄の意志は『鋼の騎士』ユーウィンにも負けません。あなたが今一度シャイルの日輪の幟を揚げれば、死を恐れぬ数万のシャイル人が祖国を取り戻すために、あなたの元に集まるでしょう。大戦士『ダイ・シャン』の称号を与えられし人よ。栄光の戦士よ。あなたなら幾らでも栄光を求められるはず。なぜ、そんなに死を急ぐのです」

「……人はいつか死ぬ。ならばわたしは戦って死にたい。我が父が、我が祖国の民がそうしたようにな。死だけが、わたしの心の安らぎだ」

ティグレインにもライオネルの心の内は痛いほどわかる。彼の心の中は復讐だけだ。それも燃え滾るような熱い復讐心ではない。氷のような、影のような、冷たい、勝利の届かぬ、絶望した復讐。

「……」

ティグレインがうな垂れ、押し黙っていると、ライオネルは黙って踵を返し、歩き出した。強い風が、吹き付けた。白い椿の花びらが、風に散り、舞い上がる。

ライオネルの上着を、後ろからティグレインがぎゅっと捕まえる。

「愛しい人よ……わたくしの心はわかっていらっしやるはず。なぜ、あなたはいつも行ってしまふのです」

ティグレインがうな垂れたまま、涙を浮かべて言った。

ライオネルが振り返る。その表情は相変わらず鉄のように厳しかったが、その瞳だけは柔らかな光を放っていた。

「あなたの心は嬉しいが、わたしはあなたの愛に答える資格が無い。わたしはこの剣以外何も持たぬ男。そしてわたしの未来にあるのは死だけだ。婚礼の翌日に、喪服を着たい女性がいるはずがない。あなたはライオンより気高く、野に咲く白い百合のようにしとやかで、輝く朝日のように美しい人だ。きっと、わたしよりふさわしい男がいるはず」

ライオネルはそう言うのと、立ち尽くすティグレインを後に残し、歩き出した。

「わたしは生まれてから一度も人を妬んだ事がありません。でも今はレディ・エレインが羨ましい。ライオネル様と共にいることができます」

ティグレインが立ち去っていくライオネルの背中に向かって言った。

ライオネルは答えず、立ち去っていった。

エレインとティグレインの会見から数日後。ティグレインは約束を守り、サレン家、ヤース家、モスヴァニ家の三人の当主を連れて、再びキャメロンを訪れた。三家の当主達はティグレインの説得によって、エレイン支持を誓い、エレインとそれら三家の会見は無事に終わった。

しかし、良い出来事ばかりではなかった。エレインが十二大貴族達に向けて呼びかけた、十二大貴族会議の総取。なんとか内乱を起こすまいとするエレインの提言であったが、リスラン派の貴族達はこれを拒否。両陣営の貴族達の溝はますます深まる事となる。

戦いは避けられない。戦争が始まる。そんな噂が町中に流れた。噂を聞き、レオデグランスの各都市では田舎に疎開する人々も現れた。裕福な商人達は戦争に備えて食料を買占め、都市の物価は高騰し、市民の不平は徐々に高まっていく。

レオデグランスの全ての民が、戦争という名の暗い影に怯えていた。今までは戦争など、魔界との境界地域だけの、自分達には遠い土地の、関係のない話だった。それが今もうそこにあ

るのだ。

リスラン・グリファルは自宅の巨大な宮殿、豪華な造りの自室にいた。前にはオクト大臣が座っている。リスランの足並みは早い。彼女の気が強く、せっかちな性格が表われている。

「準備は順調だ。兵は募っているし、傭兵どもも雇い入れている。いつでも戦いは始められるぞ」

オクトが言った。

「そうですか。あなたのご協力感謝いたします、オクト・バルリット」

リスランが言う。

「うむ。ベルド・リヴァもおぬしの支持に回ったそうじゃの。これで、わしをいれておぬしの支持を表明した十二大貴族は五家、これで次期女王はおぬしに決まったようなものじゃ」

「そうですね。わたしが女王になれば、あなたを決して粗略には扱いません。しかるべき地位をお与える事を約束します」

「おお、ありがたい。わしはあのエレインの馬鹿王女から不当な辱めを受けた。あの糞アマがギロチンにかけられて、無様に死んでいくさまを見たいのじゃ。よろしくお頼み申すぞ、レディ・リスラン」

悔しそうにそう言うと、オクトはリスランの部屋を出て行った。



美しい赤毛を指で弄びながら、オクトの退出を座ってみていたリスラン。くだらない男だ。想像力も実行力も無い。あるのは身不相応な野望だけだ。それで身を滅ぼす事になった。いいがまだ。まあ、利用できる物はしておこう。オクト自身は無能でも、彼の後ろにある名門バクリット家は役に立つ。所詮、使い捨てだが。わたしが女王になれば、さっさと捨ててしまえばいい。

しかし、予想外だったのは、最大の敵になるだろうと予想していたティグレインがあっさりエレイン支持を表明し、ティグレインを支持していた三家までもエレイン支持に回ったことだ。これでエレイン・アヴァロンを支持する十二大貴族は合わせて五家。リスラン派と同数だ。レオデグランスの次期女王候補は、リスランとエレインの二人に絞られた事になる。

まあ、予想外ではあったが、嬉しい誤算だと、リスランは思った。リスランが考えるところ、最もやっかいな敵だったのはティグレインだ。彼女は智勇兼備、次期女王候補としてまさに一点の非も無い。領民にも慕われ、下級貴族の中にも彼女の支持者は多い。

しかし、そのティグレインが裏方に下がり、エレインが台頭してきた。

(……ふん。エレイン・アヴァロンか……)

リスランはワインを飲みながら、苛立たしげな瞳で部屋に掛かっている鏡を見た。そこには赤毛の若く美しい女性、リスラン自身が映っている。

正直、エレインなどまったく問題にしていなかった。今も問題にしていない。あの馬鹿女に何ができる。一流の貴族としての知性も礼儀も教養も無い。民からも『おてんば娘』と陰口さ

れ、アヴァロン家の中でもその奇行ぶりから持て余されている女。あんな女に貴族を束ねていく事が出来るとは思えない。

本当に馬鹿な女だ。下手に支持者など集めなければ、こちらでも戦争など起こさずに済んだのに。十二大貴族はエレイン派とリスラン派の間でまっぴたつに分かれてしまった。これでもう話し合いの余地は無い。後は実力行使だけだ。内乱が始まる……。

部屋の扉がノックされ、一人のメイドが銀の盆を持ち、豪勢な食事を運んできた。

「そこに置いておきなさい」

リスランの言葉に、メイドは怯えたように頭を下げ、慌てて退出する。

リスランは椅子から立ち上がり、銀の盆を取った。リスランのための食事ではない。リスランは銀の盆を持ったまま、部屋を出て、しばらく巨大な宮中の長い廊下を歩くと、一つの部屋の前で立ち止まった。そこは屋敷の一番端にある小さな部屋。屋敷の中でも離れた。そして今は、この部屋には誰も近寄らない。リスランが屋敷の者達にそう命じたからだ。だから、忌々しい事だが、リスラン自身がこの部屋に食事を運ばなければならぬ。間違っても、メイドなどに、あの女の顔を見せるわけにはいかないのだ。

扉の前で小さく深呼吸する。リスランも、あの女に会うのだけは緊張する。いや、緊張ではない。恐怖を感じるのだ。

リスランが扉をノックする。部屋の中から声が聞こえた。扉を開け、中に入る。

昼間だと言うのに、カーテンを閉め切った部屋の中は薄暗く、その部屋の中央に椅子に腰掛

けた一人の奇妙な女性がいた。奇妙といったわけは、その女性が顔を仮面で覆い隠していたからだ。陶器製の白い仮面。美しい装飾が施されたその仮面の奥から、闇の中で不気味に光る目がリスランを見ている。

「お食事をお持ちしました、セリーン様」

リスランが掠れる声でそう言つて、セリーンの前の机の上に銀の盆を置く。セリーンはゆっくりと陶器の仮面を外す。リスランは声を上げそうになるのを、必死に我慢した。何度見ても、この顔にだけは慣れない。仮面の下にあったのは、肩頰の肉が削げ落ち、齒と頰骨が見える、かつては美しい女性であつたはずの無惨な顔。

セリーンは銀のスプーンを取ると、食事を口に始めた。リスランは黙つて、身を硬くして立っている。

セリーン、つい先日までレオデグランズ国内ではミリアム・エルドリッチと呼ばれていた女性。オクトと共謀し、アヴァロン王を暗殺を命じた人物だ。始め、この女がコンタクトを取ってきた時、リスランは躊躇した。セリーンはもはや大陸中に指名手配されている身だ。前王暗殺の黒幕者など味方に引き入れて、もしそれをエレイン派に気付かれれば、リスランにとって致命的なダメージとなる。だが、結局はセリーンの言うとおりにするしかなかった。

その理由の一つは、セリーンの持っていた莫大な資金が魅力だったと言う事だ。これだけの資金があれば、多数の貴族の支持を集め、エレイン派に打ち勝つ事など容易い。そして、もう一つは、セリーンの正体を知つたからだ。セリーンは魔族だ。それもかなり高位の。その時から、

リスランはこの女に逆らうことなど、恐ろしくて考えもしなくなつた。

「……で、どうかしら状況は？」

セリーンが突然、言った。

「はい。軍備を整えさせております。エレイン派も軍備を整えつつあるようですが、セリーン様から頂いた資金で、傭兵も十分に雇う事ができましたので、兵力では完全にこちらが有利です」

「そう。よくやっているわね、リスラン」

セリーンがそう言った時、リスランは突如、何か巨大な力で床に叩き付けられた。そのまま、まったく動く事が出来ない。セリーンの魔法だ。床に押し付けられた胸が、潰れるように痛かった。

「……本当に、人間なんて蛆虫にしてはよくやっているわ。わたしの顔をこんなにした人間どもなんて、皆殺しにしてあげようと思つてたけど……このまま存分に働いて、わたしに忠誠を誓つていれば、あなたを人間界の王にしてあげる。そしてもちろん、不老不死も与えてあげるわ」

「……ありがとうございます……」

床に押し付けられたまま、苦しそうに声を出すリスラン。そんなリスランの様子を、セリーンは面白そうに見ている。押し掛かる力はどうんどん大きくなる。身体の骨全部が粉々になるかと思うほどの圧力。苦しみと痛みで、呻き声を上げるリスラン。目尻からは涙が出た。

セリーンが微笑むと、リスランを押しえ付けていた魔法の力が、ようやく解けた。

リスランは涙を流しながら、うずくまった。

「リスラン……可愛い子。だから、わたしを裏切ろうなんて思わないでね」

セリーンがリスランの髪を優しく撫でながら、その瞳を見て、微笑んで言う。

裏切ろうなんて、思ってもいない。初めの頃は、思っていたかもしれない。だが、セリーンという女の恐ろしさを知って、そんな気は消え去った。裏切ったらどうなるか、考えただけでも身の毛もよだつ。私の言い付けを破って、好奇心から、この部屋を覗いた新人の若いメイドがいる。そのメイドがどうなったか……口にするのも恐ろしい。私でも、いや、どんな人間でも、あんな残酷な事は思いつかない。

リスランは涙を流したまま立ち上がると、セリーンに向かって深くお辞儀し、部屋を出た。涙を拭う。赤く腫れた瞳が、天井を睨む。

私は悪魔に魂を売ったのだ。もう後戻りはできない。光に背を向け、創造主に唾を吐いてでも、レオデグラランスの女王になってやる。

リスランが部屋を出て行った後、セリーンは巨大な部屋の隅、暗闇の中を見つめた。

「いつから、そこにいたの？」

「つい、先ほどから」

闇が動いた。暗闇の中から、灰色の髪をした男が現れた。のっぺりした、歳のわからない顔。

人に見えるが、人間ではない。その証拠に肌の色は白、本当に何の混じりけもない純白。額には小さな角が四つ生えている。そして、異様に光る、真紅の目。深緑のローブを羽織っているため、白い顔だけが闇に浮かんで見える。

「見慣れない顔ね。名前は？」

「ラモラック」

その名を聞いた時、セリーンの表情が僅かに動いた。『赤眼のラモラック』、伝説に名を残すほどの古く、強力な魔族だ。モートと契約を結び、魔族と呼ばれるようになる遥か以前から人間ではない彼は数百年の時を生きてきた。恐らく、年齢だけなら魔族の中でも一、二を争うだろう。だが、彼は三百年前の先の大戦で戦死したと聞いていたのだが。こんな高名な魔族が、数百年の間も隠れ生きていたとは。

「それで、私に何のよう？」

「モードレッド殿から、あなたを手伝うようにと。それと……」

ラモラックの赤い目が一段と強く光った。

「モードレッド殿が『時の禁呪』を成功させた」

今度こそ、セリーンは驚きを隠せなかった。表情が歪む。

『時の禁呪』、それはかつてモートが行なった古の禁術。人を時の理から解き放つ技。人から魔族への転生の秘術。契約を結ぶ事で永遠の命と、強大な力を得る。数百年の間恐れられ続けた魔王と十三使徒、それらを生み出した術だ。

だが、有史以来、この術を成功させる事が出来たのはモートだけ。彼の無尽蔵の魔力があればこそ、術は執り行えたのだ。モードレッドには不可能なはず。

「多くの使徒は死に、または分裂し、今や十三使徒は崩壊した。モードレッド殿は十三使徒を見限り、それに代わる新たな階位を作られた。名は四魔候。わたしもその一人。そのおかげで、わたしは力を取り戻した」

ラモラックは唇をほとんど動かさず、淡々と述べた。闇が蠢く。ラモラックの異様な力を、セリーンも感じた。不気味で禍々しい、力を。

セリーンは小さく呻く。ラモラックはかつて十三使徒に匹敵するほどの力を持っていた、その男がさらに力を得たとすると……そして、そんな者達があと三人もいるのだ。百万の兵に最強の四人。人間界の諸勢力は勿論、トゥオンや他の十三使徒もとても太刀打ちできまい。これで次の魔王は、いや世界の霸王は決まった。

「モードレッド殿は、あなたに一刻も早くレオデグランスを手に入れろと。ここが人間界の中心。この国さえ落とせば、あとは烏合の衆だ」

「……それで、わたしの手伝いをしてくれるって？逆じゃあないの？」

「あなたはモードレッド殿の副将。新たな副王と成られる人だ。わたしが命令を受ける立場にある」

セリーンは小さく溜息を付いた。セリーンは上位の魔族の中では力の強い方ではない。むしろ、かなり非力なほうだ。武ではなく知でこの地位まで上り詰めた。魔界では異例な事である。

そして、常に自分より強い者を顎で使ってきた。だが、この男は不気味すぎる。

「……あなたの力を借りるまでもないでしょう。あの小娘、リスランの手勢の者だけで十分事は足りるわ。それに人間の国の内乱に魔族が出ていくと後々厄介ですしね」

「そうか」

ラモラックは無造作に頷いた。静かに後ろに下がり、また闇の中に身を隠す。姿は闇に紛れ、声だけが聞こえてくる。

「わたしは少し遊んでくる。まだ、取り戻した力にうまく慣れていないのだ。わたしの力が必要な時は、いつでも言ってくれ……」

セリーンが目を凝らすと、闇の中からラモラックの姿は消えていた。

(雨か……)

エレインは報告書の置かれた机を前に座り、窓から外を眺めて思った。昼だというのに薄暗い空から、鈍い雨が降っている。重い灰色の日だった。今のエレインの心と同じだ。

臣下からの報告書には明るい報告など無かった。物価の高騰を抑えるために、エレインは城に貯蔵されてある食料を安い値段で市場に流す事を命じたが、所詮一時しのぎに過ぎない。問題は山積みだった。道を遮る高い壁のように、エレインの心を塞いでいく。

ずっと身勝手に放棄してきた国王の娘という立場。それに初めて真面目に向き合い、国政を



担う立場になった今、エレインはその重圧に押し潰されそうだった。

そんなエレインを支えてくれているのが、ライオネルをはじめとする家臣達だ。ナナとティグレインはエレインの側において、内外問わず諸問題で適切な助言をしてくれる。ナナはエレインの命によって諜報部を外れ、エレインの相談役になったし、ナナの抜けた王宮諜報部はエステルが統括している。侍従長のザザはキャメロン城内を取り仕切りつけているし、ティグレインも自家の領内は他の一族の者に任せ、キャメロン城に留まってくれていた。

軍務はヴァース・ヴィットロとライオネルに一任していた。ライオネルはエレイン警護の間をぬって、キャメロン城に赴任している、エレインにとっては直属のアヴァロン家の貴族達の軍を統率していたし、ヴァースはその他のエレイン派の貴族達の軍をキャメロン郊外に集結させ、来るべき時に備えて軍事演習を行っていた。

エレインが積み上げられた報告書にサインを書き込んでいる時、部屋の扉がノックされた。扉が開いて、侍女の姿が見える。

「エレイン様、お客様が……」

そう言う侍女を押し退けて、リユネットが顔を見せる。

「やあ、元気かしら？」

断りも無しに、部屋にずかずかと入ってくる。相変わらず常識外れな奴だ。

「ちょっと、困ります……」

侍女が困った顔でリユネットを止めようとしたが、エレインが手を振った。

「……いいのよ、その人は。ご苦勞でした、下がって」

エレインの言葉に、侍女は深々と頭を下げて、部屋を出ていく。リユネットはお構い無しに、部屋にあった椅子に腰掛けた。エレインが溜息をついて、リユネットの顔を見る。

「……驚きました。あなたもこちらに帰ってきていたんですね」

エレインの言葉。

「ええ、まあね。教会の命令で仕方なくだけど」

リユネットが言う。

「で、今日は何の御用です？教会から何か私に言伝でも？」

「別に無いわ。今日は非番だから、遊びに来ただけよ」

「へえ……あなたがわたしのところにですか……」

エレインが呆れて言う。絶対嘘だ。表情でわかる。相変わらず嘘の下手な奴だ。だいたい、聖都ラヴィーンとキャメロンがどれだけ離れていると思っているんだ。気軽に遊びに来たなんて言える距離じゃない。

リユネットはきよるきよるとせわしなく部屋を見回している。まるで何か会話の発端を探しているように。あきらかに挙動が怪しい。

一体何しに来たんだ？

「結構忙しいそうね」

リユネットがエレインの机の上に積まれてある書類の束を見て、言った。

「ええ、見ての通りです。残念ですけど、あなたと遊んでいる暇は無いです」

「そう硬いこと言わないでよ。お互い命を共にしてきた仲間でしょ。で、どうなの？ちゃんと王位に就けそう？今あなた、結構微妙な立場なんでしょ？まさか、あのクソ馬鹿リスランになんか負けないわよね？」

リュネットが言う。

（なるほど……この事か……）

エレインは内心で納得した。教会が状況を探っているのだ。私とリスラン、どちらがこの国の王位に就くか。そして新しい女王として、教会と友好的な関係を作っていける人物かどうか。それらの事を調べるために、私のところには私と顔見知りのリュネットを派遣してきたわけだ。リュネットは食い入るようにエレインを見つめて、回答を待っている。

……まあ、完全に人選ミスだとは思うが。

「もちろん、わたしが女王になるわ。リスランなんか女王になれば、この国は終わりよ」

エレインが強い口調で言った。

「そう。そうよね。その意気だわ」

リュネットは嬉しそうに強く頷く。リュネットはエレインも嫌いだったが、リスランはそれ以上に嫌いだった。エレインとは犬猿の仲といった、いわいるケンカ友達だったが、リスランの方は会うだけで虫睡が走る。どこが嫌いかわれれば困るが、とにかく吐き気を催すほど嫌いなのだ。

「で、話は早いんだけど、あなたが女王になる戴冠式は、聖都でやるわよね？」

リユネットが当然のように言う。まあ当然なのだが。レオデグランスの王位に就く者は代々、必ずラヴィーンで戴冠式を行なってきた。法皇自らの手で、レオデグランスの王に王冠を授けるのだ。それが慣例だった。この三百年、例外は無い。

だが、エレインはあっさりと首を振った。

「いいえ、戴冠式はこのキャメロンで行ないます。教会とは関係なくね」

「あなた正気？」

リユネットが驚いて立ち上がった。そのまま早口で捲し立てる。

「慣習を破るつもり？絶対教会がいい顔しないわ。リスランは熱心なイーリアス教徒って言うじゃない。こんなつまらない事で、教会上層部がリスランを支持するようになったらどうするのよ？あなたに勝ち目は無くなるわ！」

「教会は中立のほうでしょう。国政には立ち入らないというのが、教会の立場のほうです」

「あなた馬鹿？そんなの建前に決まっているじゃない！私知ってるのよ。リスランが教会のお偉い方を買収しているって。そりゃ、表立ってどちらかの支持や非難はできないでしょうよ。でも、イーリアス教は民衆の間に根付いてる。お偉方の神父が説法の合間にリスランを讃える言葉でも吐けば、それだけで民意は大きくリスランの方に傾くのよ！」

「……そうですか。教会もまた、そこまで腐敗してきているのですね」

エレインが冷静に言う。リユネットは言葉が詰まった。

「……も、もちろん、そんなのは一部の奴等だけよ。ほとんどの僧は、絶対に賄賂なんか受け取らないわ！ 私達は神に全てをささげた身。金のために神に背を向け、聖職者面している罪深きゲス野郎どもは、神の裁きを受けるでしょうよ。糞ッ、地獄に落ちろ！」

リユネットが喚く。

「わかつてますよ。でも、組織とはそういうものです。大きくなればなるほど、膿も溜まる」  
「……とにかく、その事は置いておくにしても、教会を敵に回さないほうがいいわ。教会の力はあなたが思っている以上に強大なのよ。今からでも遅くない。教会の洗礼を受けて、イーリアス信者になったほうがいい」

「教会を敵に回すつもりはありません。しかし、教会に擦り寄ってゴマをするつもりもありません。わたしは国政と宗教は明確に線引きをして、お互いに干渉し合わないようにするべきだと思っっています。わたしはいかなる宗教の信者にもなりません。これがわたしの信念です」

エレインがきっぱりと言った。これでは、エレインが女王になればイーリアス教をレオデグランスの国教という地位から外し、その特権を剥奪するといっているのと同じだ。しかし、リユネットにはエレインに返す言葉も浮かばなかった。うな垂れるリユネット。

「……あなたの意思はわかったわ。教会にはそう言っておきます。一応、わたしがフォローしておくけど、あまり期待しないでね」

リユネットが疲れたように頭を抑えて言った。

「ええ、お願いしますね」

エレインがにこりと微笑んで言う。うまくいった。これで教会の中に私の支持者が一人増えた事になる。まあ、それがリユネットでは逆に不評を買い集めてしまうという可能性も無いわけではないが……。

万が一、教会が敵に回ってもいい。その時はその時だ。私は自分の信じた道を行くだけ。行く手を阻む物は、誰であろうと排除する。それがイーリアス教であろうと神であろうと、容赦はしない。

エレインはびっくりを身体を震わした。

……私は一体何を考えている。

邪魔する物は如何なる者も排除して進むなんて……これじゃあ、まるでかつての魔王モートだ。暴君。恐怖の圧制。

自分の中に生まれた、拭いきれぬ嫌な感情に、エレインは吐き気がした。

聖都ラヴィーン。その大寺院。

アミスは法王と並んで寺院の廊下を歩いていた。

「すまんのお。一騎士団長のおまえにこんなことをさせて」

法王が言った。

アミス率いる第十九神聖騎士団、というより全ての神聖騎士団は今、聖都ラヴィーンに駐屯

していた。ラヴィーンに戻ってからというもの、他に命令もなく、アミスは毎日やる事もなかった。本ばかり読んでいた。そんな時、突然アミスは法王の身の回りの世話役を命じられた。法王直々の指名だという。

「いえ、私は法皇様のお近くにお仕え出来るだけで幸せです」

アミスが言う。

「いかんなあ……おまえみたいな若いもんが、そんなことじゃあ。こんなかび臭い寺なんかに籠って、わしみたいになくたばかりかけの老人の相手してると、おまえまで苔が生えてきちゃうで」

「はあ……」

アミスが呟く。

変わった方だと思った。

法王といえはイーリアス教で最も偉い人のはずである。その人のお付を命じられた時、アミスは感動のあまり言葉も出なかった。

しかし、実際に法王に近くで会ってみると、まるで威厳も威光も感じられないのである。御歳八十二歳。その老体は偉い僧というより、アミスには百姓の隠居のように思えた。肌は乾燥してひび割れ、痩せ細った体、僧衣だけがやたらと豪華で、まるで案山子が着飾っているように滑稽に見える。

「しかし、前任の世話役の方はどうしたのです？」

アミスが聞く。

「ああ、あいつか。わしはあいつは好かんのじゃ。どうもこうるさくてのお。しばらく、他の仕事にまわしてやったわ」

法王が言う。

「でも、なぜ私なんです？」

アミスが聞いた。なぜ騎士団付きの自分が、ラヴィーン駐屯の間だけとはいえ、法王の世話役に命じられたのか、まったく疑問だった。

「そういえば、おまえと同僚のあのリユネットとか言う娘は今何しとる？」

法王はアミスの問いには答えず、まったく見当違いの事を逆に聞いた。

「リユネットさんですか？彼女は今、キャメロンに行ってますよ」

「……あいつらも下らん事しよる。長老なんて呼ばれる歳になっても、アホはアホか……一回きつう言ったらなあかんな」

法王が厳しい顔付きで言った。あいつらというのは、教団の長老達だろうか。

「下らない事ですか？」

「ああ、どうせその嬢ちゃんに命じて、誰がレオデグランスの王位に就きそうか、誰が王位に就くのが望ましいかなんて事調べに行かしたんやろ。阿呆が……わし等坊主が政治に手を出してどうするつもりじゃ。坊主どものその慢心が、六百年前の悲劇を起したとどうしてわからんかのう」



法王が憎々しげに毒づいた。六百年前の悲劇とは、モートのイーリアス教弾圧の事だろうか。

「魔王の暴挙は、我々僧の慢心がもたらしたと？」

「全ての原因がそれとはいわんかの」

「しかし、経典にはモートは悪魔と書かれていますか？生まれながら悪意と罪を持った存在だと」

「ああ、あんなもん昔の坊主が、誰も文句言わんのいい事に嘘八百書いたんやろ」

法王がさらりと言う。

「人は人や。どうあがいたところで悪魔にも神にもなれん。たとえ並ならぬ魔力を持って、それによって寿命を延ばしたところだな。モートって奴も可哀想な奴やで。全ての罪背負わされた挙句、悪魔にされてもうてんからなあ」

法王はしみじみとそう言いながら、大聖堂へ入っていく。イーリアス教の最高位の僧である法王がこんな事を言ってもいいのだろうかと思いつつ、アミスも後へ続く。

「さて、おしゃべりはここまでや」

法王はそう言つて、大聖堂の一番前にある巨大なイーリアス神像の前まで行くと、そこでひざまづいた。アミスも同じように石畳の上にひざまづき、法王の様子を見守る。法王が後ろのアミスを振り向いた。

「おまえさんにはまだこの行は無理や。無理せんでいいさかい、椅子にでも座つてゆっくりしとけばいい」

「いえ、私もご一緒します」

アミスが固い口調で言う。

「そうか。まあ、好きにせい。くれぐれも無理せんようにな」

法王はそう言うのと、目の前の神像に向き直り、聖言を唱え始めた。

このまま法王は丸三日、七十二時間、水も食料も一切口にしないで、不眠不休でイーリアス神像の前に聖言を唱え続けるのである。これを法王は月に一度、十数年間一度も欠かさず続けていると聞く。とんでもない苦行だった。アミスは、自分にはとても無理だと思った。ましてや法王は八十歳を超える高齢である。

法王が聖言を唱え始めて半日ほどが経ったであろうか。石畳の上にひざまづき続けているアミスの足は痛みを通り越して、すでに感覚がなかった。暑くもないのに全身からは滝のように汗が流れ、口の中は水分を失ってざらざらに乾いていた。

丸一日経った頃には、アミスの意識は朦朧としていた。薄れいく現実の中で、目の前のイーリアス神像がアミスに微笑みかけた。後ろからは神々しい光が見える。天使が大聖堂の天井を舞い、創造主イーリアスが優しくアミスに手を伸ばした。アミスが恍惚として、その手を掴もうとする。

その時、アミスの頭の中に法王の誓言が響いた。はっつとして意識を取り戻すアミス。もちろん、目の前には天使も創造主イーリアスもない。あるのは石で作られたイーリアス神像と、黙々と誓言を唱え続ける法王だけだ。

行を行なう前、法王が教えてくれた。苦行を行なっていると、目の前に光や天使が見える事がある。あるいは神の言葉が聞こえるかもしれない。修行の足らぬ者はそれを悟りや、神の啓示と考える。だが、騙されるなど法王は言った。それらは全て幻覚であると、自分の心の弱い部分に住む悪魔が作り出した妄想であると。下らぬ幻覚に心を惑わせず、己の心を保つ事こそ真の修行であると。

アミスは法王を見た。法王は誓言を唱え続けている。その姿は全くの不動で、声調も全く揺らぐ事がない。あの枯れ木のような体のどこにそんな力があるのか、アミスには信じられなかった。

何時間経ったか、今が何日なのか、アミスにはもう時間の感覚がなくなっていた。あるのは極度の疲労。目の前に現われる幻覚。必死に精神を平衡に保とうとするのだが、心はどんどん深みに落ちていく。

ここは現実なのか、それとも夢なのか。

ふと、アミスは何かの違和感を感じた。そして、それに気付いた時、いつきに彼の意識は現実へと引き戻された。

——法王の聖言が途絶えている。

アミスは法王に目をやった。その後姿は石畳にひざまづいたまま、ぴくりとも動かない。嫌な予感を感じて、アミスは法王の元へ駆け寄ろうと立ち上がった。いや、立ち上がるう

としたが、足に力が入らず、大きく転倒した。それでもアミスは這いずりながら、法王の前ま

で回りこむ。

法王の顔を見て、アミスは息を呑んだ。法王は口を硬く閉じたまま、目を大きく見開いて、虚空を見つめたまま、固まってしまっているように動かない。アミスには呼吸すらしていないように感じた。

「法王様！法王様！」

アミスが法王を揺り動かす。

法王は驚いたように、アミスの顔を見つめた。

「……おお、アミス……そうか、わしは意識を失っておったのか……」

法王が言う。その顔は極度の疲労のために酷くやつれていた。しかし、その声は意外としっかりとしていたので、アミスは安堵のため息をついた。

「……心配いたしました。今、お医者様を呼んでまいります」

「いや、必要ない。ちよつと気絶しただけや。どこも悪うない」

「しかし……」

アミスが心配そうに言った。

「はあ……しかし、ほんまに修行の足らん事やで。こんな事ぐらいで意識失ってしまうとはなあ……半世紀以上修行を続けてまだこのざまか……：我ながら情けないわ」

法王が肩を落として言った。

情けないと法王は言ったが、アミスにしてみれば高齢の法王がこんな苦行を丸二日耐え抜い

た事だけでも奇跡に思えた。

「……ろくでもないもんが見えたんや」

「え？」

「……苦行の最中に見える幻覚や幻聴の事を『魔境』と言う。わしも若い頃は、修行中、この『魔境』によう心を惑わされたもんや。しかし、もうこの歳や。それに至らぬとはいえ、何十年も修行を続けてきた身。まさか、今になってあんなもの見るとわなあ……」

そう言うと、法王はぶるりと身を震わした。

「……何かろくでもないものが、とんでもない災いが迫っておる気がするわ」

法王がぼそりと呟いた。

窓の外で振り続ける雨空のように、エレインの気分は晴れなかった。エレインは羽ペンを置いた。書類はまだ山のように積まれてある。仕事が終わったくはかどらない。

なのに、リユネットときたら帰りもせず、エレインの部屋に居座り、暇なのか部屋のあちらこちらを物色し回っている。鬱陶しいことこの上ない。

「あの、用事が済んだのならとっとと帰って欲しいんですけど。わたし、まだ仕事も残ってますし」

「そう硬い事言わないでよ。私暇なの。どうせラヴィーンに帰っても、ジジイどもの説教聴か

されるだけなんだから。ねえ、仕事なんか部下に任して、城下に出て散歩でもしましょうよ  
本当に退屈そうに、リユネットが言う。

「そう言う訳にはいきませんよ。臣下に働かせて、自分だけ楽するなんて人の上に立つ者のすることではありません」

「でも、ほら、町で火事が起こってるみたい。火事場見物に行きましょう」  
窓から外を見ながら、不謹慎なりユネットの言葉。

（火事ですって！）

エレインが窓から外を覗く。城下の町の一角で、猛々しい炎が真っ赤に広がっている。一軒や二軒の火事ではない。かなりの大災害だ。

その時、ナナとライオネル、ティグレインが部屋に駆け込んできた。

「エレイン様、大変です」

ナナが言う。

「わかってます。何事ですか？リスラン派の放火ですか？」

エレインが内心の動揺を隠して、落ち着いた様子で言う。何よりも疑ったのは、リスラン派による治安攪乱の工作だった。

「いいえ、それが、どうやら魔族の強襲です。正確な事はわかりませんが、少なくとも百以上のデーモンやトロロークが町に進入しました。現在、商業地区付近で、警備隊が応戦中です」

「まさかー！」

エレインが驚いて椅子から立ち上がる。リUNETトも驚いた様子だ。

馬鹿な、どうやって町の内部に侵入したんだ。警備兵に気付かれずに、百ものデーモンが街中に進入できるはずがない。

「はい、確かに信じられません。しかし、事実です」

ナナが冷静に言う。

「それで、住民の避難はどうなっているんです!？」

エレインが怒鳴る。

「警備隊が誘導し、城内に避難を進めておりますが……住民の混乱状況から、あまりはかどつてはいません」

ナナの言葉。

「それにいきなりの奇襲で、兵達の指揮系統もだいぶ混乱しています。現場の状況がどうなっているか、まったくわかりませんが……かなり鎮圧には時間が掛かりそうです」

ティグレインが言う。

「万が一の事を考えて、エレイン様は城内の安全な部屋にお移りください。衛兵が警護いたします」

ナナが言う。

「冗談じゃない!わたしだけ安全な所で隠れているなんて御免です!ライオネル!あなたもこんなところで何をしているんです?わたしの警護ならいりません。あなたは城内の兵を率いて、

すぐに商業地区に向かいなさい！」

エレインの言葉にライオネルは黙って頷くと、身を翻して部屋を出て行った。ティグレインが心配そうに、ちらりとその後姿を見送った。

「わたしも現場で指揮を取ります」

エレインはそう言って部屋に立てかけてあった聖剣エクスカリバーを腰に挿すと、部屋を出て行こうと歩みだす。

「そうね。魔族どもが相手なら、望むところよ。わたしも行くわよ」

リユネットも剣の鞘を握ってにやりと笑う。エレインの後に続く。

「冗談ではありません。エレイン様の身に万が一の事があつたらどうするのです」

ナナが真顔でエレインの進路を塞ぐ。指をぱちんと鳴らすと、部屋に武装した兵士達がぞろぞろと入ってきた。

「エレイン様とリユネット殿を安全な場所にお連れしなさい。決して部屋から出さぬように」

ナナがそう言うのと、兵士達はエレインとリユネットを取り囲んだ。うむを言わず腕を捕まえ、引っ張っていく。

「ちょ、ちょっと！ナナ！あなた、こんな事してただですむと……」

「申し訳ありません、エレイン様。あなた様の安全のためです。しばらく大人しくしててください」

ナナは微笑みながら頭を下げると、連れ去られていくエレインとリユネットを見送った。



リユネットも兵士達を殴り蹴り暴れているが、多勢に無勢、もみくちやにされながら連れ去られていく。

「……さて、これでエレイン様の無事は確保しましたが……」

エレインの部屋に残ったナナが、ティグレインに呟く。

「ええ、問題はここからです。心配を掛けぬよう、レディ・エレインには魔族の数は百と言いましたが、本当は三百以上の数です。それに現場から伝令では、こちらの警備兵がまるで問題にならない強さだとか……おそらく、かなり上級の魔族も来ているでしょう。このままでは魔族が城にたどり着くのは時間の問題です。レディ・エレインを無理やりにもお連れしたのはいい判断でした。あの方の性格なら、どんなにおとめしても間違いない戦いに行くでしょうから……しかし、危険すぎます」

ティグレインが言う。

「そうですね。ヴァース様の率いてらっしゃる我が方の主力は遙か遠方。こちらへの救援に間に合えばよいのですが……万が一、十三使徒クラスの魔族が来ていれば、我々は終わりです。この城を捨てるしかありません」

「……ライオネル様なら大丈夫です。あの方なら必ず、勝ってくれます」

ティグレインが胸に手をあて、願いを込めるように言う。ナナはその様子を見て、ため息をついた。

「……そうですね。ライオネル様に期待しましょう」

ナナはそう言った。

「これじゃあまるで監禁ね……」

エレインは自分が閉じ込められた部屋の扉を叩いて、言った。頑丈な鉄の扉は厚さ10センチはありそうで、外から鍵が掛かっている。どうやっても破壊できそうな代物ではない。

そこはおそらく昔倉庫として使われていた部屋なのだろう。狭い部屋で、何が入っているのか、忘れられたように木製の箱が幾つか端に積まれている。壁は石造りで、床には厚い埃が溜まっている。部屋に唯一の窓、しかし頑丈そうな鉄格子がはまっているが、そこからその雨が降り込んでくる。

なるほど、ここなら安全だろう。

リユネットはおもしろくなさそうに木箱に腰掛けて、足をぶらぶらさせている。

「ふん、あなたの威厳もたいした事ないわね。部下にいいようにあしらわれちゃって。あなたなんてまったく頼りにされてないって事でしょ」

リユネットがエレインに向かって言う。

まったくくだ。ナナ達が私の事を心配してくれているのはわかる。しかし、主君が臣下に心配されているようでは笑い話にもならない。ナナ達にとって、まだ私など危なっかしい子供ぐらいにしか思われていないのだ。

「……出るわよ。ここを」

エレインが静かに、しかし力強く言った。このまま、こんな所で大人しく護られているなんて、我慢できない。私は子供ではないのだ。

「出るって、どうやって？」

「こうやってよ」

エレインはにやりと笑うと、腰からエクスカリバーを引き抜いた。光り輝く刀身があらわになる。私にこれを持たせたままだったのが、ナナの手抜きだ。

エレインがエクスカリバーを振るう。音もなく、窓の鉄格子は輪切りにされた。

「……怖いぐらいの切れ味ね」

リユネットが目を丸くして言う。剣の達人でもないエレインが軽く振っただけで、鉄がバターのようにつれてしまったのだ。常識では考えられない。聖剣エクスカリバーは勇者アトロが泉の精霊から授けられたといわれているが、人間の作った剣ではないことだけは確かのようにだ。

「さて、行くわよ」

エレインが窓から身体を外に出す。運良く、ここは一階だ。城の庭に出る。リユネットも続いて庭に出た。

「急ぎましょう。こんな所でうろろしていたら、またナナ達に見つかるわ」

「そうね。敵がいるのは商業地区とか言ってたわね。魔族の野郎ギタギタにしてやるわ」

二人は領くと、走って商業地区に向かった。

ライオネルは振り下ろされたトロロークの巨大な斧を、横に跳んで避ける。振り下ろされた斧は地面の石盤を粉々に砕いた。トロロークの体長は3メートル以上、その攻撃は人間が受け止められるような威力ではない。

雄たけびを上げ、斧を振り上げるトロローク。ライオネルは素早く間合いに踏み込むと、そのまますり抜けざまにトロロークの横腹を薙いだ。悲鳴を上げ、倒れるトロローク。

これでライオネルが倒したトロロークとデーモンは合わせて二十匹以上。しかし、まだまだいる。そこから中から市民の悲鳴が聞こえ、ライオネルの周りでも兵士達がトロロークと戦っている。

一匹のトロロークの斧が兵士達数人まとめて吹き飛ばした。血に塗れ、手足がバラバラに空中に飛び散る。

ライオネルはそのトロロークに近づくと、反撃の猶予も与えず、切り捨てた。

「負傷兵の運搬、それと市民の避難を急げ！」

ライオネルが後ろにいる兵達に怒鳴る。

皆、満身創痍だった。ライオネルが城から率いてきた五百の兵も、今は三分の一以下になっている。トロロークやデーモンは一匹で、人間の兵の十人以上に匹敵する。こんなモンスターの前では、非力な人間など藁人形同然だった。

また一匹、ライオネルはトロロークを斬り殺した。倒れたトロロークの生死の確認もしない、

次々に群がってくるトロロークを駆け抜け抜げざまに切り捨てていく。

「ほう……なかなか凄い奴がいるじゃないか」

頭上からのその声に、ライオネルは動きを止め、顔を上げた。民家の屋根に一人の男が立っている。男が飛び降りた。建物の三階から飛び降りながらも、体勢も乱さず静かにライオネルの前に着地する。

ライオネルは前に立った男を見上げた。それほど背が高かった。トロロークほどではないにしても、身長はゆうに二mを越していた。そしてその顔は、トロローク以上に醜く歪んでいた。真っ赤な目に、口から出た不揃いな牙。皮膚の色は灰色をしている。明らかに人間ではなかった。

「……ミルドラルという奴か」

ライオネルが異形の男に向かって言った。

ミルドラル、それはモードレッドが生み出した異形の魔物。トロロークやデーモンといった人型の魔物と人間を掛け合わせて作った新種の魔物だった。トロロークの怪力とデーモンの魔力、人間の知性を併せ持つといわれている。

「おまえ、人間にしてはやるな。俺が遊んでやる」

ミルドラルはしわがれた声で、楽しそうにそう言うと、腰の蛮刀を引き抜いた。ライオネルも剣を上げて身構える。

いきなりミルドラルが剣を振り上げたまま、凄まじい勢いで踏み込んできた。そのまま、蛮

刀を振り下ろす。ライオネルが素早く横に身をかわす。しかし、ミルドラルはさらに一步踏み込み、振り下ろした刀を両手でそのまま横に薙いだ。その蛮刀をライオネルが剣の腹で受け止める。ライオネルの足が地面から浮いた。そのまま3メートルも後方に飛ばされる。ミルドラルの怪力からなる剣撃が、受け止めたライオネルの身体ごと弾き飛ばしたのだ。まさに人間離れした力だった。

「……たいした馬鹿力だ」

体勢を崩すことなく着地したライオネルが、言う。

「わははは、俺も驚いてるぞ。ただの人間が俺の一撃を受け止めるなんてな。普通なら剣がへし折れるか、受けた止めた腕の骨が折れるか、いやほとんどの人間は反応もできずに身体を真っ二つにされるんだがな」

ミルドラルが笑う。

ミルドラルは獣のように凶暴な顔な笑みを浮かべ、剣を振り上げ、ライオネルに無造作に近づいていく。ライオネルも身構えた。

「酷いわね……」

あまりの残劇に、リユネットも眩いた。今、エレインとリユネットは商業地区を走っている。立ち並んだ建物は炎を上げ燃え、道端には市民や兵士の死体が無数に転がっている。とところどころにトロロークの死体もあった。

「で、どうするの？」

リユネットが走りながらエレインに聞く。

「いきなり魔物達が街中に現れたなんて、どう考えてもおかしすぎる。唯一、考えられるのは召喚よ。召喚士が街中に入って、そこからトロローク達を呼び出した。それなら説明がいく」  
その召喚士がきつと敵の指揮官。そいつを見つけて倒す」

エレインがエクスカリバーを抜いて言う。

しかし、一匹や二匹ならともかく、百体以上の魔物を一度に召喚するなど可能なのだろうか？

そんな巨大な魔力を持つものなど、まともな魔族じゃ考えられない。考えられるのは、十三使徒クラス……。

知った事か。相手が誰であろうと、戦うまでだ。

目の前の街角から、三匹のトロロークが現れた。トロローク達がエレイン達を見つけて、恐ろしい咆哮を上げる。

「ふん、雑魚トロロークごときが、邪魔するならばチコロス」

リユネットの言葉。エレインとリユネットは速度も落とさず、三匹のトロロークに向かっていく。

走りながら呪文を唱えていたリユネットが、手を前方にかざす。白く光り輝く槍がリユネットの手から放たれ、一匹のトロロークの胸を貫いた。

そのまま、腰の銀の剣を引き抜き、一匹のトロロークの間合いを詰めるリユネット。トロロークが剣を振り下ろす。それを前転してかわすと、リユネットはトロロークの懐に入った。銀の剣をトロロークの腹に突き立てる。だが、致命傷ではない。トロロークの生命力は並外れていた。腹に剣を突立てられたまま、怒りの咆哮を上げ、リユネットの細い首を掴もうと手を伸ばす。

リユネットが剣を手にしたまま呪文を唱えた。トロロークの手がリユネットの首に触れるかという時、トロロークの身体が白い光を放って内部から四散した。

エレインはトロロークと対峙していた。エクスカリバーを構えたまま、トロロークの瞳を見つめる。不思議を怖くない。昔の私なら、トロロークを見ただけで恐怖で足が竦んでいただろう。しかし、あの旅を経験して、私は成長した。

あのポールズに比べれば、こんな敵なんて、まるでライオンと子猫だ。

エレインはさっと前に踏み出すと、前方に飛び上がった。あまりに何気ないエレインの動きに、トロロークの反応は遅れた。エレインはエクスカリバーを振り下ろす。それは持っていた鉄製の槍ごとトロロークを真っ二つにした。悲鳴を上げる事もできず、地に崩れるトロローク。トロロークの死体を見下ろすエレイン。自分がトロロークという恐ろしい魔物を倒した事に、何の驚きも感じなかった。むしろ、当然だという気がした。自分の手の平の中に、何か言いようもない力を感じる。やはり、何かが昔の私とは変わってきている。

「へえ、あなたもなかなかやるわね」



リユネットがエレインに声を掛ける。リユネットにも、所詮世間知らずのお姫様であるエレインがトロロークを倒せるとは思ってもいなかったのだろう。

また、遙か向こう側から数匹のトロロークがエレイン達の姿を見つけ、地響きを立て走ってくる。いや、前からだけでは足りない。後ろからも、周り中からトロロークが集まってきた。このままでは囲まれる。

「……しかたない、少々魔力を使うけど、こいつで」

そう言うと、リユネットは目を閉じて何か呪文を唱えだした、そして、

「裁きの雷！」

リユネットが叫ぶ。天から凄まじい光が発した。エレインがあまりの眩しさに目を閉じる。辺りに轟音が鳴り響いた。エレインが目を開けると、そこら中でトロローク達が黒焦げになって、地面に倒れていた。

「……凄いわね」

エレインが思わず呟く。今の魔法だけで、二十匹近いトロロークを倒している。凄まじい魔法だった。このクラスの魔法を使える人間が、イーリアス教内に、いや世界に何人いるだろう。さすがは『イーリアス教の破壊神』と陰口叩かれているだけはある。

その時、黒焦げになったトロロークの山から死体を押し退け、巨体の男が起き上がった。全身に酷い火傷を負いながらも、エレイン達を見て唸っている。

エレインとリユネットは身構えた。

ライオネルとミルドラルの壮絶な一騎打ちが始まった。剣と剣が舞い、火花が散り、鋼と鋼がぶつかる音が響く。

ミルドラルの腕力、そして剣圧は驚異的だった。ミルドラルの前では、ライオネルの身体が子供のようになく見える。身体ごと押し潰そうとするかのように、ライオネルに向かって蛮刀を振るっていく。それもまともな剣技じゃない。反射神経と動物的感にだけたよった、むちゃくちゃな打ち込みだった。まるで子供が棒でも振り回す如く、巨大な蛮刀を振るっている。それでもライオネルが徐々に圧されていく。圧倒的な身体能力の差であった。力だけではない。速度も反射神経も。

「どうした？おされてるぞ、人間。まだまだこんなもんじゃない、俺の剣はもつと速くなるぞ」

ミルドラルが剣を振り回しながら、笑う。ミルドラルの振り下ろした剣をライオネルが受け、鏝迫り合いになる。互いに剣を押し合う。ライオネルとミルドラルの顔が間近に見詰め合う。

「だったら、さっさと本気を出したらどうだ」

ライオネルの冷静な言葉に、ミルドラルの目が怒った。力任せに剣をぶちかますと、ライオネルは体勢を崩し、後ろに下がった。

「お望みどおり、これで終わりにしてやるよ」

ミルドラルが怒りの声をあげ、飛び掛ると、剣を振り上げる。それは確かに、今までの中で

一番速く、力強い動きだった。

蛮刀を振り下ろす。その岩をも切り裂きそうな一撃の下に、ライオネルの姿はなかった。

「あッ」と声を上げる間もなく、ミルドラルはどとうと地に倒れた。その横腹からは赤黒い血が噴出し、じわりと地面に吸われていく。

その死体を横に、ライオネルが立ち、見下ろしていた。

「阿呆が。いくら身体能力が優れていたところで、所詮ただ力任せに剣を振り回しているだけ。そんなもので、本物の剣士が倒せると思ったのか」

ライオネルが腰の鞘に剣を収め、呟く。倒れたミルドラルを背を向けて、歩き出そうとした。突如、柄を掴み、素早く振り返るライオネル。目も留まらぬ速さで、抜刀する。しかし、びたりと剣を止めた。そこには、剣を振り上げたミルドラルが、胸を地面から生えた錐状の岩に貫かれた姿で絶命していた。

「もの凄いい居合いですね。いらなにお世話でしたか。でも、気を付けた方がいいですよ。ミルドラルってのは、簡単には死にませんから」

かわいい声がある。まるで仮装しているようなウサギ耳の少女が、離れたところに立っていた。小人のように、ずいぶん背が小さい。

「君は？」

ライオネルが剣を下ろして、言う。

「あ、わたし急いでいるんで、もう行かないと」

少女はそう言うと、まるで本物のウサギのように、驚異的な跳躍力で、近くの家屋の屋根まで一飛びで跳び上がる。ライオネルは追おうとしたが、少女の人間離れた運動能力の前では無駄だと悟って、諦めた。もう少女の姿はどこにも見えない。

それに今は、魔物どもを退治するのが先決だ。

ライオネルは生き残った兵を集め、再び魔物を探し、戦いに向かった。

トロロークの死体の山から立ち上がった巨体の怪物。焦げて黒ずんだ皮膚を怒らせ、エレイン達を睨んでいる。

「あれは……ミルドラル……」

リユネットが苦々しい顔で言った。

「ミルドラル？」

エレインが聞く。

「ええ。人間とトロロークを掛け合わせた新種の魔物。トロロークなんて雑魚じゃない。こいつはやばいわよ……」

リユネットが剣を構えて呟く。

ミルドラルが地を蹴った。エレインの方に向かっていて、エレインもとっさに構えを取るが、――速い。

獣のような動きで襲い来るミルドラル。エレインにはよける暇もなかった。頭上に凄まじい

圧力で剣が振り下ろされる。死の恐怖で身体が硬直する。エレインは死を感じて、目を瞑った。しかし、いつまでたっても何もなかった。エレインが恐る恐る目を開ける。

エレインの頭の上でミルドラルの蛮刀は止まっていた。剣を握るミルドラルの腕を、ミルドラルと同じくらい巨体の男が掴んで止めていたのだ。ミルドラルは唸り声を上げて腕に力を入れるが、巨体の男に掴まれた腕はびくりとも動かない。赤い髪の毛の、鬼のような顔の男だった。明らかに人間ではない。でも、エレインはこの顔を知っていた。この男は……。

ピュツと空気を切る音がした。ミルドラルが悲鳴を上げる。驚いてエレインが見ると、銀の矢がミルドラルの胸に突き刺さっている。同時に巨体の男が上に腕を振る。ミルドラルの巨体が軽々と宙に舞って、地面に叩きつけられた。頭が割れ、脳髓を地に撒き散らすミルドラル。

「おいおい、俺の獲物だけ。手を出すなよ、エリック」

巨漢の男が後ろを振り向いて言う。銀の弓を持った長髪のエルフがゆっくりとこちらに歩いてくるところだった。

「ふん。知った事か」

エルフが言った。

「誰？こいつら」

リユネットがエレインの耳元に口を近づけ、聞く。

——この二人は。

エレインが驚きの顔で二人を見る。『銀の弓』のエリックとオーガ族の英雄ガリアスだ。ど

ちらもあの勇者募集の時、エレインは顔を合わせていた。

「おお、これはエレイン殿。お怪我はありませんかな」

ガリアスが思い出したようにエレインの方を向く。地に響くような低い、豪快な声だ。

「これはこれは、エレイン様。このような場所でお会いできるとは、思ってもいませんでした」

エリックもエレインの前に立つと、優雅にお辞儀した。

「……どうして、あなた達がここに？」

二人とも、魔王討伐のために北へ、魔界へ向かっていたはずだ。

「世界の事情もだいたい混乱してきた。魔王討伐なんて暢気な事をやっている場合ではないと思いついて、我々は魔界から帰ってきて、このキャメロンに滞在していたんですよ。来るべき戦いのためにね。そしたら、この騒ぎだ」

エリックが言った。

「私もいますよ」

かわいい女の子の声がした。エレインが見ると、街角からかわいい少女が、奇妙なのは頭にウサギの耳が生えている事だが、こちらに歩いてくる。

幻の希少種族、ラビットニアンだ。

「どうも、始めまして、エレイン様。私、ニユートといいます」

エレインの前でラビットニアンはぺこりと頭を下げた。そして、エリックの方を向き、

「エリックさん、向こうの方にいたのは片付け終わりましたよ」

と簡単に言った。

「そうか。これであらかたは倒したか」

エリックが言う。

が、向こうから一体のミルドラルを先頭に、三十体近いトロロークが突撃して来た。

「ちっ、まだいたか。エレイン様、お下がりにください。すぐに終わらせませますので」

そう言うときエリックは、背負った銀の矢を弓につがえると、次々と敵勢に向かつてうち始めた。銀の矢が先頭のミルドラルの額を貫く。エリックは早射ちは見事だった。放たれた矢が敵に当たる前に、もう次の矢を放っている。雨のように降り注ぐ銀の矢に、トロローク達はばたばたと倒れた。

ニュートが人間の耳には聞き取れぬ言葉で魔法を唱えた。地面が揺れ、土が槍状に突起し、トロローク達を無残に貫いた。

ガリアスは腰に下げていた巨大な斧を手にとると、唸り声を上げてトロローク達に向かっていく。ガリアスの斧が、ガリアス以上の巨体であるトロローク達を軽々と薙ぎ飛ばしていく。

「うーん、すごいわね。こりゃ、彼等に任しときゃ楽勝みたいね」

リユネットが人事のように、エリック達を見て言う。

(この人達……とてつもなく強い……)

エリック達の様子を見ていたエレインが思った。いや、強くて当然なのだ。三人とも、それ

ぞれ種族の中では英雄と讃えられている戦士なのだから。

ものの三分足らずで、ミルドラルと三十体以上のトロロークは一匹残らず死に絶えた。

エリック達がエレインの元に集まる。

「さて、これでほとんど倒したはずですが……よかったら城までお送りしましょうか、エレイン様」

エリックが言う。

「いえ、まだよ。魔物達を召喚した術士がいるはず。そいつを見つけないと……」

エレインが言う。そいつを殺さないかぎり、雑魚モンスターを何匹殺したところで、どうにもならないのだ。

その時、声が聞こえた。

「それはわたしだ」

低く、空気を貫くように通る声。エレイン達が一齐に声の方を見る。少し離れた道の真ん中に、深緑のローブを纏った男が立っていた。

「……驚いた。この程度の戦力でキャメロンを落とせるとは考えていなかったが……まさかこの短時間で、トロローク達を倒してしまうとはな……ちようどよい。脆弱なる者達よ、わたしの鍛錬に付き合ってくれ」

ローブの男が呟きながら、ゆっくりとこちらに歩いてくる。

「ああ、何ほざいてるの、こいつ?」



リユネットがそう言ったが、ロープの中で真紅に光る男の目を見て、身体が固まった。身体の震えが止まらない。前にも、ミルチアで感じた事がある。これは、巨大な力の差を認めて閉まった時に感じる恐怖だ。あのポールスと対峙した時と同じ、恐怖……。

「こいつ……やばい」

リユネットが額に汗を流し呟く。エリック達も感じていた。徐々に近づいてくる、押し潰されそうな威圧感を。

エリックが素早く矢をつがえ、銀の矢を男に向かって放った。だが、その矢は男の前で金属音を出して弾かれる。驚いたエリックは次々と矢を放つのだが、男は腕も動かしていないのに、全て空中で打ち落とされた。

男はゆっくり、止まる事無くこちらに歩いてくる。一步一步近づくと、周りの空気が音を立てて割れんばかりに張り詰めていく。

ガリアスが身を奮い立たせるかのように、唸り声を上げた。唸り声を上げたまま、斧を振り上げ、男に突撃していく。斧を振り下ろした。岩石でも真つ二つに砕きそうなガリアスの一撃を、男は片手で受け止めた。鋼鉄の刃を素手で受け止めただけでも信じられなかったが、男はそのまま斧を掴むと、片手でぐいっと持ち上げた。斧を握ったままのガリアスの巨体が宙に浮く。170cm程度の男が片手で、300キロを超えるガリアスの身体を持ち上げているのだ。

そのまま、男はガリアスを後方に投げ捨てた。ガリアスの身体は地面からたっぷり十メートル

ルは投げ上げられ、放物線を描き、地面に激突した。そのままぐったりと動かない。

倒れたガリアスには目も向けず、男はゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……化け物」

ニユートが震えて言った。

しかし、男が突如、足を止めた。まるでこの距離から相手の顔を覗き込まんとするように、上半身だけを前にぐっと倒し、首を伸ばす。

「そこにいるのは、誰だ？」

エレインの顔を見る。ねっとりとした視線をエレインは感じた。じっくり、端から端まで舐め回すように。

「……忘れるはずもない。その顔、あの男にそっくりだ……そうか、あの強き者の子孫か。これはよい。軽い運動のつもりだったが、最高の相手に出会えた」

ローブの奥から覗く男の目が赤く光った。

「……ここはなんとか私達が食い止めます。エレイン様はお逃げください」

エレックがそう言って、エレインを見た。しかし、エレインはエレックの言葉を聞いているのかいないのか、呆然とした表情で立ち尽くし、男の顔を見つめている。

(ちっ……恐怖でおかしくなったか……)

エレックはとっさにそう判断すると、再び銀の矢をつがえ、放つ。しかし、やはり男の前で弾かれてしまう。

矢が全て地に落ちた。エリックが鹵軋りする。男がロープの下から、血でも滴ってきそうな真っ赤な口の端を、三日月形に上げた。エリック達など問題にしていけない。ただ、エレインを見て、笑っているのだ。好敵手と出会えた喜びだった。

「名乗りをしておこう。わたしの名前はラモラック。四魔候の一人。勇者の娘よ、いざいかにん」

ラモラックがそう言って、優雅にお辞儀する。そして、手をかざした。ラモラックの周りに、こぶし大ほどの青い球状の物体が無数に浮き上がる。

青い魔法球がエリック達に襲い掛かる。エリックは襲い来る魔法球を矢で打ち落とそうとするが、数が多すぎる。

「大地の護り！」  
ニユートが叫んだ。

エリック達の前の土が盛り上がり、巨大な正方形の壁になった。魔法球が土の壁にぶつかり、閃光を放ち爆発する。土の壁が粉々に崩れた。エリックが土煙の中で前を見る。ラモックの姿が消えている。

背筋が凍るような不安。とっさに後ろに気配を感じてエリックが振り返る。だが、振り返ると同時に、エリックの身体はラモラックの腕に弾き飛ばされていた。殴られたエリックの左腕は、奇妙な方向に捻じ曲がり、音を立てて骨が砕ける。

「いのッー！」

リユネットとニュートが同時に、ラモラックに向け、魔法を放とうとする。しかし、「遅い」

魔法の詠唱が終わる前に、リユネットとニュートはラモラックの腕に弾き飛ばされる。

皆、苦痛の声を出して、地面に倒れこんでいる。立っているのは一人、エレインだけだ。

ラモラックはゆっくり近づいて、エレインの顔を上から覗きこんだ。エレインは身動き一つしない。呆然と、どこか見つめている。

ラモラックが腕を振った。エレインが顔を殴られ、派手に倒れる。ラモラックはほとんど力を入れていなかった。本気で殴れば、エレインの頭など粉々に砕けている。

「どうした、なぜ抵抗しない？」

黙って倒れているエレインの頭を掴み、ゆうゆうと吊り上げるラモラック。

「あと少し力を込めれば、頭が砕ける」

ぎしぎしと音を立てるエレインの頭蓋骨。しかし、エレインは声も上げず、ただ俯いて立っている。

ラモラックがエレインの全身を、もう一度丹念に見返した。そして、落胆したように首を横に振る。

「その細い首、細い手。ガラスのように無気力な目。かつてのあの強い君はどこにいった？古き友よ、わたしを満足させてくれ」

「……」

無反応なエレインに、ラモラックの瞳は酷い失望の色が見えた。

「……やはり君は脆弱な者だ。弱き者に価値はない」

ラモラックが腕に力を込める。エレインの頭蓋骨が音をたてた。

「……………だ」

エレインが何か呟いた。

「……………？」

ラモラックが力を緩め、エレインの顔を覗き込む。エレインが顔を上げて、ラモラックの赤い瞳を見つめた。ゆっくり口を開く。

「……………死ぬのは貴様だ」

そのエレインの瞳を見た瞬間、ラモラックがびくりと身体を震わせ、手を離し、とっさにエレインから離れた。それは魔族としての、彼の本能だった。

ラモラックは信じられないように、エレインを見る。エレインの目は強い意思の光を放っていた。ゆっくり剣を構える。

ラモラックが低い声で笑う。これ以上ないほど嬉しそうに。狂気的笑みを浮かべて。

「いいぞ、勇者の娘よ。それでこそ、君だ。昔のようにもう一度、至福の時を」

ラモラックの手から魔法球が無数に生まれる。手を振ると、魔法球が様々な方向から、恐ろしい勢いでエレインを襲う。だが、まだエレインは身動き一つしない。

最初の魔法球がエレインにぶつかろうとするその寸前、エレインがエクスカリバーを振った。

その一振りです、すべての魔法球は爆発もせず、音もなく消える。

何が起ったのか、ラモラックが驚きの表情を浮かべる。

突然、エレインがラモラックに向かって地を蹴った。ラモラックは距離を取ろうと、人間離れした跳躍力で、二階建ての民家の屋根まで一飛びで跳び上がる。しかし、驚いた事に、エレインも軽々と屋根に飛び上がると、ラモラックを追撃してきた。

人間の身体能力ではなかった。

屋根を蹴り、驚異的な速度で屋根の上を移動していく、エレイン。あっさりと間合いに入り込んだエレインが、ラモラックめがけ聖剣を振るう。ラモラックは奇妙に身を捻り、紙一重でその刃をよけた。避けたラモラックの身体は腰から上が横に九十度以上も曲がっていた。異常な身体の柔らかさだった。そして、エレインの剣も素人の剣ではない。達人すら舌を巻く、鋭い剣撃だった。

エレインが次々に剣を振るっていく。ラモラックはほとんどその場から移動しないで、人間では考えられぬ上半身の動きだけでエレインの剣撃を避けていった。身体の構造も異様なら、その反射神経も異常だった。

ラモラックが拳を繰り出した、それもまともなパンチじゃない。どういう骨の構造になって、いるのか、肘が逆に曲がったままでの奇妙な方向からのパンチだ。エレインが上体を屈めて、その拳を避ける。後ろにあったレンガ造りの煙突をラモラックの拳が貫いた。こんなパンチ、まともにもらえば人間など一撃で即死だ。

「いいぞ！これだ！この感覚をわたしは三百年、探し続けてきたんだ！」

ラモラックが狂喜の声で叫ぶ。

ラモラックの奇妙な体術は、常識では考えられない方向やタイミングで襲い掛かってくる。徐々に追い詰められていくエレイン。

エレインがラモラックの蹴りを避けながら、落ちてあったレンガの破片を蹴り上げた。石片はラモラックの顔めがけて飛んでいく。ラモラックが首を捻って避けた。その隙を狙って、エレインはラモラックを斬りつける。避ける暇がないと悟ったラモラックは、手のひらに小さな魔法壁を作り、聖剣の刃を受けた。バシッと魔法の火花が散る。そのまま、ラモラックは後ろに大きく跳ぶ。エレインは逃がすまいと剣を振りかぶり、前に跳んだ。瞬間、ラモラックはにやりと笑い、後ろに跳躍したまま、手にあつた魔法壁をエレインに向かって投げつけた。エレインも跳躍中、足は地に付いていない。おまけに剣は振りかぶったまま。完全な奇襲で、剣で切り払う事もできぬ体勢だった。

だが、エレインは剣の刃でなく柄でその魔法壁を叩き付けた。魔法壁が弾け、爆発が起こる。爆炎の中からエレインが飛び出る。

「おおおッ！」

エレインが剣を振り上げ、叫ぶ。聖剣エクスカリバーが青白く光り輝いた。

ラモラックはとっさに魔法壁を掌に作り出し、受け止める。しかし、

「がああああっ！」

ラモラックが悲鳴を上げた。聖剣は魔法壁ごと、ラモラックの手を肩から切り落としていた。ラモラックは呻き声を上げながらも、身体を回転させ、後ろ回し蹴りを放つ。石柱でも砕きそうな一撃だった。エレインはとっさに後ろに飛んだが避けられず、腹を蹴られ、後方に蹴り飛ばされた。しかし、くるりと空中で前転すると、二階から落ちる事もなく、屋根の上に着地した。今のであばらが折れて肺が傷ついたのか、口の端からは血が流れ出た。

「……素晴らしい。それでこそ、わたしの仇敵。本当に素晴らしい戦いだ」

ラモラックが傷口を押さえ、ローブの中からやりと笑って、言う。もう腕を失くした事など何も感じていないようだ。

「……この時が永遠に続いて欲しいものだが……」

ラモラックがそう言って、屋根から下を見下ろす。エリックやリユネット達が意識を取り戻し、立ち上がるうとしているところだった。

「……友よ。君との戦いは、この至福の時だけは、誰にも邪魔されたくない。決着は次の機会としよう」

「逃がすと思ってるの」

エレインが剣を構えて言う。

「さあ？これならどうか」

ラモラックが手を振った。目に見えない何か、空気が音を立てて斬られていく。これは、エレインを狙っているのではない。



「リユネット！逃げて！」

エレインが叫んだ。立ち上がるうとしていたリユネットの首に赤い線が入る。噴水のように、首筋から血が吹き出した。

リユネットに気が取られている間に、ラモラックがエレインの懐に入り込んだ。残った片腕で、エレインの胸に掌打を放つ。衝撃でエレインの小柄な身体は軽々と宙に浮き、二階から地面に落ちる。

「強き者よ……次に会う時が楽しみだ。きみはもっと強くなっているだろう。そして、わたしも……本当に、楽しみだ」

ラモラックは倒れているエレインにそれだけ言うと、空気に溶けるように消えてしまった。

エレインは立ち上がると、急いでリユネットの側に駆け寄った。辺りは出血で血の海だった。出血多量で意識がない。そして、首筋からの血は止まらない。

「ニュート、回復魔法を！出血を止めて！」

エレインが叫ぶ。ニュートが駆け寄って、急いで回復魔法を掛ける。出血は止まった。しかし、リユネットの意識は戻らない。その表情は真っ白だった。

「駄目……血を失いすぎて……」

ニュートが呟いた。エレインがリユネットの脈をみる。今にも鼓動は止まりそうだった。

「リユネット！しっかりして！」

エレインがリユネットを揺さぶる。しかし、リユネットは確実に命の温もりをを失いつつ

あつた。

エリックもガリアスもニュートもうな垂れる。沈痛な雰囲気が流れる。誰にも、どうしようもなかった。

エレインはリユネットを抱きしめた。その身体はもう氷のように冷たかった。肌を通して伝わる鼓動も、消えそうなほど弱い。

エレインは涙で濡れる顔を上げた。そして、目が合った。黒い、深い瞳。それは路地にいる少年だった。じつと、エレインを見つめている。黒い髪。歳はエレインより少し下ぐらいだろうか。真つ黒に汚れたぼろを纏い、白い肌は泥と埃で汚れていた。

なぜかエレインはその少年から目を逸らせなかった。少年もまた、エレインの瞳を見つめている。ただ目が合っただけなのに、見た事もない少年のはずなのに、エレインには、その少年が自分にとってただの他人ではないと感じた。

そう、私はこの子を知っている。

この子も私を知っている。

他人ではない。まるで向き合った鏡。自分を見ているよう。

この子と私は、会うべくして会った。運命、宿命、いやもっと大きなものが、二人を結びつけたのだ。

やがて、少年は歩き出した。ゆっくりとエレインの元によってくると、リユネットの側しやがみこんだ。

少年がリユネットの胸に手を当てた。何かを唱えた。

エレインは目を見張った。リユネットの顔色が、みるみる良くなっていく。肌には赤みが差し、鼓動も強く、正常に戻っていく。

リユネットが目を開けた。

「あれ？わたし、どうしたの？」

上半身を起こし、首に手を当てるリユネット。そこにはもう傷跡も残っていないかった。

少年が立ち上がって、再びエレインの顔を見た。エレインも少年の顔を見つめ返す。

「ありがとう。凄いのね、あなた。名前は？」

嬉しさのあまり、エレインが少年の手を握り、言う。

「……ティア」

少年が答えた。

「ティア……古語で確か『明けの明星』の意味。いい名前ね」

エレインが言った。明けの明星。闇を照らす、夜明けを告げる、光り輝く星。金星。

「……あなたは？」

「わたしの名前はエレイン」

「エレイン……ようやく見つけた。僕と同じ人」

「同じ人？」

エレインは聞き返したが、少年はそれきり黙りこんでしまった。エレインの顔を見たまま、

じつと何かを考え込んでいる。

「あー、なんかその子に助けられたみたいね。君、とりあえず、ありがと」

リユネットがそう言って立ち上がった。ティアはリユネットの方も見ないで、黙り込んだまま。

「エレイン様、胸の傷は大丈夫ですか？」

エリックが聞いた。ラモラックに蹴られた胸だ。

「ええ、大丈夫みたい。痛みはないわ」

エレインが言う。本当だった。肋骨が折れたはずなのに、ティアが側にきた途端、胸の痛みがすつと消えてしまったのだ。まさか、私の傷まで治ってしまったのだろうか。

「我々の方も、とりあえずは無事なようです」

エリックがニュートとガリアスを見て、言った。

「おそらく、ほとんどのトロロークは殺したでしょうが、まだどこかに残っているかもしれません。我々はこのまま、残ったトロロークの残党を狩りに行ってきます」

「そうですか。あなた達のおかげで助かりました。ぜひ、後で城に来てください。お礼がしたい」

「いえ、助けられたのは私達のほうです」

エリックはそう言うと、ガリアスとニュートを連れて走って行ってしまった。

「しかし、酷いわね」

リユネットが辺りを見て呟いた。そこら中に死体が転がっている。女性や子供の死体もあった。

エレインがそんな子供の死体を抱き上げた。まだ十歳にも満たない、幼い女の子だった。背中に大きな傷がある。おそらく、トロロークの剣で斬られ、即死だったのだろう。目は見開いたままだった。

「……かわいいそうに」

エレインが少女の亡骸を撫でた。

「……僕なら、その子を助けられるよ」

ティアが言った。

「え？」

エレインが声を上げる。

ティアはエレインが抱き上げたままの少女の亡骸に手を触れると、目を閉じて、何か唱えだした。それは、人間の言葉ではなかった。

エレインはぎよっとして、あやうく少女の遺体を放り出すところだった。少女の死体が、小刻みに震えだしたのだ。傷口はみるみるまに塞がり、脛は痙攣し、黒い目は白目の中でぎよろぎよろとせわしなく動き、唇は何かを訴えようとしてもするかのようには、ぱくぱくと開閉した。

——まさか。

エレインの顔が真っ青になって震えだす。リユネットも青い顔で、その様子を見守っている。

死体が叫び声を上げた。地獄の底から響くような、背筋も凍りつく悲鳴。少女の顔はまるで断末魔の苦しみのように、醜く歪んだ。少女の手が、エレインの手首を掴む。少女の小さな身体からは想像もできない凄厉な力だった。

「やめて!!」

エレインが叫んだ。ティアがエレインの声にびくりと震え、言葉を止める。

少女はもう、動いていなかった。先ほどまでと同じ、冷たい死体だ。エレインの手首には、少女の指の指の指が青くなって残っている。エレインは涙を流し、その死体を地に寝かせた。そして、泣いた。

「……神への冒瀆だわ」

リユネットが呟いた。

そうだ。こんな事、絶対に許されない事だ。創造主への冒瀆だ。あのモートでさえ、行なわなかった、生命への最大の禁忌。

エレインが涙を流し、再び死の底に舞い戻ってしまった少女の顔を見る。その表情にもう苦痛はない、穏やかな死に顔だった。

この子は生き返りたかったのだろうか。それとも、このまま静かに眠りたかったのだろうか。人が絶対に踏み込んでほならない領域がある。決して越えてはならない、一線が。

エレインはティアの手を掴んだ。ティアはエレインに怒られたと思ったのか、しょんぼりと肩を落としている。

「二度と、こんな事しないで。お願い、約束して」

エレインがティアの目を見て言う。

「……わかった。二度と、しない」

ティアは頷いた。

「そう。いい子ね」

エレインが微笑んで、言う。

それにしても、この子は一体何者だろう。死者を蘇らせる魔法など、イーリアス教の法皇だっただけではない。いや、歴史上最大の魔力を持つといわれたあの魔王モートでさえ、できなかっただろう。それをこの少年はおこなった。何の苦も無く。

この黒髪の美しい少年。こんな子供に、あの魔王モート以上の力があるというのか。

まさか、そんな事が。

「あなた、どこかに行く当てがあるの？無いのなら、私の城に来ない？」

エレインがティアに言った。この子の服装を見る限り、まともな生活をしていないというのはわかる。まるでもう何ヶ月も辛い旅をしてきたよう。

ティアは首を横に振った。

「僕、行かなきゃならない。もう一人の、僕と同じ人に会うために。でも、僕達はもう一度、会えるよ。会うべき時に、必ず。僕達は引き付け合う。僕にはわかるんだ」

ティアはそう言うのと、歩き出した。

エレインは呼び止めようとしたが、やめた。これは別れではない。エレインも感じるのだ。私たちは、もう一度会えると。会うべき時に、会うべき場所で。その出会いが何を意味するか、何をもたらすかはわからないけれど。

ティアが立ち止まって、振り返った。

「エレイン、夢には気をつけて。夢は繋がっている、あちら側と。僕等の根源と。そして、そこは彼の領域でもある。彼はいつも僕らを見ている。決して、惑わされないで」

そう言うのと、再びティアは歩き出した。

「変な子ね」

リユネットが言った。エレインは立ち去るティアの姿を、いつまでも見ていた。

目を閉じたまま、玉座に深く腰掛けていたモードレッド。その目がゆっくりと開いた。いつものまにか、眠っていてしまったようだ。

とても気分がいい。『時の禁呪』がこれほどの力を与えてくれるとは、思っても見なかった。今なら、何でも可能な気がする。これだけの力があれば、もはや十三使徒など問題ではない。

確かに『時の禁呪』は困難な呪術だった。術者には非常に繊細な、そう針の穴にラクダを通すような、魔力のコントロールを要求される。ニトログリセリンを抱えながら細い綱を渡り、火の輪をくぐっていくような危険で慎重な作業。古の大魔導士達の多くがこの禁術に挑み、魔



力を制御できずに、自己の魔力に身を焼き尽くされて死んでいった。この禁術を独力で成功させる事が出来たのは、唯一モートだけだった。彼だけが比類なき魔力を持ちながら、その巨大な力を完全にコントロールする事ができたのだ。モードレッドには、いや世界中の誰にだって無理な芸当だった。

しかし、時代は変わった。この数百年の間に、ボールスやヘンギスト、その他多くの錬金術士達の功績により、魔法科学は飛躍的に発展した。人類が築き上げてきた、偉大な知だ。その『知』の力が、モードレッドに『時の禁呪』を成功させた。現代のテクノロジーを使えば、自己の魔力制御はごく最小限に抑えられる。

そしてモードレッドは力を得た。彼と契約した四人の魔族も。

モードレッドには、モートのように十三人にも魔族に力を与えるほどの魔力は無かった。たった四人だけだ。しかし、それで十分だった。四魔族の力は十三使徒をも超える。

モードレッドは広大な謁見の間で一人、高い声で笑った。六百年前、十三使徒として魔族に転生したあの時、これほどの喜びはあれ以来だ。いや、それ以上だ。

「なあ、そこにいるんだらう？」

誰もいない暗く静かな謁見の間で、モードレッドが笑いながら言う。声が巨大な天井に反響した。もちろん、何の返答もない。

「わかっているぞ。おまえはいつも見ている。どうだ、わかるか？わたしは人間も魔族も越えた。そして、おまえを殺して、わたしはモートをも越える王になる。世界の全てを、あのモ―

トすらできなかった運命をも統べる偉大な王だ」

モードレッドは玉座から立ち上がった。誰もいない謁見の間。だが、彼の目には確かに映っている。あの男が。そう、六百年前、霸王モートの大陸統一の祝賀会で突如現われたあの時のように。全てはあの時から。そして、我々は魔族となり、神と戦う宿命を背負ったのだ。

「さあ、約束の時は近い。おまえの生み出した光の子が勝つか、我々闇の一族が勝つか。おまえの予言が成るか、魔族が生き残るか。全てはこの時のために」

モードレッドは自信に満ち溢れた声で、笑った。

古城カムナギト。

静寂の闇夜にひっそりと、まるで自己の存在を隠すかのように建つ古城。その静寂が突如、破られた。轟音と共に、城全体が大きく揺れる。

エアリアルが城内を走る。今の音は……。

「ネヴィーナ！」

ネヴィーナの部屋の扉を蹴り破るように押し開ける。そこでギョツと立ち止まった。ネヴィーナの部屋が文字通り半分欠けている。何が起こったのか、部屋の半分は石造りの天井も壁も、跡形もなく破壊され、ぼっかり空いた空間から星空が見えている。

ネヴィーナが部屋の片隅で壁にもたれかかり、荒い息を付いている。

「どうした！敵襲か？」

「……近づかないで……」

駆け寄ろうとしたエアリアルを、掠れた声で制止するネヴィーナ。エアリアルはその言葉と共に、ネヴィーナの異常な殺気を感じて、思わず足を止める。

ネヴィーナの顔色は真っ青だった。額からは汗を流し、呼吸は乱れ、そして、小刻みに震えている。だが、その瞳はどこを見ているのか、異常に力強い目で、空間を睨んでいる。部屋中に満ちる、ネヴィーナからの異様な圧迫感。エアリアルは思わず息を呑んだ。近づけば、有無を言わず殺されそうな威圧感。

やがて、その圧迫感が徐々に薄れていく。ネヴィーナの呼吸は落ち着きを取り戻し、その瞳からも殺気が消えた。

エアリアルがネヴィーナに近づく。

「……何があった？」

「……夢を見たの」

ネヴィーナが掠れた声で言う。

「夢？」

「モートが、わたしの前に立っていた。何かを喋ってた。ほとんど、聞こえなかったけれど……」

「……」

ネヴィーナはそこで言葉を切った。自らの手のひらを見つめる。

「……何かと呼応するかのように、わたしの中の何かが変わっていく。少しずつ、少しずつ……わたしの中の魔力が、抑え切れない。破裂してしまいそう……」

ネヴィーナの言葉に、エアリアルは破壊された部屋を見た。広大な石造りの部屋の半分を跡形もなく消し飛ばしてしまふ力。これを、ネヴィーナがやったというのか……。

ネヴィーナが立ち上がった。自ら破壊した部屋の淵に立ち、そこから外を見る。まるで零れ落ちそうな星空。風が、彼女の美しい髪をなびかせた。

「モートが言った。『終末の時が近づいている』……」

ネヴィーナが呟いた。

「流れを感じる。決して、人には逆らえない、大きな流れ。破滅が近づいてくる……」

頭の中に響く、モートの言葉。

人類の向かう、最後の戦い。絶対なる者との、最終戦争。

「遙か南に、わたしと同じ力を感じる。祝福されし者、光の王。わたし達魔族の、最大の敵」  
光の子、アトロ。精霊達に祝福されし聖王。魔族にとっては最も忌むべき者。

魔王、モート。神に弓を引いた霸王。魔族にとって、絶対の存在。

この磁石の両極のような二人は、しかし、どこか似ていた。どこかで繋がっていた。

そして今、私も何か感じている。南に感じる、最も忌むべき輝く光。その光に、わたしの中の闇が共鳴する。まるでお互いを呼び合うように。殺しあうために、お互いを求めている。

「わたしは、誰なの……?」

ネヴィーナが頭を抑えた。頭の中で響く、モートの声。

遙か南で、光が大きく輝きを増していく。それに呼応するように、わたしの中の闇も深く暗く広がっていく。

ネヴィーナの姿を後ろから見ているエアリアル。皮膚があわ立つ。身震いして、感じた。ネヴィーナの周りに宿る禍々しいまでの魔力を。空気が震え、大地は小さく唸っている。懐かしくも、酷く恐ろしい。冷たく、深く、濃密で、全てを覆い尽くす巨大な力。

あの魔王モートの力、そのままだ。

ネヴィーナは遠い目で、遙か南方を見つめた。

この世に、絶対に存在してはいけない二人。どちらかは消えなければならぬ。

いや、あるいは二人ともか。

エレインは一人、白い世界に立っていた。どこまでも、何も無い。ただ果てしない白い世界。ここはどこだろう。わたしはなぜ、ここにいます。

天から、老人の声が響いた。

「エレイン……選ばれし者よ。汝の役目を果たせ」

「選ばれし者?」

エレインが天を仰いだ。空も、どこまでも、突き抜けるような白。

「暁の、神の祝福を与えられし子よ。世界に光を満たせ」

「神？」

「運命の車輪からこの世に生れ落ちし、第三の王よ。世界に調和を戻せ」

「第三の王？」

「魔王も勇者も越えた、至上の王。栄光を約束されし者」

「それが、わたしなの？」

「光の衣を纏い、黄金の海を渡る、白き雌鹿」

「あなた、誰？」

「運命の車輪からこの世に生れ落ちし闇の子は、車輪に戻さなければならぬ。あるべき世界に」

「わたしに何をしろというの？」

「約束の時は近い。光で闇を照らせ。忌むべき子を殺せ。時は無い。このままでは、終末が、近づいて……い……い……」

老人の声が乱れた。白い世界の果てに、まるでガラスのようにひびが入った。天からの声にノイズが入る、

「また……だ……誰かが……邪魔……を……」

老人の声が、どんどん小さくなっていく。それと共に、白い世界の端に闇が生まれた。闇は

どんどん近づいてくる。世界の輪郭が徐々に縮まっていく。世界が縮まるにつれ、エレインは自分の身体がどんどん大きくなっていくと錯覚した。恐ろしいような、嬉しいような。もう黒い空に頭が届きそうだ。力を感じる。溢れ出そうなほど、身体中にみなぎる熱い光が。私は世界を突き破る。

エレインは目を開けた。そこはエレインの自室。暗い部屋、白いベッドの上だった。  
……夢。

エレインはベッドの上で仰向けになりながら、暗闇の中、手のひらを目の前にかざした。黒い天井に、ぼんやりと白い手が浮かび上がる。白く細い指。薄い滑らかな肌。見慣れた手のひら。何も変わりがない。いや、

やはり、以前の私と何が違う。手のひらの中に、体の奥に。細く滑らかな、澄んで心地よく冷たい、それでいて強靱な、流れが。

今日の、あのラモラックという魔族との戦い。あの時の私は、明らかに以前の私と違った。身体にみなぎる力。

何か、私を変えていく。それとも、私がある何かを変えていくのか。

まるで引き合うように、私達は変わっていく。まるで何かに備えるように。こうなる事が宿命であったように。

エレインはベッドから起き上がり、闇夜にテラスに出た。星空の下、眼下には巨大なキャメロンの町並みが広がっている。

『選ばれし者よ。汝の役目を果たせ』

老人の声が聞こえた。耳からではない。頭の奥に、言葉が貫き通った。

エレインが遙か北の大地を見つめた。心地よく冷たい風が、エレインの側を流れていった。

この風は遙か北、魔界から吹き付ける風。幾千年も、いや何万年も何億年も、悠久の時をずっと吹き続けてきた風。

あの声は言った。『約束の時は近い』。私のこの力は、そのためのものなのか。

三日月の澄んだ光を浴びて、エレインはずっと北を見つめていた。

魔王との戦い。己の宿命を感じて。



## 古城カムナギムト

激しい音が部屋から溢れ出る。

床を叩く音、金属が破壊される音、ガラスが砕かれる音。

その全てが激しく、荒々しく、行為者の心を表しているようでもあった。

その部屋の扉の前、エアリアルが黙って立っていた。

「ネヴィーナ……」

普段その部屋にそのような音を流れない。

基本的には沈黙を、そして時折人間が好んで聴く、音楽、というものが流れていた。

先日、ネヴィーナが破壊した壁はすでに修繕が終わっていた。

しかし、まるでまた壊してやると言わんばかりの行為が室内で行われているようだった。中から声は聞こえない。破壊音がまるで慟哭のように鳴り続けている。

一際大きな音が聞こえたとき、エアリアルは部屋に入った。

「っ……くっ……」

部屋の中央で自分の体を抱くように蹲っているネヴィーナ。

最後の破壊音はその蹲っている傍の床に拳を叩きつけたのか、決して控えめとは言えないクレーターが形成されていた。

「ネヴィーナどうしたんだ？いつものお前らしくもない」

エアリアルが声をかける。

「私らしくない……」

エアリアルの言葉をただ反芻するだけに見えた矢先、ネヴィーナで激しく感情が爆発する。

「そう、私じゃない！私じゃないものが私の中にいる！これは…これは！」

衣服の胸の部分を引き張りながらそう絶叫する。

今のネヴィーナを包む感覚。

力が溢れる。

それだけならばいい、しかしネヴィーナは自身の中に違う者の介入を感じいた。

それが我慢ならない。

「ネヴィーナ……」

どうなるのだろうか。ネヴィーナにはそんな言葉が脳内を埋め尽くし、エアリアルの声は届かない。

「私はいったいなんなの！」

ヒステリックに叫ぶ。

自慢の髪を掻き乱し、床に蹲るネヴィーナ。

エリアルは思う。

(こんなときガルガンデイがいれば、ネヴィーナの支えになっただろうが……俺では役不足だ)

ネヴィーナとガルガンデイの結びつきは強い。

互いに補完しあっていたからといてしまえば話は早いが、まるでパズルのピースのように足りないものを互いが持っていた。

その重さは十三使徒であるネヴィーナが地位を捨て、三百年にも渡り彼を探し続けていたことからもわかるだろう。

「ヴェネルクス……」

ネヴィーナの眩きが部屋に静かに流れ、消えていく。

そのとき、ネヴィーナにガルガンデイの言葉が思い起こされる。

「過去？くだらないものに時間を割いているな、ネヴィーナは。過去は過去だ。それ以下でもそれ以上でもない。過去は今の俺たちに少しの影響を与えるかもしれない、だが結局今を決めるのは、今の自分、だろ？」

呆れたようにガルガンデイ。

「強いよね、ヴェネルクスは」

「ふむ、今の返答で強いかどうかの判断はつかないと思うが？」

発言の意味を取り違っているガルガンディを見、くすりと笑うネヴィーナ。

「だが、過去は過去で重要でもある。俺がここにいる理由は過去の因縁からだ。過去を知ることも自分にプラスにはなることが多い。過去の戦争など、良い手本になる」

自分の野望を思い起こしてか、ニヤリと笑みを浮かべるガルガンディ。

「プラスに？自分の過去が？」

ネヴィーナは考えもしなかったこと言われ聞き返す。

「ああ、稀にだが、自分が何をなすべきか、思い出させてくれる」

「何をなすべきか……」

「過去を恐れる必要はない。今は過去を知ったくらいでは変わらん。変わると感じるのは、それはネヴィーナ、君が成長したから変わったのだ。過去を知ったから変わったのではなく、過去を知って成長したから変わったんだ」

そう言って、ガルガンディは無骨な笑みをネヴィーナに投げかけた。

「過去を知って成長する……」

ガルガンディを思い起こしたのか、ネヴィーナは不思議と自分の中の異物が少なくなったよ

うに感じた。

「ネヴィーナ？」

傍にいたエアリアルが声をかける。

「エアリアル、心配をかけたわ」

そこには、いつもときほど変わらないネヴィーナがいた。

「今から行くところがある。トウオンたちにそう伝えておいて」

そう一方的に捲し立て、窓の方へ歩み寄るネヴィーナ。

「おっおい、どこにいくってんだ！」

「私を知るために、私を知るものところへ」

問いかけるエアリアルに、ネヴィーナはそう言葉を残し、闇夜に消えた。

## 魔界の森の奥

「クマネコの反応は？」

アムリタがそうメルフィナに問いかける。

「今反応がでただけねど……急速に小さくなっていった」

メルフィナが自信なくそう返す。

「小さく？ ネットコになにかあったのか？」

アムリタの前でロアが言う。

「その可能性は高いだろう、急いだほうがいい」

アッドはそう呟き、馬に鞭を入れる。

「だな」

ロアもすぐさま同意し、馬を走らせる。

暗い魔界の森を、魔力の波動を頼りに駆け抜ける。

今のところ運がいいのか、魔族との遭遇はない。

「こっちであつてるよな？」

「ええ、こちらの方で小さいですが反応が」

馬を走らせ始めてからどれくらいの時が流れただろう。

少なくとも日の光などない魔界では、アッドたちは時間の感覚が迷走をし始めていた。

「まだか？」

静かにアッドが問いかける。

「あともうすこ」

「止まれ」

メルフィナがそこまで言いかけたとき、ロアの静止の声が小さく、しかし強く放たれる。前方をじっと睨む四人。

「魔族だな」

「ああ」

確信と共に馬を下りるロアとアッド。

「メルフィナはアムリタの援護を頼むぞ」

腰にある剣を静かに抜きながらアッドが言う。

拳を鳴らしながら

「久々に腕が鳴る」

ロアが口の端に笑みを浮かべていう。

「確かにな」

アッドも同意する。

二人とも馬上には飽き飽きし始めていたのだ。

スリルという名のスパイスは旅には無くてはならない。そう言った学者の言葉をふとメル

フィナは思い出した。

その時、向こうから十数匹のトロロークが現れる。お世辞にも高位とは言えない。

「人間ノニオイ……」

「ミツケタゾ」

口々にそう言い、こちらを睨みつけてくる。

「おい、聴いたか？」

「ああ。こんな森にいる酔狂な人間はアムリタ以外には一人しかいないな」

二人は顔を見合わせて笑みを浮かべる。

「獣のような咆哮と共に押し寄せるトロローク。」

「じゃあ、さっさとすませるか」

「ああ」

軽く言い、戦闘に突入する二人。

緊張、気負い、不安はない。

目的のものを近くに感じたのだから。

### 魔界の最西端

「ここに来るのも何百年ぶりかしら」

ネヴィーナは北の端から西の端へ移動し、そう眩く。

髪を触る風は懐かしくもあり、忌々しくもあった。

ここにはネヴィーナにとっていい思い出と呼ばれるものがなかった。

といつても、記憶に残るほどいた記憶も無い。

ただ、純然たる事実、ここに「母」がいる、そのことだけしたネヴィーナは持っていないなかつ



た。

生き物の身を削ぐために葉をつけている草の絨毯をしばらく進んだ時、ネヴィーナの目にカ  
ムナギムトに劣らぬ古城が瞳に映りこんだ。

一瞬心臓が跳ねる。

「ここで、私は成長する」

そう決意を口にするので、跳ねた心臓は何事もなかったかのように落ち着いてた。

「私はいくわ、ヴェネルクス」

そう心の中で告げ、古城の門へと足を進める。

葛が纏わり、ただ純粹に大きな扉。威圧感だけを持ち、他者を拒絶する為に存在する。  
頻繁には開かれないのだろう。もう長い間開かれた様子を感じられない。

辺境の地であり、扉の風化も早いのか、建造時の彩色を窺い知ることとはできない。

ネヴィーナにとってはあまり感慨もない、使徒にとっては薄い扉であるはずだった。

しかし、その扉が持つ威圧感か、ネヴィーナはその扉に手をかけることを躊躇っていた。

「ヴェネルクス」

ネヴィーナにとっての呪文を呟く。

背をガルガンディ見ている気がした。

「あなたに笑われるのは癪だわ」

軽く笑みを浮かべ、扉に手をかける。

ゆっくりと開いていく。過去への扉。

「私は強くなるわ、ヴェネルクス」

ネヴィーナは心の中でそう宣言し、古城の門をくぐった。

「これであらかた片付いたか……」

一階の広間にて、装甲蟲を斬り倒したカイルが言う。

「しかし遅いな……そろそろコーディア様のほうに動きがあってもいいはずなのだが」

「そうだな。ここも片付いたし、俺達も参戦しに行くか？」

カイルに近づきながら、フォルデが呑気そうに言った。

その時だった。小さな地揺れと共に、金属音による足音のようなものが彼らの耳に入ってきた。その音はどんだん彼らに近づいており、やがて、その音の正体が姿を表す。

「お、おいおい、また出てきたぞ」

その姿は、二足歩行で長身五メートルもあろうかという巨大なものであった。その装甲機体の数箇所が、船の大砲のようなもので構成されていた。

「やばい……！散れ！」

カイルが何かを察し、ブラックナイツ全員にそう告げる。同時に、装甲機から複数の鉄の弾が一斉に発射される。その鉄の弾が地面や壁に触れると同時に、それらは爆発を起こし、辺り

を破壊する。その爆発に、ブラックナイツの兵たち数名が巻き込まれる。

「船に付いている大砲を標準装備しているってのか!？」

フォルデが驚きのあまりそう叫ぶ。

「側面から回り込んで、間接部分を攻撃するぞ!フォルデ、お前は反対側から回れ!」

そう言いながら、カイルは装甲機の右手から側面に回る。そのカイルの目に飛び込んできた光景に、彼は絶句する。側面に回りこんだ時、その装甲機と同等の形をとった装甲機が、奥の通路から何体もこちらに向かつて歩んでいたからである。

「いかん……フォルデ、逃げ……!」

カイルがそう言いかけた時、奥の通路の装甲機から、鉄の弾が発射される。右手から回り込んでいたカイルとブラックナイツたちは、無惨にもその砲撃の直撃を受けてしまう。

「カイル……!？」

フォルデが絶句する。彼の目にはバラバラになるカイルの体が映っていた。装甲機達は、次の目標に向け、歩みを進める。

「やばい……散開しろ!やつらの正面には回るなよ!」

フォルデの合図で、装甲機の周囲を取り囲むように散開するナイツ。しかし、装甲機は通路の奥からどンドンとやってくる。

「……何体いるんだ!伝令、外のナイツにこの事を伝える!」

フォルデのその言葉に、数名のブラックナイツが出口へと走る。なおも増え続ける装甲機。

その数はすでに二十を超えていた。

「こんなものを隠していたとは……コーデリア様は何をやってるんだ……!」

言いながら、フォルデは装甲機の脚の間接部分を狙う。間接部を打たれた装甲機は、軸を失い、地面へと倒れ込む。

「装甲機と一緒に間接部は攻撃が通る!そこを狙えよ!」

フォルデの言葉どおり、間接部分を狙って攻撃を繰り返すブラックナイツ達。しかし、その圧倒的な巨体と数で、一人、また一人と命を失っていくブラックナイツ。

「このままじゃ……ちくしょう!」

叫びながら、フォルデは次の装甲機の間接部を狙う。

「何か様子が変わね……」

外の装甲機やアルテオムの私兵をあらかた片付けていたヴァネッサが、複数の爆発音を遠巻きに聞きながら言う。

「コーデリア様からの動きもありません。何かあったのでしょうか?」

その横で、フランツが心配そうに言った。

「敵はだいたいこちらで惹き付けたはずだし、ゼト將軍やロット殿も一緒だから、そう簡単にやられるはずはないと思うけど……それにしても遅すぎるわね」

「あわわ……ロット様大丈夫でしょうか……」

その脇で、ルーシイが今にも泣き出しそうな声を出しながら言う。

「大丈夫だ。ロット殿は、そう簡単にやられるお方ではない。ヴァネッサ殿もそう言っているだろう」

「そうよルーシイ。大丈夫だから、あなたは怪我人の治療を急いでちょうだい」

「でも私……ロット様が心配で……その……」

ふうっと、溜め息をつくヴァネッサ。馬から降り、自分の足でルーシイへと近づく。そっと手を伸ばし、その手をルーシイの頬へと当てる。

「ルーシイ。あなたは今までロット殿の何を見てきたの？そんなに信頼できないの？」

「そんな……信頼してます！私はただ、心配なだけで……」

首を横に振りながら、めい一杯否定するルーシイ。そのルーシイの目を見ながら、ヴァネッサは言葉が続ける。

「いいえ、あなたは彼を信頼してないわ。彼らの身を案じているのは皆一緒よ。私だってコールドリアの事が心配だわ。でもね、彼女を信頼しているからこそ、私達はこうやって自分の任務を遂行しているのよ？わかる？彼女の事を信頼なんかしてなかったら、少数で城内に向かわせたりしないし、ここで待機せずにもう城内へ踏み込んでいるわ。あなたもロット殿を信頼しているなら、何故彼が勝って戻って来ると信じてあげないの？私達は彼らを信じて、今自分のやるべきこと、できることをやらねばならない。彼等は必ず勝つわ。だからこそ、私達も負けるわけにはいかない。何もしないわけにはいかない。だからね、ルーシイ。あなたもロット殿の

事を信じて、今やれることをやるべきなのよ。だって、あなたにはあなたにしかできない事があるのだから」

「ヴァネッサさん……ごめんなさい。ロット様がいたら、ヴァネッサさんと同じことを言うような気がします。今自分にできることをしろ……と」

「そうかもしれないわね。じゃ、怪我人の治療お願いするわね」

「はい、私やります！」

ルーシイは杖を握り締めながら、元気よくそう答えた。

「ヴァネッサ様、誰かきます」

フランツが静かにヴァネッサに伝える。

「あれは……ブラックナイト？」

遠方よりヴァネッサの方へ近づいてくるのは、ブラックナイトの兵二騎であった。

「どうした！？何があった！」

まだ近づききっていない二騎に対し、大声で尋ねるヴァネッサ。二騎は歩みを止めず、ヴァネッサの元まで近づき、馬を下りる。

「報告します！城内より、装甲蟲とは違う機械兵が多数現われました！」

「装甲蟲ではない？一体何なの？」

「二足歩行の巨大な機械兵です。現在ブラックナイトが交戦中ですが、どうにも歯が立ちません。カイル様はすでに戦死されました……」

「カイルが！？……それで、コーディネリアは？」

「コーディネリア様はまだお戻りになりません！ブラックナイツは現在、フォルデ様が指揮を取っておられますが……相手が相手ゆえ、このままでは……！」

「城内に踏み込んだ方がよさそうね……」

ヴァネッサの言葉が終わると同時に、城門前で爆発が起こる。

「まさか……あの爆発……」

「ブラックナイツが……突破された……？」

二人の伝令兵が驚愕の声をあげる。

「行くしかないわね。ガウエイン殿！ルーシィとフランツを連れて、城内へ行ってちょうだい。コーディネリア達がまだ生きている可能性があるわ」

「承知した」

短い返事で返すガウエイン。ガウエインを身ながらこくつと頷くヴァネッサ。そして、彼女はフランツの方へと歩み寄る。

「フランツ、辛いのはわかるわ……でも、今は堪えてちょうだい。お願い」

「大丈夫ですヴァネッサ様。私も兄も軍人です。いつかこうなるのではないだろうかと覚悟は決めています。それは兄も同じだと思います」

「フランツ……お願いね。よし、他の者は私に続け！一気に城門前まで突破する！」



第一ミルチア城、王の間にて。

コーデリアはただじっと、アルテオムの死体を見続けていた。

「コーデリアさん！何か起こっているのは事実です！早く行かないと……」

ロットがコーデリアに声を掛ける。だが、コーデリアは黙ったままずっと同じところを見つめているだけだった。

（わかっている……でも、体が動かない。声が出ない。なんだろう……どうしようもないくらいに悪い予感がする。その予感に、自分が押しつぶされてしまいそうなほどの不安を感じる。私はどうしてしまったんだろう……）

そんなコーデリアに、ゼトが近づく。

「コーデリア、お前の気持ちにはよくわかる。私とて、何か嫌な予感がするのだ。だがな、起こってしまったことは仕方がない。アルテオムの事については後で考える事にするんだ。今は、何が起こっているかこの目で確かめる事が先決だぞ」

「ゼト……そうだな。ここで考え込んでいても仕方がない。すまないなロット殿。行こう、何が起こっているか、この目で確かめないと！」

そう言い、コーデリアは走り出す。王の間の扉を蹴り開け、廊下に仁王立ちのティティスに目をやる。

「ティティス！」

コーデリアがティティスの名を呼ぶ。その声にピクリと反応し、ティティスがコーデリアの

元に駆け寄る。

「ゼト、ロット殿。悪いが先行する！」

叫び、ティティスへと飛び乗るコーデリア。手綱を握り、ティティスを一気に走らせる。階段を降り、廊下を走りぬけ、ブラックナイツ……あのカイルとフォルデに任せた大広間を目指す。大広間が近づいてくる。さっきまで聞こえていた爆発音は、その広間からは聞こえてはこなかった。変わりに、女性の叫び声が聞こえてくる。

コーデリアが大広間に辿り着く。そして、彼女は目に飛び込んできた光景に絶句する。

見たこともない装甲機が数体と、ブラックナイツ達の死体が転がって、見るも無惨な姿へと変貌していたその大広間。

「コーデリア殿！」

呼ばれたコーデリアは、その声の主達の方へと向き直る。そこには、ガウエイン、フランツ、そして叫び声の主ルーシイがいた。

「これは……いったい……」

「我々も今来たところで……何やら、そこに倒れこんでいる装甲機が何体も出てきているようですな。今も外でナイツ達が交戦中のはずです」

ガウエインが簡潔に状況を説明する。

「アルテオムの最後の言葉……これがそうだったのか……？」

ブラックナイツの面々を見ながら、力なく呟くコーデリア。

(これが……私達の迎える結末だと言うの……?これじゃ、本当にただの無駄死にじゃないか!)

怒りの表情を露わにするコーデリア。

「う……コーデリア……様?」

名を呼ばれ、声の主の方に向き直るコーデリア。そこには、左足と左腕のないフォルデが壁にもたれかかっていた。

「フォルデ……!」

声にならないような声をあげ、ティティスから飛び降り、急いでフォルデへと駆け寄るコーデリア。

「すみません……やられちゃいました……」

「わかった。わかったから喋るな!ルーシィ!回復魔法を……早く!」

「は、はい!今行きます!」

コーデリアに呼ばれ、ルーシィが慌ててフォルデの元に駆け寄る。

「兄さん……!」

「フランツか……無事だった……か」

「兄さん……そんな……」

「馬鹿……野郎!お前も騎士として生きてる以上、私情をはさむんじゃない……!始めに言っただけ……騎士になるなら、戦いの中では兄弟という事を忘れろって……な」

フォルデのその言葉に、黙り込むフランツ。

「ぐっ……くそ……コーデリア様。奴等は正面からしか砲撃できないんです。それがわかっていたのに……数で四方囲まれて……俺、やっぱ指揮官むいてないですね。カイルの奴が生きてもうちよいましな結果になってたものを……」

「カイルも死んでしまったのか……」

「ええ、真つ先に……ね……」

「すまない……ここをお前達に任せた私の責任だ……」

「へっ……何謝ってんですか。あなたの信頼に答えれなかった俺たちの責任ですよ……」

「……」

言葉を失うコーデリア。

「……壊ちゃん、もういい。無駄な体力は使うな……」

フォルデはルーシイを制止する。言葉を終えると、彼は力なく事切れる。

「そ……そんな！」

目から涙を零しながら、ルーシイが言った。

「……覚悟はできるといつも自分に言い聞かせてきたんだ。でも、現実を目の当たりにして僕は……僕は……！」

フランツも涙を流しながら叫ぶ。そこへ、ロットとゼトがようやく追いついた。

「コーデリアさん……これは……！？」

「ロット殿、ゼト。見ての通りだ。奴にしてやられたよ」

二人の方を見向きもせず、コーデリアは淡々とそう言った。

(……腐るな！ここで私が腐ったらどうなる？まだよ。まだ耐えるのよコーデリア！)

自分に壮言い聞かせ、ぐっと拳を握り締めるコーデリア。

「フランツとルーシーは生存者がいないか確かめて！ゼトは外部に出ているミルチア兵をかき集めてちょうだい。できるだけ近くににいる者からでいい！ロット殿とガウエイン殿は私とともに城外へ出るぞ！残ってるナイツで戦線を展開し、なんとしても奴らを止める！

こうなった以上、もう我々の濡れ衣などどうでもいい。守るべきは、ミルチアの民だ！

行くぞ！」

コーデリアの言葉に、全員が力強く頷いた。

第一ミルチア城門前。

ルビーナイツとエメラルドナイツは戦線を展開し、装甲機の進行を食い止めんと交戦を繰り返していた。

「クーガー！状況は？」

クーガーの姿を見つけたヨシユアが問う。

「あまり思わしくないが、ヴァネッサの部隊が合流してくれたおかげでなんとかかなりそうだ」  
「そうか……とにかく、街のほうに行かさないう気をつけないとな」

そんなやりとりをする二人の前に、一人の女性が姿を現す。

「おいおい、民間人がこんな所に来ちゃ危ねえって……」

「ボールの手掛けていたアルテオムという奴を四魔候の一人にしようという意向だったが……こうも簡単に殺されてしまうとはねえ……予定が大狂いだよ」

「貴様……何者だ!？」

ヨシユアが腰の剣を抜きながら聞く。

「四魔候の一人、ヘカテ。アルテオムが死んでしまった以上、ここに用はないけど……どうせだから、あんた達の邪魔をして、ミルチアには死んでもらうとしようか」

「魔族……!これ以上、ミルチアを破壊させてたまるか!」

ヨシユアが駆ける。手にした剣で斬撃を繰り返す。その残撃を、軽やかに捌いていくヘカテ。「人間の中ではそこそこやる方か……だがな」

反撃に転じるヘカテ。もう一本の剣を抜き、両手でヨシユアを攻め立てる。

「うおおおおお!」

なんとか反撃に出ようとするヨシユア。だが、ヘカテの放つ一閃に、無惨にも両手を斬りおとされてしまう。

「……!?!」

一瞬の出来事に、声も出ずにいるヨシユア。ヘカテは容赦なくヨシユアの胸へと剣を突き立てる。

「ヨシユアああ！」

クーガーが槍を握り、ヘカテに特攻をかける。

「ふん……雑魚め！」

叫び、地を蹴るヘカテ。空中へと飛び上がり、二本の剣を交差させる。ヘカテが地面に着地すると、クーガーの首はそこにはなかった。時間を置いて、鈍い音と共に地面へと落ちるクーガーの首。

「弱すぎる……こんな弱い人間から四魔候を選べなどと……モードレッド様の意向がよくわからないわ」

その光景を目の当たりにしたナイツ達が、一斉にヘカテへと槍を突き立てる。しかし、ヘカテはすべての攻撃をかわし、剣を振るう。一振り、また一振りする度に、ナイツ達の命が簡単に失われていく。

「やめろ！」

城内からそこへ辿り着いたコーデリアが叫ぶ。

「今度は威勢のいいお嬢さんの登場かい？」

「貴様……一体何者だ!？」

「はあ……揃いも揃って同じ台詞ばかり。これだから人間って奴は嫌いだね」

「貴様魔族か!魔族が何の用だ……?ただ殺戮を行いにきただけというのか?」

「用事はあったんだけど、無駄足だったね。だからあなたの言う事は間違いではないわ」

「き、貴様！」

ティティスから飛び降り、剣を抜くコーディネリア。その勢いでヘカテへと斬りつける。

だが、ヘカテはその場から一歩も動かさず、コーディネリアの太刀を左手に手にした剣で受け流し、右手の剣でコーディネリアの腹へと突き刺す。鎧の上からでも簡単に通るヘカテの一撃に、コーディネリアは言葉なく膝をつく。

「はう……かはっ……！」

「非力、遅い、もろい……三拍子そろって弱いわね……人間って」

そう言いながら、コーディネリアの腹から剣を引き抜くヘカテ。コーディネリアは吐血し、地面へと倒れこむ。

「コーディネリアさん！」

その光景を見たロットが、悲痛の叫びをあげる。

「次から次へと……退屈だけはさせてくれないみたいねえ」

「貴様……魔族か！よくもコーディネリアさん達を……許さんぞ！」

「おやおや、たまには違う台詞を吐く人間もいるんだねえ。で、許さないならどうするんだ  
ん？」

身構えるヘカテ。その姿を見て、ゆっくりと剣を抜くロット。

「ガウエイン！援護しろ！」

叫び、特攻するロット。ヘカテに向かって、正確に太刀を繰り出す。その間に、ヘカテの横



手に回ったガウエインも攻撃を繰り返す。ヘカテは両手に持った剣で、二人の太刀を軽やかに捌いていく。

「ふーん。人間にしちや、なかなかやる方だ。これは、楽しませてくれるかしら？」

余裕の表情、余裕の口調で語るヘカテ。相変わらず、正確に二人の太刀をかわしていく。ロットが攻撃を繰り返す、それをサポートするようにガウエインの太刀がヘカテを襲う。

「なかなか息の合ったコンビネーションだ」

言いながら、笑みさえ浮かべるヘカテ。その傍で、意識が遠のく中、言葉もなくその光景を見つめるコーデリア。

（何故魔族が……ああ、今状況はどうなってるんだろう……？このままじゃ本当にミルチアは死んでしまうかもしれない……。最初から、あのアルテムを殺していれば、私一人逆賊扱いされるだけで、こんな事にはならなかったんだろうな……。私……。このまま死んじゃうのかな？）

色々な事がコーデリアの脳裏をかすめる。だが、コーデリアにはこの一連の出来事と現在の状況以外に考えることができなかつた。

うつろとするコーデリアの視界に、ティティスの姿が映る。

「コーデリア、私の声が聞こえますね？」

「……？」

何処からともなく聞こえてくる声に、視線だけを左右に動かし、声の主を探すコーデリア。

そして、その声の主はティティスだと確信する。

（ふふ……とうとうティティスの声まで聞こえてくるようになったか……。私ももう長くないな……）

—そう、あなたは時機死ぬでしょう。もう間もなくと言ってもいいでしょう。

（そうでしょうね。死ぬのは怖くないが、このまま死ぬのは悔やまれるわ……）

—一つだけ、このミルチアを救う方法があります。しかし、それはあなたの命……。すべてを代償にしなければいけない。コーディア・レキよ、あなたはそれに耐えることができますか？

（もともと、もうない命。代償も何もない）

—それは命を捨てることよりもっと辛いこと。それでもあなたは、ミルチアを救いたいと望みますか？

（構わない。ミルチアを救うことができるなら……。なんだって構わない）

コーディアの顔に、自らの顔をそっと近づけるティティス。

「このままではらちが明かない……。私が奴の二刀を抑える。ガウエイン、君はその間に奴の本体へ斬り込んでくれ！」

「わかりました！」

ロットがヘカテに向かい駆ける。そのロットの一撃を振りはらわんと、ヘカテが左手の剣を振るう。しかし、ロットはヘカテの左手を蹴り上げ、本体へ斬り込む。慌てて右手の剣でロットの一撃を捌くヘカテ。

「今だ！」

ロットの叫びに、ガウエインがヘカテに攻撃を仕掛ける。だが、その攻撃は何か<sup>に</sup>捌かれ、ガウエインは反撃を食らってしまう。

「ぐおっ！」

肩を大きく切り裂かれるガウエイン。慌ててヘカテとの距離を取る。

「人間風情にここまで楽しませてくれるとは思ってなかったよ。でも、そろそろお終いにしよ  
うかねえ」

ヘカテの腕が四本に増えている。ガウエインの剣を捌き、肩を切り裂いたのはその新たに増えた二本の腕であった。

「さあ、コーデリア・レキよ！自らの主を殺し、その力を解き放ちなさい！」

そのティティスの言葉に、目を開き、飛び上がるコーデリア。手にした剣で、ティティスの首をいともあっさり飛ばす。

「なんだと……？」

その光景を見ていたヘカテが、驚愕の声をあげる。

「ロット！ガウエイン！下がっている！」

叫び、地を蹴るコーデリア。人間とは思えぬ速度で、ヘカテへと一気に間を詰める。

「ふん、なんだかわかんないけど……相手してやるよ！」

ヘカテが四本の手に持つ剣で、それぞれ攻撃を繰り出す。だが、そのすべてをかわし、捌く

コーデリア。

(こいつのこの目は……そして、この感じは……!)

ヘカテが飛び退き、コーデリアとの距離を取る。

「貴様、吸血鬼だな!」

ヘカテのその言葉に驚きの表情を浮かべるロットとガウエイン。コーデリアだけはただ、ヘカテをじつと睨みつける。鋭い金色の瞳で……。

「ふん……どうやって吸血鬼になったのかは知らないけど、所詮吸血鬼は下等魔族。貴様に勝ち目はないよ!」

コーデリアとの間を詰めるヘカテ。四本の剣でコーデリアを攻め立てる。しかし、そのすべてを確実にかわしていくコーデリア。

「どうしたい? 避けてばかりじゃ私は倒せないよ!」

「黙れ!」

短く言葉を吐き捨てると、剣を一閃させるコーデリア。その一撃に、ヘカテの二本の腕が切り落とされる。

「なん……だと?」

一瞬の出来事に、啞然とするヘカテ。コーデリアは構わず、そのまま体を半回転させ、ヘカテの首を飛ばした。

ふうっと呼吸をつき、剣を収めるコーデリア。ゆっくりロット達の方へと向く。

「コーデリアさん……」

ロットが悲しげな声で言う。

彼らには察しがついていた。コーデリアが吸血鬼であるというヘカテの言葉。そして、コーデリアがテイティスの首を切り落とした事……。吸血鬼は噛んだ者を新たな吸血鬼にするという事も知っていた。

「テイティスに噛まれ、吸血鬼になった……」

そのロットの言葉に、コーデリアは悲しい表情を浮かべる。

「悔いはないさ……ミルチアを救うためだ。それに、あのままだと私は死んでいたんだ。だから、悔いはない……」

コーデリアは相変わらず悲しい表情のまま、どこか遠くを見ていた。

——魔界の南東、暗黒の大森林。

カーマの屋敷を抜け出し、暗黒の大森林を歩き回るリリパット。ネッコに蹴られて折れた肋骨の部分が真っ赤に腫れて、呼吸をする度に苦痛が襲ってくる。額に滲む脂汗。早く治療をして楽になりたいのに、彼は回復魔法というものをとんで知らなかった。

「くそ、くそっ！ネッコ・ヴァンシュタイン……クソオツ！」

ルービンシュタイン家は代々魔法を専門に扱う家系である。このリリパット・ルービンシュタイン少年にもその素質は十分にあり、それなりに将来を期待されたのだが、彼はある感情をきっかけに魔法を使うことをやめてしまった。妹のアリスに対する劣等感である。

双子と言うだけでいつも引き合いに出される。彼の両親はいつでもアリスの魔法に関する才能を褒めちぎり、リリパットは努力が足りないと言われつづけた。両親に認めてもらえなかったことももちろん腹立たしい。しかし、一番の屈辱は、どう鼻屑目に考えても、確かに自分は妹に負けているという事実だった。

彼は詠唱が苦手だった。悪口の言い合いなら負けないが、いざ詠唱をしようとする呪文の

内容が全て頭から飛んでしまい、ごによごによと口籠もって誤魔化して、魔力のフィードバックが不完全なものとなる。出てくるのは線香花火のような小さな炎、雨だれを流れるような弱い水流、静電気となんら変わらない雷。その隣で妹のアリスはと言えば、まるでシルクのスクロールのように流麗な口調でスラスラと文句を歌い、抑揚やアクセントも完璧で、その絢爛さはまさに詠唱そのものが詩歌の如くと言った風情であった。彼女は精神的にも肉体的にも魔法を唱えるために生まれたような、まさしく魔法の天才だった。

自分の魔法に関しての才能の無さに——実際は素質の無いわけでも無かったのだが、妹に負けているのではもはやそんなことは関係なかった——絶望していた彼は、両親が死んでしまっただけで自由になると、さっさとヴァジュラの元へ弟子入りした。そして彼は魔法とはきっぱり縁を切って、劣等感を反動に己の肉体を鍛え上げることに全てを費やした。だがやはり、彼の血にそういった方面の素質は無かった。血に無いものは、いくら努力しても実らない。彼はすぐに二度目の挫折を味わったが、今更おめおめとアリスの下へ帰る訳にも行かず、ひたすら向いていない格闘術の鍛錬に励むしか他に仕様がなかった。——ただ、それでもヴァジュラが彼を見捨てようとしたことは一度も無い。ヴァジュラは全てを捨ててただ強くなるうとするものが好きだったからだ。

しかし、承知のとおり彼の師であり兄であり理解者であるヴァジュラは死に、彼の使い魔であるリリパットは主をみすみす死なせた責任を問われ、カーマに捕らえられ、ついには実の妹であり生涯のライバルとも言えるアリスに助けられた。ここ最近の出来事は彼にとって、屈辱

という名のペンキを幾層にも幾層にも顔面に塗りたくられて、自らの自尊心を道化の舞台に晒しているようなものだった。

「くそお！ ネットコ・ヴァンシユタイン！ カーマ・カメレオン！ アリスも余計なことをしやがって！ 魔法使いなんて大っ嫌だあああ……ん？」

びたつと足を止めるリリパット。彼の行く道の傍らに、クマのぬいぐるみが不自然に地面に転がっていた。せいぜい五十センチほどの、大ききこそ普通のぬいぐるみ程度だが、真っ黒で、目つきは悪く、牙や爪までするどく、可愛げというものがまるで無い。——それは言うまでも無くアルアルパッツに魔力の髓まで吸い取られた例のクマネコ王子だが、（たとえそれが自らの主を絶命たらしめたものだとしても）彼はそんなことを知る由も無かった。

「なんだこりや？」

それでも彼の鋭い直感が、ぬいぐるみに妙な胸騒ぎをかき立てる。

「なんかヘンチクリンな人形だな……ふん、なんでもいいぜ！ クソオ！」

渾身の力を込めてぬいぐるみを蹴り飛ばすリリパット。ぬいぐるみは鳥のように高く高く舞い上がり、曇った灰色の空に大きな穹窿を描くと、大森林のどことも知れない場所にぽとりと落っこちた。三秒後にはぬいぐるみのことなど忘れてしまった。

それからリリパットはネットコやカーマの文句をぶつぶつと言いながら、アリスの住んでいる古く懐かしい我が家を目指して森を歩いた。親の死に目にすら顔を見せなかった彼にとって実に何十年ぶりの帰宅である。



屋敷に近づくにつれてなんとなく見覚えのある風景が視界に展開されていく。遠いセピア色の幻想に現実感という名の彩色が施されると、記憶の海底の奥深い場所からいろいろな思い出が浮かび上がってくる。しかし、リリパットにはそれらがそれほど大切なものではないという気がした。というより、どうでもよかった。魔族の長い長い人生には、ノスタルジイや悔恨などという感情はあまりにちっぽけで詰まらないもので、できる限りさっさと忘れるに限る……なんていう風に彼は考えていた。ただ単純に、彼にはいい思い出というものが無いだけなのかもしれない。——思えば不連続きの人生で、それが改善される気配も無いのだから……。

ようやく屋敷に辿り着く。屋敷は彼の最後の記憶に比べると少し小さい気がした。彼が大きくなった所為かもしれないし、あるいは屋敷自体がぞっとするほど静かで、存在感がまるで感じられない所為かもしれない。立ち並ぶ窓からは明かりがほとんど漏れておらず、良く手入れのされた中庭が逆に寂寥感をかき立てる。

（しんみりしちやってるもんだな。ま、アリスとかメンフィスしかいねーんだから無理ねえか……）

リリパットが外門を開けようとした瞬間、後ろ髪を引くような気配に彼は振り返らざるを得なかった。門の取っ手に手をかけたまま姿勢だけを背後に傾ける。

そこに立っていたのは粗野なローブを纏った、ひよろつと背の高い不気味な男だった。気持ちの悪いほど肌の青白い男で、ぼんやりと遠い目を屋敷の方に向けている。

リリパットは敵意剥き出しの視線を相手に向けた。

「何か用か？おっさん」

男はちらりとリリパットの方を見る。

「……小僧。ここは貴様の屋敷か？」

男は粘着質な、しかし気品のある声でそう言った。

取っ手に置いていた手を腰に当て、真っ直ぐ相手に向き直るリリパット。肋骨の痛みがずきずきと酷くなってきている。彼は顔の汗を拭うと、さっさと相手をどこかへやってしまおうと考えた。

「ここが俺の家だったらなんだってんだ？気味の悪いおっさんだぜ。つまんねえ呪術グッズの押し売りとか邪神教の勧誘とか黒豹新聞とか、ウチはそういうのぜーんぜん間に合ってるからわかんذار？ボンクラ！さっさと失せねえとケツ蹴りとばすぞ！」

リリパットの啖呵に男は全く怯んだ様子も無い。

「小僧、貴様はガリバー・ルービンシュタインを知っているのか？」

不意に父親の名前を出され、リリパットは少し戸惑った。

「……なんだおっさん、親父の知り合いかよ？」

リリパットが言うのと、男はうんざりした感じのため息をついた。

「ふん……まあ、こやつが私を知らぬのも無理は無い。この小僧が生まれる前に、私はあの奈落の岩の監獄に堕ちたのだからな。しかしまさかとは思ったが……本当にこれがガリバーの息子なのか。この教育の行き届いていない野卑極まる物腰は……一体どういふことだ？あやつら

しくもない」

「何をごちゃごちゃ言つて……」

リリパットがまた罵ろうとした瞬間、男は指先をリリパットに向けて、くるん、と宙に小さな輪を描いた。

「うわっ！」

まるで足を釣り糸にでも引つ掛けられたように、リリパットの身体は綺麗に180度ひっくり返る。重力と遠心力が激しく少年の頭を大地にたたきつける。目の前に火花が散り、少しだけ涙が出てきた。

リリパットはそれが男の仕業だと気づいたが、それはあまりに突然の出来事に、正常な意識が戻るまで少しく時間を要した後だった。その間に男はリリパットの目の前にまでやってくる。リリパットは自分を見下ろす男の視線を見つめ返し、ぞっとした。冷酷とか残忍とか、そう言った外見的性質のもっと奥底から漂う力量の渦が、彼の恐怖の首根っこを捕らえて放さない。「聞け、小童め！私は十三使徒アルアルパッツ。貴様の父親の主だ。一先ず宜しくと言つておこう……が、次に非礼があったとき、私は貴様に別れを告げねばならん。分かるな、ボンクラめ！私はあまり気の長い方ではないのだ。心しておくがいい」

そういう残すと、アルアルパッツは外門をくぐり、黙って屋敷の方へと歩いていった。一方、リリパットと言えば、とつくに死んだものと思っていた主人の突然の出現に開いた口が塞がらなかった。墓の下から死んだ親父が出てきたりするよりもずっと驚いた。そして、それ以上に

厄介なことになるのは、ありありと眼前に見えていた。もはや逃げることも適わないだろう。やっぱり、帰ってくるんじゃないや無かったな……と、彼は思った。

——ルービンシュタイン家。

自室に籠って紅茶を嗜むアリス・ルービンシュタイン。その傍らで、執事のメンフィスは後ろに手を組み、どこへとも無くじつと遠い視線をやっていた。アリスは相変わらず自室から出るに出入れぬ生活を送っており、退屈をしてはネツコに手紙をしたためるが、彼から返事が返ってきたことは一度も無かった。

ひよつとして……メンフィスは、本当は自分を騙しているのではないか？あまりネツコから返事が返ってこないため、アリスは時々そう考えることがある。自分の渡した手紙は全てネツコの手に渡らずに、ゴミとして処分されてしまっているのではないか？あるいは、ネツコからの手紙だけが処分されてしまっているのではないか？……最悪、ネツコはこの家にはおらず、自分に黙ってとうに殺されてしまっているのではないだろうか？

アリスはちらりとメンフィスの表情をうかがう。だが、彼の表情からは隠し事の後ろめたさのようなものは全く見受けられない。いつでも堂々として、一執事としてなら恥じることの無い精神と行動を行っていることを、彼自身の表情が物語っている。アリスは自らの矮小な猜疑心を恥じると同時に、しっかりと再確認するのだった。——メンフィス・ブラウンが、アリ

ス・ルービンシュタインを裏切るはずは無いのだ、と。

「美味しい紅茶だわ」

アリスはぼつりと呟いた。

「人間界から入手した、最高級の葉を使っております」

「とてもいい香り……ありがとうメンフィス」

それがいい香りだと感じるのは人間であるアリスだけであり、メンフィスにとっては今ひとつ慣れを許さない、下手をすれば不快さすら催すものであったが、彼はそんな様子はおくびにも出さなかった。ただにっこりと笑って「勿体の無いお言葉」と呟くのである。

アリスは紅茶をテーブルに置くと、ハンカチで口元を拭いて、静かに窓の外をみた。彼女の部屋から見えるのは裏門の方向の、大森林と小さな村が見えるだけの寂しい風景だけだった。

「魔族に戻る方法は見つかりそうなの？」

「……残念ながら、カーマめの呪いは恐ろしく嚴重なプロテクトがかかっている、並みの解呪では歯が立ちません。やはり、カーマ本人に解呪の方法を訊ねてみないことには……」

「そう……」

アリスはメンフィスのそんな言葉を聞いても、最初の頃ほど絶望したりヒステリを起こしたりはしなくなつた。美的感覚、食事、力、能力……たしかに色々な物事が魔族の時とは勝手が違うが、根本的には魔族も人間もほとんど同じなのだ、彼女は最近気づいたのだ。四肢があれば両の目もある。不安があれば喜びもある。嫌なことがあるれば、大好きなことだってある。

人間と魔族という種族の間には、皆が言うほどの絶望的な隔たりはないように彼女は感じた。では、現にこれほどまで人間と魔族を隔絶している壁とは、一体何なのであろうか？

……アリスは考える。

もちろん魔族には戻りたい。自分は魔族として生まれ、魔族として生きてきたのだから。だが、それがいざ適わぬ願いとなった時、――そして、それは十分あり得ることなのだ――自分は一体どうするのだろうか？また、どうするべきなのだろうか？最初は潔く死ぬことを考えた。魔族としての最悪の恥じだと思ったからだ。だが……このまま人間として生きてみるのも、あるいは悪いことではないのではないか？

「アリス様」

「え？」

メンフィスの呟くような声に、アリスは耳を傾けた。

「……もしアリス様が魔族に戻れないような事があったとして……もちろん、絶対にあってはならないことでございますが……ですが万が一そのような事があったとしても、私はアリス様の元を決して離れません。私はルービンシュタイン家の執事でも無ければ、亡きガリバー様の執事でも無く、今はただアリス・ルービンシュタイン様の執事なのですから」

メンフィスは、彼自身の言葉通りに決心したのだった。

「メンフィス……」

「私のような取るに足らないものがそう言ったところで、アリス様の心の支柱としては何の役

にも立ちませんでしようが……それが私の本心でございます。どうか、それだけはお知り置きくださいませ」

メンフィスはそう言うと、肩膝をつき深々と頭を垂れた。アリスは彼の方に向き直り、右手を差し伸べる。

「ありがとうメンフィス。頼もしいわ、誰の言葉よりも……」

メンフィスが、差し伸べられた主の手の甲に口付けしようとした瞬間、高らかなノックの音がドアを打ち鳴らした。

「……誰？」

アリスが訊ねると、ドアの向こうからメイドのアルグレイの声が聞こえてきた。

「お嬢様、メンフィス様！ た、た、た大変でございます！」

屋敷の中に足を踏み入れたアルアルパツとリリパット。本来召し仕えるべき相手であっても、あまりに突然過ぎる来訪は屋敷のメイドたちを相当狼狽させた。

「静かだ……ガリバーは遠征か？」

「違うって。親父はとっくの昔に死ん……」

ぎろり、とリリパットの方を睨むアルアルパツ。

「遠征ではございません。ガリバー・ルービンシュタインは死にましたんです」

リリパットが機械的な口調でそう言うと、アルアルパツはそれほど驚いた様子も無く、少

年の方を見た。

「ふん……死んだ……か。どうりでこんな野生児が育つわけだ……」

と、アルアルパッツは言った。

(ううわ、なんかすっげえムカつく……)

と、リリパットは思った。

「ガリバーが死んだとなると、今の当主は奴の妻であるシャロルということか」

「いや、お袋も……」

「お生憎でございます。ガリバー様同様、シャロル様も亡くなりました」

言いつつ、中央広間に通じる大階段をメンフィスが駆け下りる。

「お久しぶりです、アルアルパッツ様、それにリリパット様」

階段を駆け下り、彼らの前に立つと、メンフィスは深々と頭を垂れた。

「貴様はガリバーの執事か……今、シャロルも死んだと言ったのか？」

「はい。悪性の伝染病でございます。ご夫妻は二人のお子様を残して、三十年ほど前にお亡くなりになりました」

「二人の子供……一人はこの小僧だな」

「はい」

「もう一人は？」

「リリパット様の双子の妹、アリス様です」



「どこにいる？」

表情を曇らせるメンフィス。十三使徒はもちろん、ほとんど絶縁状態だったりリリパットにも、アリスが魔族ではなく人間になってしまっていることを知られてしまうことだけは、なんと少しでも避けるべきだと考えた。

「アリス様は現在、先代と同じ伝染病にかかり、もう何日間も部屋に籠っておられます」

「……えーっ、マジで？」

リリパットがきよんとする。

（カーマのババアがかましていたハツタリは……「魔族に戻れなくなってもいいのですか？」とか、そんな感じだったよな。伝染病とは、どうも話が違うぜ）

「本当でございます。アリス様は病魔が私たちに感染することを恐れて、自らを自室に隔離しておられます。アルアルパツゾ様が百年ぶりにお屋敷にお出でなすったというのに当主がお目通しできぬご無礼を、なにとぞお許しください」

メンフィスが一口にそう言うのと、リリパットとアルアルパツゾは黙ったまま彼の方を見ていた。特にリリパットは、カーマの言葉とメンフィスの言葉の差異がどうしても気になって仕方が無い。

（あつれー？「伝染病にかかっても知りませんよ？」だっけ？んなわけないよな。「魔族に戻れなくなってもいいのですか？」だったよな、たしかに……でも、何から魔族に戻るんだっけ？猿？犬？インコ？魚？キリン？象？テントウムシ？）

「……」

アルアルパッツはじつとメンフィスの顔を見ていた。メンフィスは目を逸らすことなく、黙って相手の視線に耐えていた。主人に対して忠実、正直を模範とする執事だが、それだけに客人に対するポーカーフェイスは完璧であった。

「ならば、勝手に寛がせてもらうことにしよう」

「もちろんでございます」

「何でもいいけど、腹が減ったぜ。アバラも折れてるし……メシ食って体力つけて、さっさと治癒しねえと」

魔族の回復力なら肋骨の損傷ぐらい割とすぐに治る。ただ、そのベースとなる体力が必要だということを知りパットは言っているのだった。

「はっ。畏まりました」

メンフィスがそう言うも、アルアルパッツが冷たく遮る。

「……さて。リリパット、貴様は私がガリバーに預けた魔法書を探して来い。この屋敷に必ずあるはずだ」

「ええーっ？俺はこの屋敷久しぶりだから、よく分かんね……じゃない。久しぶりでよく分からないです」

「探して来い」

少し語気を強めてアルアルパッツが言い直すと、リリパットはしぶしぶ屋敷の奥に引っ込ん

で行った。

「私は食事にしよう。胃に直接何かを入れるのは、実に百年ぶりだ……あっさりとしたものが良いな。マンドラゴラのスープはあるか？」

「承知致しました。こちらへ」

メンフィスはダイニングルームにアルアルパッツを案内する。しかし、その心中は魔法書を探しに行ったりリリパットのことについてばいだった。胸中に吹き荒れる狼狽の嵐。アリス同様、ネッコ・ヴァンシユタインの存在は当然の如く見つかつてはいけないのだから。

（まずいな……アルアルパッツ様の魔法書は地下の、あのネッコの監獄の中にある。もしリリパット様がネッコの奴めと顔を合わせでもしたら……）

そのとき、背後から、ととと……という足音が聞こえたと思うと、アールグレイはアルアルパッツを追い越し、メンフィスの傍にやってきた。そして、先ほどの一部始終を見たうえで、こう耳打ちした。

「（メンフィス様、私がリリパット様を地下室に近づけません）」

「（……アールグレイ、すまん。頼めるか？）」

こくりとうなずくアールグレイ。

「（すまないな。人間を庇うような真似をさせて）」

「（いえ……あのネッコ・ヴァンシユタインの存在が公になれば、ルービンシユタイン家は破壊ですから）」

「(……そうだな。頼んだぞ)」

アールグレイはもう一度、こくり、と頷くと、アルアルパッツの方を見てスカート裾をつまんで会釈した。アルアルパッツはメイドの存在など何の気もなさそうに、壁にかかった絵画を見ていた。麦藁帽子を被った二人の男女が木陰に腰を下ろし、寄り添って、一枚の新聞紙を楽しいげに読んでいる様子が描かれている。——ノレノワール作・表題を『内緒話』という。

アールグレイは急いで地下室への入り口へ向かった。逸る気持ち自然と足取りを早める。人間を、ネッコ・ヴァンシュタインを庇うような真似……確かに、ネッコがリリパットやアルアルパッツに見つかれば、アリスの立場が良くないことになるのは間違いない。しかし、それとは別にアールグレイは、忌まわしい人間を匿うという仕事がある、あるいはネッコ・ヴァンシュタインを匿うという仕事がある、不思議と、それほど嫌では無かった。

食事やアリスの手紙を持ってネッコの元へ訪れるたびに、アールグレイは彼と軽く話をすることになるのだが、確かに厭味な性格であれ、確かに傲慢な性格であれ、彼が心から悪意を持って魔族であるアールグレイと接している訳では無さそうなのだ。それはアールグレイの田舎育ちの気の良さから来る錯覚では無く、幼少の頃から植え付けられた人間に対する印象とは大きくかけ離れた人間性を、ネッコ・ヴァンシュタインが備えているためである。もともとの酷い印象との差異から……例えば善行を成した悪人のように、彼女はネッコに対して少なからずの驚きと好奇心と好印象を抱いていたのだ。取るに足らぬ存在、と言うには彼には奇妙な余

裕がある。それは傲慢さというより、単純に彼自身の自信に裏打ちされた、無邪気さ、であろうか。あの厭味な性格もそうである。アールグレイは、もしネッコが人間ではなく魔族であるならば、けっこう仲の良い友達になれそうな気がした。

……魔族であるならば？

どうして相手（ネッコ）が人間ではいけないのか？

一体、人間と魔族の間にどんな壁があるというのか？

ただの友達という関係に、どんな重大な溝があるのだ？

改めてそんな風に思うアールグレイには、それが妙で堪らなかつた。しかし、考えが脳裏を過ぎるたびに彼女は、はっと息を呑むと、自分の魔族としてのプライドの無さを恥じると同時に、無理をしてネッコを始めとする人間全般を憎もうと努めるのだった。——彼女は彼女自身が一番聡明な部分を自らドブにかなぐり捨てていることに、これっぽっちも気づいていなかった。

そんなことを考えているうちにアールグレイが地下室の入り口にまでやってくると、彼女は思わずぎよっとした。ヘタクソな鼻歌を歌い、いかにもこれから地下室に降りんとするリリパットの姿が視界に飛び込んできたのだ。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと、リリパット様ああ！」

アールグレイの大声にびっくりするリリパット。階段を踏み降りようとしていた足を、危うく滑らしそうになる。彼は何とか堪えて、不躰なメイドを睨んだ。

「……なんだよ、うるせえな！」

「……その……」

「なんだ、用があるんだろ？」

「はい……いや、あの、その……」

「早く言え」

答えに窮したアールグレイ。リリパットは訝しげな表情を見せる。

「あの……久々に帰って来られたリリパット様のお手を煩わせるのは、わたくし、とても心苦しいと思ひまして……お探しになられているのは、アルアルパッツ様の魔法書ですよね？」

「ふん。お前、あの場にいたのか？聞き耳を立てるなんて嫌らしいメイドだな……それにしても大げさな声を出してんじやねえよ」

「はい。申し訳ございません……」

顔を赤らめて頭を下げるアールグレイ。

リリパットはちつつと舌打ちする。

「もういい。魔法書は俺が探すから、お前は向こう行ってろ」

と、リリパットは言うのと、そのままアールグレイを無視して地下室へと足を進め始めた。

「ぎょっ！」

アールグレイの心臓が張り裂けんばかりに高鳴る。

「ちよ、ちよっと待ったあああ！」

素っ頓狂なアールグレイの大声のせいで、今度こそリリパットは階段を踏み外すと、彼はそのまま薄暗い闇に吸い込まれ、大げさに地下室の中へ転がり落ちていった。激しいドタバタという物音がアールグレイの背筋を凍らせる。ぎよっとするアリス。彼女は名前だけの主人の安否よりも、アリスあるいはネツコの暗い未来を思つて、絶望し、思わず駆け出していた。

「……り、リリパット様！大丈夫ですか！？」

アールグレイが階段を駆け下りると、リリパットは真つ青な顔をして、脇腹を押えて蹲っていた。まだ治癒の出来ていない折れた肋骨をもう一度激しく打ち付けてしまったのだ。

「……ぐぐぐぐぐ」

リリパットは汗だくになりながらアールグレイを睨みつけると、口をばくばくと微かに動かした。

「……お前は、おれに、いったい何の恨みが、あるって、いうんだよ……ええ？」

「う、恨みなどございません！滅相もございません！恨みだなんてとんでもない！私はただ、リリパット様のお手を煩わせないようにと……ああ、それでは説明になりませんか！実は私、本当のことを申し上げますと、ちっとも片付けていない地下室をリリパット様に見られて、己の仕事の怠慢ぶりを叱られるのが恐ろしゅうございました！これは本当のことです！私、仕事はサボっても嘘はいいません！田舎育ちですので元来正直で通つて……あらまあ、酷い怪我！さあ今すぐ手当てを致しましょう！私の肩に寄りかかり下さい！上に骨に良く効く軟膏があるのです！さささ、どうぞこちらへ！」

アールグレイは鬼のような形相で睨んでくるリリパットの腕を無理矢理自分の肩に回し、ゆっくりと立ち上がる。アールグレイは思った。これで結果オーライだ。叱られるのは私一人で済む。アリス様にご迷惑をかけずに済むし、ネッコ・ヴァンシュタインをみすみす彼らの手に渡さずに済む……そう。他の魔族に正体がバレたとき、ネッコ・ヴァンシュタインは間違はなく死罪を言い渡されるのだから。いくら相手が人間とは言え知らぬ間柄でもなし。それでは流石に目覚めが悪い。

(……はあ、これは流石にクビかもしれないわね。せいぜい私に感謝するのよ……ネッコ・ヴァンシュタイン！)

と、アールグレイは思った。

しかし、その時思いもかけない不運が彼女を襲った。

アールグレイは、自分がネッコのことを一瞬でも無邪気と称したことに幾ばくかの後悔覚えた。

彼女は彼にもっと最適な言葉を与えるべきなのだ。

愚鈍。あるいは危機感の無い男。あるいは自分の立場が分かっていない男、あるいはドジ、あるいはマヌケ、あるいは馬鹿、あるいは……

あるいは、ボンクラ。

「おーい、アールグレイ。誰かそこにいるのかーい？」

岩で出来た地下室に、ネッコの間の抜けた声がよく反響した。疑い様の無い、あまりに聞



こえ過ぎる声だった。

やったわね、あの馬鹿。

アールグレイはもはや呆れ返るしかなかった。

リリパットはアールグレイを突き飛ばし、慌てて振り返る。

「い、今の声は!?!」

脇腹の痛みも忘れて、彼は地下室の奥を覗む。

「今の声はなんだ、メイド!?!」

アールグレイは地面に尻餅をついたまま、冷や汗を背中が流れていくのを感じていた。

「言え、メイド!?!今の男の声は何なんだ!?!」

「そ、その……」

「それになんだ、よく嗅いでみればこの人間臭さは!」

「それは……」

「どうしてこの屋敷に人間がいるんだ!?!」

「それは、あの、その、その……」

泣き出しそうになるアールグレイ。

「そうだ、アリスは? 貴様らはどうして俺たちをアリスに会わさない!?!」

「……」

「アリスは本当に伝染病にかかったのか!?!」

「……?」

「隠しているな。お前達はアリスを隠しているんだ！」

「……へ……?」

「ああ、なんてこった！カーマの言葉は本当だったんだ！」

徐々に軌道がずれていくリリパットの言葉。彼は何かを勘違いしているようだった。

「そうだ、アリスは……猿でもない、犬でもない、インコでもない！魚でもなければキリンでもないし、象でもなかったらテントウムシでもウメヤルリミズギワゴミムシでもなんでもない！アリスは……アリスは……」

リリパットは叫んだ。

「アリスは人間にされちまったんだ！」

地面にがくりと崩れ落ちるリリパット。

「しかも今の声はどうだ！よりもよって人間の男にされちまっただなんて！」

四つん這いになって嘆くリリパット。アールグレイは彼を理解できなかった。彼の出した結論に至るまでの思考のプロセスが、ただひたすら理解できず、眉間に皺をよせて呆気にとられるばかりであった。

「ああ、アリス！すまん！俺のせいだ！お前がネッコ・ヴァンシユタインを油断させるために人間にさせられたとは聞いていたが……まさか男にされていたなんて！頼む、不甲斐無い兄を許してくれ！」

「……」

シーン……と静まる地下室。リリパット、アールグレイ、ネッコそれぞれ三者三様の感情が交錯する。

「……どうした？返事をしてくれよアリス。お前なんだろう？」

沈黙が冷たい地下室を支配する。リリパットがたまらず、曲がり角の向こうを覗こうと身を乗り出しかけたそのときだった。

ネッコの側から見て、リリパットの影が見えた瞬間、ネッコは反射的に叫んだ。

「ま、待て待て！止まれ！」

ネッコの大声が廊下に響き、リリパットは思わず足を止める。

「え？」

「こっちに来るんじゃない！」

「どうしてだ？……というかお前、本当にアリスか……？なんか、口調まで……」

「に、にに、兄さんにこの姿を見られるぐらいなら……俺……いや、私は死んだほうがマシなのです！」

またも絶望に身を震わせるアールグレイ。わざとらしいにも程がある。今の気味の悪い言葉はネッコのものだろうが、なんとというか、彼には演技というものの才能が欠片も無かった。これでは騙されるという方が無理だと言うものだが……

「うわあああ！やっぱりそうなんだ！」

アールグレイの不安をよそに、姿の见えないネツコの声にまんまと騙されるリリパット。

「たのむ、許してくれ！俺を許してくれアリス！」

「許すから向こうに逝ってくれ……じゃない、行ってくださいまし」

と、ネツコの声。

いくらなんでもこんな……子供の童話じゃないんだから……心の中でそう嘆息を漏らすアールグレイ。こんなもので騙そうとするネツコもネツコだし、騙されるリリパットもリリパットだ。

（大馬鹿者は、魔族も人間も一緒なのね……二人とも、素晴らしい、神があった、気持ちのいいぐらいの馬鹿だわ。感心してしまうぐらい）

アールグレイはゆっくりと立ち上がり、埃まみれのエプロンをばんばんと叩く。

「許してくれるのかアリス。お前はいつだって寛大だな……！ただ、やっぱりなんか口調まで男っぽいような……」

疑ってんじやねえよ、とネツコは思った。

「そんなことありませんわ」

「そうかな……そうだよな。長く一緒に暮らしていないと忘れちゃうよ」

そうそう、とネツコは言った。

「思えば俺はいつでもお前に迷惑をかけてきたな。俺がアルアルパZZに仕えるという本来のルービンシュタイン家の使命を放棄し、ヴァジュラの元へ駆け出した時だって……お前は大層

困ったことだろう」

気にしないで下さいまし、とネッコは言った。

「お前のことが好きな下級魔族にお前の下着売ったこと、まだ根にもってるか？」

「いえいえ全然。もう全然、気にしないで下さいまし」

「お前の小さいハムスターの使い魔を、俺が自分の魔獣のエサにしちまったこともあったよなあ……あれも思えば悪いことをしたよ」

酷いことをするな、とネッコは、他人事ながらそう思った。

「……き、気にしないで下さいまし」

「本当にすまない……お前と大喧嘩したとき、爺ちゃんの屍骸を墓から掘り起こしてお前の弁当に入れたのも……ま、今思えば懐かしい思い出だよな。へへ」

「は？」

「覚えてないのか？アリス。お前はあれから一月ほど肉が食べられなくなったじゃないか。魚の煮凝りみたいだったもんなあ、爺ちゃんの肉」

ネッコは思った。

……こいつは俺を疑っているんじゃないのか？

わざと滅茶苦茶言ってこっちの出方を伺っているのだろうか？一体、どこの世界に自分の爺の屍骸を妹の弁当に入れるやつがいると言うのだ。なにが「へへ」だ。真面目に言っているなら、このリリパットという奴は、まるっきり頭がおかしい。

「……」

「あのあと俺は親父に散々叱られたっけなあ……でも、それを庇ってくれたのもアリス、お前だったよなあ……はは。今思い出せば、それも懐かしいけどさ」

ネッコの返事を待たずに話を進めるリリパット。

……どうやら、こつちを疑っているわけでもないらしい。ということとは、この話は本当なのだ。そう思うとネッコは急に吐き気がした。傍で成り行きを見守るアールグレイも完全に引いて、ケダモノを見るような目つきでリリパットを見ていた。

「本当に済まない。俺はどうしてもお前に頭があがらないよ」

「……気にしないで下さいまし」

「お前はそういうけどさ、俺にもプライドってものがあるんだ」

「……」

「そうだ！お前の呪いを解く為に、なんとかしてカーマを捕まえてこの屋敷に連れて来るから、どうかそれまで辛抱してくれよ」

「い、いや、それは！」

ぎよっとするネッコ。カーマをこの屋敷に連れて来る！？冗談じゃない！もうあの魔女の顔など一生の間に一分一秒足りとも見たく無い。

「え？」

予想外の返事に、リリパットは驚く。

「……どうした？アリス。何か不満でも……」

「……か、カーマは危険な魔族だから、無理をしない方がいいと思いますよ」

「ああ、そういうことか……お前が俺のことを思ってくれるのは分かるが、この際そんな悠長なことは言ってもらえないさ。これは俺の責任だし、男のケジメなんだ。どうか少しの間待ってくれ」

「ほんと、そんなに困ってないから。無理しなくてもいいです」

「お前は男の姿のまままで良いって言うのか？……へへ、実を言うとき、今お前と話をして、俺もそんなに悪い気分じゃないんだ。なんか男の兄弟が出来たみたいでさ……ヴァジュラを思い出すよ。あいつは俺にとっちゃ良い兄貴だったんだ」

（それを殺したのは、いま話しているネツコ・ヴァンシュタインなのに……）

アールグレイは馬鹿なりりパットを哀れんだ。

「でも、そういうわけにもいかないよな。お前はやっぱりアリスだし、俺の妹だ。大丈夫！お前を魔族に戻して、俺たちをこんな目に合わせた奴らに仕返しするんだ！」

「ええ」

「二人が力をあわせればカーマの野郎にだって一泡吹かせられるさ！」

「そうですね」

「人間界に攻め込んで、手柄を立てて……ルービンシュタイン家の名誉を復活させて……」

「うん、そうしようしようしよう」

「そして、いつかネッコのクソ野郎と一緒にぶっ殺そうぜ。な!？」

「お前には無理」

「え?」

「……お、お前には無理させたくない」

「アリス……」

リリパットは、あくまで自分を思ってくれる妹の優しさに打たれ、涙ぐみ、鼻をすすった。あれほどうっとおしいと思っていた兄妹というものが、今日ほどありがたいと感じたことは、今までに一度も無かった。

「さあ、リリパット様、お立ち下さい。魔法書は私がお届けしますから、上のソファでゆっくり休まれないと……」

アールグレイは眩暈を感じながら、それでも口調はいかにも兄妹愛に心打たれたという感じにリリパットに言った。感極まったリリパットは、メイドのそんな演技に気づく由もない。

「じゃあな、アリス。俺たち、立った二人の血族だもんな。これからはもっと仲良くやっつけていこうぜ」

よろめきながら立ち上がると、リリパットはふらふらとした足取りで階段を上っていった。かくして、ルービンシユタイン家とネッコを襲ったピンチはひとまず喉元を通り過ぎたのだった。アルアルパッツの下に戻ったリリパットはもちろんアリス（ネッコ）の事を一言も漏らさず、それでも重苦しいような朗らかなような不気味な表情をしていた。



そのことをアルアルパッツに問われれば、彼は伏目がちに「家族っていいもんですよね」と言うのだった。メンフィスとニルギリは顔を見合わせて不思議そうな顔をし、アルアルパッツは彼を真正正銘のアホだと思ひ、アルルグレイは一人顔をうつぶせに、ずっと堪えていたものが噴出してしまふのをなんとか我慢して、肩を振るわせるのであった。

その日の晩、アルアルパッツはガリバー夫妻の寢室で眠り、リリパットは自分の部屋で眠った。二人の就寝を見届けて、アリスからの手紙と遅めの夕食がアルルグレイの手によつてネッコの元へ届けられる。

「あーっはっは！ああ、可笑しい！」

今日の出来事を大声で笑うアルルグレイ。

「本当、人間って馬鹿よね。あれで演技のつもりなの？くくく……」

そういう彼女の言葉の裏には、悪意は込められていない。無邪気にネッコをからかっている。「おい、ここで馬鹿なのはどう考えてもリリパットだろう」

「ふふ。ほんと。肝を冷やして損したわ」

「僕がどうして、よりよつてあんな奴の妹にならなきゃならないんだ！？ああ、思い出しただけで気色の悪い……クソ、クソ、クソ！なんだっけ？爺の死体を妹の弁当にいれた？ダース単位で頭のネジが外れてるんじゃないか、あいつは！」

ネッコはどかっさと格子の前に胡座をかくと、アルルグレイの持つてきたパンとサラダとスー

プに手を伸ばした。アールグレイは前かがみになり、格子越しにネッコの顔を覗き込む。

ネッコはパンを頬張りながらアールグレイを見上げた。

「はい。今日もアリス様から」

アールグレイはエプロンのポケットから一枚の手紙を取り出し、ネッコに差し出した。ネッコはさも困ったという顔をしてそれを受け取る。

「はあ、またヒステリ女の愚痴を聞かなきゃならないのか……」

そういうネッコはそれでも毎回律儀に読んでいる。

「ねえ、たまには返事を書いてあげたらどう？アリス様、一人ぼっちで寂しいんだよ」

「めんどくさい」

「お願いよ」

「……ふん。だったら、ペンと紙を持ってこい」

「書いてくれるの？」

「……気が向いたらな。どうせ退屈だし……その代わり、もっとパンよこせ」

ネッコの言葉を聞いた途端、アールグレイの顔がぱあっと明るくなる。うんうん、と頷くと、彼女は踵を返し、地下室の階段の方へ足を運んだ。と、曲がり角の壁際を曲がる直前に、くるとネッコの方を振り返る。

「ねえ、ネッコ・ヴァンシユタイン」

アールグレイが言った。ネッコは返事をせず、サラダを貪り、器のままスープを啜る。

「魔族と人間って、頑張れば分かり合えるかもしれない、とか考えたことある？」

ネツコはスティックのにんじんを齧りながらアールグレイの方を見た。

「無理」

「え……」

「とても無理だよ。壁は大きいし、歴史の傷跡は途方も無く深い」

「……そっか。そうよね」

残念そうなアールグレイ。ネツコはにんじんをこりこりと齧りながら喋りつづけた。

「……僕は魔族が嫌いだ。ヴァジュラを倒したことにだって罪悪感はないし、リリパットも好きじゃない。この家を出ればやっぱりサンダルクで待ってる人達のために使徒を倒しに出かけるだろうし、カーマと分かり合うなんて死んでもごめんさ」

真剣な顔をしてネツコの言葉に耳を傾けるアールグレイ。

「でもな、アールグレイ。アリスやこの家の連中に関しては、もちろんお前も含めてだけど、僕はそれほど嫌っているわけじゃないんだよ。お前達が悪人だという風にはどうしても思えないんだ。まあ、メンフィスなんかには……あのおっさんには厭味な事も言われるけどさ、あいつは僕自身を嫌っているというより、この家の伝統を重んじるから屋敷の中に人間なんて置きたくないって思ってるだけなんだよな。伝統だのなんだの、それって人間界の貴族そっくりじゃないか！このことは僕もここに来て初めて気づいたんだけど、結局お互いにやってることはほぼ同じなんだ」

「うん」

「分かり合うなんてことは無理だろう。ただ、きつかけさえあれば、何かが悪くなるかもしれない。何かが少しずつ良くなれば、人間と魔族の関係も新しいものになっていくかもしれない。そのために誰かの言葉が必要だということのなら、例えば僕のような人間の言葉が必要とされるなら、僕は喜んで革命の触先に立とうと思う。魔界での生活を送った唯一の人間だし、ふん、なんてったって英雄だからな、僕は」

腕を組んで得意げに笑うネッコ。

「革命……」

「賢者サンダルクは、力だけで生きていく人生を……孤独で、際限の無い、ひどく疲れる生き方だと言ってた。それは誰か個人だけの話じゃなくて……あるいは人類全体の話かもしれない……そう、例えば、もう剣を振りかざす人間が勇者になる時代は、とくに終わっているのかもしれないんだ。ふん、まあ、何だっもいいさ。こういう話は僕なんかよりも父さんやアルフォンソのメシの種ってわけだ！僕のような人間は結局、剣や魔法をぶんぶん振りかざす方が得意なのさ。太古の恐竜の化石みたく、いずれは博物館に並ぶ運命ってわけだ。さ、アールグレイ、ペンと紙を持ってきておくれ！めんどくさいけど、悲劇の姫君に手紙を書かなくっちゃ！」

「ありがとうネッコ。アリス様、きつと喜ぶわ」

「『お前の兄貴はいかれてる』って内容を、便箋数十枚に渡って書き連ねてやるさ」

ネツコの悪態に、アールグレイはにっこりと笑うと、地下室を後にした。